

県営中山間地域総合整備事業（広域連携型）種子島南部地区に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

植松遺跡

一ノ坪遺跡

高田遺跡

真所汐入B遺跡

有鹿野遺跡

下鹿野遺跡

日ノ丸遺跡

2009年3月

鹿児島県南種子町教育委員会

序 文

遺跡は、それぞれの地域の歴史を今に伝える貴重な文化遺産です。しかし、土地の開発によってやむをえず遺跡が失われてしまうこともあり、その場合、遺跡の発掘調査を行い報告書にまとめ、遺跡を「記録保存」します。

本書は、鹿児島県農政部による県営中山間地域総合整備事業（広域連携型）種子島南部地区に伴い実施した植松遺跡、一ノ坪遺跡、高田遺跡、真所汐入B遺跡、有鹿野遺跡、下鹿野遺跡、日ノ丸遺跡を「記録保存」した発掘調査報告書です。

これらの遺跡では、種子島の歴史を知る上でいくつかの貴重な発見がありました。中でも日ノ丸遺跡で、中世の徳之島で焼かれた「カムイヤキ」と呼ばれる焼物が種子島で初めて出土したことは注目されました。

また、有鹿野遺跡、下鹿野遺跡では縄文時代後期を中心とする土器・石器、一ノ坪遺跡、高田遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土しました。これらの土器や石器を分析研究することで、先史時代の種子島に住んでいた人々がどのような文化をもち、生活を営んでいたのか少しずつ明らかになっていきます。

最後になりましたが、ご指導をいただいた諸先生方に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査の実施と本報告書の刊行に当たり、鹿児島県教育庁文化財課および鹿児島県立埋蔵文化財センター、そして作業にご協力をいただいた皆様方に心から感謝の意を表します。

平成21年3月

鹿児島県南種子町教育委員会
教育長 岩屋 秀男

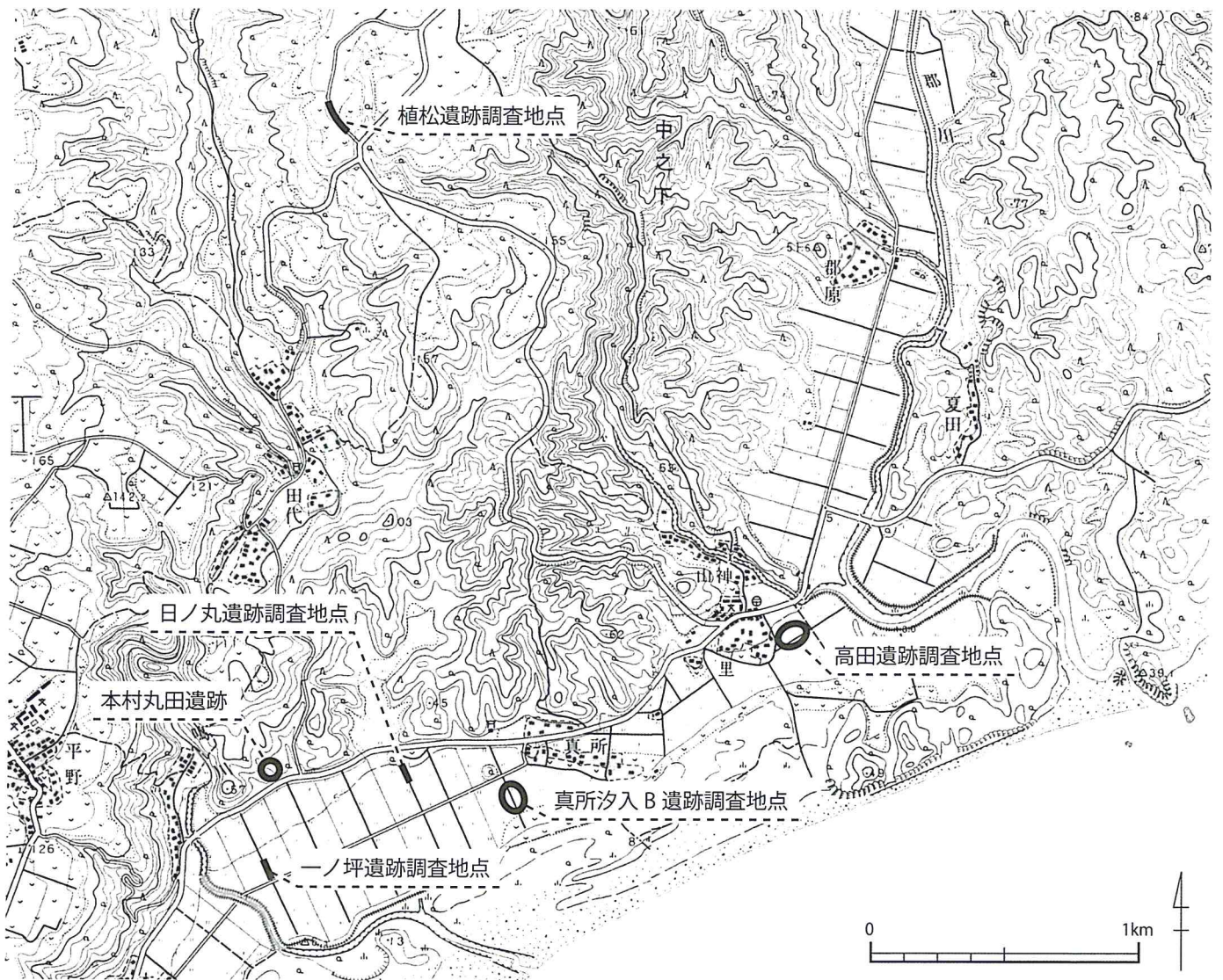
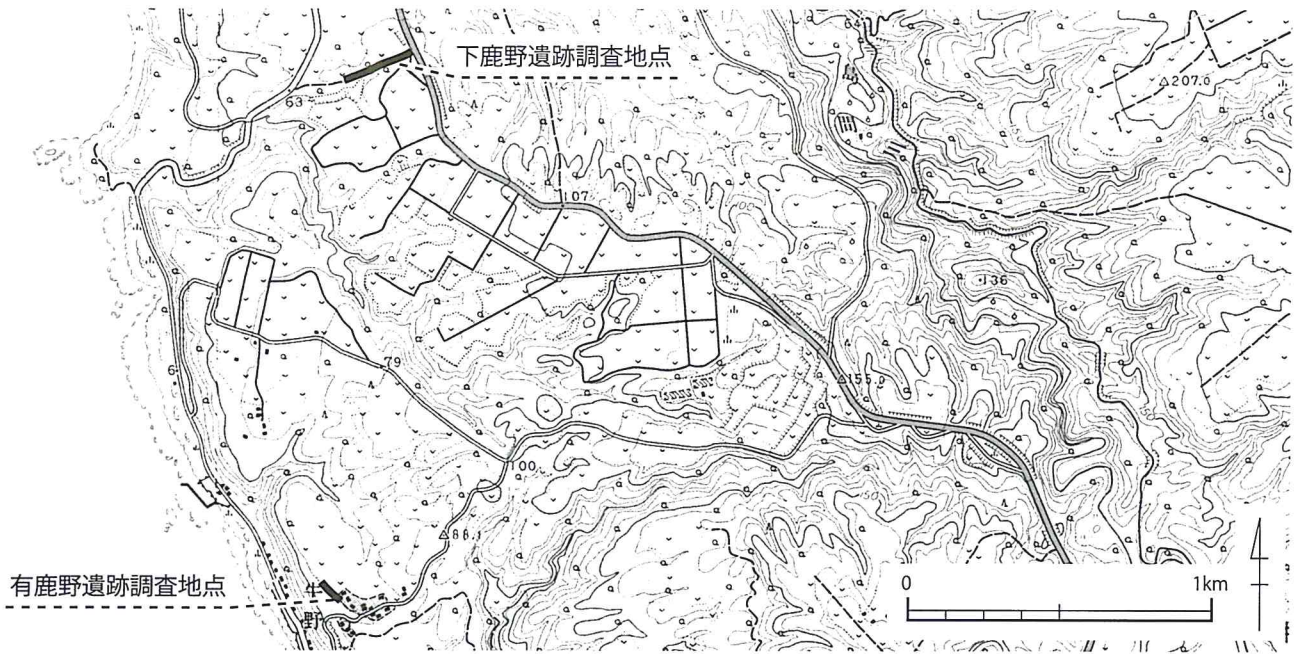
報 告 書 抄 録

ふりがな	うえまついせき, いちのつぼいせき, たかだいせき, まどころしおいりBいせき, ありかのいせき, しもかのいせき, ひのまるいせき							
書名	植松遺跡, 一ノ坪遺跡, 高田遺跡, 真所汐入B遺跡, 有鹿野遺跡, 下鹿野遺跡, 日ノ丸遺跡							
副書名	県営中山間地域総合整備事業(広域連携型)種子島南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	1							
シリーズ名	南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	16							
編集者名	徳田 有希乃・石堂 和博							
編集機関	南種子町教育委員会							
所在地	〒891-3792 鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793-1 TEL 0997-26-1111							
発行年月日	2009年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査 期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえまついせき 植松遺跡	かごしまけん 鹿児島県	5020	81-69	30° 23' 20"	130° 53' 39"	2003年 ～ 2007年	285㎡	県営中山間地域総合整備事業(広域連携型)種子島南部地区
いちのつぼいせき 一ノ坪遺跡	くまげけん 熊毛郡		81-67	30° 25' 57"	130° 53' 46"		124㎡	
たかだいせき 高田遺跡	みなみたちょう 南種子町		81-62	30° 22' 11"	130° 54' 51"		40㎡	
まどころしおいりBいせき 真所汐入B遺跡			81-64	30° 21' 49"	130° 54' 19"		24㎡	
ありかのいせき 有鹿野遺跡			81-22	30° 27' 00"	130° 51' 42"		672㎡	
しもかのいせき 下鹿野遺跡			81-57	30° 25' 57"	130° 51' 50"		176㎡	
ひのまるいせき 日ノ丸遺跡			81-66	30° 21' 58"	130° 53' 59"		85㎡	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特記事項	
植松遺跡	散布地	縄文早期		苦浜式, 妙見・天道ヶ尾式, 磨製石斧				
一ノ坪遺跡	散布地	弥生～古代		弥生時代前期末～中期の土器, 弥生時代後期～古墳時代の在地の土器, 弥生時代後期末の壺形土器				
高田遺跡	散布地	弥生～古墳		弥生時代後期～古墳時時代の在地の土器			確認調査のみ	
真所汐入B遺跡	散布地	縄文前期		曾畑式			確認調査のみ	
有鹿野遺跡	散布地	縄文後期～晩紀		市来式, 丸野式, 納曾式, 一湊式, 磨石, 石皿, 磨製・打製石斧				
下鹿野遺跡	散布地	縄文早期, 縄文後期	集石1基	縄文時代後期土器, 塞ノ神式				
日ノ丸遺跡	散布地	古代～中世		カムイヤキ, 青磁, 白磁, 古代～中世の須恵器・土師器			種子島で初めてカムイヤキが出土した。	
概 要	本報告書に収録した7遺跡の中で, 一ノ坪遺跡・高田遺跡は, 弥生～古墳時代の散布地である。植松遺跡は縄文早期の散布地である。真所汐入B遺跡では, 曾畑式が出土した。有鹿野遺跡では, 縄文後期～晩紀にかけての土器・石器がまとめて出土し, 下鹿野遺跡では縄文後期の集石1基が検出された。							

例 言

1. 本報告書は、県営中山間地域総合整備事業（広域連携型）種子島南部地区に伴い南種子町教育委員会が実施した植松遺跡、一ノ坪遺跡、高田遺跡、真所汐入B遺跡、有鹿野遺跡、下鹿野遺跡、日ノ丸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成15年度から平成19年度にかけて実施した。報告書作成事業は、平成19、20年度に実施した。
3. 本報告書に収録する発掘調査に関する遺物・発掘調査記録は、南種子町教育委員会で保管している。
4. 本書が用いる測量座標は平面直角座標Ⅱ系である。標高は海拔高である。
5. 挿図の縮尺は各図ごとに示してある。
6. 遺物番号は、本文及び挿図・図版番号と一致する。
7. 発掘調査における写真撮影は、徳田有希乃・石堂和博が行い、実測・測量は、主として徳田・石堂で行った。遺物撮影については県立埋蔵文化財文化財センター吉岡康博氏の協力を得て、徳田が行った。土器・石器の実測・トレース及び図版作成は、整理作業員の協力を得て各章の執筆者が行った。
8. 本報告書の執筆分担については、以下のとおりである。

I章・II章・III章・IV章・V章	石堂 和博
VI章・VII章・VIII章	徳田有希乃
9. 本報告書の編集は、徳田・石堂が行った。



第1図 各遺跡の調査地点 位置図

目 次

序文		第Ⅵ章 有鹿野遺跡の調査	44
報告書抄録		第1節 調査の概要・方法	44
例言		第2節 層位	46
第1図 各遺跡の調査地点 位置図		第3節 有鹿野遺跡の遺構	46
		第4節 有鹿野遺跡の遺物	56
		第5節 まとめ	81
		第Ⅶ章 下鹿野遺跡の調査	83
第Ⅰ章 調査の経過	1	第1節 調査の概要・方法	83
第1節 調査に至るまでの経過	1	第2節 層位	85
第2節 調査の組織	1	第3節 下鹿野遺跡の遺構	85
第3節 調査の経過	2	第4節 下鹿野遺跡の遺物	92
		第5節 下鹿野遺跡から出土した炭化物の 年代と樹種	94
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	5	第6節 まとめ	98
第1節 自然環境	5		
第2節 歴史的環境	5	第Ⅷ章 日ノ丸遺跡の調査	99
		第1節 調査の概要・方法	99
第Ⅲ章 植松遺跡の調査	11	第2節 層位	101
第1節 調査の概要	11	第3節 日ノ丸遺跡の遺構	101
第2節 層位	11	第4節 日ノ丸遺跡の遺物	105
第3節 遺構・遺物	11	第5節 日ノ丸遺跡中世畠跡の 植物珪酸体分析	117
第4節 まとめ	22	第6節 まとめ	122
第Ⅳ章 一ノ坪遺跡の調査	23		
第1節 調査の概要	23		
第2節 層位	23		
第3節 遺物	30		
第4節 まとめ	37		
第Ⅴ章 高田遺跡			
真所汐入B遺跡の調査	39		
第1節 調査の概要	39		
第2節 層位	39		
第3節 遺物	41		
第4節 まとめ	42		

挿図・表目次

挿図目次

第1図	各遺跡の調査地点位置図		第25図	有鹿野遺跡調査区トレンチ 配置図	45
第2図	町内遺跡分布図	10	第26図	有鹿野遺跡土層断面図(1)	47
第3図	植松遺跡調査区・ トレンチ配置図	12	第27図	有鹿野遺跡土層断面図(2)	48
第4図	植松遺跡土層断面図(1)	13	第28図	有鹿野遺跡土層断面図(3)	49
第5図	植松遺跡土層断面図(2)	14	第29図	有鹿野遺跡確認トレンチ遺物 出土状況及び土層	50
第6図	植松遺跡遺物出土状況図(1)	15	第30図	有鹿野遺跡遺構遺物 出土状況図	51,52
第7図	植松遺跡遺物出土状況図(2)	16	第31図	有鹿野遺跡遺構(1)	53
第8図	植松遺跡出土遺物(1)	18	第32図	有鹿野遺跡遺構(2)	54
第9図	植松遺跡出土遺物(2)	19	第33図	有鹿野遺跡遺構(3)	55
第10図	植松遺跡出土遺物(3)	20	第34図	有鹿野遺跡土器(1)	60
第11図	一ノ坪遺跡周辺遺跡位置図	24	第35図	有鹿野遺跡土器(2)	61
第12図	一ノ坪遺跡調査区・トレンチ 配置図	25	第36図	有鹿野遺跡土器(3)	62
第13図	一ノ坪遺跡B区土層断面・ 出土状況図	26	第37図	有鹿野遺跡土器(4)	63
第14図	一ノ坪遺跡C区土層断面・ 出土状況図	27	第38図	有鹿野遺跡土器(5)	64
第15図	一ノ坪遺跡D区土層断面・ 出土状況図	28	第39図	有鹿野遺跡石器(1)	65
第16図	一ノ坪遺跡E区土層断面・ 出土状況図	29	第40図	有鹿野遺跡石器(2)	66
第17図	一ノ坪遺跡出土遺物(1)	32	第41図	有鹿野遺跡石器(3)	67
第18図	一ノ坪遺跡出土遺物(2)	33	第42図	有鹿野遺跡石器(4)	68
第19図	一ノ坪遺跡出土遺物(3)	34	第43図	有鹿野遺跡石器(5)	69
第20図	真所汐入B遺跡の調査地点 位置図	40	第44図	有鹿野遺跡石器(6)	70
第21図	真所汐入B遺跡1トレンチ西側壁面 土層断面図	40	第45図	有鹿野遺跡石器(7)	71
第22図	高田遺跡の調査地点位置図	40	第46図	有鹿野遺跡石器(8)	72
第23図	高田遺跡2トレンチ西側壁面 土層断面図	40	第47図	有鹿野遺跡石器(9)	73
第24図	高田遺跡・真所汐入B遺跡 出土遺物	41	第48図	有鹿野遺跡石器(10)	74
			第49図	有鹿野遺跡石器(11)	75
			第50図	有鹿野遺跡石器(12)	76
			第51図	下鹿野遺跡調査区 トレンチ配置図	84
			第52図	下鹿野遺跡遺構遺物検出状況	86
			第53図	下鹿野遺跡土層断面図(1)	86
			第54図	下鹿野遺跡土層断面図(2)	87
			第55図	下鹿野遺跡確認トレンチ 土層断面図	88
			第56図	下鹿野遺跡溝状遺構検出状況	89
			第57図	下鹿野遺跡集石(1)	90

第58図	下鹿野遺跡集石(2)	91
第59図	下鹿野遺跡出土土器	93
第60図	日ノ丸遺跡調査区 トレンチ配置図	100
第61図	日ノ丸遺跡遺物出土状況 遺構配置・土層	102
第62図	日ノ丸遺跡1トレンチ遺物出土状況 及び土層	103
第63図	日ノ丸遺跡1トレンチ出土遺物	103
第64図	日ノ丸遺跡確認トレンチ 土層断面図	104
第65図	日ノ丸ピット	106
第66図	日ノ丸遺跡畠跡	107
第67図	日ノ丸遺跡ピット及び 溝状遺構	107
第68図	日ノ丸遺跡遺構遺物	107
第69図	日ノ丸遺跡V層遺物	110
第70図	日ノ丸遺跡IV b層遺物	110
第71図	日ノ丸遺跡IV a遺物	110
第72図	日ノ丸遺跡IV a'層遺物	110
第73図	日ノ丸遺跡IV層遺物(1)	111
第74図	日ノ丸遺跡IV層遺物(2)	112
第75図	日ノ丸遺跡III層遺物	113
第76図	日ノ丸遺跡II層遺物	114

表目次

第1表	遺跡地名表(1)	8
第2表	遺跡地名表(2)	9
第3表	植松遺跡遺物観察表	21
第4表	一ノ坪遺跡遺物観察表(1)	35
第5表	一ノ坪遺跡遺物観察表(2)	36
第6表	有鹿野遺跡遺構計測表	77
第7表	有鹿野遺跡遺物観察表(1)	78
第8表	有鹿野遺跡遺物観察表(2)	79
第9表	有鹿野遺跡遺物観察表(3)	80
第10表	下鹿野遺跡遺構計測表	93
第11表	下鹿野遺跡土器観察表	93
第12表	日ノ丸遺跡遺構計測表	115
第13表	日ノ丸遺跡遺物観察表(3)	115
第14表	日ノ丸遺跡遺物観察表(3)	116

図版目次

図版 1 炭化材	97	図版31 有鹿野遺跡出土遺物(7)	154
図版 2 植物珪酸体	121	図版32 有鹿野遺跡出土遺物(8)	155
図版 1 各遺跡の土層断面(1)	124	図版33 有鹿野遺跡出土遺物(9)	156
図版 2 各遺構の土層断面(2)	125	図版34 有鹿野遺跡出土遺物(10)・ 下鹿野遺跡出土遺物	157
図版 3 出土土器の胎土(1)	126	図版35 日ノ丸遺跡出土遺物(1)	158
図版 4 出土土器の胎土(2)	127	図版36 日ノ丸遺跡出土遺物(2)	159
図版 5 植松遺跡調査写真(1)	128	図版37 日ノ丸遺跡出土遺物(3)	160
図版 6 植松遺跡調査写真(2)	129		
図版 7 一ノ坪遺跡調査写真(1)	130		
図版 8 一ノ坪遺跡調査写真(2)	131		
図版 9 高田遺跡・真所汐入 遺跡調査写真	132		
図版10 発掘作業員・整理作業員 集合写真	133		
図版11 有鹿野遺跡(1)	134		
図版12 有鹿野遺跡(2)	135		
図版13 下鹿野遺跡(1)	136		
図版14 下鹿野遺跡(2)	137		
図版15 日ノ丸遺跡(1)	138		
図版16 日ノ丸遺跡(2)	139		
図版17 日ノ丸遺跡(3)	140		
図版18 日ノ丸遺跡(4)	141		
図版19 植松遺跡出土遺物(1)	142		
図版20 植松遺跡出土遺物(2)	143		
図版21 一ノ坪遺跡出土遺物(1)	144		
図版22 一ノ坪遺跡出土遺物	145		
図版23 一ノ坪遺跡出土遺物	146		
図版24 一ノ坪遺跡・真所汐入B遺跡 出土土器	147		
図版25 有鹿野遺跡出土遺物(1)	148		
図版26 有鹿野遺跡出土遺物(2)	149		
図版27 有鹿野遺跡出土遺物(3)	150		
図版28 有鹿野遺跡出土遺物(4)	151		
図版29 有鹿野遺跡出土遺物(5)	152		
図版30 有鹿野遺跡出土遺物(6)	153		

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県では、文化財の保護と活用をはかるため、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて開発側と事前協議を行い調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課／以下、県農政部）が、種子島南部地区において計画をした県営畑地帯農道網整備事業の実施に先立ち、事業区域内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

これを受けて、県文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター及び南種子町教育委員会（以下、町教育委員会）は、平成12年度に事業区域内の分布調査を実施した結果、一ノ坪遺跡、植松遺跡、高田遺跡、真所汐入B遺跡、日ノ丸遺跡、下鹿野遺跡、有鹿野遺跡、坂元田遺跡、藤七畑遺跡の存在が判明した。

この結果をうけ、県農政部、南種子町農地整備課及び町教育委員会の3者で遺跡の保存と事業の実施について協議を行い、対象地域内の遺跡の範囲と性格を把握するための確認調査を実施した。

確認調査は、平成15年～17年度に町教育委員会が実施した。その結果、一ノ坪遺跡、植松遺跡、高田遺跡、真所汐入B遺跡、日ノ丸遺跡、下鹿野遺跡、有鹿野遺跡において事業区域内に遺跡が包蔵されていることがあきらかとなった。

そこで、県農政部、南種子町農地整備課、町教育委員会及び県文化財課は再度協議を行い、現状保存や設計変更等を検討したが、それが不可能な範囲については、記録保存のための発掘調査を町教育委員会が実施することとなった。なお、高田遺跡と真所汐入B遺跡については、工事の内容と遺跡の性格から工事立会となった。また、坂元田遺跡、藤七畑遺跡については事業区域内の遺跡の包蔵が確認されなかった。

本調査は平成17年～19年度に行い、報告書作成事業については、平成19、20年度に行った。

第2節 調査の組織

本事業に伴う確認調査・本調査は、平成15年度から19年度に、整理作業及び報告書作成事業については、平成19、20年度に以下の体制で行った。

調査主体	南種子町教育委員会	
調査責任者	南種子町教育委員会教育長	竹迫 種俊（平成15年～19年度） 岩屋 秀男（平成20年度）
事務組織	南種子町教育委員会社会教育課長兼文化係長	上山 幸夫（平成15年～19年度） 坂口 浩一（平成20年度）
	南種子町教育委員会社会教育課主査	徳田 有希乃
	南種子町教育委員会社会教育課主事	石堂 和博
	南種子町教育委員会社会教育課	松山 りか（平成15年度）
	南種子町教育委員会社会教育課	豊島 ますみ（平成16年度）

	南種子町教育委員会社会教育課	折田 日出代 (平成17～20年度)
調査組織	南種子町教育委員会社会教育課主査	徳田 有希乃
	南種子町教育委員会社会教育課主査	石堂 和博
協力機関	鹿児島県教育委員会	
	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
調査指導	鹿児島県教育委員会文化財課文化財主事 (当時)	堂込 秀人 (平成17, 18年度)
	鹿児島大学法文学部助手 (当時)	新里 貴之 (平成18年度)

第3節 調査の経過

発掘調査の経過について、各遺跡毎に調査日誌から略述したい。

・植松遺跡 (本調査：平成17年5月16日～平成17年6月10日)

5月16日(月)～5月27日(金)

調査準備，表土剥ぎ，調査区設定，A～C区Ⅲ層人力で掘り下げ開始。A～E区 Ⅲ層人力で掘り下げ。出土状況図を作成し遺物取り上げ。岩坪巖氏来跡

5月30日(月)～6月10日(金)

雨の多い週である。6月3日，南種子中学校生徒4名，職場体験学習の打ち合わせのため来跡。6月8日，台風接近のため天候悪し。南種子中学校生徒4名職場体験学習で発掘参加。G区で石斧出土。各区の土層断面図，出土状況図，写真記録保存実施。6月10日が現場最終日。撤収。

・一ノ坪遺跡 (本調査：平成17年8月22日～平成17年9月17日)

8月22日(月)～8月26日(金)

調査準備，表土剥ぎ，調査区設定，区割りをを行い人力で掘り下げ開始。

8月29日(月)～9月9日(金)

台風接近に伴う台風対策実施。検出済みの遺物を全て記録保存し取り上げる。9月5日，台風14号直撃。9月6日暴風圏を抜けると同時に現場確認。トレンチ内に流れ込んだ水やゴミ類を取り除く。

9月12日(月)～9月17日(土)

全区でⅢ層精査，遺物を記録保存し取り上げ。9月14日～15日に県文化財課堂込氏に指導をいただく。9月17日，重機による埋め戻し。

・高田遺跡 (確認調査：平成17年11月8日～平成17年11月18日)

1～8トレンチを設定し，調査を実施。2トレンチで上能野式土器底部出土。調査終了後重機で埋め戻し。

・真所汐入B遺跡 (確認調査：平成15年4月28日～平成15年5月12日)

表土剥ぎを重機で行い，1～3トレンチを設定し，人力で掘り下げ。1トレンチより曾畑式土器片出土。5月12日，重機によりトレンチ埋め戻し。

・有鹿野遺跡（本調査：平成19年8月16日～平成19年10月5日）

8月16日(木)～8月24日(金)

調査準備，表土剥ぎ，調査区設定，区割りをを行い人力で掘り下げ開始。

8月27日(月)～9月7日(金)

台風接近に伴う台風対策実施。検出済みの遺物を全て記録保存し取り上げる。9月5日，台風14号直撃。9月6日暴風圏を抜けると同時に現場確認。トレンチ内に流れ込んだ水やゴミ類を取り除く。

9月10日(月)～9月21日(金)

A20，21区で砂岩円礫大量に集中して出土。噴礫か。光波によりグリッド杭延長。9月21日，A20区で石斧出土。平板による遺物取り上げ。

9月24日(月)～10月7日(火)

A20区の落ち込みを確認するも遺構ではなかった。10月2～3日，南種子中学校生徒3名職場体験のため参加。10月7日，道具類撤収等。

・下鹿野遺跡（本調査：平成18年5月8日～平成18年6月29日）

5月8日(月)～5月19日(金)

調査準備，表土剥ぎ，調査区設定，区割りをを行い人力で掘り下げ開始。D～F地区で溝状遺構検出。

5月22日(月)～6月2日(金)

確認調査時に検出し未調査のまま白砂で保護していた1号集石を再度検出し，調査を行う。1/2カットし，噴礫でないことを確認する。

6月5日(月)～6月16日(金)

1号集石を記録保存しつつ取り上げる。遺構中の炭化物をサンプリング。A～B区の調査実施。

6月19日(月)～6月29日(木)

1号集石は，下部に大型の礫を伴うことが判明する。6月29日をもって，記録保存を完了し調査終了。

・日ノ丸遺跡（本調査：平成17年9月26日～平成17年10月31日）

9月26日(月)～10月14日(金)

調査準備，表土剥ぎ，調査区設定，区割りをを行い人力で掘り下げ開始。横峰F・G遺跡も同時並行で行ったため作業効率が悪い。

10月17日(月)～10月21日(金)

B・C-1・2区のⅢ～Ⅳ層の掘り下げ実施。ピット検出。南種子中学校1年約80名現場見学。

10月24日(月)～10月31日(月)

B～D区のⅠⅤ層掘り下げ。E区Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ。A区に下層確認トレンチ設置し，確認をする。遺物を平板測量でとりあげ，写真記録保存を図り調査終了。埋め戻し。

発掘・整理作業従事者（平成15年～19年度）

発掘作業員：柳田弘，寺川順子，小山田鶴子，稲川ナナ子，脇田和江，原南海雄，福島清，丸塚とめ子，柳田幸子，砂坂理香，長田陸郎，牛野光男，小西スイ子，立石竜太，佐々木ふさ子，河野タヅ子，市坂あやの，大嵐まり子，森良樹，久木原三男，峯山鈴子，飯田寧子，梶原美智子，小山孝幸，砂坂信

義，砂坂エツ，頓所美佐子，久米由香，峰山いづみ，砂坂トシ子，泉川誠，兼田美保，岩坪正美，木之下美穂子，牛野光，砂坂誠，尾関昌平，行廣保成，土屋覚，砂坂嘉秋，整理作業員：西園六代，森真智子，小早太，脇田和江，清水貴子

なお，発掘調査，整理作業において下記の方々にご教示・ご助言をいただいた。記して謝意を表します。(50音順；敬称略)

黒川忠広・中村耕治・中村直子・西園勝彦・宮田栄二・八木澤一郎

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 自然環境

種子島は、面積447.09km²、南北52km、東西12km、最高海拔282.3mの低平な島で、九州島最南端の佐多岬から南東約40kmの洋上に位置する。自然環境としては、亜熱帯と温帯の境界付近に位置し、黒潮が島の沖を流れ、サンゴ礁の北限地である。

地学的には、本州、琉球の両島弧の屈曲部の海溝側に位置し、琉球弧の外弧で西南日本外帯・四万十帯の地質構造帯に属する。また、海岸段丘が良好に発達し、その段丘上に旧石器・縄文期の遺跡の多くは立地する。

第2節 歴史的環境

九州島から台湾まで連なる琉球列島は、次の3つの文化圏に分けられている（註1）。

- ① 北部圏 大隅諸島（種子島・屋久島など）・トカラ列島。
- ② 中部圏 奄美諸島・沖縄諸島。
- ③ 南部圏 宮古・八重山諸島。

九州島に最も近い北部圏では、南九州の縄文・弥生文化をほぼそのまま受け入れていたとされている。中部圏では、西南九州の縄文・弥生文化を一部取り入れながらも、独自性のつよい文化が生まれた。一方、先史時代の南部圏では、九州島や中部圏の文化の影響をほとんど受けず、台湾やフィリピンなどの南方文化の影響をつよく受けていた。

以下、北部圏に属する種子島の南種子町所在の遺跡を中心に時代ごとに記述したい。

・旧石器時代

種子島で最も古い時期の遺跡は、後期旧石器時代初頭の遺跡である。南種子町横峯遺跡（21）では、A T火山灰、種Ⅳ火山灰、種Ⅲ火山灰などの鍵となる火山灰層に挟まれた文化層に掘り込み開始面を持つ礫群と、敲石などの石器がみつまっている。中種子町立切遺跡で局部磨製石斧が出土している。また、中種子町大津保畑遺跡では、種Ⅳ火山灰（約30,000年前）下位で落とし穴遺構が検出された。

ナイフ形石器を伴う文化層は、種子島では確認されていない。

細石器を伴う文化層は、1996年に鮫島安豊氏らにより西之表湊遺跡で表採され、その存在が確認された。南種子町では、銭亀遺跡（24）で細石核が確認されている。いずれも船野型である。銭亀遺跡出土資料の中には、複数の細石刃核が接合により同一の母岩礫に復元される資料もあり、注目される。

・縄文時代

草創期の遺跡としては、隆帯文土器が表採された横峯C遺跡（21）・横峯D遺跡（39）がある。他に、西之表市奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡・中種子町三角山遺跡などで隆帯文土器が出土している。

早期の遺跡としては、岩本式土器が出土した上平遺跡（35）、中種子町園田遺跡、吉田式土器の出土した長谷遺跡（1）、塞ノ神式土器の出土した小牧遺跡（14）、平成7年に発掘調査がなされ塞ノ神式土器

や磨製石鏃が出土した石ノ峯遺跡（36）が知られる。押型文土器は、西之表市国上久保田遺跡でアカホヤ火山灰層下層より崖面表採されている。

前期の遺跡では、平六間伏遺跡（15）、赤石牟田遺跡（2）、轟式土器、西川津式土器の出土した上平遺跡（35）などがある。

中期の遺跡は、西之表市下剥峯遺跡などがある。

後期の遺跡は、茶木久保遺跡（23）、田尾遺跡（4）、市来式土器・丸尾式土器の出土した松原遺跡（11）、大規模な配石遺構で知られる藤平小田遺跡（38）などがある。西之表市大花里一之鳥居貝塚は、指宿式土器を主体とする後期の土器が表採され、磨消縄文土器が確認されており注目される。

この時期の大隅諸島に特徴的な土器様式として、一湊式土器がある。南種子町には、一湊式土器の単純遺跡である野大野A遺跡（18）があり、一湊式土器を持つ集団の特徴を知るうえで重要である。

晩期の遺跡は、黒川式土器や人骨・貝製品などの出土した一陣長崎鼻貝塚（5）、松原遺跡（11）などがある。中種子町大園遺跡は、縄文時代晩期の黒川式土器を主体とするが、丹塗りの研磨土器で大洞C2式土器の特徴を残すものも1点確認されており、注目される。

旧石器時代から縄文時代晩期までの種子島は、後期旧石器時代初頭においては類例の少なさ等から判断が難しく、また、後期～晩期の一湊式をどう捉えるかの問題があるが、全体を通じて、九州島とほぼ同じ文化圏に属すといつてよい。

・ 弥生時代～古墳時代併行期

弥生時代前期の遺跡としては、広田遺跡（73）で板付Ⅱ式の壺形土器の破片が発見されている。また、中種子町阿嶽洞穴出土資料の甕形土器の中に、前期末頃に比定できそうなものが一部含まれている。

弥生時代中期の遺跡は、中種子町阿嶽洞穴、西之表市泉原遺跡などがある。

弥生時代後期になると大隅諸島で独自の土器様式が成立し、中種子町鳥ノ峰遺跡にみられる覆石墓（4）など、この地域独特の墓制が生まれる。

弥生時代終末から古墳時代併行期にかけて、種子島には、弥生終末期の南九州の土器様式である中津野式は搬入されるが、古墳時代併行期の南九州の土器様式である成川式や古式土師器については、確かな出土例は知られない。また、高塚古墳や古墳時代の須恵器なども確認されていない。

この時期の種子島を代表する遺跡として、広田遺跡（73）があげられる。

・ 歴史時代

平安時代の掘立柱建物跡の検出された本村丸田遺跡（9）が知られ、中世の遺跡としては、藤平小田遺跡や中世の山城とされる上妻城址（13）が知られている。

註1) 国分直一 1959 「史前時代の沖縄」 『日本の民族・文化』 講談社

[参考文献]

- | | | | |
|------------------------------|-----------------------------------|----------------------|------|
| 南種子町教育委員会 | 「本村丸田遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) | 1986 |
| 〃 | 「小牧遺跡・平六間伏遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) | 1988 |
| 〃 | 「野大野 A 遺跡・上瀬田 A 遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) | 1991 |
| 〃 | 「横峯遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) | 1993 |
| 〃 | 「松原遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) | 1993 |
| 〃 | 「石ノ峯遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) | 1996 |
| 〃 | 「摺久保遺跡・ヌカス遺跡・嵐遺跡・今平遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(7) | 1996 |
| 〃 | 「横峯 C 遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8) | 2000 |
| 〃 | 「藤平小田遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(9) | 2003 |
| 〃 | 「銭亀遺跡」 | 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(14) | 2006 |
| 中種子町教育委員会 | 「立切遺跡」 | 中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) | 2002 |
| 〃 | 「立切遺跡」 | 中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) | 2003 |
| 盛園尚孝 | 「広田遺跡に関する調査報告書」 | | 1995 |
| 広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館 | 「種子島 広田遺跡」 | | 2003 |
| 南種子町郷土誌編纂委員会 | 「南種子町郷土誌」 | | 1987 |
| 南種子町教育委員会 | 「南種子町の民俗」 | | 1995 |
| 西之表市教育委員会 | 「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」 | 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7) | 1995 |
| 鹿児島県立埋蔵文化財センター | 「三角山 I 遺跡 (P地点)」 | | 2002 |
| 桑畑武志・大久保浩二 | 人類史研究12 「種子島の細石器ー西之表市大中峯遺跡資料の紹介ー」 | | 2000 |
| 種子島考古学研究会 | 「潮流」 第1号 | | 1978 |

第1表 遺跡地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	長谷	中之上 赤石牟田	台地	縄文(早期)	吉田式	表面調査による出土
2	赤石牟田	〃	〃	縄文(早期・前期)	曾畑式・塞ノ神式・石鏃 黒耀石片・石匙・石斧・集石	平成4年分布調査
3	野大野	西之 野大野	〃	縄文(後期)	市来式・磨製石斧・敲石	
4	田尾	島間 田尾	〃	〃 (〃)	市来式・磨製石斧磨石・敲石・石皿	表面調査による出土
5	一陣長崎鼻貝塚	中之下 一陣	低地	縄文(晩期)	黒川式・磨製石斧+・骨製髪飾り 骨鏃・貝輪・人骨・獣魚骨・貝類	昭和31年発掘調査
6	浜田嵐	平山 嵐シ	〃	弥生(中期)	土器片(須玖式)	
7	広田埋葬址	平山 奥ノ園	〃	弥生(中期・後期) 古墳(前期)	弥生土器・人骨百数十体余 貝製品・紡錘車・石錘 鉄製鈎針・獣魚骨・貝類	昭和32～34年発掘調査埋葬 址考古学雑誌43巻3号、日本 考古学協会発表(24回総会)、 福岡医学雑誌52巻8号、種子 島民俗集7号広田の民俗。
8	本村塚の峯	西之 塚の峯	山地	弥生(後期)	土器片	
9	本村丸田	西之 丸田	〃	縄文(後期) 弥生(後期) 平安	指宿式・市来式・曾畑式 石斧・磨石・弥生土器 土師器・須恵器・陶磁器	昭和60年発掘調査 南種子町埋文報告書(1)
10	本村宇都	西之 宇都	〃	弥生(後期)	土器片	
11	松原	荃永 堤ノ小田	低地	縄文(後期・晩期) 古代	集石・市来式・丸尾式・指宿式・石斧 磨石・石皿・土師器・須恵器・青磁	平成4年発掘調査 南種子町埋文報告書(5)
12	上里城址	荃永 野久尾山	山地	中世		中世城館跡(昭和58年県文化課調査)
13	上妻城址	島間 内城	〃	〃		〃 (〃)
14	小牧	中之上 小牧	台地	縄文(早期)	塞ノ神式・磨石・敲石	南種子町埋文報告書(2)
15	平六間伏	中之上 平六間伏	〃	縄文・古墳	土器片・石斧	〃
16	上瀬田A	西之 上瀬田	〃	縄文	土器片	南種子町埋文報告書(3)
17	上瀬田B	〃	〃	〃	〃	昭和63年分布調査
18	野大野A	西之 野大野	〃	縄文(後期)	一湊式・敲石・磨石・石皿	南種子町埋文報告書(3)
19	横峯A	島間 横峯	〃	縄文	土器片	平成3年分布調査
20	横峯B	〃	〃	縄文(早期)	土器片・磨製石斧	平成4年確認調査
21	横峯C	〃	〃	旧石器縄文(草創期・早期)	礫群・礫器・隆帯文・集石・石鏃・石斧 敲石・塞ノ神式・善浜式・轟式	南種子町埋文報告書(8)(12)
22	下鹿野	島間 下鹿野	〃	縄文・古代・中世	石鏃・土器片	平成13年分布調査(周知の遺跡拡大)
23	茶木久保	島間 茶木久保	〃	縄文(後期)	土器片・石鏃	平成6年確認調査
24	銭亀	西之 銭亀	〃	縄文(早期)	下剝峯式・桑ノ丸式・天道ヶ尾式 前平式・マイクロコア・マイクロブレード	南種子町埋文報告書(14)
25	駒取野	西之 駒取野	〃	縄文	土器片	平成4年分布調査
26	安久保	西之 安久保	〃	縄文(早期)	吉田式	〃
27	西之大宮田	西之 大宮田	低地	中世	染付・土師器	〃
28	真所汐入A	中之下 東真所汐入	〃	〃	染付・青磁・白磁・土師器	〃
29	上松原汐入	荃永 上松原汐入	〃	〃	製塩土器	〃
30	松原山	荃永 松原山	〃	縄文	台石	〃
31	友心汐入A	荃永 友心汐入	〃	中世	土師器	〃
32	友心汐入B	〃	〃	〃	〃	〃
33	福ヶ野A	平山 福ヶ野	台地	縄文	土器片	〃
34	福ヶ野B	〃	〃	縄文(前期・後期)古墳	縄文土器・成川式	〃
35	上平	平山 上平	〃	縄文(早期・前期)中世	岩本式・轟式・石鏃・石斧青磁	南種子町埋文報告書(10)
36	石ノ峯	中之上 石ノ峯	台地	縄文(早期)	磨製石鏃・磨石・敲石・石皿 塞ノ神式・平橋式	南種子町埋文報告書(6)
37	摺久保	中之上 摺久保	〃	縄文(早期) 弥生	塞ノ神式・弥生土器 片	南種子町埋文報告書(7)

第2表 遺跡地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
38	とうへいおだ 藤平小田	島間 藤平小田	〃	縄文(後期) 中世	市来式・丸尾式・指宿式・松山式・ 一徳式・台付皿など・石鏃・石斧・ 磨石・敲石・凹石・石皿・石製品な ど・配石遺構・集石・大型土坑・柴 付・土師器・青磁・掘立柱建物跡	南種子町埋文報告書(9)
39	よこみね 横峯D	島間 横峯	〃	縄文(草創期)	隆帯文	南種子町埋文報告書(13)
40	しおうらでん 塩浦田	西之 塩浦田	〃	古代	土器片	南種子町埋文報告書(11)
41	いまだいら 今平	西之 下今平	〃	縄文(早期)	塞ノ神式・轟式・石鏃・石匙・チップ	南種子町埋文報告書(11)
42	しんまさ 新牧	西之 新牧	〃	〃 (〃)	土器片・石鏃・石皿・石斧	平成9年発掘調査
43	はしくぼ 橋久保	西之 橋久保	〃	旧石器	礫群	平成13年確認調査
44	りゅうあんざか 龍庵坂	西之 龍庵坂	〃	縄文(早期)	前平式・吉田式・石鏃	南種子町埋文報告書(11)
45	よこみね 横峯E	島間 横峯	〃	旧石器・縄文		平成10年分布調査(周知の遺跡の隣接地)
46	いな 稲野	島間 稲野	〃	弥生	土器片	平成10年分布調査
47	まるの 丸野	中之上 丸野	〃	縄文	〃	〃
48	ささ 笹	中之上 笹	〃	〃	〃	〃
49	とくまるがの 徳丸ヶ野	西之 徳丸カノ	〃	縄文(後期) 中世	市来式・丸尾式・松山式 磨石・敲石・石皿	周知の遺跡平成10年分布調査
50	たかはな 高鼻	西之 高鼻	〃	古墳	土器片	平成10年分布調査
51	ありお 有尾	中之上 有尾	〃	縄文	〃	平成7年分布調査
52	たかみね 高峯	島間 高峯	〃	縄文(後期)	〃	平成10年確認調査
53	にしおまがり 西大曲	中之下 西大曲	〃	縄文	〃	平成7年分布調査
54	つばきやま 椿山A	中之上 椿山	〃	〃	〃	平成8年分布調査
55	つばきやま 椿山B	〃	〃	縄文(早期)	塞ノ神式	〃
56	どうのなかの 堂ノ中野	中之下 堂ノ中野	〃	縄文	土器片	平成9年分布調査
57	ありかの 有鹿野	島間 有鹿野	〃	縄文(後期)	市来式・磨石・敲石・石斧	平成13年分布調査(周知の遺跡拡大)
58	つばきやま 椿山C	中之上 椿山	〃	縄文	土器片・磨石	表面調査による出土
59	おくはまわたり 奥浜渡	平山 奥浜渡	低地	近世	人骨4体・寛永通宝	平成11年発掘調査
60	かみやまみね 神山峯	西之 神山峯	台地	縄文	磨石・土器片	平成13年分布調査
61	ながぼたけ 長畑	西之 長畑	〃	〃	土器片	〃
62	たかた 高田	中之下 高田	低地	中世	〃	〃
63	はまのたしおいり 濱ノ田汐入	中之下 濱ノ田汐入	〃	古代・中世	〃	〃
64	まどころしおいり 真所汐入B	中之下 西真所汐入	〃	〃	〃	〃
65	まどころしおいり 真所汐入C	〃	〃	中世	〃	〃
66	ひのまる 日ノ丸	西之 本村	〃	古代	〃	〃
67	くぼた 久保田	中之下 久保田	〃	中世・近世	〃	〃
68	さかもとでん 坂元田	中之下 坂元田	〃	古代・中世	〃	〃
69	うえまつ 植松	西之 植松	台地	縄文	〃	〃
70	とうしちばたけ 藤七畑	中之下 藤七畑	〃	〃	〃	〃
71	しもはまわたり 下浜渡	平山 下浜渡	低地	縄文(後期)	〃	平成8年分布調査
72	かききのすみ 枯木野隅	中之上 枯木野隅	台地	縄文(早期)	苦浜式土器・石匙・磨石	平成14年分布調査
73	ひろた 広田	平山 奥浜渡他	砂丘	縄文～中世	貝製品他	南種子町埋文報告書(15)
74	きはら 木原	西之 木原	台地	中世		平成17年度試掘調査
75	よこみね 横峯F	島間 横峯	台地	旧石器	礫群	平成17年度試掘調査
76	よこみね 横峯G	島間 横峯	台地	旧石器	石器	平成17年度試掘調査
77	きのでん 野木田	荃永 野木田	平地	弥生～古墳	土器片	平成18年度試掘調査
78	かみうしきやま 上牛木山	島間 上牛木山	台地	縄文	敲石	平成19年度試掘調査
79	しまなかのまち 島間仲之町	島間 仲之町	砂丘	弥生～古墳	上能野式, 貝輪	南種子町郷土誌



第 2 図 町内遺跡分布図

第Ⅲ章 植松遺跡の調査

第1節 調査の概要

植松遺跡は、南種子町大字中之下字植松の標高195メートルの台地上に立地する遺跡で、今回調査を行った場所は、台地の縁辺部にあたる。遺跡は、平成12年度に開発に伴う分布調査によって発見された。全面調査時に行った聞き取り調査で、以前は、遺跡周辺の谷に小川が流れていて、良質の水を汲める場所があったという話を得た。

平成16年度に確認調査を実施したところ、工事予定区域内で遺跡が残存する範囲が確認された。その結果をうけ、開発側との協議を行い、記録保存のための本調査を平成17年度に実施した。

調査は、10m×10mのグリッドを設定し地区分けをした上で、工事予定地内で遺跡が残存している範囲すべてを対象に行った(第3図)。遺跡は、アカホヤ層上面までかく乱を受けていたので、まず、重機でアカホヤ層上面まで除去し、アカホヤ層を重機で注意深く除去したのち、アカホヤ層下面より人力での掘り下げで調査を行った。

調査の結果、縄文時代早期の土器116点・石器10点が出土し、縄文時代後期の土器1点を表面採集した。

第2節 層位

標準土層は、下記のとおりである。

I層 表土層

II a層 明褐色火山灰層：アカホヤ火山灰の二次堆積層

II b層 明褐色火山灰層：アカホヤ火山灰一次堆積層（幸屋火砕流，降下軽石層を含む）

III層 褐色粘質土：包含層。

III a層 褐色粘質土：包含層。III b層に比べやや色調が明るい。

III b層 暗褐色粘質土：包含層。III a層に比べやや色調が暗い。

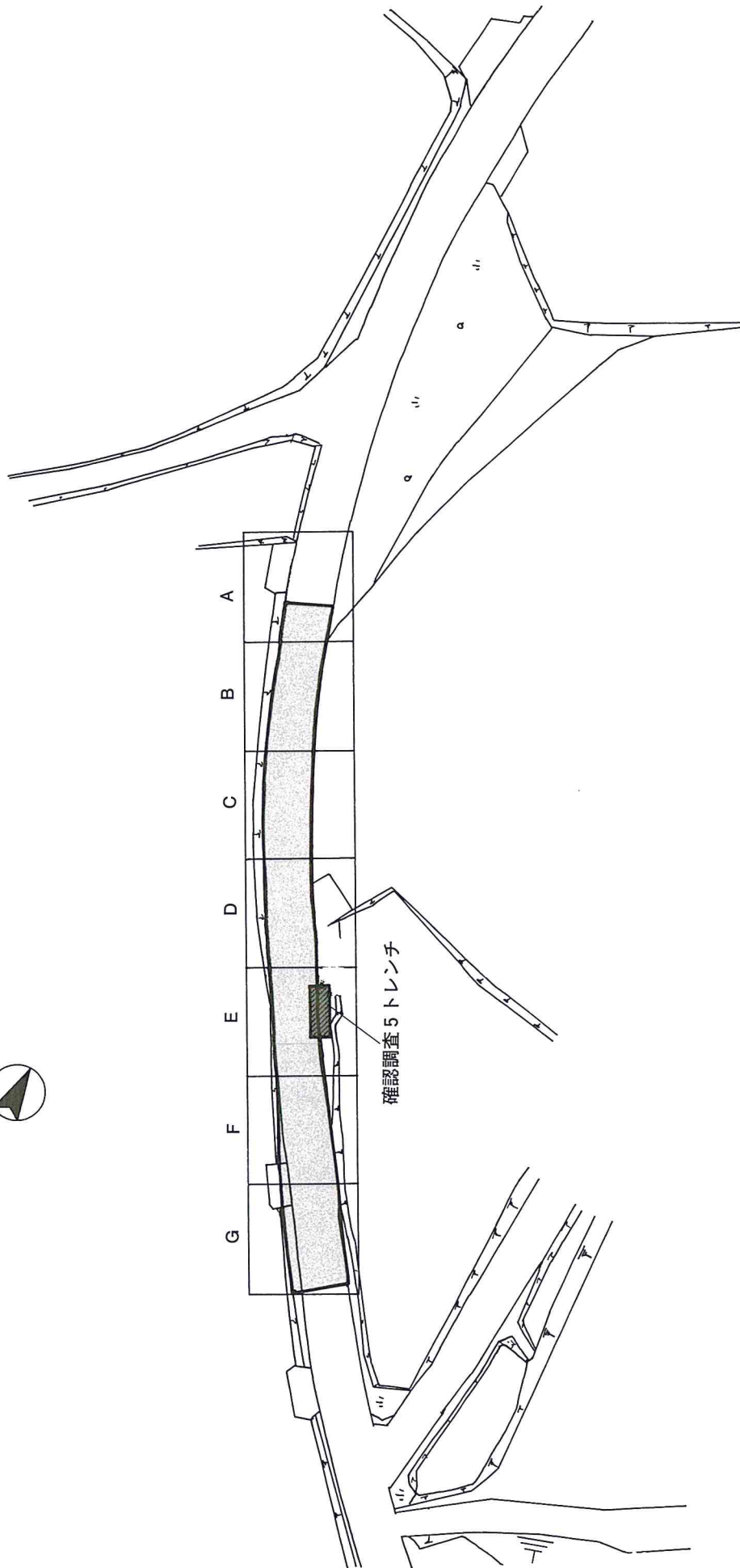
IV層 黒褐色粘質土：無遺物層。

V層 明黄褐色粘質土：無遺物層。非常にかたく締まる。

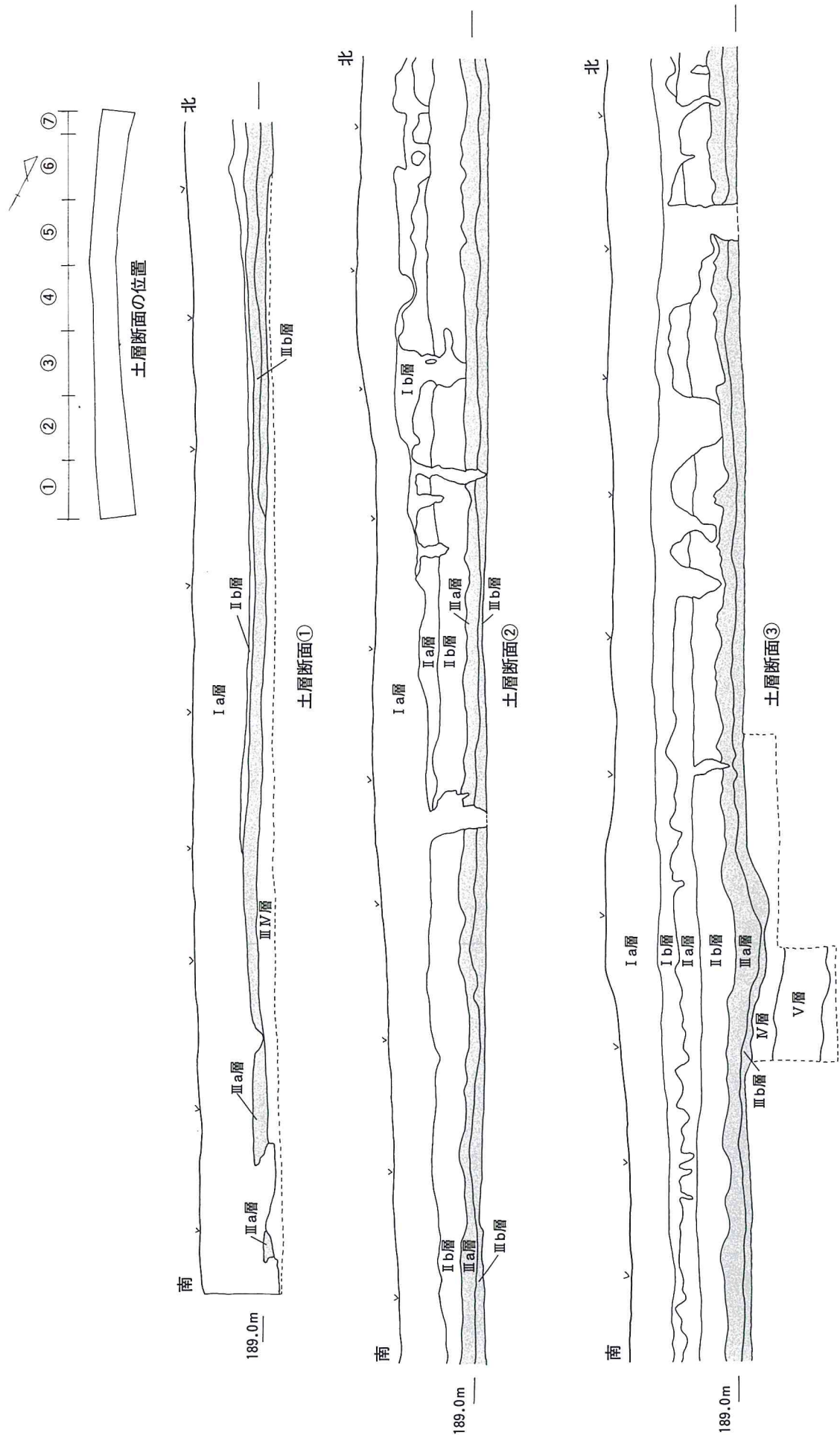
第3節 遺物・遺構

① 遺構

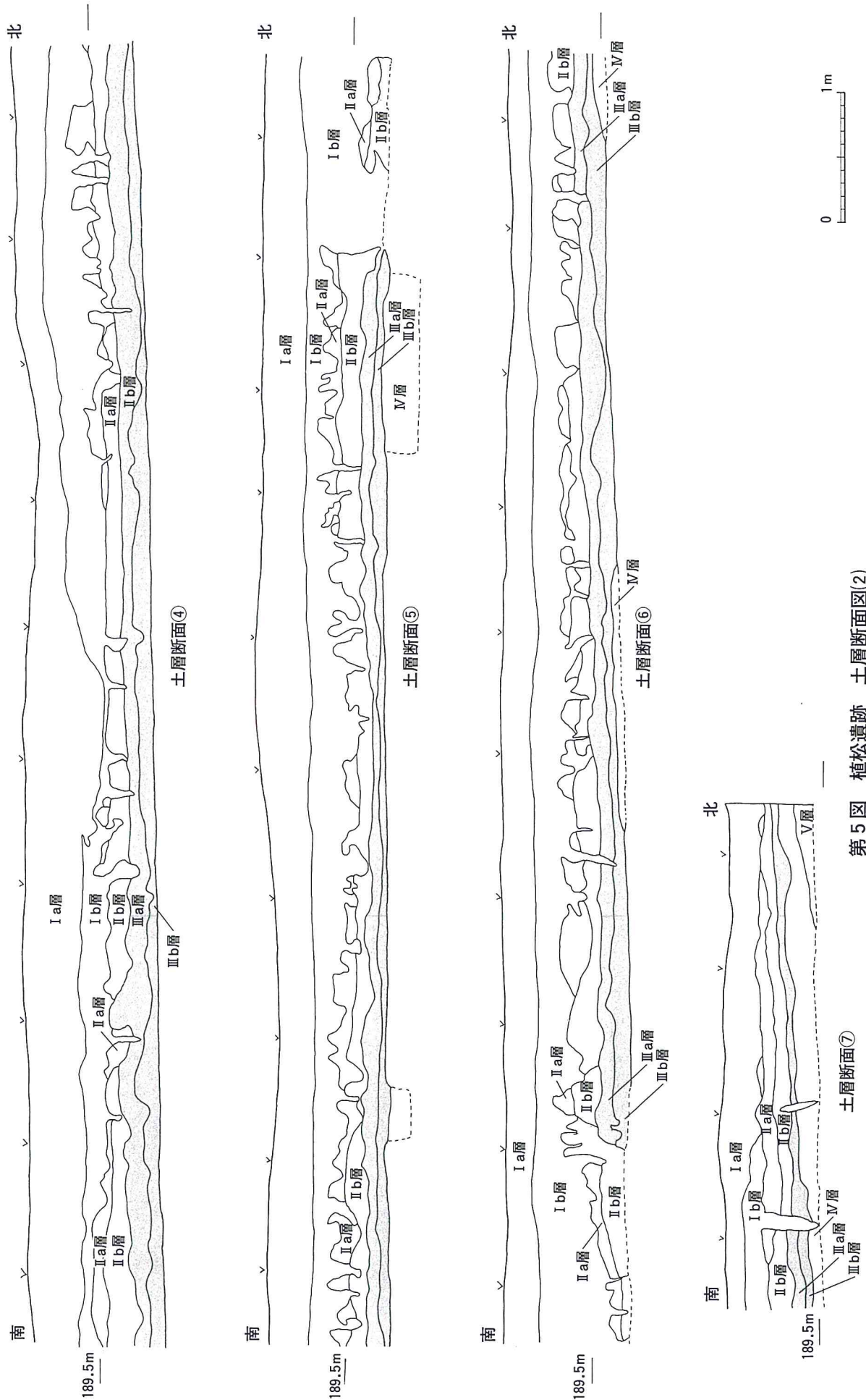
明瞭な遺構は検出されなかったが、E区のIII層中から、焼石の小片が約40点が第7図の分布状況で出土した。集石に伴うものである可能性がある。ただ、周辺に炭化物や土が受熱した痕跡はなく、調査区外にあると想定される集石に由来する可能性が高い。



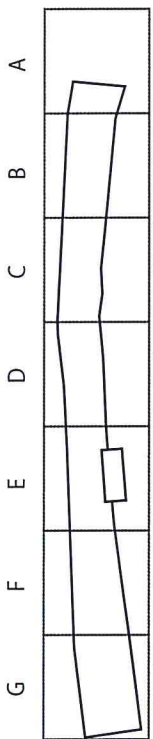
第3図 植松遺跡 調査区・トレンチ配置図



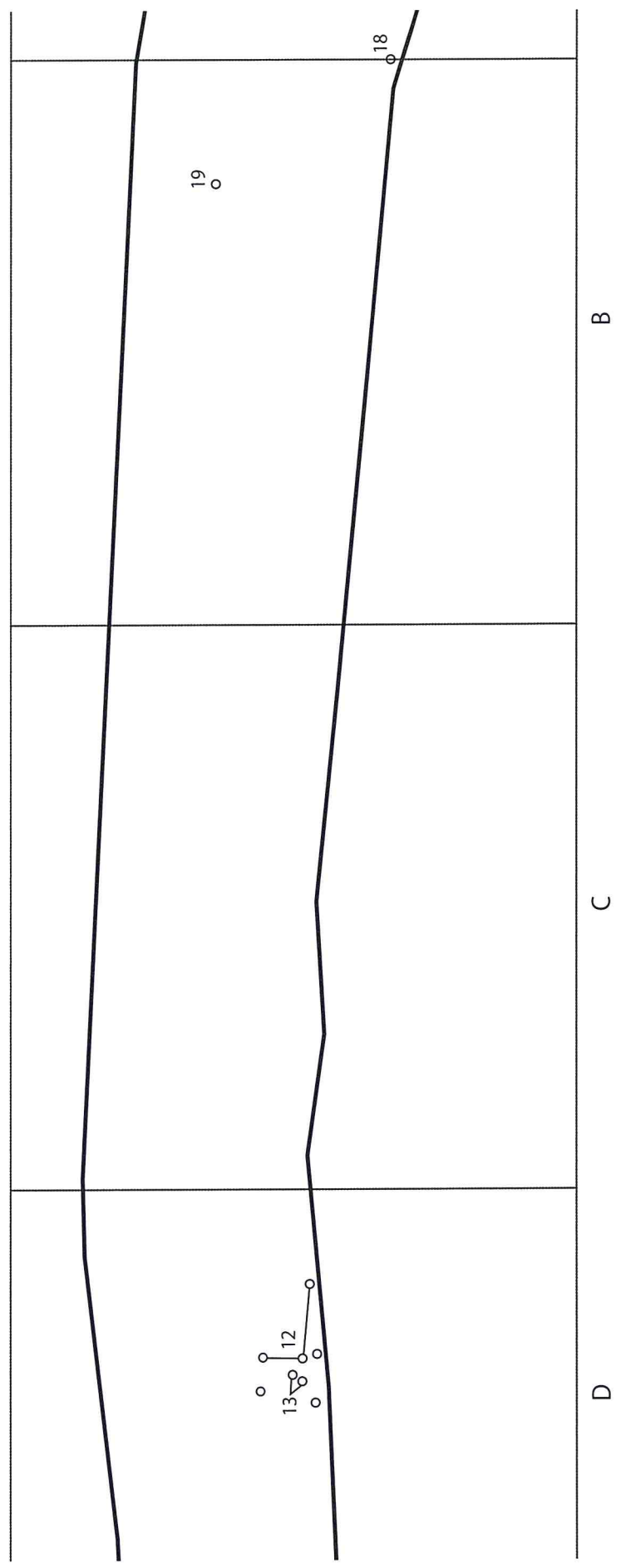
第4図 植松遺跡 土層断面図(1)



第5図 植松遺跡 土層断面図(2)

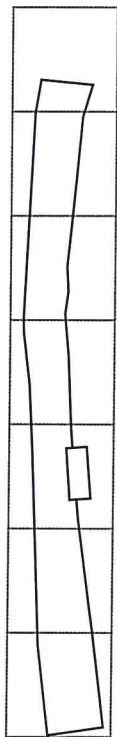


○ 土器

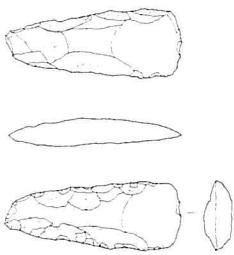


第6図 植松遺跡 出土状況図(1)

G F E D C B A



- 菅浜式
- ▲ 妙見・天道ヶ尾式
- 吉田式
- 土器 (その他)
- 石器
- △ 焼石破片



G F E



第7図 植松遺跡 出土状況図(2)

② 遺物

・土器

土器は、アカホヤ直下、縄文早期の文化層であるⅢ層から出土し、破片を含めると116点となった。うち、19点を図示した。また、表面採集した土器1点も図示した。

Ⅲ層は場所によっては、Ⅲa層とⅢb層に細分できることから層位に分け取り上げを行ったが、結果的には接合した同一個体の破片がⅢa層とⅢb層いずれからも出土したことや、吉田式が同一層序から出土していることから、Ⅲ層内の出土層位の違いの単純な比較では時期差を示さないことがわかる。

苦浜式（第8図1～3）

1～3は、出土状況と土器の特徴から同一個体である可能性が高いもので、外面に貝殻による条線文（注1）が施される。条線文は平行に直線的に施されるが、一部斜位に施される箇所も認められる。胎土に砂礫を多く含み（図版3）、土器表面が剥落する箇所が多く認められ、横峯C遺跡出土の苦浜式の胎土と似ている。内面は、ケズリ調整が認められる。これらの特徴から、1～3の土器は苦浜式にあたる。

妙見・天道ヶ尾式（第8図4, 6, 7）

4, 6, 7は、出土状況と土器の特徴から同一個体である可能性が高い。4は、縄文原体を回転施文したのち、施文部のほとんどがナデ消されている。6に施された文様は、右捻りの撚紐を2条合わせて左捻りした縄文原体を、縦に転がすことで施文された単節斜行縄文で、一部撚糸文も確認できる。内面は、ケズリ調整後に一部ナデが施される。7は、底部から胴部への立ち上がり部分の破片である。4, 6, 7は、底部から胴部の下部のみの資料であるため判別が難しいが、単節斜行縄文を評価すれば、妙見式・天道ヶ尾式にあたる可能性が高い。

吉田式（第8図8～11）

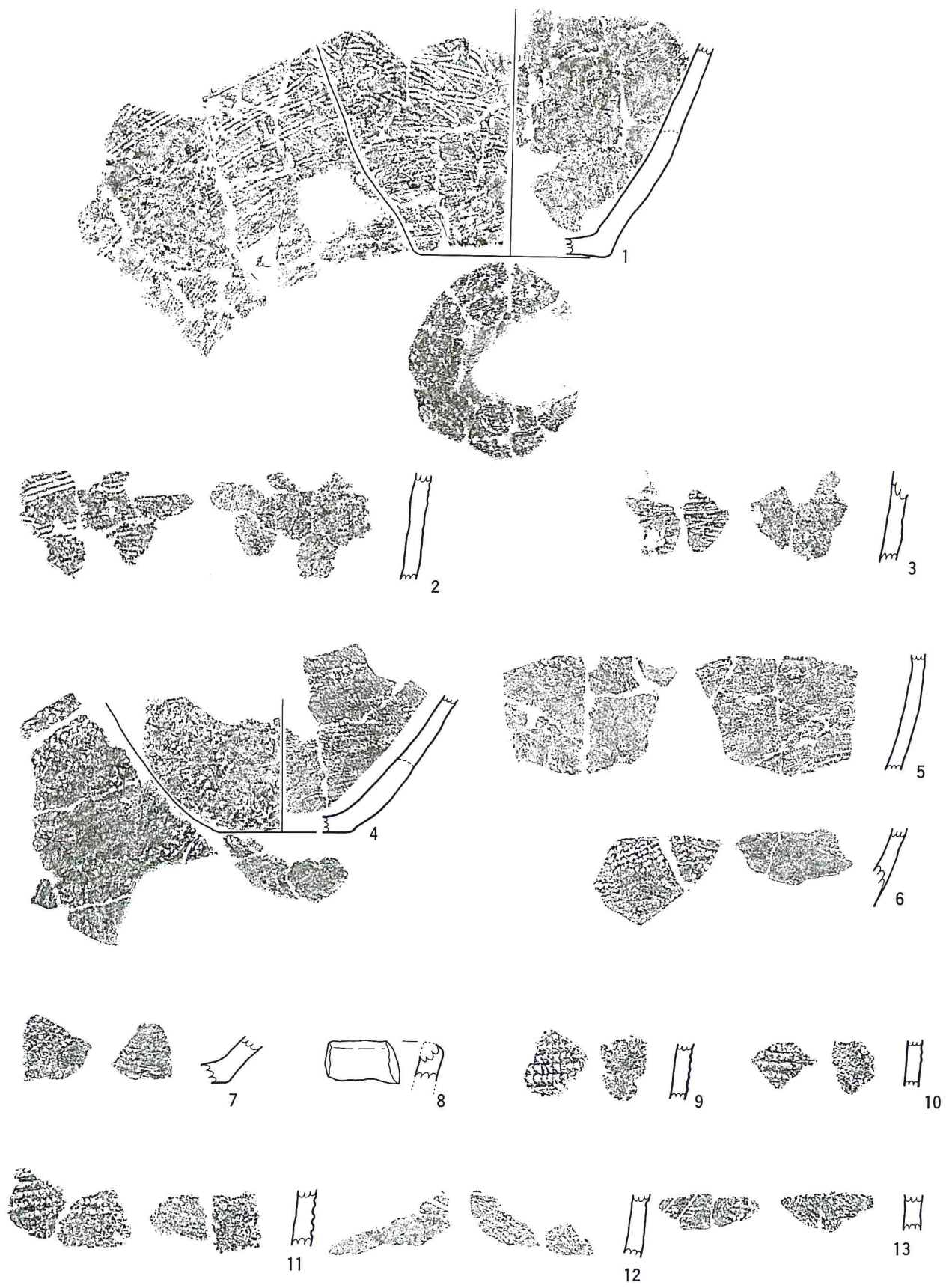
8～11は、出土状況と土器の特徴から同一個体である可能性が高い。貝殻押引文が施されていて、吉田式に該当する。

その他の土器（第8図～第9図5, 12～19）

いずれも小片である。5は、胴部片で4, 6, 7と胎土が類似する（図版3）。12～16は、胴部片で沈線文が施される。17は、口縁部で、刺突文が施される。18～19は、風化が著しく観察が困難であるが、刺突文が施されている。

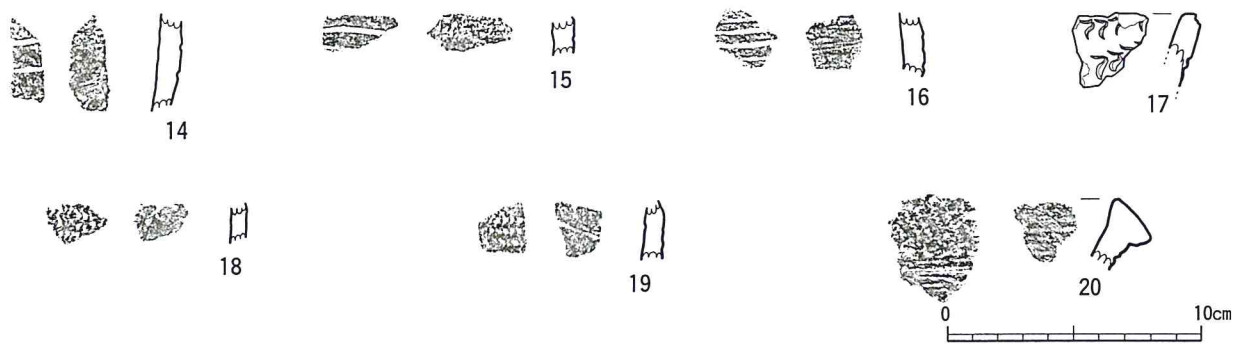
表採（第9図20）

20は、口縁部片で、口唇部外面に斜位に貝殻刺突文が施される。また、口唇部の割れ口付近に横位の沈線文の一部が認められることから、松山式に該当する可能性が高い。



第8図 植松遺跡 出土遺物(1)





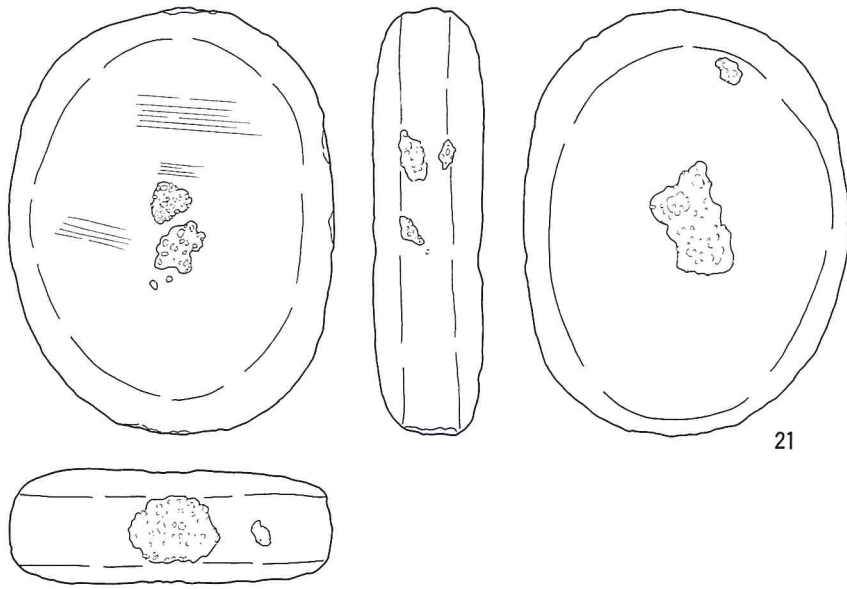
第9図 植松遺跡 出土遺物(2)

・石器

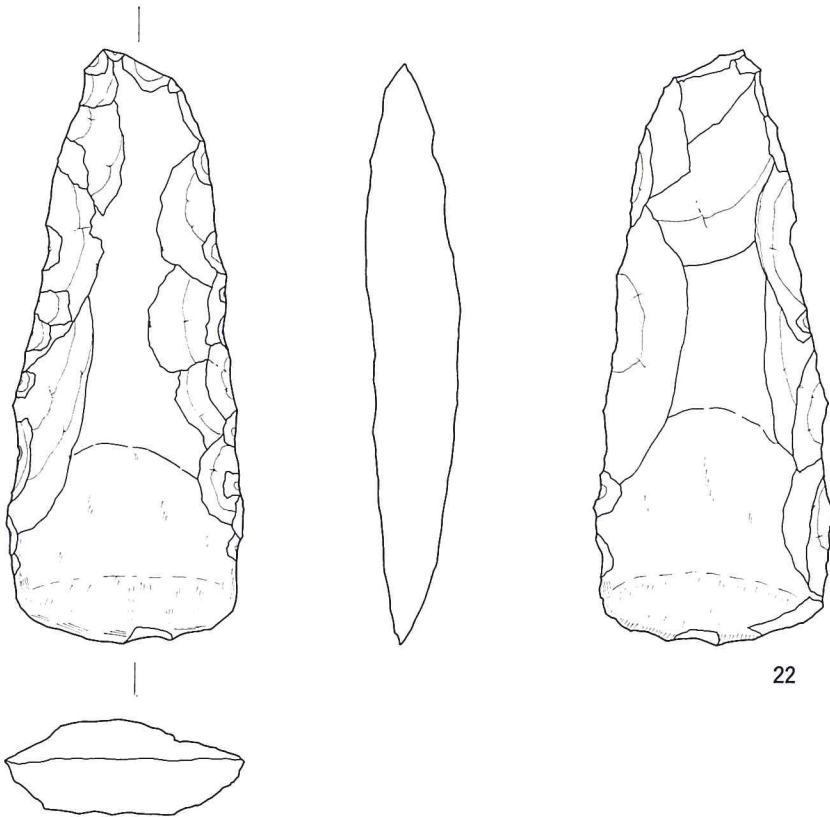
石器は、破片や剥片も含めると10点出土した。そのうちほぼ完形の2点を図示した。

21は、磨石である。花崗岩製で、相当使い込んでいて、磨り減り扁平になっている。中央と両端部に顕著な敲打痕が認められる。

22は、局部磨製石斧である。ホルンフェルスを石材とするこの種の石斧は、風化の影響を受けやすく観察が困難であるが、打製で製作したのち、刃部については磨製で製作されていることがわかる。



21



22



第10図 植松遺跡 出土遺物(3)

第3表 植松遺跡遺物観察表

遺物番号	注記番号	層	胎土					焼成	色調		調整・文様		備考
			石英	長石	角閃石	雲母	砂礫		外	内	外壁面	内壁面	
1	2005-E20他	Ⅲ	○	○	○	×	◎	良	にぶい褐	黒褐	貝殻条痕	ケズリ	65個が接合 12個未接合
2	2004-5T39, 他5個	Ⅲ	○	○	○	×	◎	良	にぶい褐	黒褐	貝殻条痕	ケズリ	1と同一個体
3	2004-5T38, 他2個	Ⅲ	○	○	○	×	◎	良	にぶい褐	黒褐	貝殻条痕	ケズリ	1と同一個体
4	2005-G230, 他	Ⅲa, Ⅲb	○	○	○	×	○	良	橙	にぶい黄橙	ナデ 単節斜 行縄文	ケズリ 一部ナデ	8個が接合 6個未接合
5	2005-G191, 他	Ⅲa	○	○	○	×	○	良	明褐	橙	ナデ	ケズリ	
6	2005-G138	Ⅲa	○	○	○	×	○	良	橙	にぶい黄褐	ナデ 単節斜 行縄文	ケズリ 一部ナデ	燃糸文が一 部施される
7	2005-G129	Ⅲa	○	○	○	×	○	良	橙	にぶい黄褐	ナデ 単節斜 行縄文	ケズリ 一部ナ デ	
8	2005-G167	Ⅲa	○	○	○	×	○	良	浅黄橙	浅黄橙	貝殻押引文	ナデ	未接合13個
9	2005-G163	Ⅲa	○	○	○	×	○	良	浅黄橙	浅黄橙	貝殻押引文	ナデ	
10	2005-G159	Ⅲa	○	○	○	×	○	良	浅黄橙	浅黄橙	貝殻押引文	ナデ	
11	2005-G206, 157	Ⅲa	○	○	○	×	○	良	浅黄橙	浅黄橙	貝殻押引文	ナデ	
12	2005-D84他2個	Ⅲ	○	○	○	×	○	良	橙	褐灰	沈線文	ケズリ	
13	2005-D9, 82	Ⅲ	○	○	○	×	○	良	橙	灰黄褐	沈線文	ケズリ	9個で接合
14	2005-D8	Ⅲ	○	○	○	×	○	良	橙	褐灰	沈線文	ケズリ	
15	2005-D14	Ⅲ	○	○	○	×	○	良	橙	褐灰	沈線文	ケズリ	
16	2005-D12	Ⅲ	○	○	○	×	○	良	橙	にぶい橙	沈線文	ケズリ	
17	2004-E40	Ⅲ	○	○	○	×	○	良	灰褐	灰褐	刺突文	ケズリ	
18	2005-A235	Ⅲb	○	○	○	×	○	良	にぶい橙	橙	刺突文?	—	
19	2005-B98	Ⅲb	○	○	○	×	○	良	にぶい橙	浅黄橙	刺突文?	—	
20	2005表採		○	○	○	×	○	良	橙	橙	貝殻刺突文, 貝殻条痕	貝殻条痕	

遺物番号	出土区	層	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (kg)	制作方法		備考
								打製	磨製	
21	E	Ⅲ	花崗岩	11.00	8.20	2.30	0.495	-	-	磨石
22	G	Ⅲa	ホルンフェルス	15.60	6.10	2.70	0.292	○	○	石斧
23	E	Ⅲ	ホルンフェルス	9.15	3.00	0.80	0.019	-	○	石斧破片
24	G	Ⅲa	ホルンフェルス	7.70	8.10	1.30	0.105	-	-	石斧破片か
25	E	Ⅲ	ホルンフェルス	5.70	3.40	0.50	0.008	-	-	石斧破片か
26	E	Ⅲ	安山岩	2.30	1.70	0.70	0.002	-	-	剥片
27	E	Ⅲ	安山岩	2.10	1.10	0.30	0.001	-	-	剥片
28	E	Ⅲ	安山岩	2.10	1.10	0.70	0.002	-	-	剥片
29	E	Ⅲ	安山岩	2.60	1.00	0.65	0.002	-	-	剥片
30	E	Ⅲ	安山岩	1.70	1.40	0.30	0.001	-	-	剥片

第4節 まとめ

植松遺跡では、遺物包含層であるアカホヤ直下のⅢ層を主に色調を基準にⅢa層とⅢb層に細分し発掘を行った。特に1～3の苦浜式と、4, 6, 7の妙見式・天道ヶ尾式とを層位的に峻別しうるかどうかは細心の注意を払い、見極めて取り上げを行った。しかし、この遺跡は、他の多くの遺跡同様、遺物が上下に一定のレベル幅を持って出土していて、接合資料がⅢa層とⅢb層にまたがり出土していることなどから、有益な情報は得られなかった。

調査時の所見では、図版5で記録してあるように、苦浜式の破片の多くは、南種子町横峯遺跡の苦浜式の出土状況に似て、アカホヤ直下で出土している。一方で、妙見・天道ヶ尾式も同じようにアカホヤ直下から出土をはじめていて、層位によって時期差を語ることは、やはりこの遺跡の堆積環境では難しいことがわかる。

調査を行った場所は、西から東へ延びる尾根が終息する場所で、地形の傾斜がきつくなり始める場所であり、遺跡の中心部は、より西側に広がっている可能性が高い。また、表採資料の20の松山式の間からは、包含層が良好に依存している場所では、縄文後期の遺跡も包蔵されている可能性が指摘できる。今後とも尾根中心部の開発行為に特に留意していく必要がある。

注1) 条線文としたのは、貝殻条痕が全面に施されずに、空白箇所を挟んで施されるからである。

主要参考文献

堂込秀人 1998 「苦浜式土器からみた塞ノ神式土器」 『九州縄文土器編年の諸問題-早期後半土器編年の現状と課題-』 九州縄文研究会

八木澤一郎 2002 「南九州における回転施文系土器の系譜と様相～縄文早期後葉前半期について～」 『鹿児島考古第36号』 鹿児島考古学会

第Ⅳ章 一ノ坪遺跡の調査

第1節 調査の概要

一ノ坪遺跡は、南種子町西之本村を流れる鹿鳴川の現在の左岸から200m離れた自然堤防上に立地する弥生前期末～中世の散布地である。遺跡は、主に弥生～古墳併行期の遺物が表面採集できる地点と、古代～中世の遺物が表面採集できる地点に分かれる（第11図）。平成12年度に開発に伴う分布調査によって発見された。

平成16年度に確認調査を実施したところ、昭和期に行われた水田の構造改善事業によって、古代～中世の散布地付近では、事業区域内の遺跡は破壊されていたが、弥生～古墳併行期の散布地では、工事予定区域内で遺跡が残存する範囲が確認された。その結果をうけ、開発側との協議を行い、記録保存のための本調査を平成17年度に実施した。

調査は、10m×10mのグリッドを設定し地区分けをした上で、工事予定地内で遺跡が残存している範囲すべてを対象に行った（第12図）。まず、重機で表土及び包含層上面までのかく乱層を除去し、包含層上面より人力での掘り下げで調査を行った。

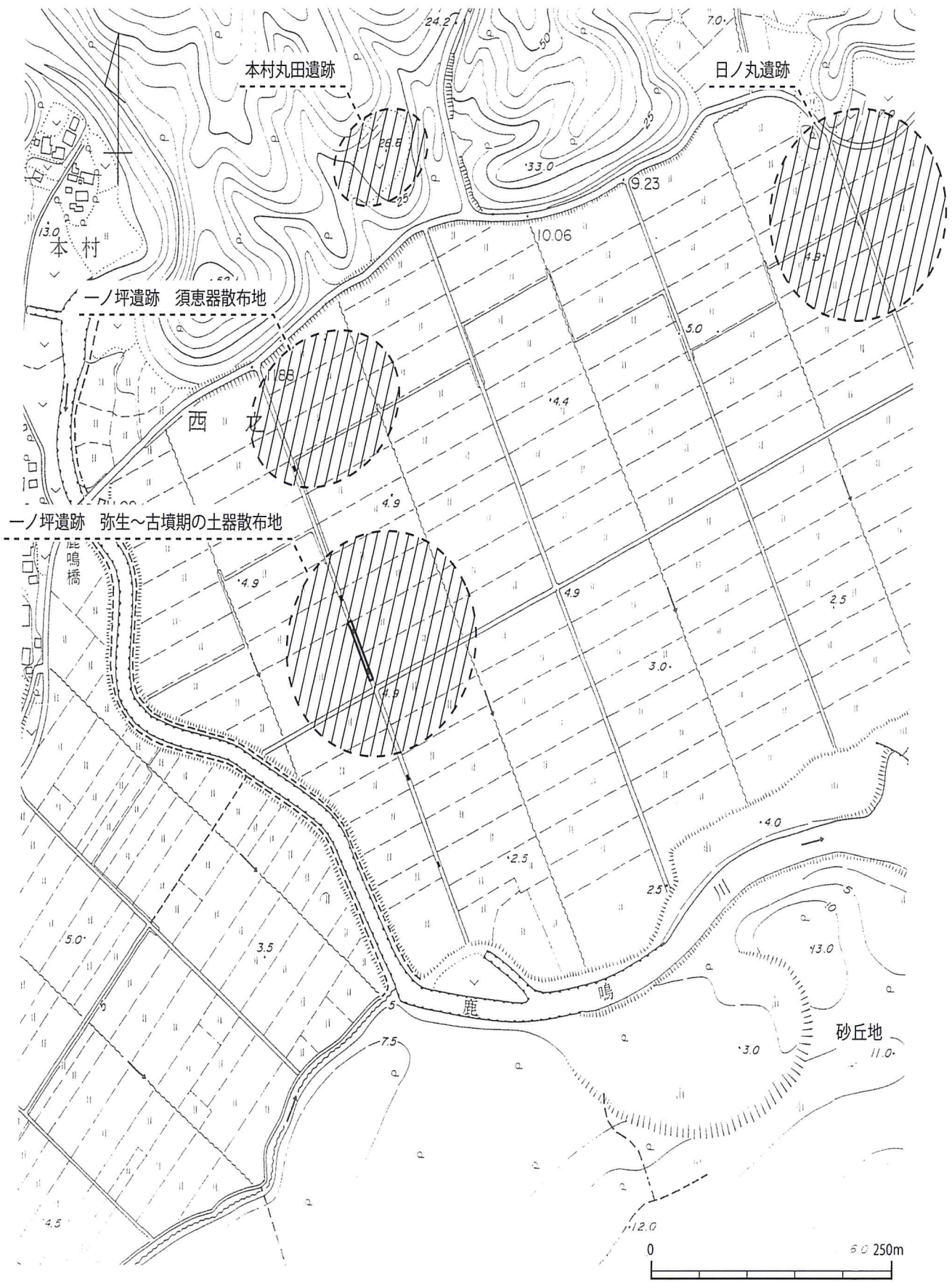
包含層は大きくⅡ層とⅢ層に分層され、弥生時代、古墳時代併行期の遺物が混在する。遺構は検出されなかった。

第2節 層位

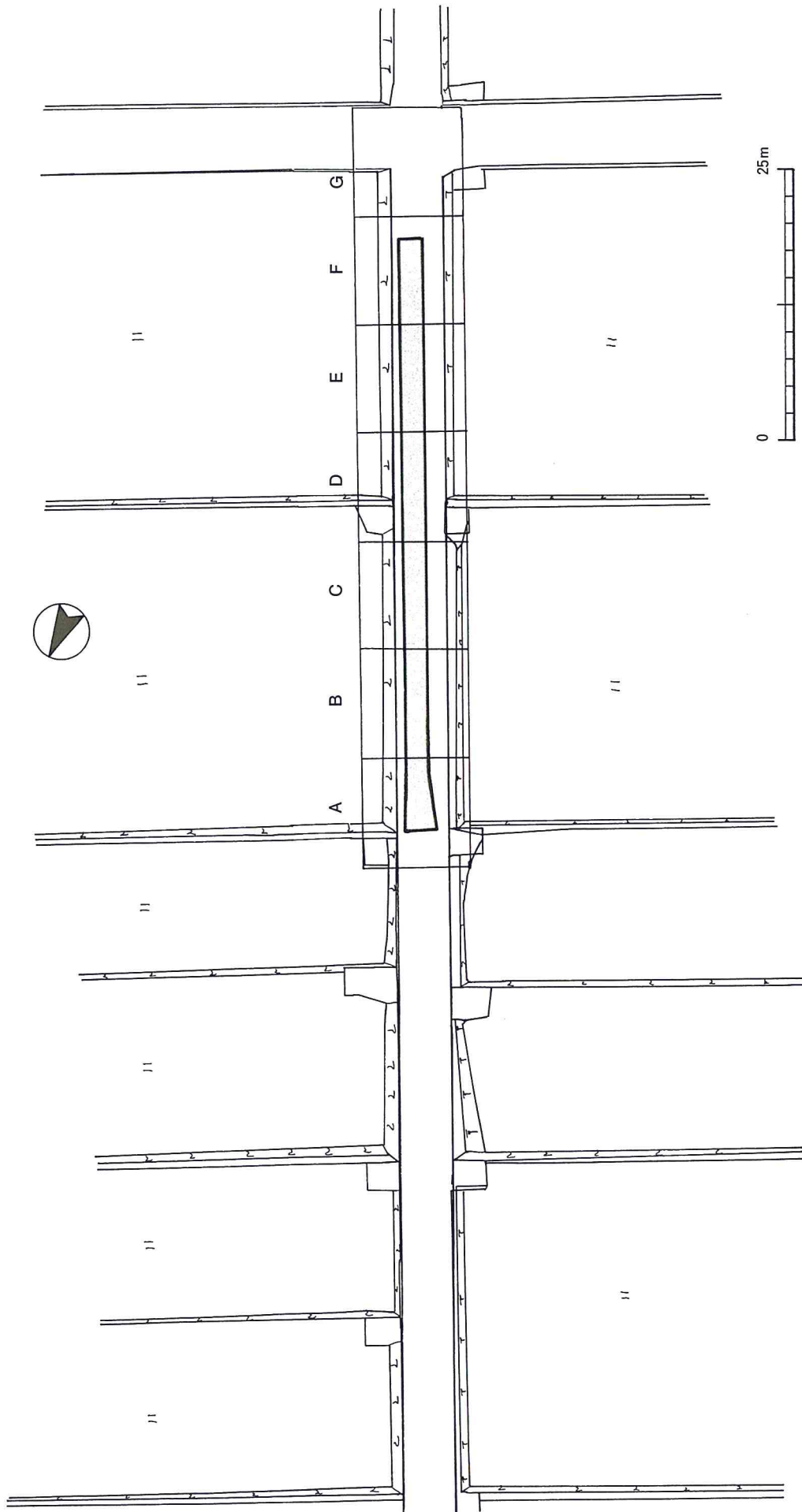
一ノ坪遺跡は、鹿鳴川の左岸よりわずか200mの自然堤防上に位置する。この遺跡における堆積は、鹿鳴川の流路変更や氾濫が大きな要因となっている。

標準土層は、下記のとおりである。

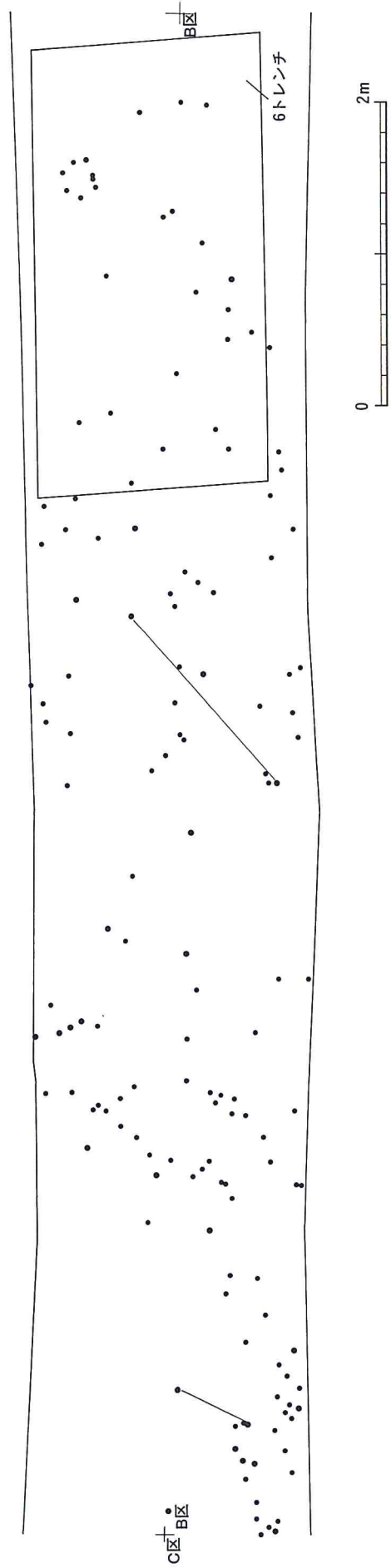
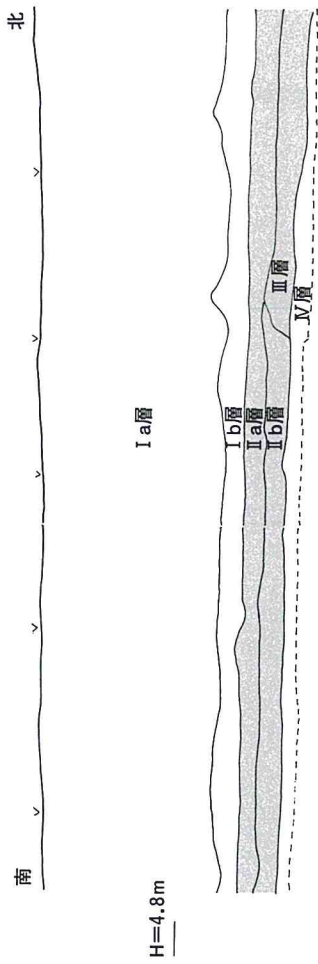
- | | |
|----------------|--|
| I a 層 攪乱層 | ：構造改善時の攪乱層及び現在の表土層 |
| I b 層 暗灰黄色細砂層 | ：構造改善以前の旧水田面。近代の陶磁器が出土する。 |
| Ⅱ a 層 青灰色極細砂層 | ：包含層。場所によっては、わずかにラミナ状の構造が確認される。 |
| Ⅱ b 層 暗青灰色極細砂層 | ：包含層。場所によっては、わずかにラミナ状の構造が確認される。斑点状に暗い粘土粒が確認され、軟質の小形の円礫が含まれる場所もある。 |
| Ⅱ c 層 暗青灰色極細砂層 | ：包含層。場所によっては、わずかにラミナ状の構造が確認される。暗い粘土粒がⅡ b 層よりやや多く斑点状に含まれる。軟質の小形の円礫が含まれる場所もある。 |
| Ⅲ層 暗青灰色細砂層 | ：包含層。砂の粒子が粗く締まりもⅡ層より悪い。 |
| Ⅳ層 青灰色砂混じり細砂層 | ：無遺物層。Ⅱ・Ⅲ層に比べ色調が明るく、締まりが悪く、砂の粒子も粗い。 |



第11図 一ノ坪遺跡 周辺遺跡位置図



第12図 一ノ坪遺跡 調査区・トレンチ配置図



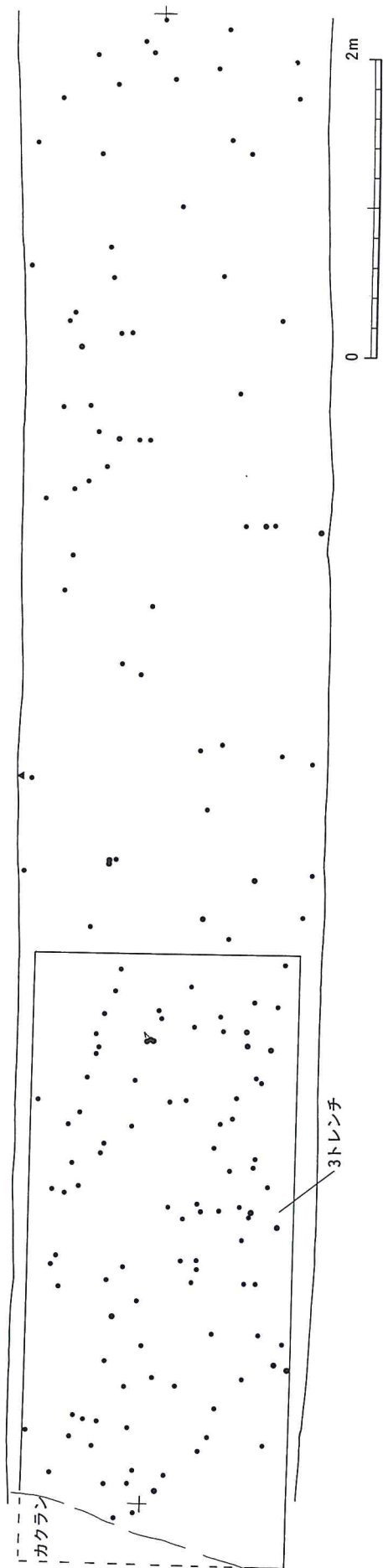
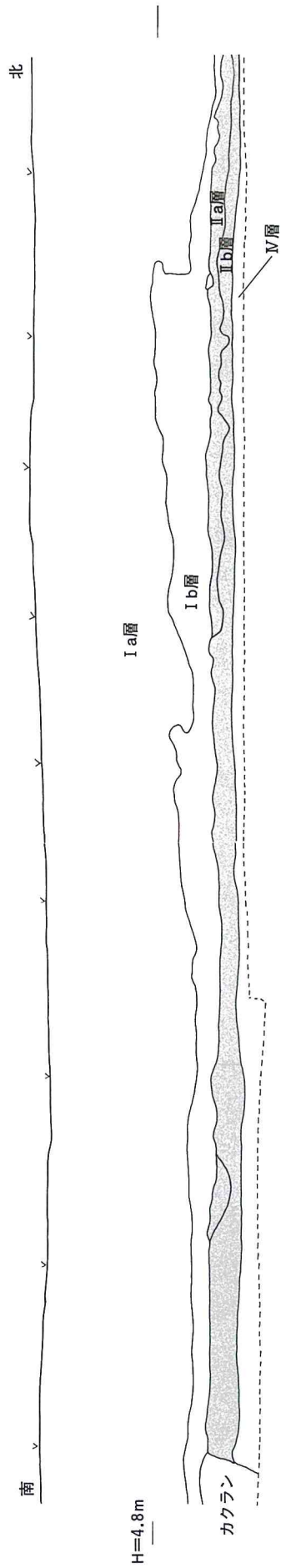
第13図 一ノ坪遺跡B区 土層断面・出土状況図



第14図 一ノ坪遺跡C区 土層断面・出土状況図



第15図 一ノ坪遺跡D区 土層断面・出土状況図



第16図 一ノ坪遺跡E区 土層断面・出土状況図

第3節 遺物

本遺跡で包含層より出土した土器は、弥生時代前期から古墳時代併行期のものである。また、今回発掘を行った地点より北に約150メートル離れた畑周辺では、古代～中世の須恵器が表面採集できた。

以下、時期がわかるものは時期毎に、それ以外は部位毎に記述する。

弥生時代前期の土器（第17図1）

1は甕形土器の口縁部片で、ナデ調整後に、口唇部にヘラ状工具による刻み目を施している。胎土中に直径2～5mm砂礫、石英粒を特徴的に含む（P126、図版3の5）。前期末～中期初頭のものであろう。

弥生時代中期の土器（第17図2～6）

2～6は甕形土器の口縁部片である。2～5は、1と同様、胎土中に直径2～5mm砂礫、石英粒を特徴的に含む。6は後期までさがる可能性があり、頸部から口縁部にかけての屈曲部に、調整の際の工具に由来するとみられる凹線を1条確認できる。胎土の雰囲気も2～5とは異なる（P126、図版3の6）。

弥生時代後期～古墳併行期の土器（第17図7～15、20～21、23～26、29～34、第18図35～46）

7～15は弥生時代後期後半～古墳時代併行期の甕形土器の口縁部片である。口唇部の肥厚化がみられないことから鳥ノ峯遺跡や広田遺跡下層期段階と併行する時期のものと判断できる。7～9、11～14は、内外面ともにナデ調整で仕上げられているが、10は、屈曲部より口縁部側の内面については、横位のハケ目調整で仕上げている。15は、外面を下から上へハケ目調整で仕上げている。

20～21、23～27、36、37、44は、弥生時代後期後半～古墳時代併行期の在地の甕の胴部片である。小片のため判断が難しいが、20～21、23～26は頸部あたりの破片で低い幅広の貼付突帯に太めの沈線を施すことで見かけ上は多条の突帯を施す、いわゆる「みかけ多条突帯」が認められる。20、26は、みかけ多条突帯の下に刻み目が施される。36、37、44では外面のハケ目調整がみとめられる。これらの施文法や調整、焼成や胎土の雰囲気（P126、図版3の7）は、鳥ノ峯遺跡や広田遺跡下層期段階出土の在地の甕に似る。

29～35、38～43は、壺形土器の胴部片である可能性が高い。29～35、39には1条の貼付突帯が巡る。35は中津野式段階の壺とみられる。これらの土器の胎土は、在地の土器とは異なる（P126、図版3の8）。

45は、破片資料で、内面の風化も激しいため観察が困難である。大隅諸島では、この時期に高杯の出土例がないため慎重な判断が必要であるが、屈曲部の特徴を評価すれば、高杯である可能性が最も高い。

46は、小片で時期を特定するのは難しいが、外面に圧痕が認められたため、山崎純男氏に光学顕微鏡による同定をしていただき靱痕であることを確認した（注1）。レプリカ法などによるより詳細な同定は未実施で、今後行う予定である。

胴部片（第17図16～19、22、27～28）

16～19、22、27～28は、貼付突帯を有する胴部片で、16は貼付突帯を1条確認できるが、突帯の先端が欠けている。

底部（第19図47～49）

47は、充実した脚台で、浅い上げ底となる。弥生時代中期の甕の底部とみられる。48～49は、外面は縦方向のハケ目を施している。上部でひきしまり裾部で開く形状や上げ底を呈することやハケ目調整及び胎土の雰囲気から、弥生時代後期～古墳時代併行期の在地の甕の底部とみられる。

染付皿（第19図50）

50は、確認調査の際に3トレンチI b層より出土した染付皿である。底部は、いわゆる「碁笥底」状を呈する。

石器（第19図51）

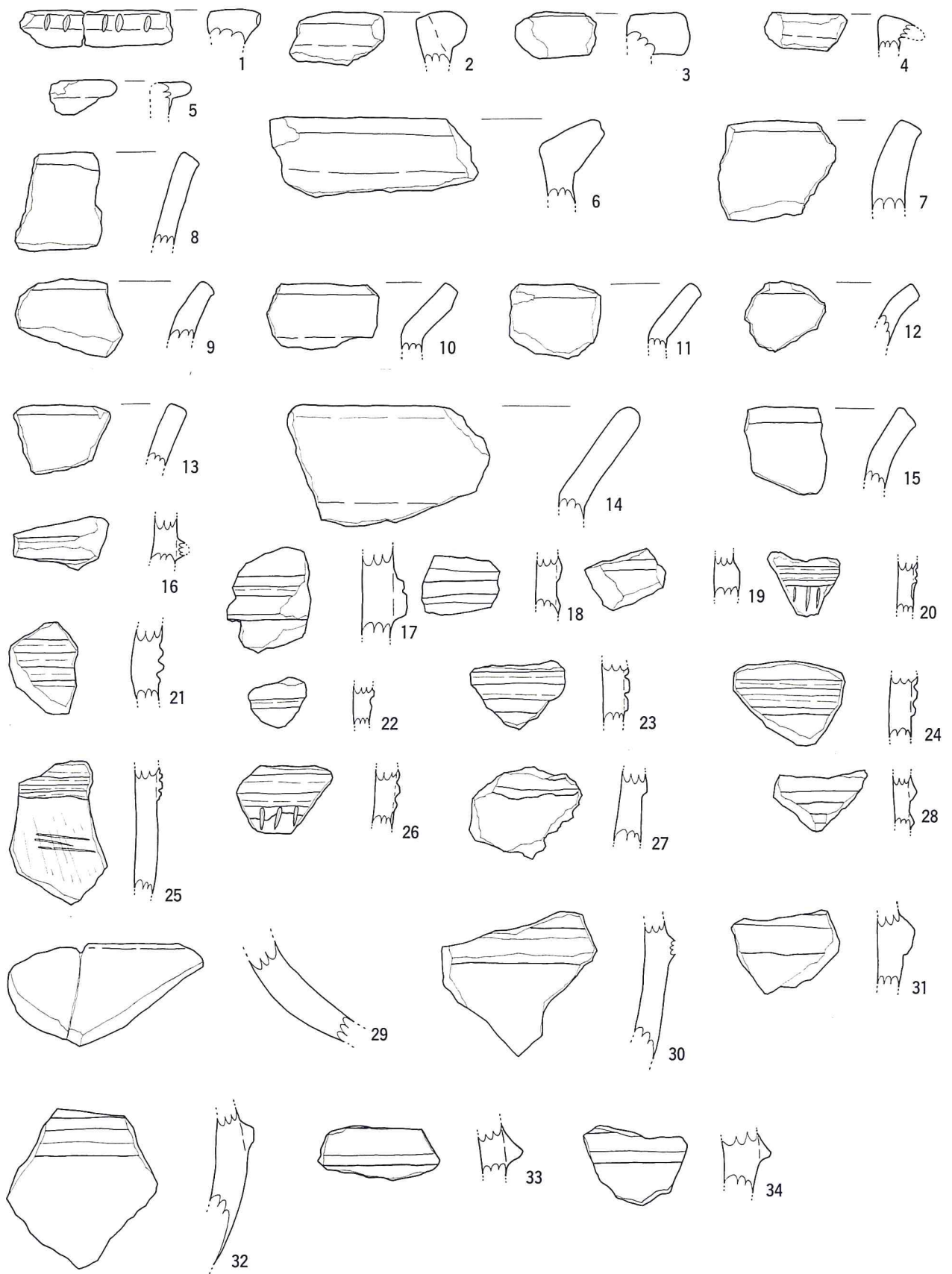
出土した石器は1点のみである。70は花崗岩製の敲石で、中央部にあばた状の敲打痕が集中している。端部の敲打痕は側面で一部集中箇所が確認できるが、中央部ほど顕著ではない。磨り痕も一部確認できる。

表面採集（第19図表1～表3）

第11図に示した「一ノ坪遺跡須恵器散布地」で表面採集した須恵器について報告したい。なお、これらはすべて胴部片であり時期を特定することは難しいので、広く古代～中世頃のものとして報告する。

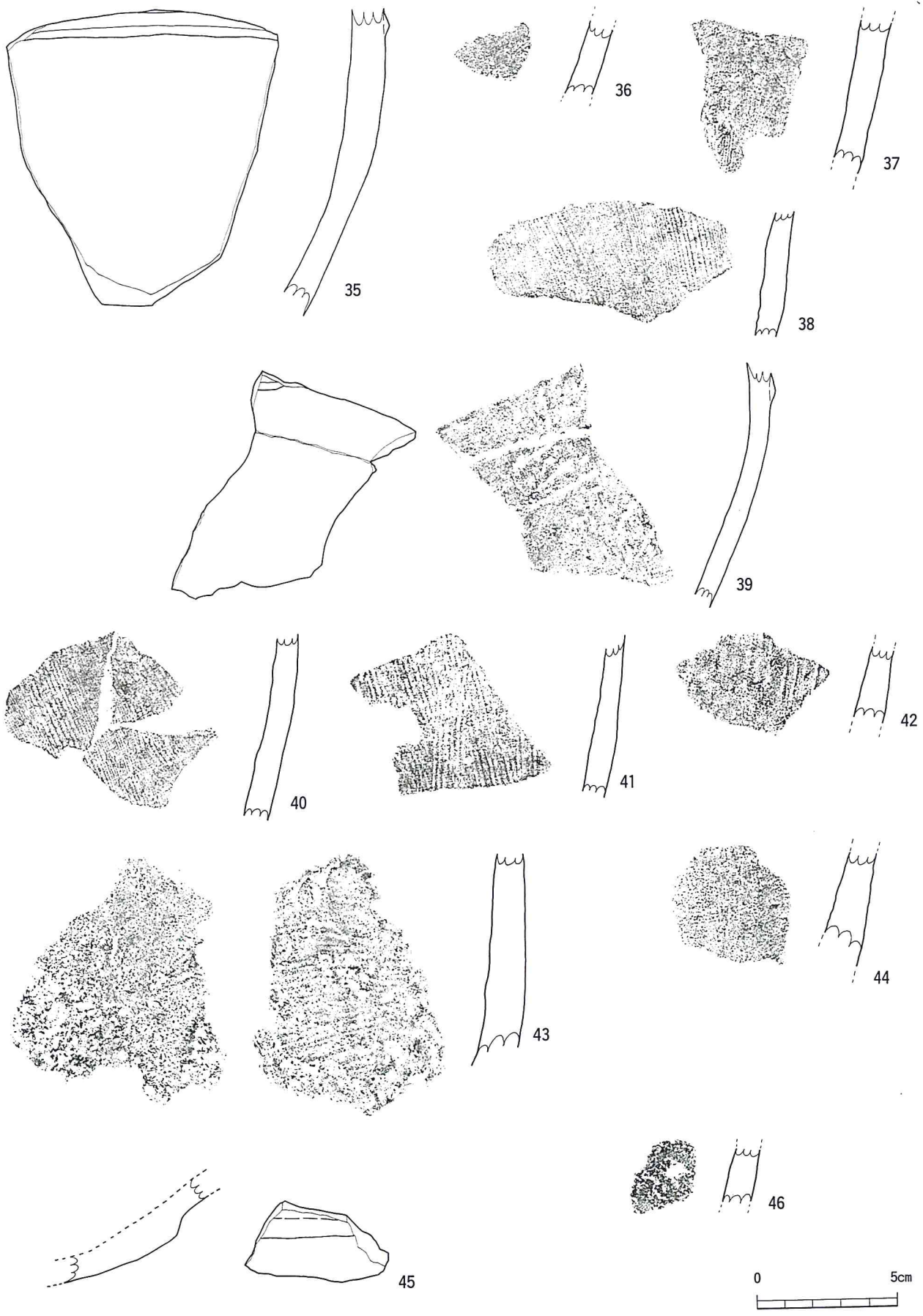
表1、表3は須恵器の甕の胴部片である。表1は、外面に平行タタキ目が残し、内面に平行線の打圧痕が認められる。表2は、表1及び表3とは胎土の特徴が異なり、胎土は内部が赤紫色になる。内外面ともにナデ調整がされる。器種は不明。表3は、外面に格子状のタタキ目が残し、内面に青海波文の打圧痕が認められる。

注1) 平成21年2月5日～6日に鹿児島県埋蔵文化財センターで開催された「平成20年度埋蔵文化財専門職員養成講座（上級講座）」において山崎純男氏が行った講義「土器に残された圧痕資料の研究―初、コクゾウムシの検出―」の実技研修の際に同定いただいた。



0 5cm

第17图 一ノ坪遺跡 出土遺物(1)



第18図 一ノ坪遺跡 出土遺物(2)

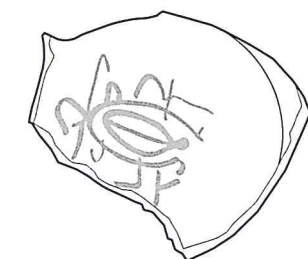
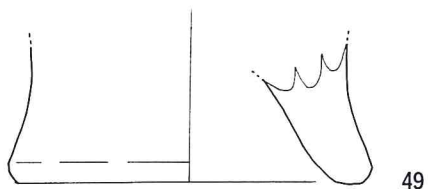
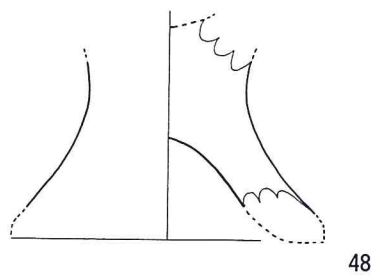
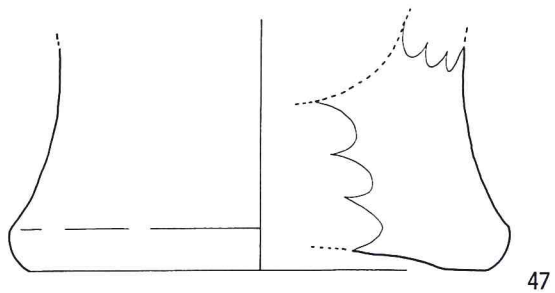


表1

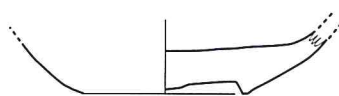
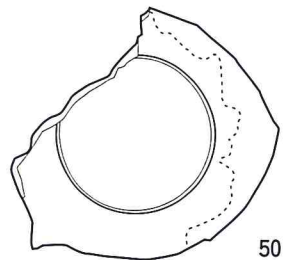
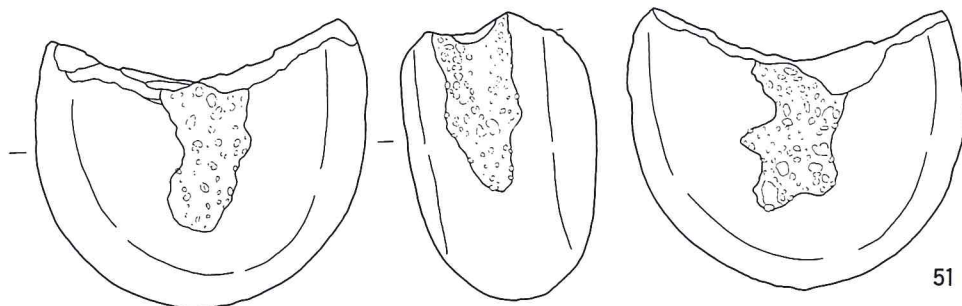


表2

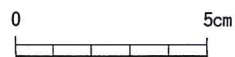
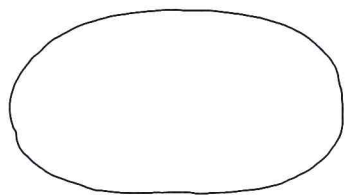
表3



50



51



第19図 一ノ坪遺跡 出土遺物(3)

第4表 一ノ坪遺跡遺物観察表(1)

遺物 番号	注記番号	層	胎土					焼成	色調		調整・文様		備考
			石英	長石	角閃石	雲母	砂礫		外	内	外壁面	内壁面	
1	2005-335	II	○	○	○	○	○	良	にぶい赤褐	橙	ナデ・刺状文	ナデ	口縁部
2	2005, 一括		○	○	○	○	○	良	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	口縁部
3	2005-167	II	○	○	○	○	○	良	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	口縁部
4	2005-395	II	○	○	○	○	○	良	にぶい褐	にぶい橙	ナデ	ナデ	口縁部
5	2004-3T, 148	II	○	○	○	○	○	良	黒褐	黒褐	ナデ	ナデ	口縁部
6	2005-298	III	○	○	○	○	○	良	にぶい褐	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	口縁部
7	2005-337	II	○	○	○	○	○	良	褐灰	黒	ナデ	ナデ	口縁部
8	2005-369	II	○	○	○	○	○	良	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	口縁部
9	2005-122	II b	○	○	○	○	○	良	にぶい黄褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	口縁部
10	2004-3T, 128	II	○	○	○	○	○	良	にぶい橙褐	黒褐	ナデ	ハケ目	口縁部
11	2005-331	II	○	○	○	○	○	良	褐灰	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	口縁部
12	2005-4	II	○	○	○	○	○	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	口縁部
13	2005-77	II b	○	○	○	○	○	良	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	口縁部
14	2005-336	II	○	○	○	○	○	良	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	口縁部
15	2005-309	II	○	○	○	○	○	良	にぶい橙	にぶい褐	ハケ目	ナデ	口縁部
16	2005-107	II b	○	○	○		○	良	にぶい褐	にぶい黄褐	ナデ・貼付文	ナデ	胴部
17	2005-398	II	○	○	○	○	○	良	にぶい赤褐	明赤褐	ナデ・貼付文	ナデ	胴部
18	2005-297	III	○	○	○	○	○	良	灰黄	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胴部
19	2005, 一括	—	○	○	○	○	○	良	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	胴部
20	2005-389	II	○	○	○	○	○	良	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胴部
21	2005-110	II b	○	○	○	○	○	良	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	胴部
22	2005-91	II b	○	○	○	○	○	良	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胴部
23	2005-340	II	○	○	○	○	○	良	灰黄褐	灰白	ナデ	ナデ	胴部
24	2004-3T, 133	II	○	○	○	○	○	良	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	胴部
25	2005-124	II b	○	○	○	○	○	良	灰黄褐	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胴部
26	2005-286	III	○	○	○	○	○	良	灰褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	胴部
27	2005-88	II b	○	○	○	○	○	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	胴部
28	2005, 一括	—	○	○	○	○	○	良	にぶい黄橙	褐灰	ナデ	ナデ	胴部
29	2005-208	III	○	○	○		○	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ハケ目?	ナデ?	壺? 胴部
30	2005-325	II	○	○	○		○	良	にぶい黄橙	黒褐	-	-	壺? 胴部
31	2005-184	III	○	○	○	○	○	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	胴部
32	2004-3T, 59	II	○	○	○		○	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	壺? 胴部
33	2005-198	II	○	○	○		○	良	褐灰	灰白	ナデ	ナデ	壺? 胴部
34	2005-274	II	○	○	○		○	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	壺? 胴部
35	2005-299	III	○	○	○		○	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ナデ?	ナデ?	壺? 胴部
36	2005-98	II b	○	○	○	○	○	良	にぶい橙	灰褐	ハケ目	ハケ目	胴部
37	2005-305	II	○	○	○	○	○	良	にぶい赤褐	にぶい赤褐			胴部
38	2004-3T, 154	II	○	○	○		○	良	褐灰	浅黄橙	ハケ目	-	壺? 胴部
39	2004-3T, 136	II	○	○	○		○	良	にぶい黄橙	褐灰	-	-	壺? 胴部
40	2005-294	III	○	○	○		○	良	黒褐	にぶい黄橙	ハケ目		壺? 胴部
41	2005-285	III	○	○	○		○	良	褐灰	にぶい黄橙	ハケ目		壺? 胴部
42	2004-3T, 90	II	○	○	○		○	良	黒	にぶい黄橙	ハケ目		壺? 胴部

第5表 一ノ坪遺跡遺物観察表(2)

遺物番号	注記番号	層	胎土					焼成	色調		調整・文様		備考
			石英	長石	角閃石	雲母	砂礫		外	内	外壁面	内壁面	
43	2005-177	Ⅲ	○	○	○		○	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	壺? 胴部
44	2005-301	Ⅲ	○	○	○	○	○	良	にぶい褐	褐	ハケ目	-	胴部
45	2004-3T, 123	Ⅱ	○	○	○		○	良	にぶい橙	にぶい黄橙	-	-	高杯の可能性
46	2004-3T, 124	Ⅱ	○	○	○		○	良	赤褐	にぶい赤褐	-	-	初圧痕あり
47	2005-205	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	にぶい黄橙	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	底部
48	2005-264	Ⅱa	○	○	○	○	○	良	明赤褐	灰黄褐	ハケ目	ナデ	底部
49	2005-292	Ⅲ	○	○	○	○	○	良	にぶい褐	にぶい橙	ハケ目	ナデ	底部
50	2004-5T, 170	Ⅲ	-	-	-	-	-	良	灰白, 暗青灰	灰白	-	-	染付
51	2005-390	Ⅱ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	敲石
52	2005, 一括	-	○	○	○	○	○	良	にぶい褐	にぶい黄橙	ナデ	-	写真図版のみ
53	2005-306	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	橙	にぶい橙	ハケ目	ハケ目	写真図版のみ
54	2005-253	Ⅱa	○	○	○	○	○	良	明黄褐	にぶい黄橙	ミガキ?	ナデ	写真図版のみ
55	2005-312	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	にぶい黄橙	褐灰	ミガキ?	ナデ	写真図版のみ
56	2005-372	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	にぶい赤褐	赤黒	ハケ目	-	写真図版のみ
57	2004-6T185	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	灰赤	にぶい橙	ハケ目	-	写真図版のみ
58	2005-380	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	にぶい赤褐	にぶい褐	-	-	写真図版のみ
59	2004-3T, 132	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	褐灰	にぶい橙	ハケ目	ナデ?	写真図版のみ
60	2004-3T, 109	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	にぶい橙	にぶい黄褐	ハケ目	ハケ目	写真図版のみ
61	2005-282	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	褐灰	にぶい橙	ハケ目	ハケ目	写真図版のみ
62	2005-84	Ⅱa	○	○	○		○	良	にぶい黄橙	にぶい黄橙	-	-	写真図版のみ
63	2005-293	Ⅲ	○	○	○		○	良	にぶい黄橙	灰白	-	-	写真図版のみ
64	2005-79	Ⅱb	○	○	○	○	○	良	にぶい橙	にぶい橙	ハケ目?	ナデ?	写真図版のみ
65	2005-378	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	にぶい赤褐	にぶい赤褐	-	-	写真図版のみ
66	2005-389	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	赤褐	にぶい赤褐	ハケ目?	-	写真図版のみ
67	2005-146	Ⅱa	○	○	○	○	○	良	赤褐	にぶい赤褐	-	-	写真図版のみ
68	2004-3T, 129	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	にぶい黄橙	にぶい黄褐	-	-	写真図版のみ
69	2004-6T, 215	Ⅱ	○	○	○	○	○	良	にぶい黄橙	褐灰	-	-	写真図版のみ
70	2005-111	Ⅱb	○	○	○	○	○	良	にぶい黄橙	褐灰	-	-	写真図版のみ
表1	2008表採	表採	-	-	-	-	-	良	青灰色	暗青灰	平行タタキ目	平行線打圧痕	須恵器甕胴部
表2	2008表採	表採	-	-	-	-	-	良	暗赤褐	暗青灰	ナデ	ナデ	須恵器胴部
表3	2008表採	表採	-	-	-	-	-	良	青灰色	青灰色	格子タタキ目	青海波文打圧痕	須恵器甕胴部
表4	2008表採	表採	-	-	-	-	-	良	青灰色	青灰色	平行タタキ目	青海波文打圧痕	須恵器甕胴部 写真図版のみ
表5	2008表採	表採	-	-	-	-	-	良	青灰色	青灰色	平行タタキ目	青海波文打圧痕	須恵器甕胴部 写真図版のみ
表6	2008表採	表採	-	-	-	-	-	良	暗青灰	暗青灰	平行タタキ目	-	須恵器甕胴部 写真図版のみ
表7	2008表採	表採	-	-	-	-	-	良	青灰色	青灰色	格子タタキ目	青海波文打圧痕	須恵器甕胴部 写真図版のみ
表8	2008表採	表採	-	-	-	-	-	良	青灰色	青灰色	格子タタキ目	青海波文打圧痕	須恵器甕胴部 写真図版のみ

第4節 まとめ

一ノ坪遺跡は、南種子町大字西之一ノ坪に所在し、鹿鳴川の現在の左岸から200m離れた自然堤防上に立地する弥生前期末～中世の散布地である。遺跡は、主に弥生～古墳併行期の遺物が表面採集できる地点と、古代～中世の遺物が表面採集できる地点に分かれる。今回調査を行ったのは主に弥生～古墳併行期の遺物が分布する地点である。

弥生期～古墳時代併行期の種子島では、広田遺跡をはじめとして海岸砂丘に営まれた墓地遺跡の調査は行われているが、海浜地以外での生活址を対象とした発掘調査事例は少なく、また、海浜地以外の弥生～古墳併行期の遺跡はあまり知られていないが、一ノ坪遺跡の所在する西之本村周辺は弥生～古墳併行期の遺跡が比較的まとまって分布することで知られている。

今回調査した一ノ坪遺跡を含む西之本村から中之下真所周辺の水田地帯は、昭和期に大規模な構造改善事業が導入されていて、遺跡の残存状況が懸念された。

確認調査の結果、弥生時代前期末～古墳時代併行期にかけての包含層が比較的良好に残存する地点があることが判明し、その範囲について全面調査を実施した。全面調査の結果、水田址などの遺構は確認されなかったものの、弥生時代前期末～古墳時代併行期の遺物が出土した。

これらの遺物には、ローリングを受けているものが含まれていて、現在の鹿鳴川に隣接する字名の中には「古川」という字があり、鹿鳴川の流路は一定でなかった可能性があることや鹿鳴川沿いに「宇都遺跡」などの弥生の散布地があることから、河川により運ばれてきた遺物を含む可能性も否定できない。

今回出土した遺物は、在地の甕形土器が主体であったが、一部搬入品と判断される壺形土器も出土した。破片資料であるため時期の特定は難しいが、中津野式の壺だと思われるものが含まれている。弥生時代から古墳時代併行期の種子島では、弥生時代前期～終末期までは九州本土より土器が搬入されるが、古墳時代併行期になると九州本土からの土器の搬入がほとんどみられなくなる。この遺跡においても、中津野式期までの搬入品は確認されるが、それ以降のものは認められなかった。

出土した在地の甕形土器のうち、弥生時代後期～古墳時代併行期のものは、口縁部や胴部の施文、胎土の雰囲気等が、鳥ノ峯遺跡や広田遺跡下層期段階の出土資料に似ていて、西之表市上能野遺跡や屋久島町火ノ上山遺跡資料段階のものは含まれていない。このことから、これらの土器の時期は、概ね弥生時代後期から古墳時代前期頃までであろう。

一ノ坪遺跡内の古代～中世の須恵器の散布地については、南種子中学校の生徒とともに分布調査を2度実施したが、時期や器種等を特定できる良好な破片は表面採取できなかったが、表3とした須恵器は、胎土が赤紫色を呈する特徴的なものであった。今後も定期的に分布調査を実施し、遺跡の内容を明らかにしていきたい。

主要参考文献

- 堂込秀人 1998 「南西諸島中部圏の弥生時代相当期の土器文化-文化変容と沖縄貝塚時代との関係への手がかり-」 『環東中国海沿岸地域の先史文化』 金曜会
- 国分直一・盛園尚孝 2001 「阿嶽洞穴遺跡の調査」 『環東中国海沿岸地域の先史文化』 第4集 甲

元眞之編

- 新里貴之 1999 「南西諸島における弥生併行期の土器」 『人類史研究』 第11号
- 中園 聡 1988 「土器様式の動態」 『人類史研究』 第7号
- 橋口達也 1996 「鳥ノ峯遺跡の編年的位置」 『種子島 鳥ノ峯遺跡』 中種子町教育委員会・鳥ノ峯遺跡発掘調査団
- 中村直子 2003 「広田遺跡出土土器の位置づけ」 『種子島広田遺跡』 広田遺跡学術調査会ほか
- 鮫島正孝 2007 「改訂版 南種子の地名」 南種子町地名研究会編
- 石堂和博・徳田有希乃・山野ケン陽次郎 2007 『広田遺跡 -平成16年度～平成18年度 町内遺跡等発掘調査事業-』 南種子町教育委員会

第V章 高田遺跡・真所汐入B遺跡の調査

第1節 調査の概要

高田遺跡は、平成12年度の分布調査で存在が判明した。遺跡は、南種子町大字中之下字高田に所在し、遺跡の北側を山神川が流れる。調査地点は、現況で水田地帯である。なお、分布調査で判明した中世の遺跡は、散布状況と地形からその中心地は現在の里集落にあるとみられる。

確認調査は、平成17年度に実施した。その結果、Ⅲ層から古代～中世の土器・陶磁器類が出土し、Ⅳ層から古墳時代併行期の土器片が出土した。この遺跡の取り扱いについて、県文化財課等と協議した結果、工事立会を実施することとなった。

真所汐入B遺跡は、平成12年度の分布調査で存在が判明した。遺跡は、南種子町大字中之下字真所汐入に所在する。遺跡の近くには、下中八幡神社とその御神田があり、この神社で毎年行われる御田植祭は、「下中八幡神社御田植祭」として町指定文化財に指定されている。また御神田に隣接し、通称「森山」と呼ばれる小山が存在する。分布調査で判明した中世の遺跡は、散布状況と地形からその中心地は現在の真所集落にあるとみられる。

確認調査は平成15年度に実施し、中世の包含層は確認されなかったが、縄文時代前期の遺物1点が出土した。その取り扱いについて、県文化財課等と協議した結果、設計変更による現状保存となった。

第2節 層位

各遺跡の標準土層は、下記のとおりである。

高田遺跡

I層：現在の水田耕作層

II層：旧水田耕作層，時期不明

III層：青灰色粘質土層，砂が多く混じる。古代～中世の包含層。

IV層：灰色粘質土層，砂を若干含む。この層の下半は、シルト質のきめ細かい粒子となる。古墳時代併行期の包含層で，遺物は主にこの層の下半より出土する。

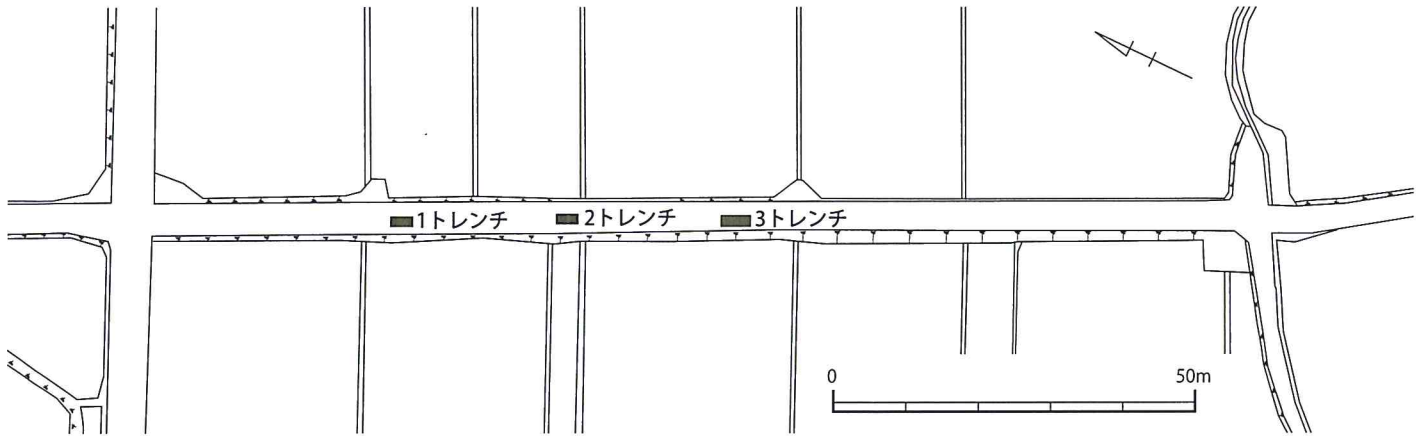
真所汐入B遺跡

I層：灰黄褐色土層，表土

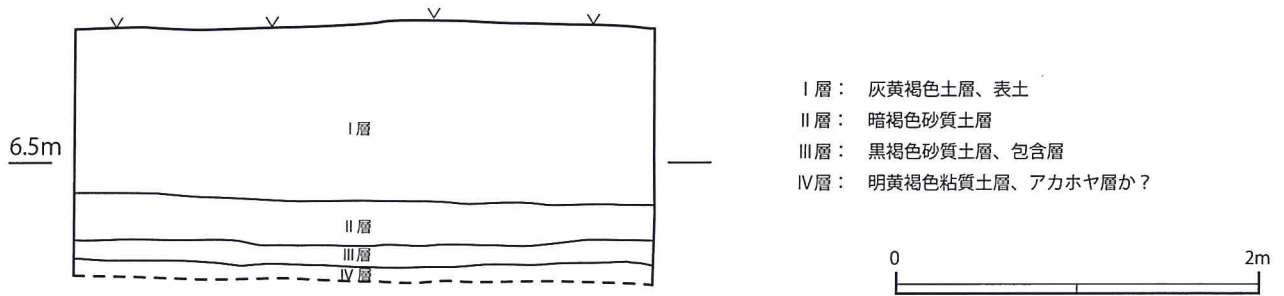
II層：暗褐色砂質土層

III層：黒褐色砂質土層，縄文時代前期の包含層

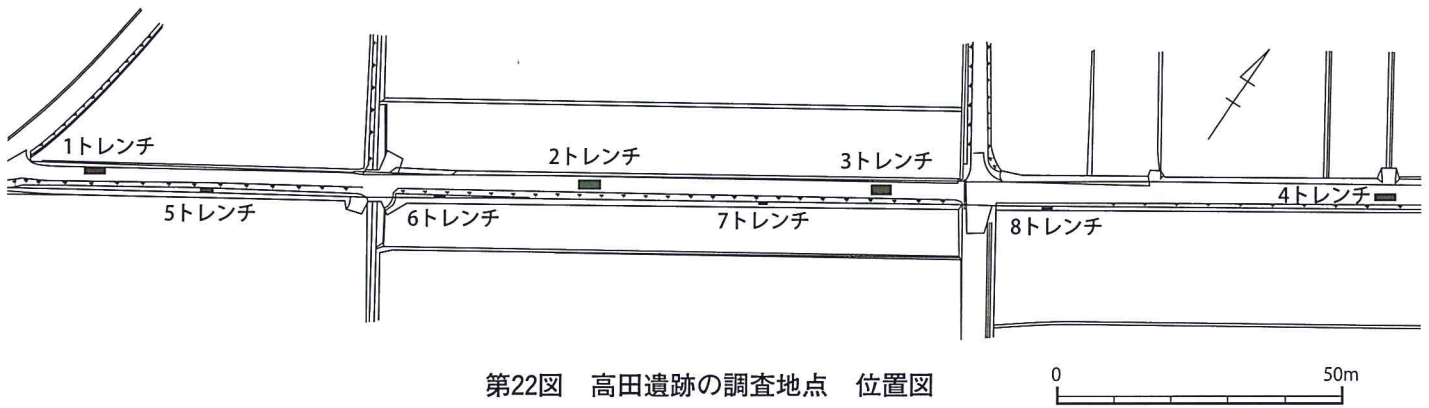
IV層：明黄褐色粘質土層，黄色砂質土がブロック状に混じる。アカホヤ層か。



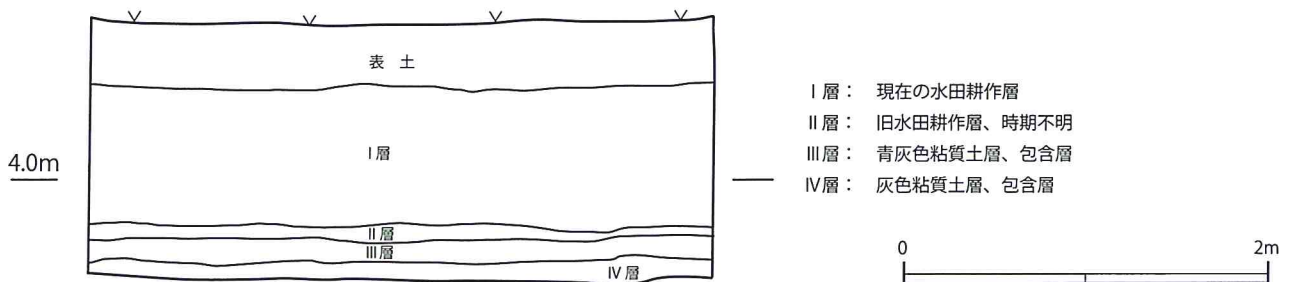
第20図 真所沓入B遺跡の調査地点 位置図



第21図 真所沓入B遺跡1トレンチ西側壁面 土層断面図



第22図 高田遺跡の調査地点 位置図



第23図 高田遺跡2トレンチ西側壁面 土層断面図

第3節 遺物

1は、高田遺跡の2トレンチⅣ層から出土した小型の甕形土器ないしは鉢形土器の底部である。

2は、真所汐入B遺跡1トレンチⅢ層上面、Ⅱ層との境界付近で出土した胴部片で、内外面ともに凹線文が認められ、曾畑式の可能性が高い。



第24図 高田遺跡・真所汐入B遺跡 出土遺物

第4節 まとめ

① 高田遺跡

高田遺跡は、現況では、中之下の里集落に隣接する水田地帯である。「高田」の読みは、行政の地籍は、「たかだ」であるが、平田信芳氏と里集落の複数の古老に聞き取り調査を行ったところ、昔は、「こうだ」と呼んでいたことがわかった。

多嶺国の国府所在地は、今のところどこであったのか決定打にかけられる状況である。国上、赤尾木、現和、中田、島間などいくつかの候補地があげられているが、近年、高田遺跡に隣接する中之下の里集落に国府所在地を求める考え方が平田信芳氏、下野敏見氏により出された。

平田氏は、里集落の周辺に、「こうだ」や「栗屋田（くりやだ）」の地名が残ることなどから、里を多嶺国の国府所在地に比定している（注1）。

下野氏は、多嶺国府は当初中之下の里周辺にあったが、後に（733年前後）、西之表赤尾木に移転したとしている（注2）。

しかし、今回の調査では国府に関連する遺構・遺物は検出されなかった。このことは、今回調査を行った範囲が、平田氏が国府跡を想定した現在の里集落が立地する微高地ではなく、隣接する低湿地であったことに由来するかもしれない。

調査で出土した土器は、いずれも小片で判別が難しいものばかりであったが、2トレンチⅣ層より種子島の弥生時代後期～古墳時代併行期の在地の甕の底部が1点出土した。

この時期の種子島の遺跡の調査は、海岸砂丘に営まれた墓地遺跡を中心になされていて、海浜地以外での生活址を対象とした発掘調査はなされていないため、低湿地に微高地が隣接する立地の場所でこの時期の遺跡が確認されたのは重要である。

今回の調査は開発に伴うもので、結果的に全面調査には至らなかった。しかし、里集落の所在する微高地とその周辺には複数の時期の遺跡が包蔵されている可能性があり、まずは地道な分布調査によって遺跡の性格を今後明らかにしていきたい。

② 真所汐入B遺跡

真所汐入B遺跡は、現在の真所集落に遺物の分布の中心がある中世の遺跡として知られていた。しかし、今回の調査では中世の包含層は確認されず、1トレンチⅢ層より縄文時代前期の曾畑式土器が1点のみ出土した。

鮫島正孝氏による南種子町の地名研究の成果によると、汐入と呼ばれる場所は、近代的な水田開発がおこなわれる以前は水田耕作に適さない場所で、名のとおり台風等の災害の際には川等を伝って海水が入り込む場所であったという（注3）。これらのことから中世においては、真所汐入B遺跡周辺は開発されていなかった可能性がある。

一方、真所汐入B遺跡より内陸に200メートル程いった地点に所在する日ノ丸遺跡では、中世の畠跡の可能性のある遺構が検出されているので、中世の遺跡は現在の真所集落を中心とし、汐入地より内陸に形成されたとみられる。

曾畑式土器の出土したⅢ層の下には、白～黄色の火山灰質の土層（Ⅳ層）が確認されている。層序からすると、アカホヤ火山灰層に当たる可能性が高いが、台地で通常認められるアカホヤ火山灰層とは色

調などが異なる。その違いは、堆積環境によるのか、それともアカホヤ火山灰層ではないのか判断できなかった。

種子島では、茎永層群が分布する東海岸側の低湿地では、第四期の火山灰層があまり確認できないが、広田遺跡で後背の微高地などにアカホヤ火山灰層の堆積が認められた。縄文海進の問題などとも関連するため、今後、低湿地の調査における火山灰層に注意する必要がある課題としたい。

注1) 平田信芳 2004年 「多祢国府の解明-南種子町中之下にしばられる一」 第50回鹿大史学会発表資料

注2) 下野敏見 2004年 「多祢国府の所在地について」 第50回鹿大史学会発表資料

注3) 鮫島正孝 2007年 「改訂版 南種子の地名」 南種子町地名研究会編

第Ⅵ章 有鹿野遺跡

第1節 調査の概要・方法

有鹿野遺跡は、海岸線から東に約400m内陸に入る舌状台地に位置する。台地は緩やかな傾斜であるが、海岸に向かって急傾斜になっていく。遺跡の標高は約50mで、南側に川が流れる。

有鹿野遺跡は平成12年度に分布調査、平成16年度に確認調査、平成19年度に本調査を実施した。確認調査は平成16年6月8日～16年6月28日まで実働11日間、本調査は平成18年8月16日～10月5日まで実働30日間実施した。

調査面積は確認調査が48.9m²、本調査が85.4m²である。

1. 確認調査

当地区は、平成12年度に分布調査を実施し、縄文時代早期の遺跡として周知されている。

トレンチは2m×4mを基本とし、分布調査の結果を基に、施工区域内を中心に7本設定した。今回の事業は農道の舗装整備であるため、耕作者の同意を得て道路を封鎖しトレンチを設定した。

調査の結果、2トレンチ～5トレンチで縄文時代後期の包含層を、7トレンチで土器と溝状遺構を確認した。なお、6トレンチにおいて後期旧石器時代のⅨ層で剥片の可能性のある石片と炭化物を確認している。

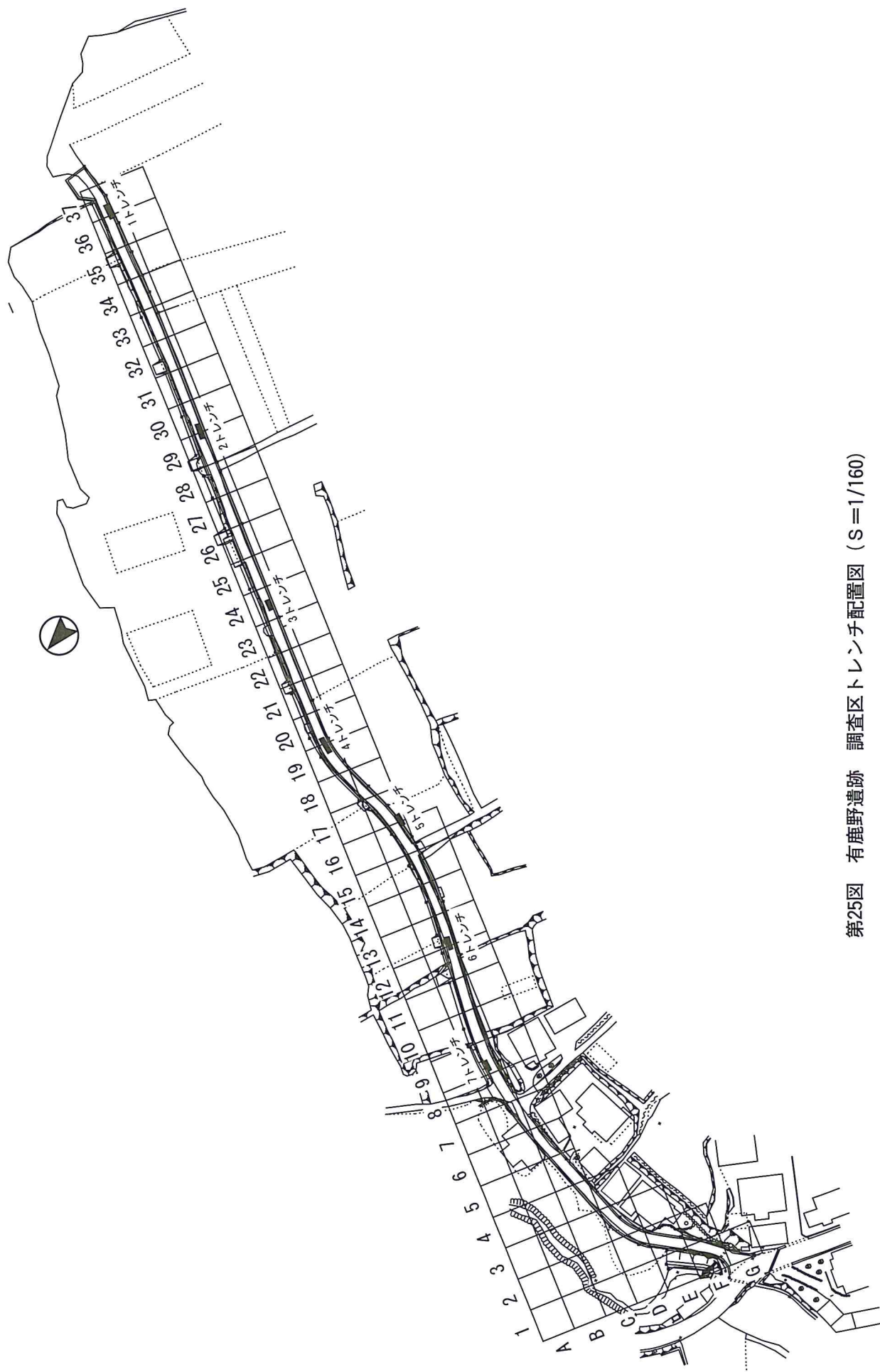
2. 本調査

確認調査の結果をもとに平成19年度本調査を実施した。

計画路線の中心線を基準に10m×10mのグリッドを設定し、南側から1～34区とした。調査にあたっては、耕作土や造成工事による攪乱層を重機で剥ぎ取り、遺物包含層は作業員により慎重に掘り下げた。調査区は北側が行き止まりになる一本道であったため、地権者に同意を得て作物の収穫等に影響のない時期に道路を通行止めにして調査を行った。

なお、B～F-1～7区は、民家の生活道路として使用されており、長期間通行止めにして調査を行うことが困難であり、またB-8～10区の調査結果より、川に下る傾斜部であったため遺跡が残存する可能性が低いと判断し、事業部と協議した結果、工事立会を行うこととした。

調査終了後は、速やかに事業主体に引き渡しを行った。



第25図 有鹿野遺跡 調査区トレンチ配置図 (S=1/160)

第2節 層位

調査区域内で若干の違いはあるが、標準土層は下記のとおりである。

I層	：表土	
II層	：黒褐色土	遺物包含層（縄文時代後期）
III層	：褐色土	アカホヤ火山灰（二次堆積）
IV a層	：にぶい黄褐色土	茶褐色粘質土をブロック状に含む
IV b層	：にぶい黄褐色粘質土	IV a層よりややくすんだ色である
V層	：にぶい黄褐色粘質土	炭化物を含む
VI層	：明黄褐色火山灰	A T火山灰
VII層	：にぶい橙色粘質土	炭化物を含む
VIII層	：明褐色火山灰	種IV火山灰がブロック状に入る
IX層	：にぶい黄橙色粘質土	
X層	：黄褐色火山灰	種III火山灰

第3節 有鹿野遺跡の遺構

遺構は溝状遺構25条、ピット14基を検出した。いずれもIII層で検出し、埋土はII層またはII'層である。

1. 溝状遺構

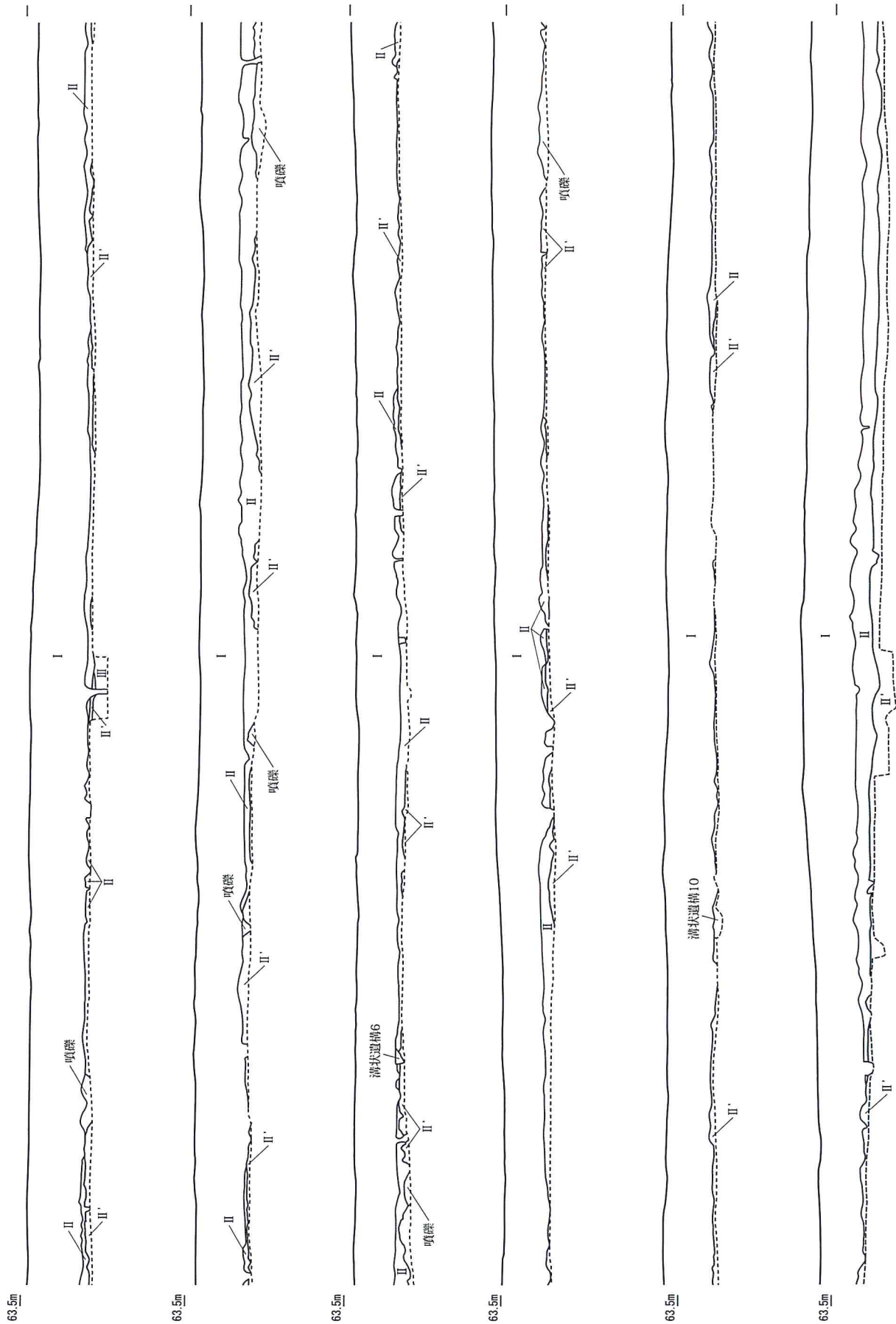
溝状遺構2は、東-西方向に走る溝状遺構1を切り弧を描くように走る。いずれも深さ3～4cm程の浅い溝である。溝状遺構3は、東-西方向に走る溝状遺構4を切り北北東-南南西に走る。溝状遺構3は二層に分かれ、埋土は非常に固くしまる。溝状遺構3から石器（1，2）が出土している。溝状遺構5は、切り合い関係より溝状遺構7-5-6の順で新しく、埋土は非常に固くしまる。方向も北北東-南南西で、溝状遺構3の続きである可能性が高い。溝状遺構10は溝状遺構5に切られている。溝状遺構15はピット3，4を切って北北東-南南西方向に走る。B-8～10区では8条の溝が入り組んでいる。砂質であること、川が近いことなどから、自然流路の可能性も考えられる。

2. ピット

ピット8は不定形で長径0.48m，短径0.42m，深さ13cmを呈する。埋土中より土器の小片が数点出土した。ピット9，10は比較的大型で、ピット9が長径1.04m，短径0.75m，深さ28cmで不定型である。西側は噴礫により切られている。ピット10は長径1.18m，短径0.93m，深さ43cmの楕円型を呈する。南側は樹痕による攪乱がみられる。ピット13は、長径0.81m，短径0.6m，深さ10cmの楕円形を呈する。一部上面を溝状遺構15に切られている。底部東側で噴礫が露出している。ピット14も、ピット13同様、溝状遺構15に切られている。



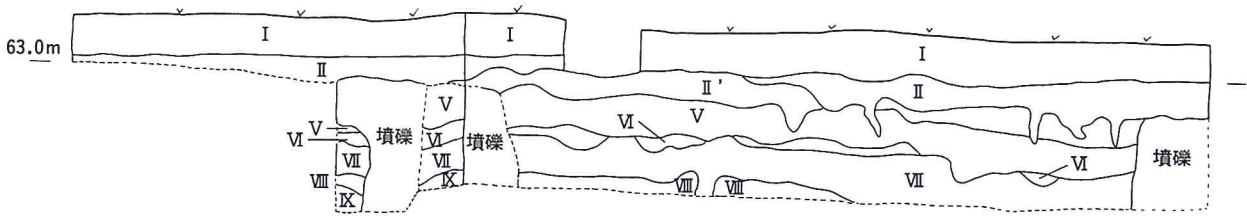
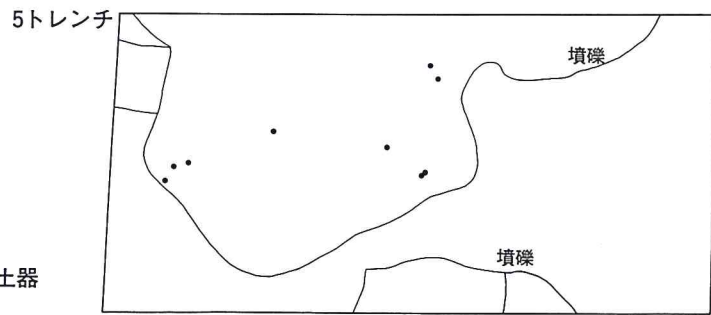
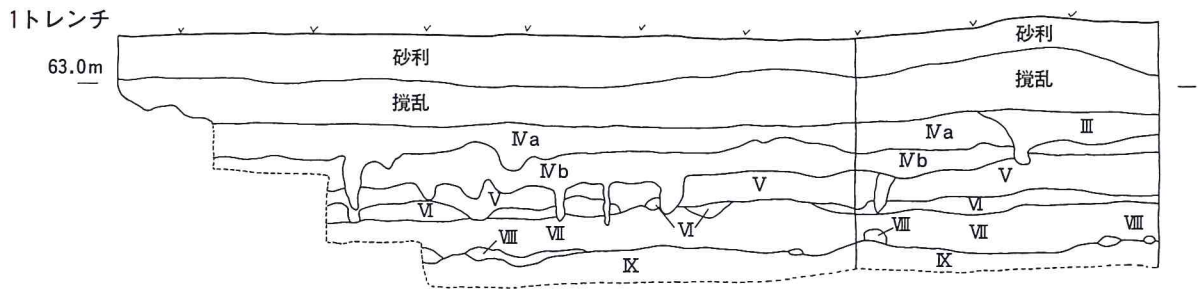
第26図 有鹿野遺跡 土層断面図(1) (S=1/40)



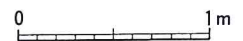
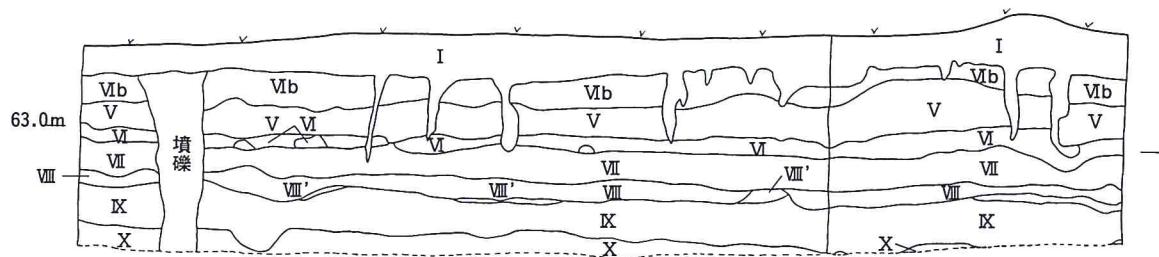
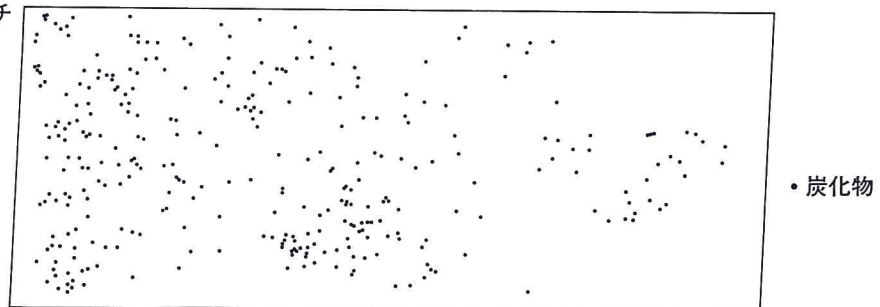
第27図 有鹿野遺跡 土層断面図(2) (S=1/40)



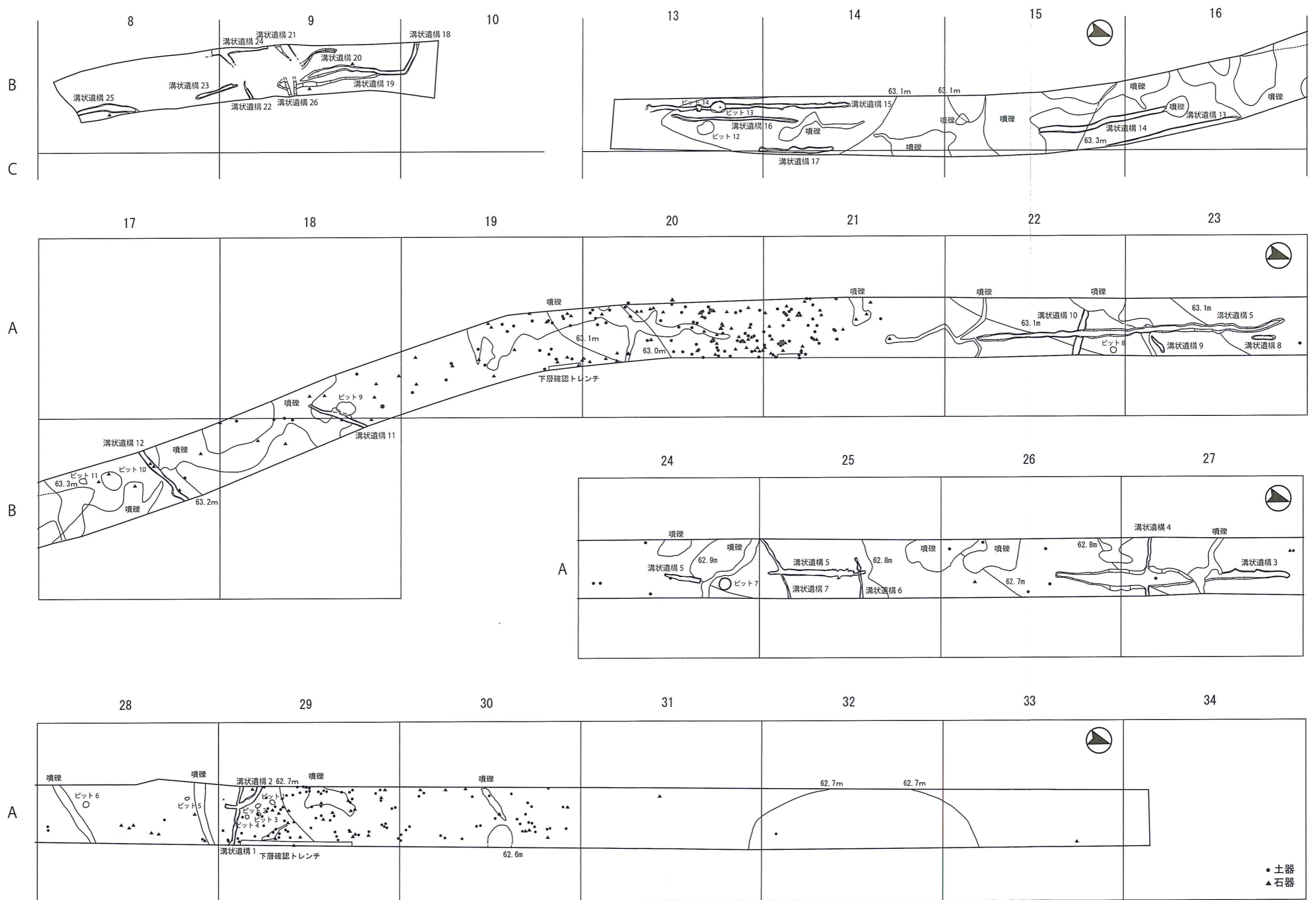
第28図 有鹿野遺跡 土層断面図(3) (S=1/40)



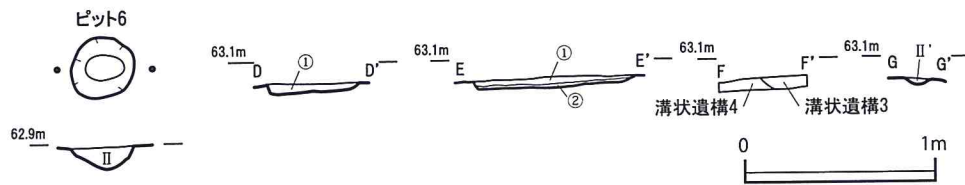
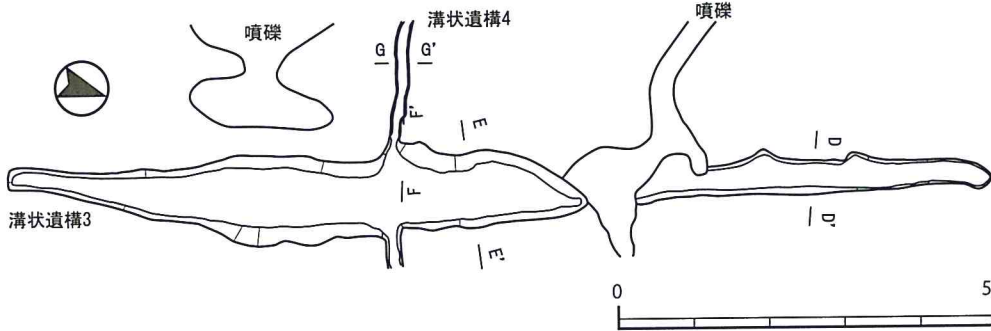
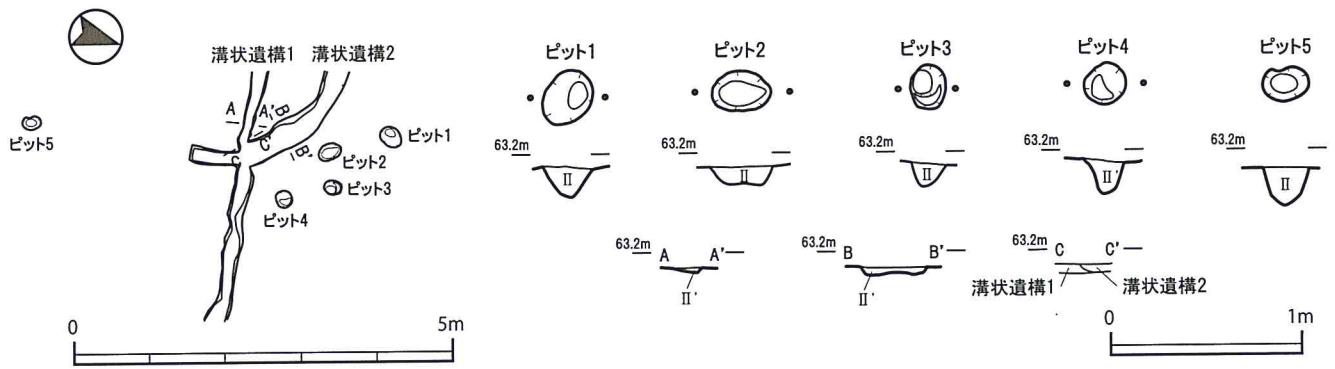
6トレンチ



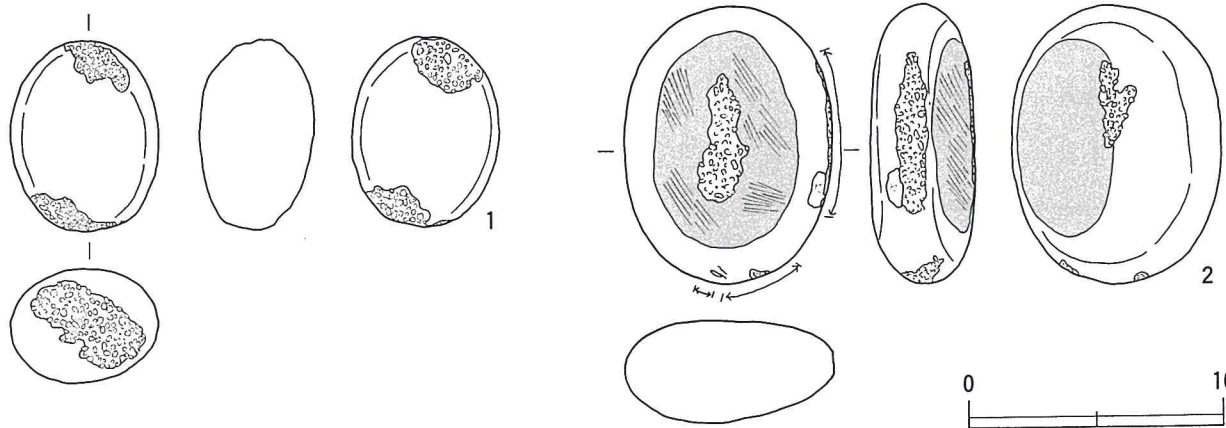
第29図 有鹿野遺跡 確認トレンチ遺物出土状況及び土層



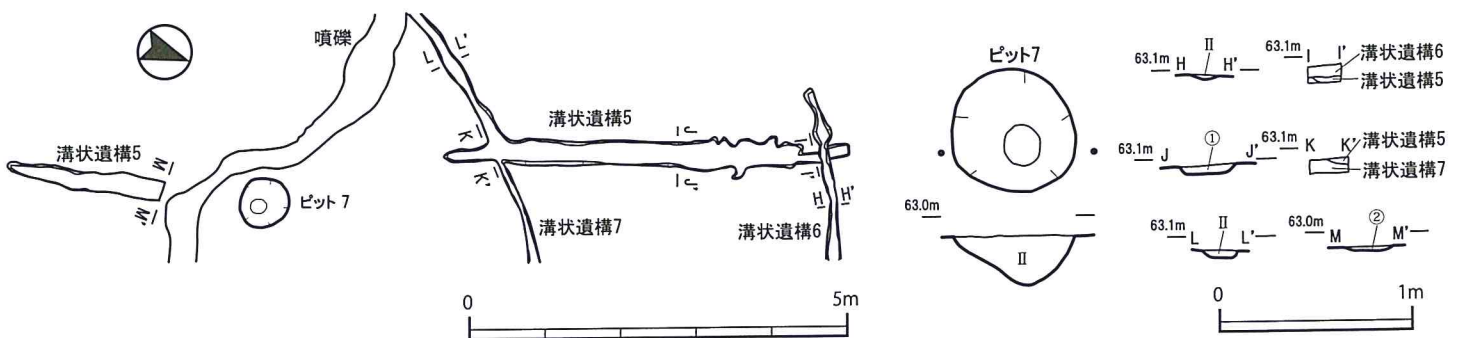
第30図 有鹿野遺跡 遺構遺物出土状況図 (S=1/200)



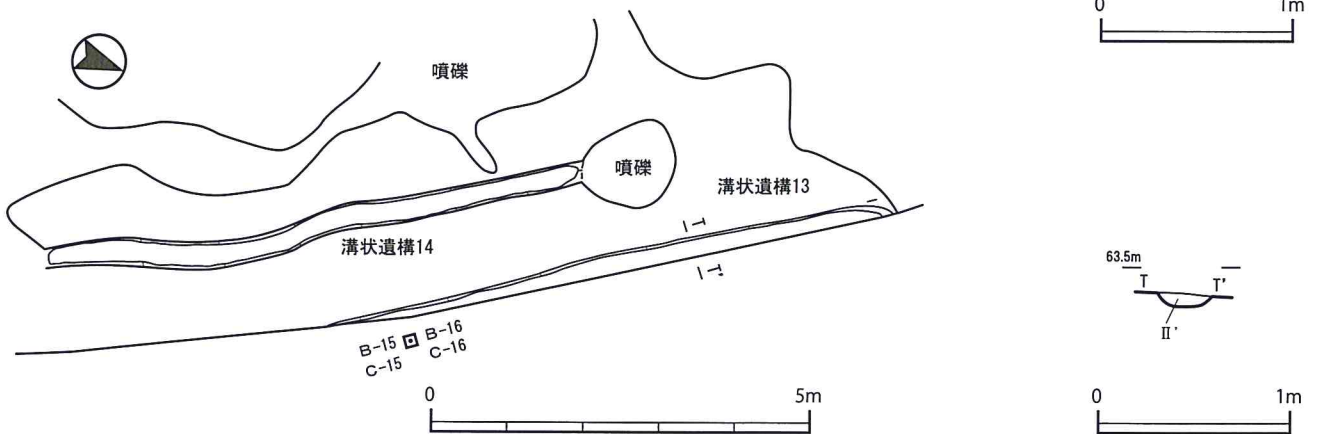
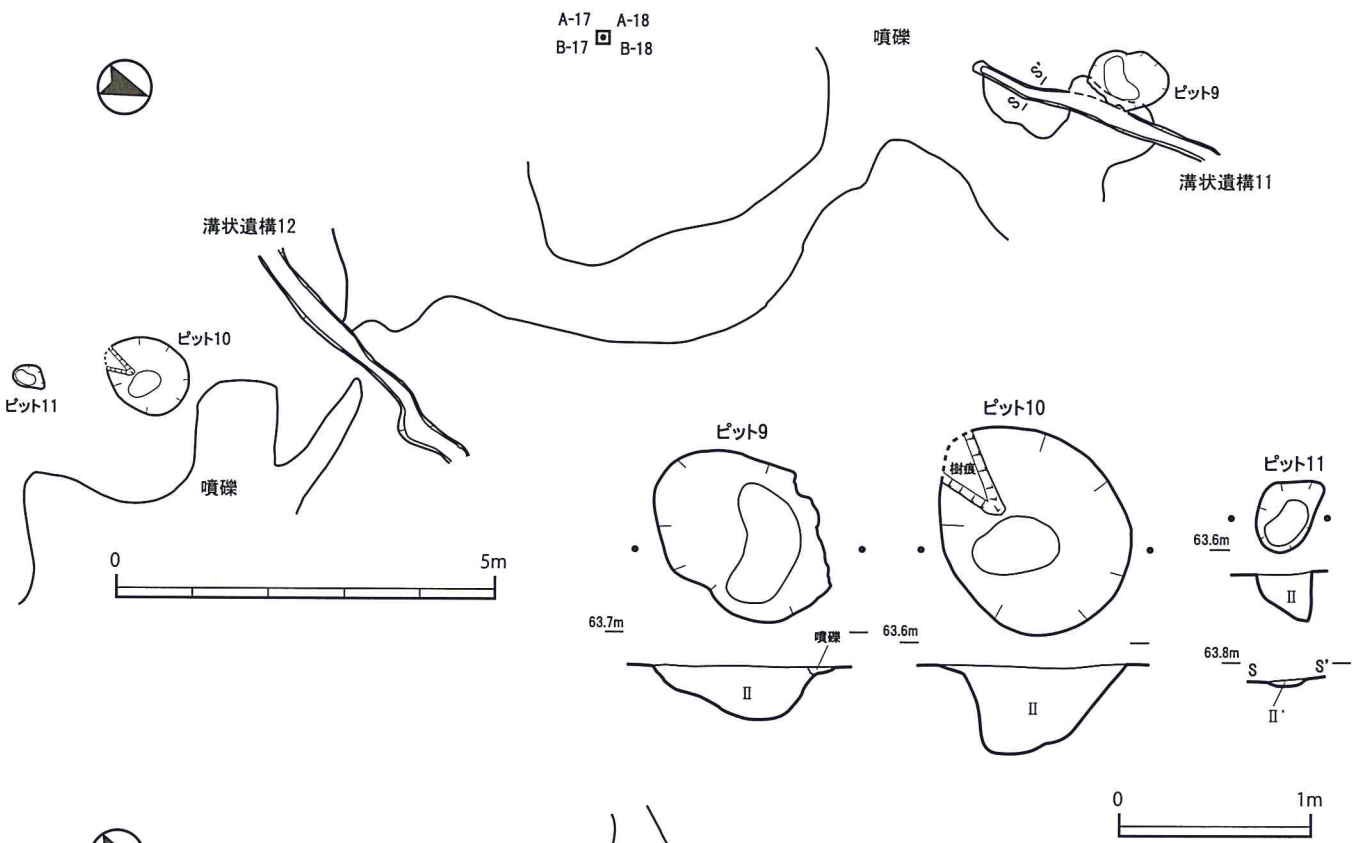
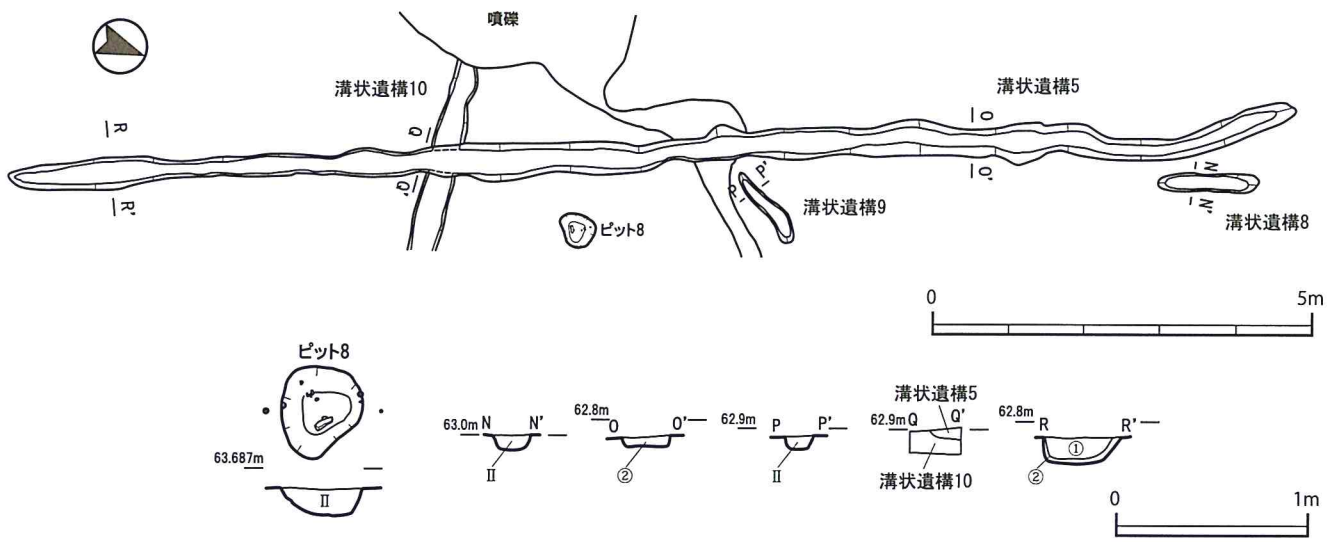
- ①層 10YR2/3 黒褐色土
非常に固くしまる。細かいⅢ層粒を多く含み、炭化物、赤土なども多く含む。粘性あまりなし。
- ②層 10YR4/4 褐色土
非常に固くしまる。下のⅢ層よりやや黒い色で、Ⅲ層粒を粒状に多く含む。粘性ややあり。



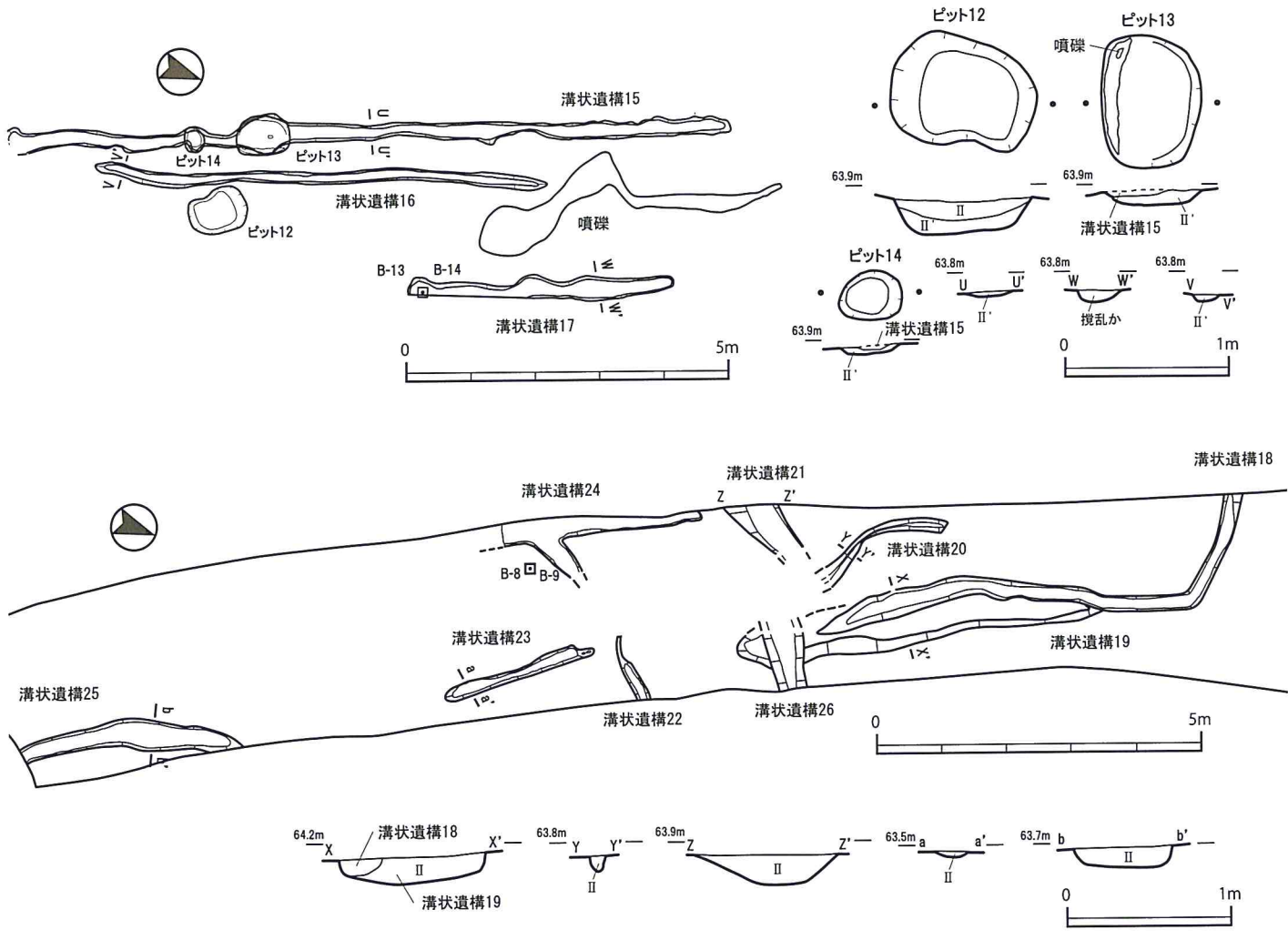
溝状遺構3 出土遺物



第31図 有鹿野遺跡 遺構(1)



第32図 有鹿野遺跡 遺構(2)



第33図 有鹿野遺跡 遺構(3)

第4節 有鹿野遺跡の遺物

遺物の取り上げは、平板で行った。包含層はⅡ層、Ⅱ'層が入り組んでいたが、土層断面より層の判別を行った。遺物の出土状況は、A-29,30区、A-19～21区と大きく2か所遺物の集中する箇所があった。遺物はすべてⅡ及びⅡ'層からの出土である。

1. 土器

土器は確認調査時も含め、総数333点出土した。概ねナデ調整が内外面に施され、胎土に雲母を含む土器もみられる。土器は大半が深鉢形土器であったが、台付皿形土器も出土している。器形・文様から1類～9類と分類した。類に分類できなかった土器は部位ごとに10類、11類として一括して報告する。

(1) 1類土器（第34図1, 2）

口縁部に断面三角形の肥厚帯を有し、横位に沈線文を施すものである。1は波状口縁で、波頂部をつぶし、縦位の沈線文を2条施す。波頂部から口縁部に横位の沈線文を1条施す。調整に貝殻条痕がみられる。胎土に雲母を多く含む。2は、波状口縁に3条横位の沈線文を施す。沈線文間は無文である。外面調整に貝殻条痕がみられる。

(2) 2類土器（第34図3～15）

口縁部がやや外反し、断面が三角形を呈するものも多い。口縁部は波状口縁部と平口縁とに分けられる。1類が波状口縁の波頂部をつぶしたのに対し、ほとんどつぶさない。文様は、肥厚させた口縁部文様帯に集中し、貝殻刺突文や連点文、沈線文などを単独あるいは組み合わせており、非常にバリエーションが多い。内外面全体に貝殻条痕がみられる。文様のパターンによりa～fに分類した。

2 a類土器（第34図3）

口縁部に連点文のみを施すものである。肥厚した波状口縁に連点文を施している。内外面に貝殻条痕がみられる。

2 b類土器（第34図4～7）

口縁部に貝殻刺突文のみを施すものである。口縁部断面は二等辺三角形をしているものから正三角形に近いものまで様々である。4は、肥厚した口縁部に斜位に貝殻刺突文を施している。6は器壁の厚さ0.6cmと薄く、口縁部断面が直角三角形に近い。口縁部に貝殻刺突文を1条横位に施している。非常に明瞭な貝殻条痕が内外面にみられる。7は、口縁部に粘土紐を外面に織り込んで肥厚させている。口縁部に鋸歯状に貝殻刺突文を施している。

2 c類土器（第34図8, 9）

口縁部に貝殻刺突文と爪形刺突文を組み合わせたものである。肥厚部が幅広く、そこに文様を施しているのが特徴である。文様は上下に爪形刺突文を横位に施し、その間に貝殻刺突文を斜位に施している。内外面貝殻条痕がみられるが、9の内面は貝殻条痕後ナデ調整を施している。

2 d 類土器 (第34図10)

連点文、沈線文、貝殻刺突文を組み合わせたものである。肥厚させた波状口縁の波頂部に縦位の連点文を施し、縦位の貝殻刺突文と横位の沈線文を3条施している。沈線文の起点と終点にはおそらく連点文をアクセントとして施していると考えられる。内外面貝殻条痕がみられるが、内面は貝殻条痕後ナデ調整を施している。胎土が非常に緻密で、堅致な土器である。

2 e 類土器 (第34図11～13)

貝殻刺突文、爪形刺突文を組み合わせたものである。11、12は口縁部下位に肥厚部がみられる。11は肥厚帯上面に横位の爪形刺突文と斜位の貝殻刺突文を、12は肥厚帯下に爪形刺突文と上下に横位、縦位の沈線文を施している。

2 f 類土器 (第34図14, 15)

爪形刺突文と太い沈線文を組み合わせたものである。肥厚した波状口縁部の上下に爪形刺突文を横位に施し、その間に14は太い沈線文2条を、15は太い沈線文と細い沈線文を1条ずつ施している。内外面貝殻条痕がみられ、内面は貝殻条痕後ミガキを施している。

(3) 3 類土器 (第34, 35図16～25)

口縁部はほとんど肥厚せず、断面が逆「く」字状になるものである。器形は波状口縁と平口縁とに分けられる。文様は口縁部に集中し、貝殻刺突文が主体である。内外面に貝殻条痕がみられる。

3 a 類土器 (第34図16)

沈線文と貝殻刺突文を施すものである。「く」字状の屈曲部上下に横位の貝殻刺突文を施し、横位の沈線文を3条その上に施している。内外面に貝殻条痕文がみられる。

3 b 類土器 (第34, 35図17～25)

貝殻刺突文のみを施すものである。18は「く」字状の屈曲部上下に斜位の貝殻刺突文を施している。20は屈曲部上下に斜位の貝殻刺突文を鋸歯状に施している。22～25は下位に短い貝殻刺突文を、上位に長い貝殻刺突文を施している。

(4) 4 類土器 (第35図26～34)

3類に類似するが、口唇部に文様を施すなど施文パターンに違いがみられる。器形は「く」字状を呈するものが大半である。文様のパターンによりa～dに分類した。

4 a 類土器 (第35図26～28)

口縁部に鋸歯状の貝殻刺突文を施すものである。26は口唇部に1条または2条の貝殻刺突文を施す。波状口縁で、口縁部に鋸歯状の貝殻刺突文、屈曲部に横位の貝殻刺突文さらにその下位に横位の沈線文を数条施している。27は断面が肥厚し、器形としては2類土器の範疇であるが、口唇部に貝殻刺突文を施しているため今回は4類にて分類した。口縁部から屈曲部にかけて鋸歯状の貝殻刺突文を施している。

28は口唇部に2条沈線文が施されており、貝殻による条痕文を沈線文に見立てていると思われる。

4 b 類土器 (第35図29)

貝殻刺突文間に短い貝殻条痕文を施すものである。口唇部に貝殻刺突文を施し、口縁部には鋸歯状に施した貝殻刺突文の間に貝殻条痕文がみられる。

4 c 類土器 (第35図30.31)

沈線文を鋸歯状に施すものである。30は波状口縁に沈線文と鋸歯状の貝殻刺突文による文様を施している。31は沈線文のみで構成されている。

4 d 類土器 (第35図32～34)

32はラッパ上に口縁部が外反する器形で、口縁部内外面に貝殻刺突文が施される。34は比較的小型の深鉢形土器で、波状口縁の下位に横位の短い貝殻刺突文を鋸歯状に施している。内外面貝殻条痕がみられる。

(5) 5 類土器 (第35図35, 36)

口縁部に短い貝殻刺突文、その下位に短い沈線文を施すものである。内面から口唇部にかけて短い沈線文と鋸歯状の貝殻刺突文が施されている。いずれも波状口縁で胎土に雲母を多く含む。35, 36は同一個体と思われる。

(6) 6 類 (第35図37～39)

口縁部が内湾し、口縁部に沈線文を横位に施すものである。口縁部はやや肥厚し、断面は角状を呈する。37は口縁部が内湾し、頸部でややくびれ、胴部はふくらむ器形を呈する。口縁部に7条沈線文が横に施されている。38は内湾し、口縁部に横位の沈線文と斜位の沈線文を組み合わせた文様を施している。

(7) 7 類土器 (第36図40～42)

6 類に類似し口縁部が内湾するが、沈線文を鋸歯状に施すものである。40は胴部で、やや太い斜位、横位の沈線文を組み合わせた文様を施している。41は内湾し、口縁部の断面が角状を呈する。2条の沈線文で弧状を描く文様を施している。

(8) 8 類土器 (第36図43～48) (それ以外)

今回の分類に当てはまらないものを8類とした。43は波状口縁である。横位の沈線を広い間隔で3条施している。47は口縁部でやや外反し、爪形文刺突文を施している。

(9) 台付皿形土器 (第36図49, 50)

49は内面に沈線文が施されており、皿部と思われる。器壁は1.5cmと厚く、内外面丁寧なミガキが施されている。50は器形が直行を呈することから、台付皿形土器の可能性があると考え分類した。無文で内外面に貝殻条痕がみられ、内面は貝殻条痕をナデ消している。

(10) 胴部 (第36, 37図51~88)

無文で分類できなかったものである。51は内外面ナデ調整がみられる。円形状の破片であるため、土器片加工品(メンコ)の可能性も考えられる。52は胎土に雲母を含む黒色土器であり、5類土器と同一個体である可能性がある。

(11) 底部 (第38図89~94)

89は緩やかに立ち上がるのに対し、90, 91はややくびれをもちながら立ち上がる器形である。92は圧痕のようなものが確認されるが、判別できなかった。

(12) その他 (第38図95)

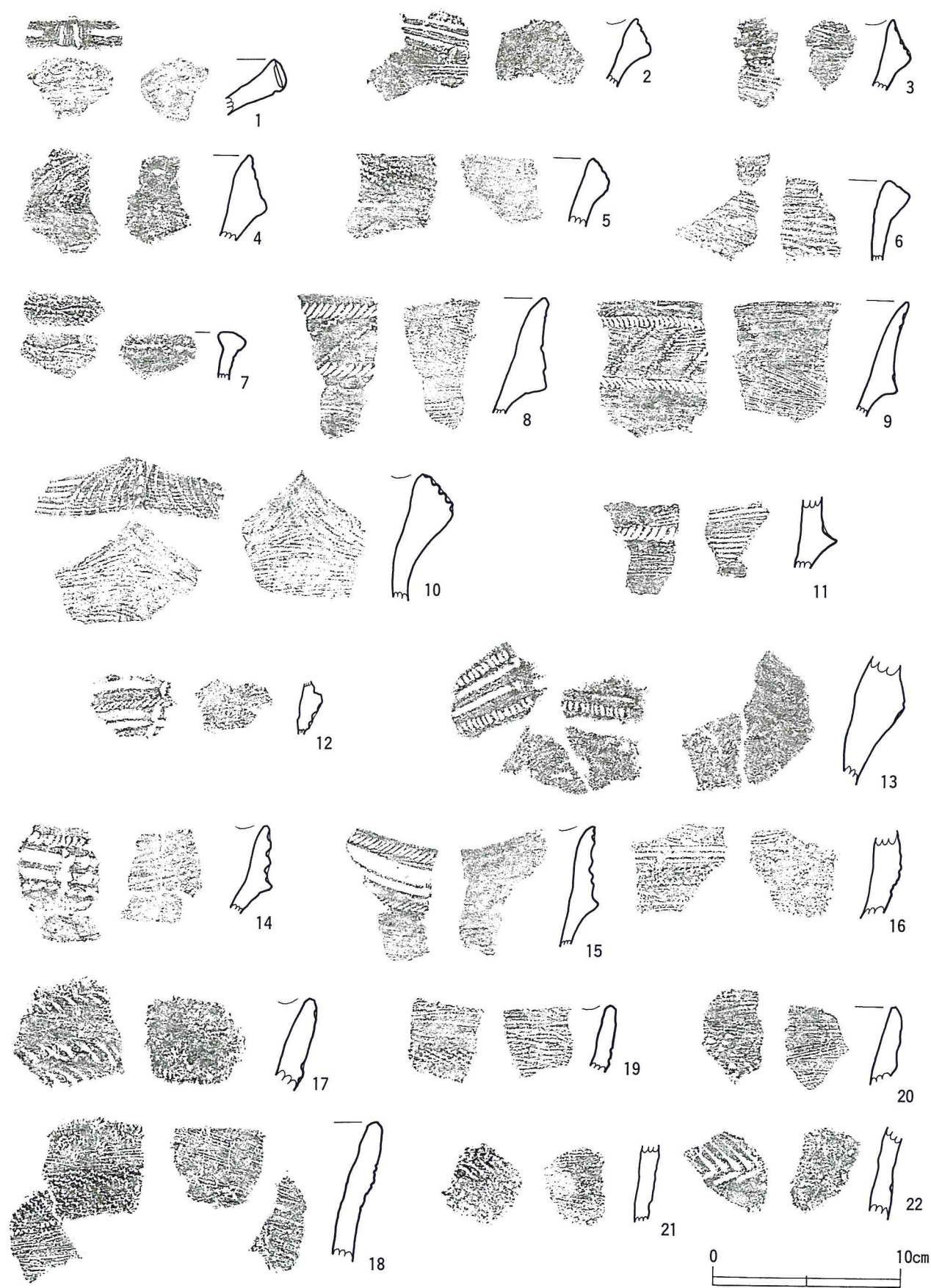
95は青磁の底部である。確認調査の4トレンチから出土している。本調査時においても同時期の遺物は出土しておらず、混じりこみの可能性が考えられる。内面見込みの釉を除去した蛇の目高台状を呈する。

2. 石器

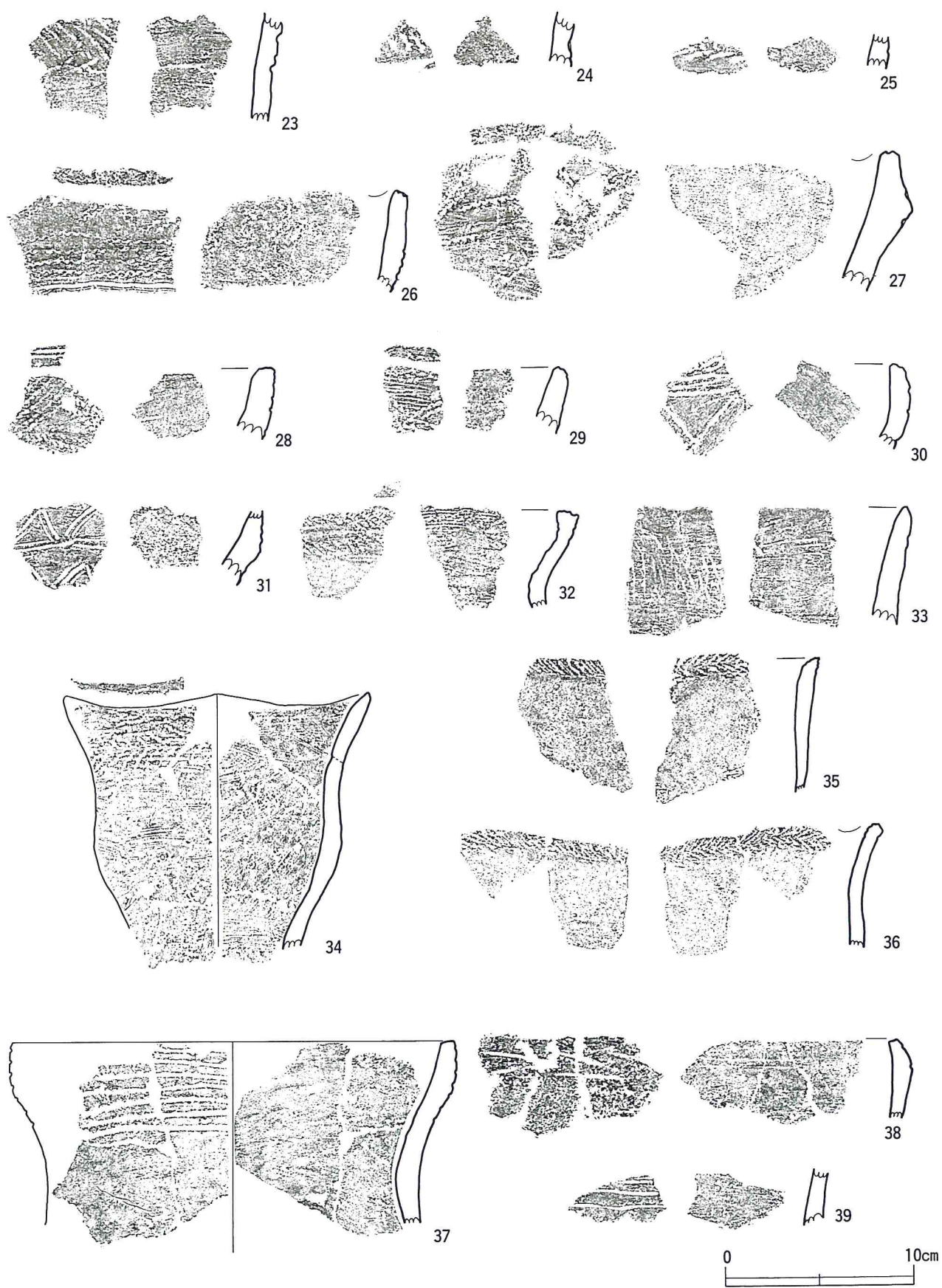
石器は確認調査時も含め、総数437点出土した。石材は安山岩、砂岩を使用している。磨石、敲石は用途によりⅠ類~Ⅶ類と分類した。

(1) 小型石器類 (第39~41図3~36)

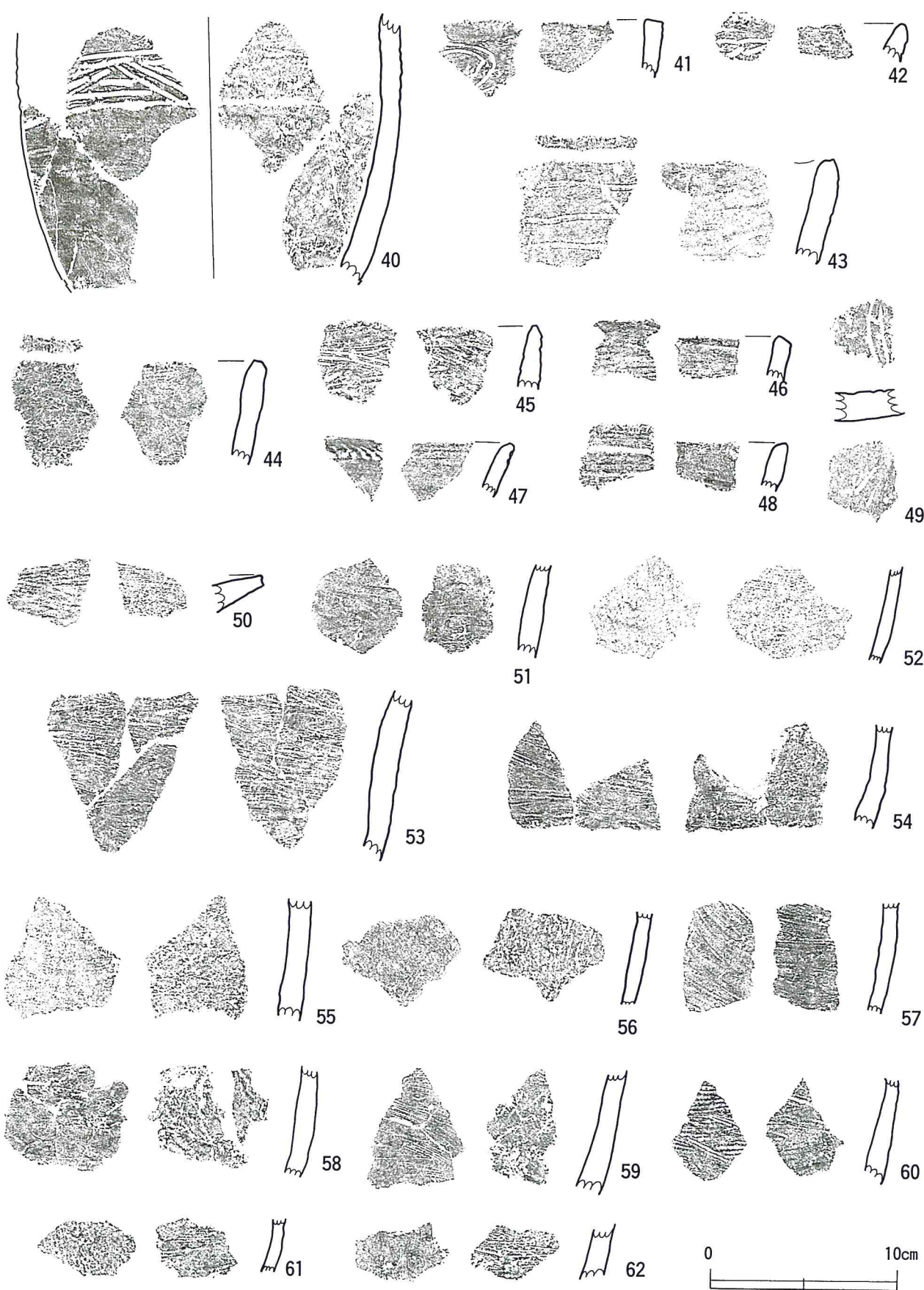
3~12は剥片石器である。大型の礫を打ちかいて剥片をとり、細かい剥離を施して刃部としている。原石残部部分が平坦であるものも多く、石皿から剥片を取った石核も出土していることから、石皿の転用品もあると考えられる。3はホシの入る硅質頁岩で、南種子町の後期旧石器時代の遺跡である銭亀遺跡では細石器に使用している石材である。剥片端部に細かい剥離を施し、刃部を成形している。13~15は微細剥離痕のあるものである。15は原石面に被熱による赤化がみられる。大型礫から剥離した剥片の端部に微細な剥離を一方から施している。16~18は石核である。16は長さ、幅1.4cmと小型の石核である。結晶面が残る水晶を使用し、平坦な結晶面から小型の剥片を剥いでいる。17, 18は砂岩製の大型石核である。全方向から剥片を剥離しており、断面が角錐状を呈す。いずれも原石面は平坦で、石皿として使用後に剥片石器作成のために剥離したものである可能性が考えられる。19~24は石斧である。19は頁岩製の磨製石斧で、基部が欠損し刃部のみ残存する。磨滅して磨痕はほとんど残らず、刃部や側片部に剥離がみられる。使用による剥離か二次転用によるものかは判別できなかった。20はホルンフェルスの石斧である。磨滅著しいが、細かい敲打により成形していると思われる。刃部は欠損している。基部と刃部を打点とした剥離がいくらか確認できるため、石斧として使用後、ハンマーに転用した可能性がある。21はホルンフェルスの打製石斧である。扁平な楕円状を呈し、刃部は使用によるか風化により剥離痕はほとんど確認できない。24は粘板岩製の打製石鏃で、両側片部に抉りを施している。風化のため剥離調整はほとんど確認できない。25~28はその他の石器である。25は定角式の磨製石斧の折れたものを、楔形石器に二次転用したものであると思われる。両端部に連続した剥離面があり、使用による剥離と思われる。26は土掘り具で、基部が欠損している。側辺部は整形のための細かい剥離が施されているが、使用により磨滅している部分もみられる。27は頁岩製の磨製石鏃である。基部・先端部ともに欠損しているが、中央部には稜はなく、扁平な作りで、二等辺三角形を呈すると思われる。28は頁岩製で、小型の



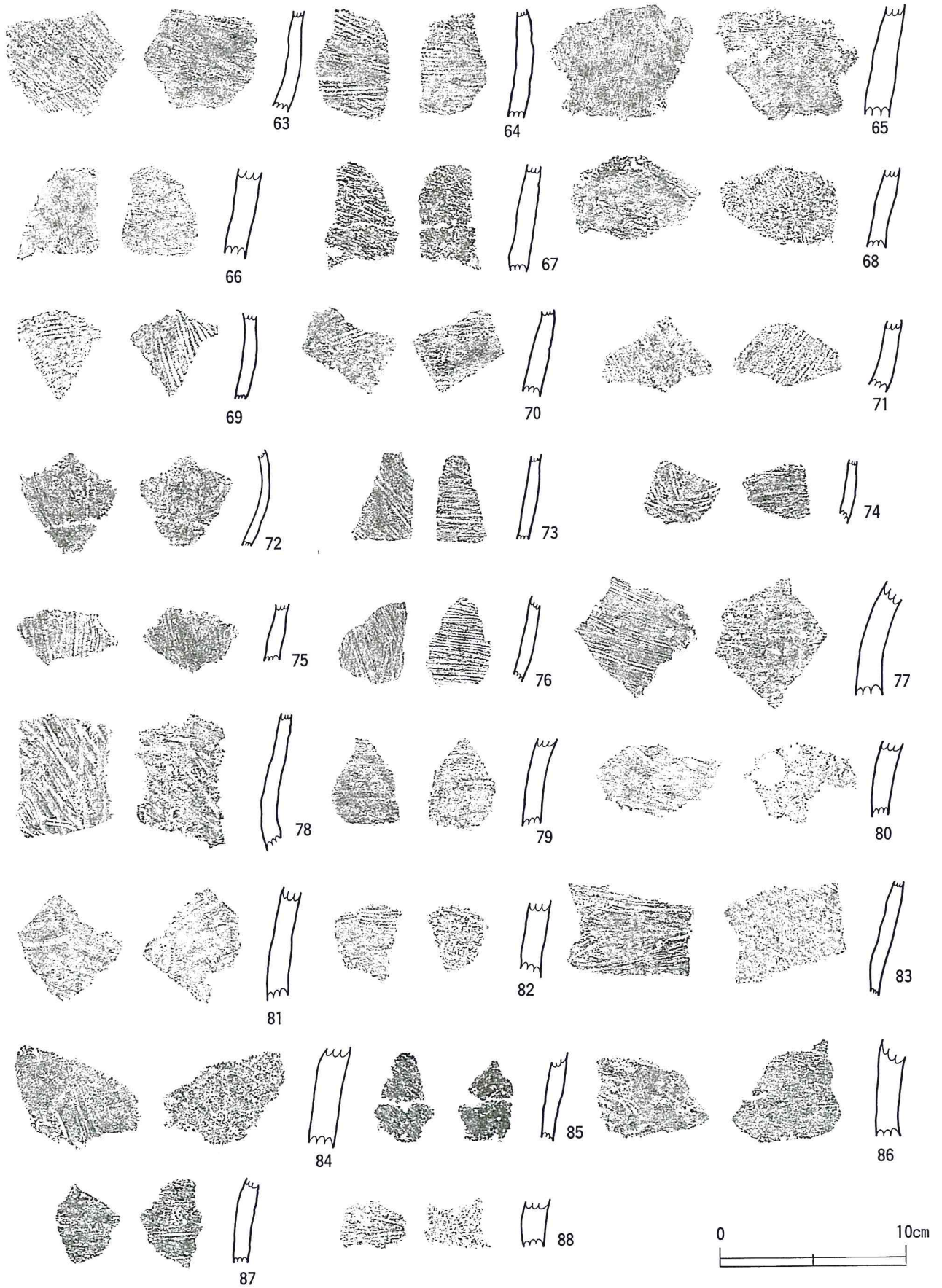
第34図 有鹿野遺跡 土器(1)



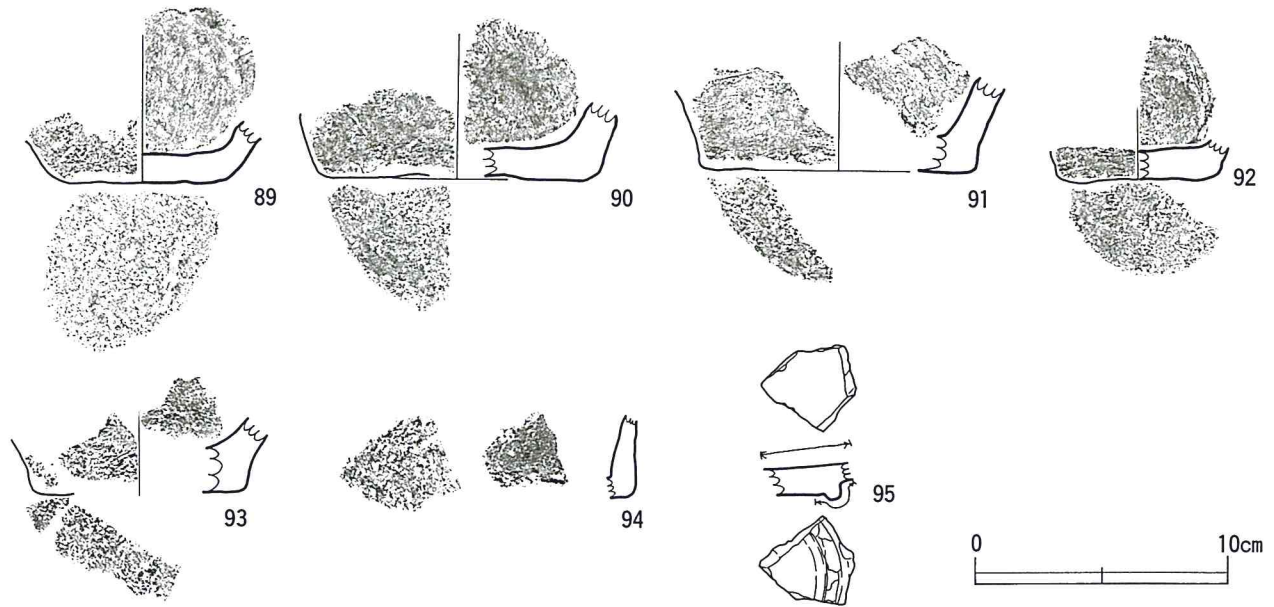
第35図 有鹿野遺跡 土器(2)



第36図 有鹿野遺跡 土器(3)



第37图 有鹿野遺跡 土器(4)



第38図 有鹿野遺跡 土器(5)

棒状の石器である。磨って平坦面を形成しているが、用途は不明である。29はハンマーである。楕円形を呈する円盤の端部に、使用による剥離痕がみられる。30は礫器である。残存する原石面は平坦面の中央がくぼんでおり、磨石の転用品の可能性も考えられる。31～34はフレイクである。6トレンチからは種Ⅳ火山灰下のⅨ層で石の小片が数点出土している。そのなかでも人為的加工された可能性の高い31を図化した。砂岩製のフレイクである。

(2) 磨石・敲石（第41～48図35～97）

Ⅰ類（第41, 42図35～46）磨面のあるもの

磨り面をもつものである。37は頁岩を石材とし、残りはすべて砂岩を石材とする。35, 36は砂岩製の砥石である。35は幅1.5cmに筋状の磨痕がみられる。35は磨痕が2つ重なっており、方向を若干変えて使用している。45は磨面に剥離がみられる。

Ⅱ類（第42～44図47～59）敲きのあるもの

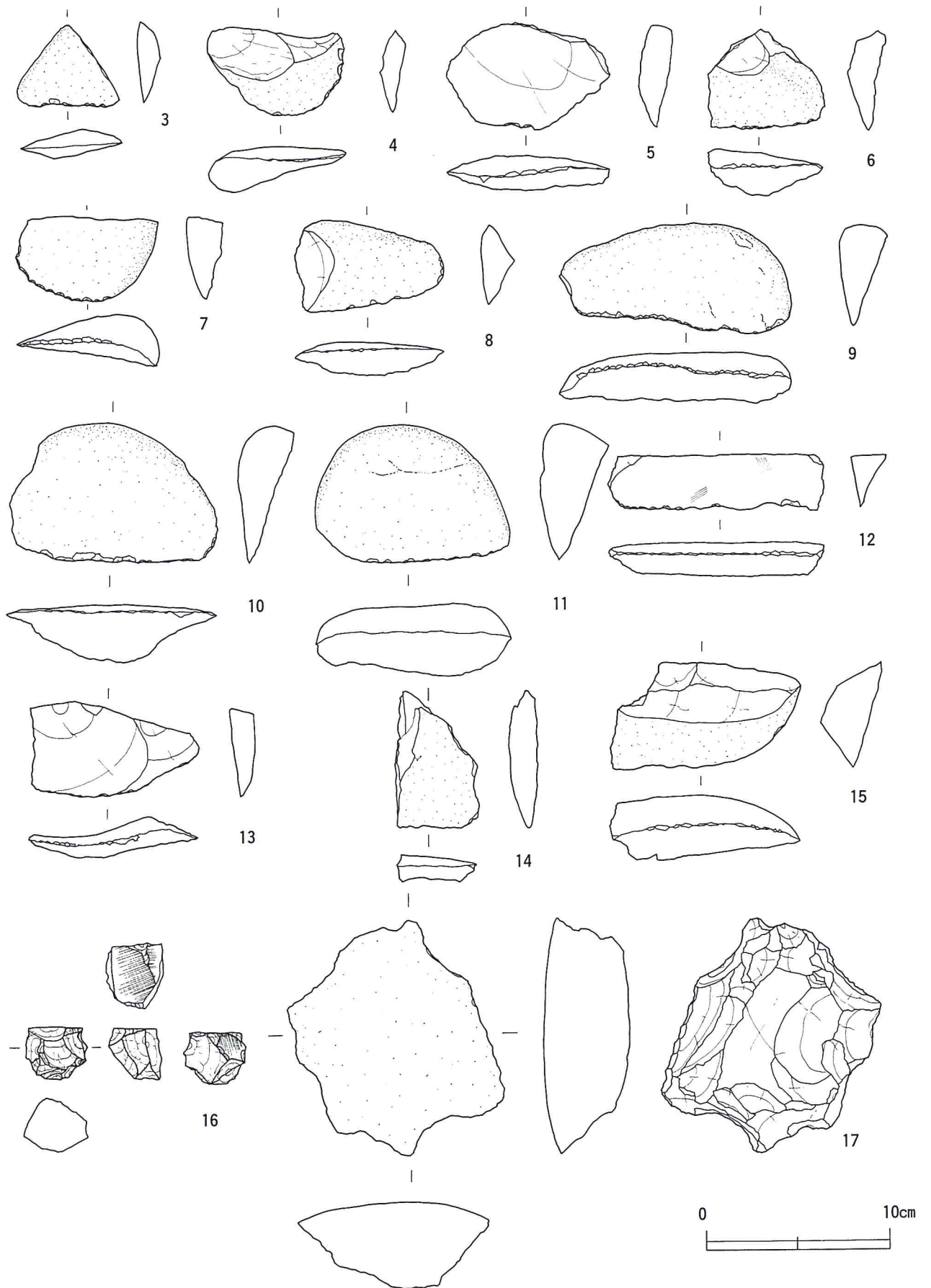
敲き面をもつものである。いずれも砂岩を石材とする。平坦部のみ使用しているものと側面も使用するものに分けられる。

Ⅲ類（第44図60～66）凹みのあるもの

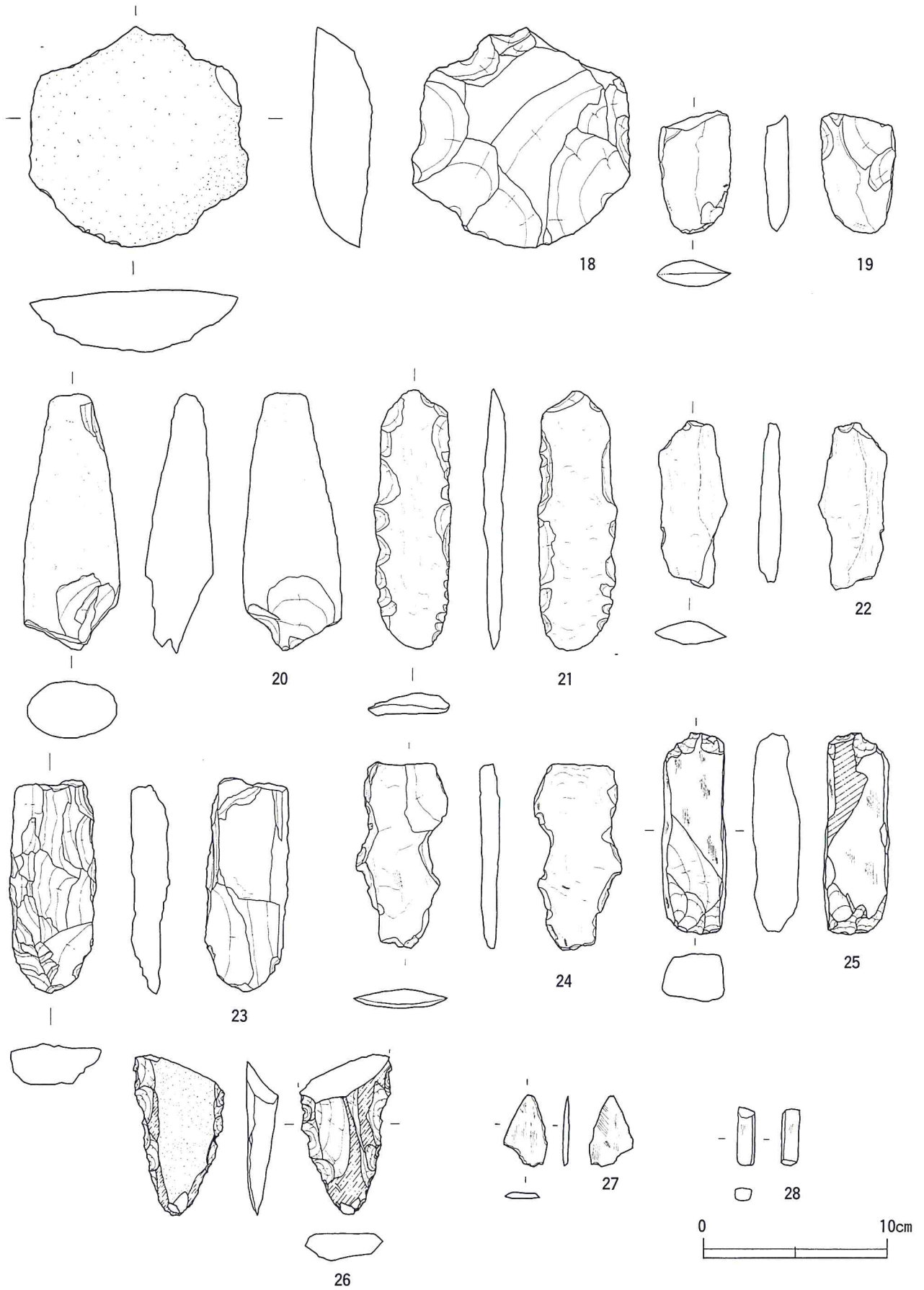
敲打による凹みをもつものである。62が石英斑岩で残りはすべて砂岩を石材とする。いずれも楕円形の円盤である。

Ⅳ類（第44～46図67～81）磨面・敲面のあるもの

磨り面・敲き面をあわせもつものである。68が花崗岩で残りはすべて砂岩を石材とする。67は筋状の磨痕がみられ、砥石としても使用している。71, 73はいずれも剥離痕がみられるが、敲打による剥離の可能性が高い。



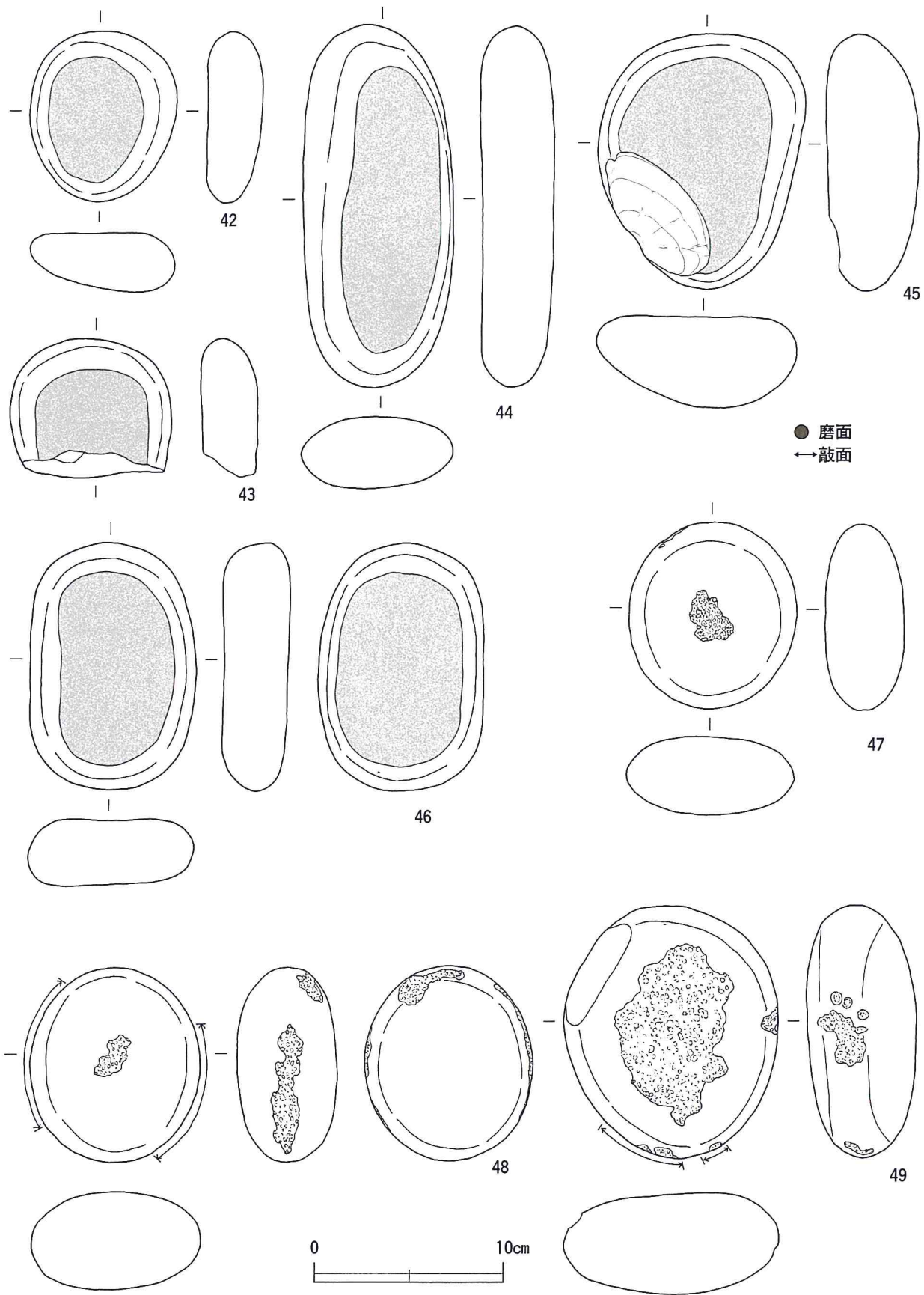
第39图 有鹿野遺跡 石器(1)



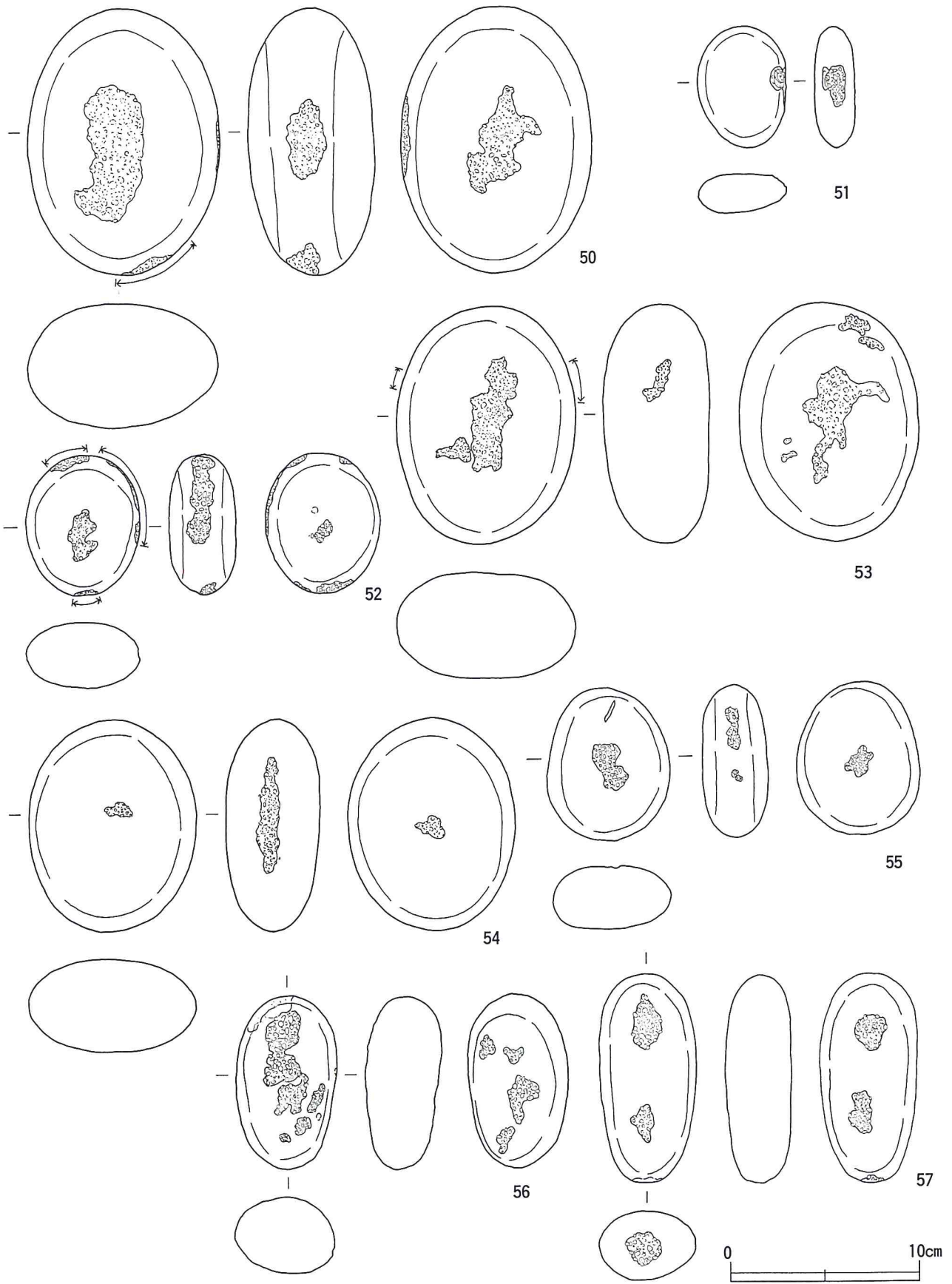
第40図 有鹿野遺跡 石器(2)



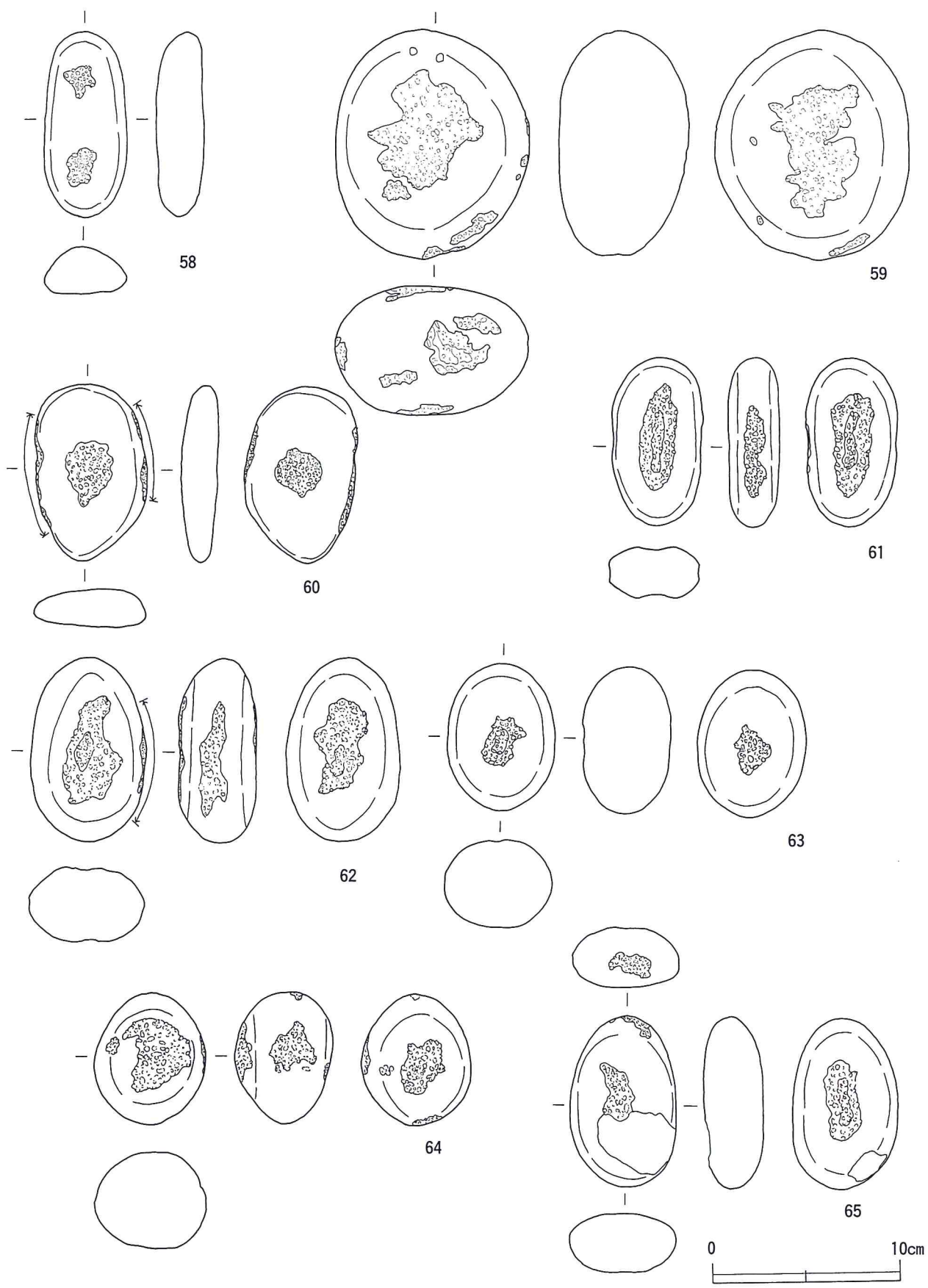
第41図 有鹿野遺跡 石器(3)



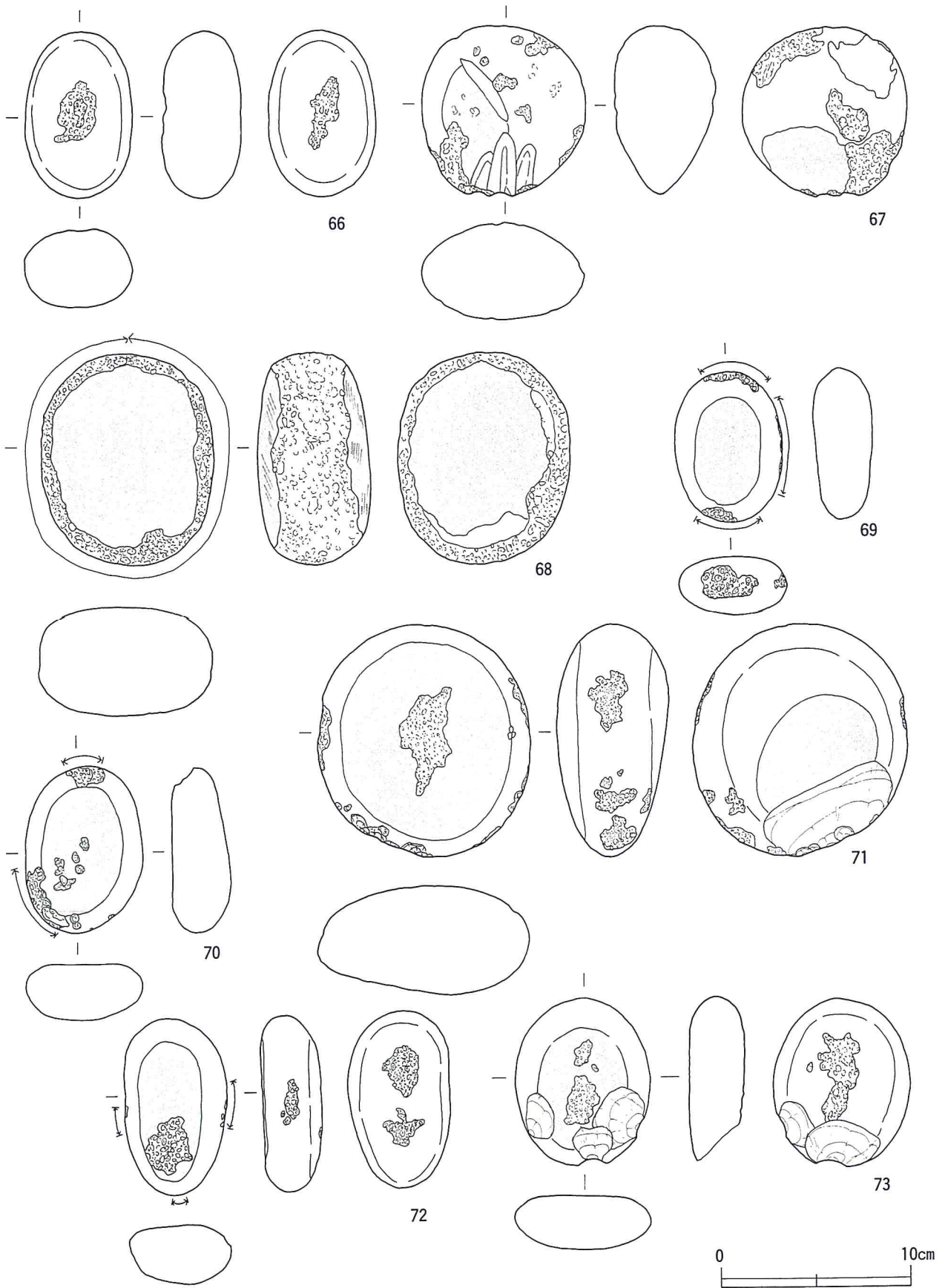
第42図 有鹿野遺跡 石器(4)



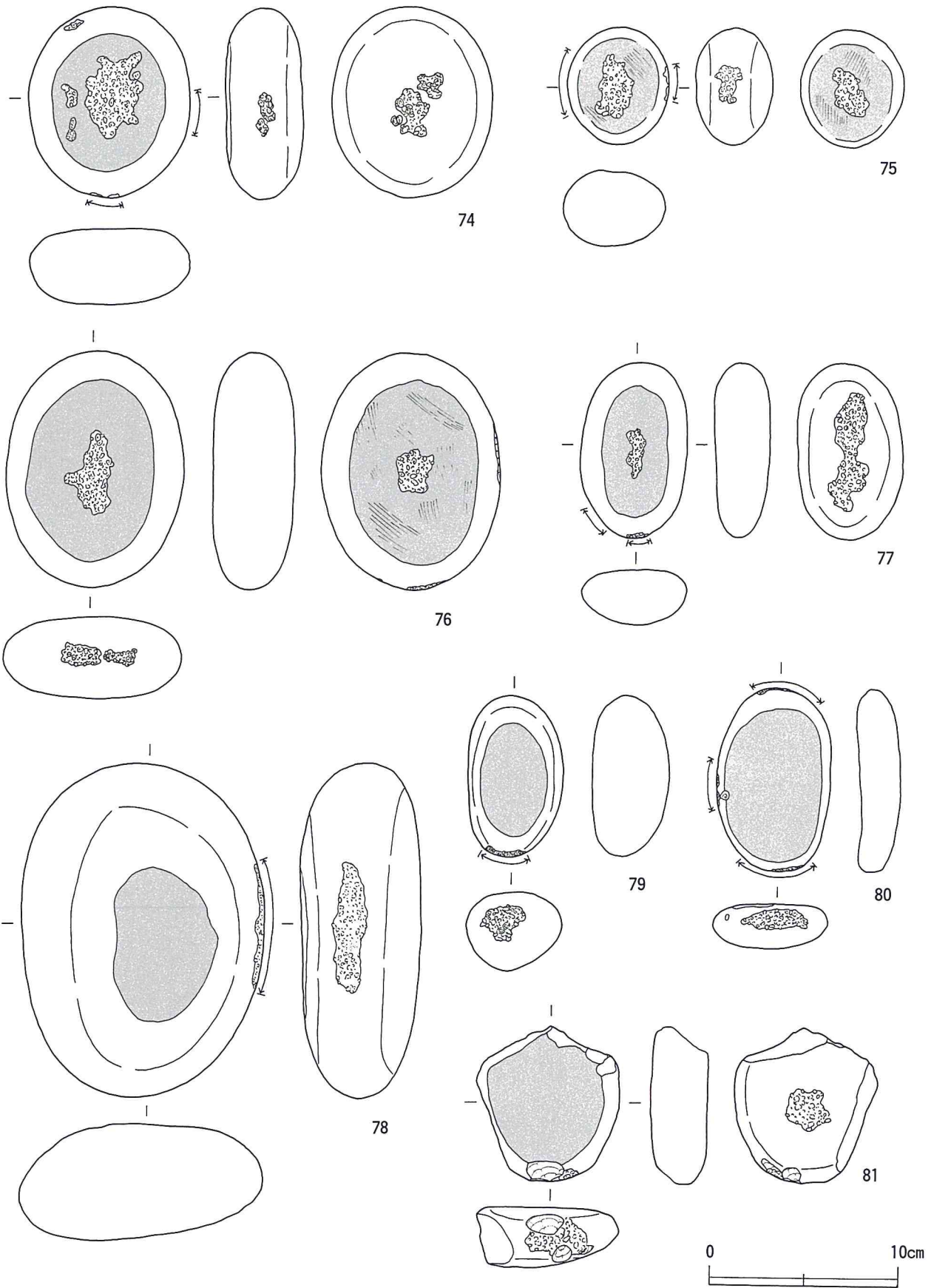
第43図 有鹿野遺跡 石器(5)



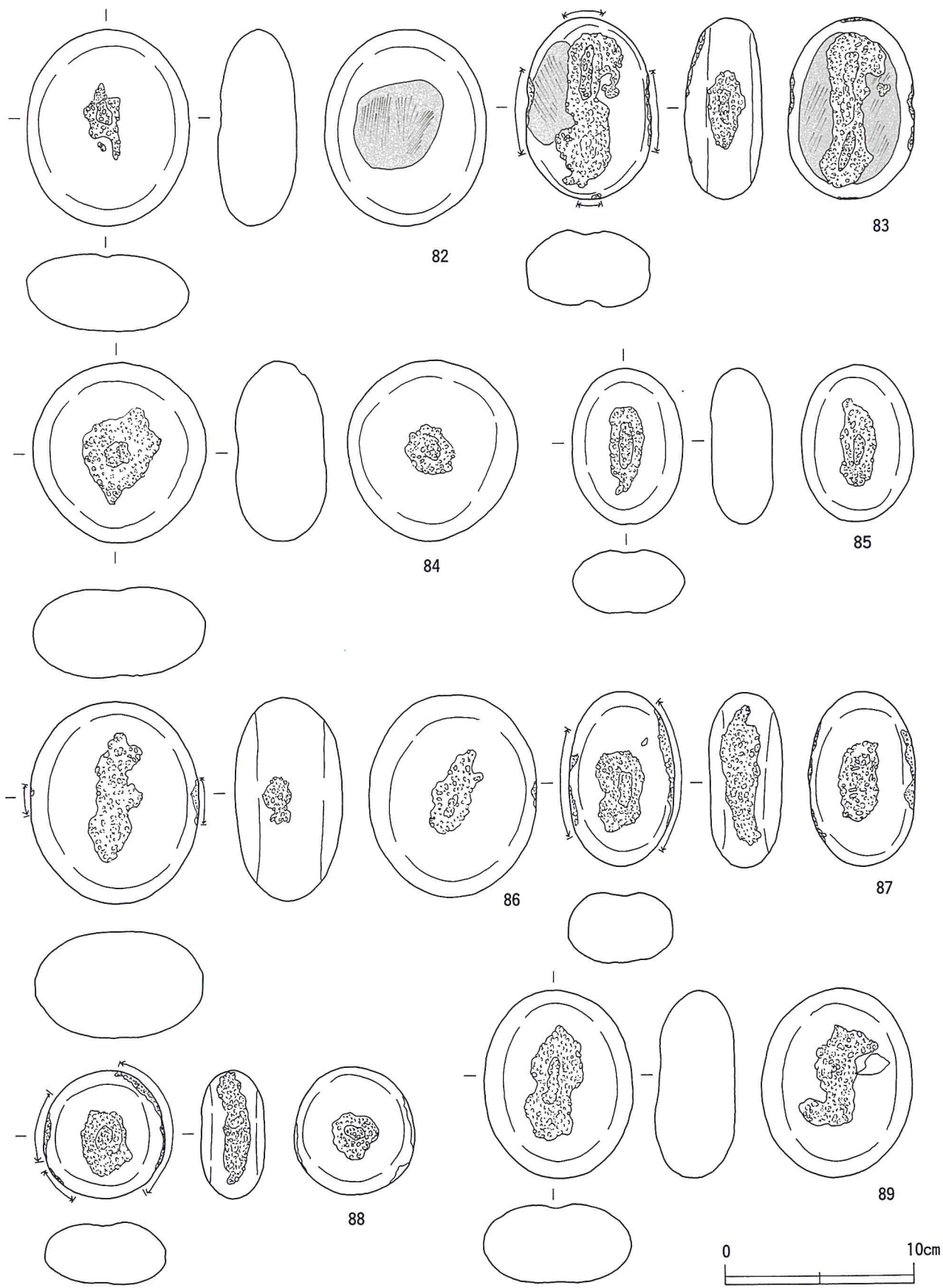
第44図 有鹿野遺跡 石器(6)



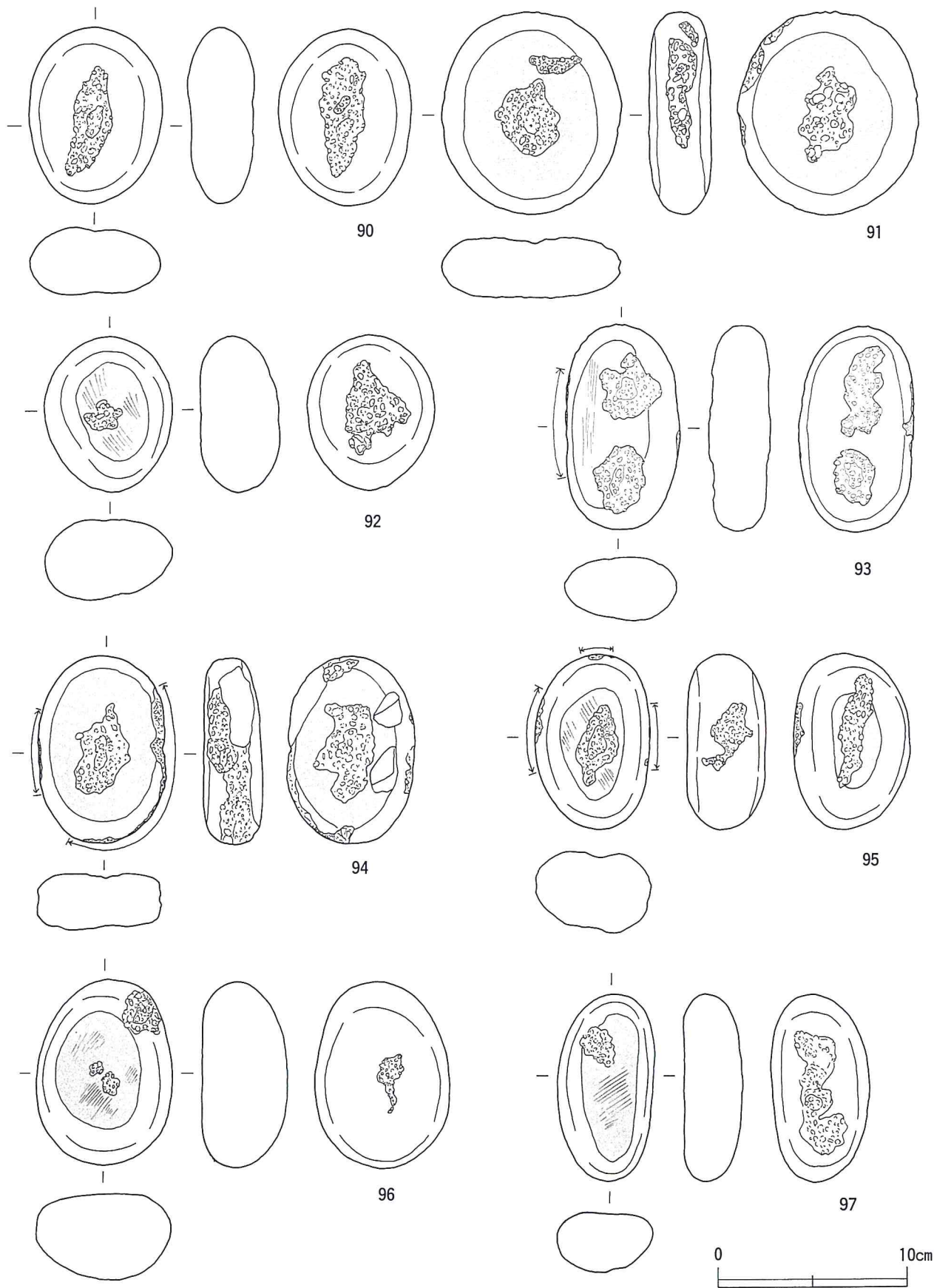
第45図 有鹿野遺跡 石器(7)



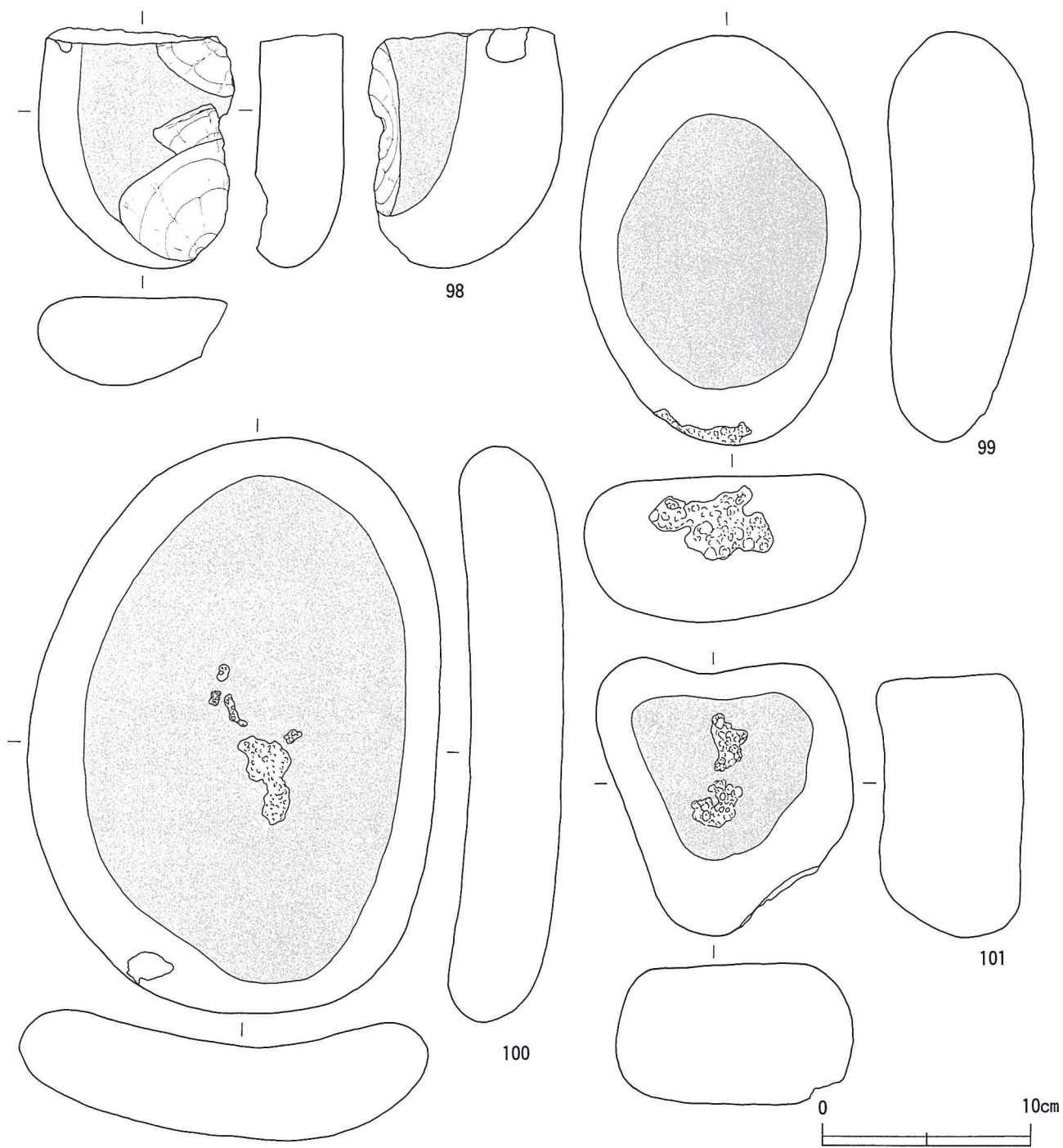
第46図 有鹿野遺跡 石器(8)



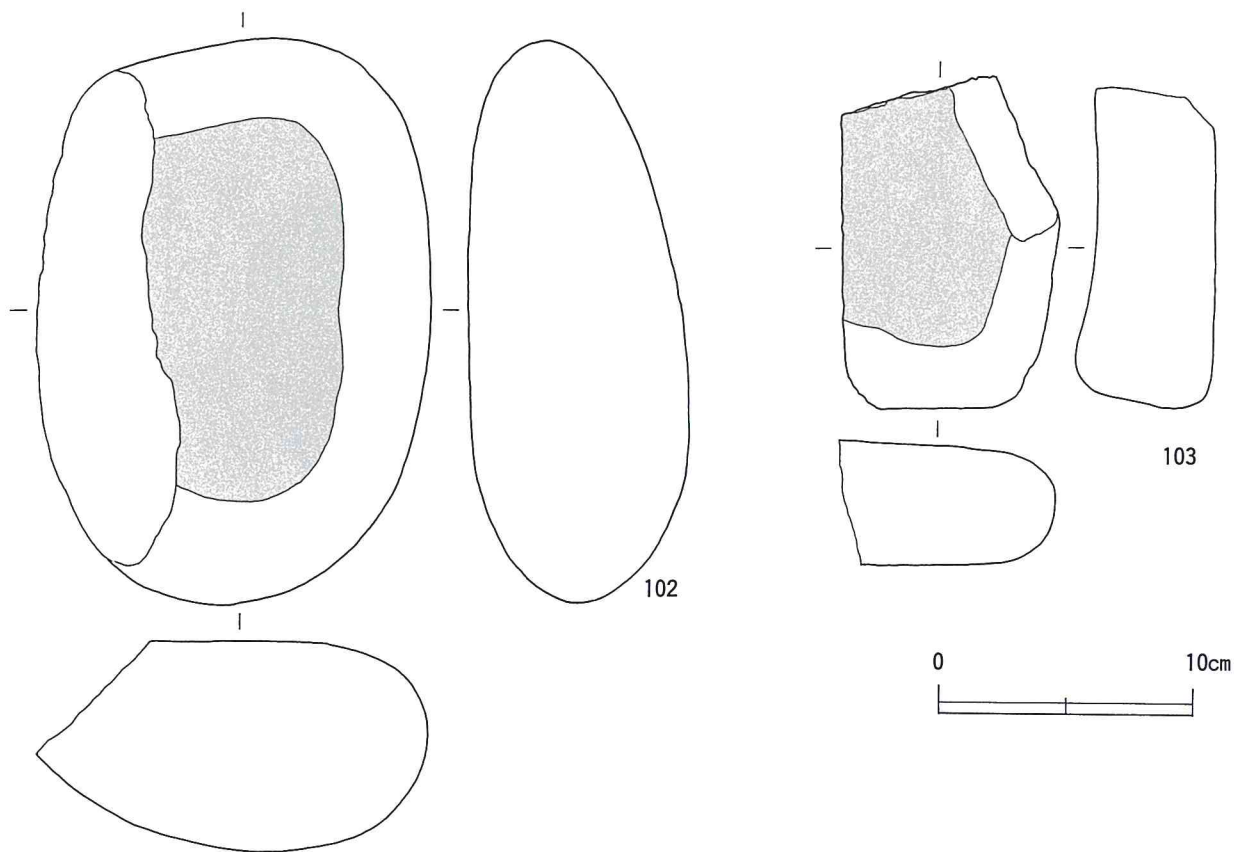
第47図 有鹿野遺跡 石器(9)



第48図 有鹿野遺跡 石器(10)



第49図 有鹿野遺跡 石器(11)



第50図 有鹿野遺跡 石器(12)

V類 (第47図82, 83) 磨面・凹みのあるもの

磨り面・敲打による凹みをもつものである。82, 83いずれも砂岩を石材とする。

VI類 (第47, 48図84~90) 敲き・凹みのあるもの

敲き面・敲打による凹みをもつものである。すべて砂岩を石材とする。

VII類 (第48図91~97) 磨面・敲面・凹みのあるもの

磨り面・敲き面・敲打による凹みをもつものである。91が花崗岩, 92~94が石英斑岩, 95~97が砂岩を石材とする。

(3) 石皿 (第49, 50図98~103)

98は硬質砂岩の石皿で, 使用面が剥離している。使用に伴う剥落か礫器と使用するための剥離なのかは判別できない。99~101は磨りと敲きの使用痕がみられる。

第6表 有鹿野遺跡 遺構観察表

挿図番号	出土区	検出面	遺構名	長さ (m)	幅 (m)		深さ (cm)	供伴遺物	備 考
					最小	最大			
第31図	A29	Ⅲ	溝状遺構 1	(3.3)	0.1	0.3	3.0		溝状遺構2と切り合う
第31図	A29	Ⅲ	溝状遺構 2	(2.4)	0.2	0.4	4.0		溝状遺構 1 と切り合う
第31図	A27	Ⅲ	溝状遺構 3	13.5	0.3	1.2	6.0	敲石, 磨石	溝状遺構 4 と切り合う
第31図	A26,27	Ⅲ	溝状遺構 4	(3.3)	0.2	0.1	3.0		溝状遺構 3 と切り合う
第31図	A25	Ⅲ	溝状遺構 5	5.4	0.1	0.5	13.0		溝状遺構6,7,10と切り合う
第31図	A25	Ⅲ	溝状遺構 6	(2.3)	0.1	0.3	2.0		溝状遺構 5 と切り合う
第31図	A25	Ⅲ	溝状遺構 7	(3.8)	0.1	0.2	4.0		溝状遺構 5 と切り合う
第32図	A23	Ⅲ	溝状遺構 8	1.3	0.2	0.3	7.0		
第32図	A23	Ⅲ	溝状遺構 9	1.2	0.1	0.2	7.0		
第32図	A22	Ⅲ	溝状遺構10	(2.6)	0.3	0.4	11.0		溝状遺構 5 と切り合う
第32図	A, B18	Ⅲ	溝状遺構11	(3.3)	0.1	0.5	3.0		
第32図	B17	Ⅲ	溝状遺構12	(3.8)	0.2	0.4	-		
第32図	B15,16	Ⅲ	溝状遺構13	7.1	0.05	0.3	7.0		
第32図	B15,16	Ⅲ	溝状遺構14	(7.2)	0.3	0.4	-		一部噴礫に切られている
第33図	B13,14	Ⅲ	溝状遺構15	11.3	0.1	0.6	3.0		ピット13,14と切り合う
第33図	B13,14	Ⅲ	溝状遺構16	(7.0)	0.1	0.2	4.0		
第33図	B13,14	Ⅲ	溝状遺構17	4.1	0.2	0.4	7.0		
第33図	B9,10	Ⅲ	溝状遺構18	(5.1)	0.1	0.4	10.0		溝状遺構19と切り合う
第33図	B9	Ⅲ	溝状遺構19	(5.2)	0.2	0.7	16.0		溝状遺構18, 26と切り合う
第33図	B9	Ⅲ	溝状遺構20	(2.2)	0.1	0.3	10.0		
第33図	B9	Ⅲ	溝状遺構21	(1.1)	0.4	0.8	18.0		
第33図	B9	Ⅲ	溝状遺構22	(1.0)	0.1	0.2	-		
第33図	B8,9	Ⅲ	溝状遺構23	(2.4)	0.1	0.3	3.0		
第33図	B8,9	Ⅲ	溝状遺構24	(3.1)	0.15	0.4	-		
第33図	B8	Ⅲ	溝状遺構25	(3.3)	0.25	0.5	12.0		
第33図	B9	Ⅲ	溝状遺構26	(1.1)	0.45	0.6	-		
第31図	A29	Ⅲ	ピット 1	0.31	0.24		16.0		
第31図	A29	Ⅲ	ピット 2	0.31	0.21		10.0		
第31図	A29	Ⅲ	ピット 3	0.23	0.18		12.0		
第31図	A29	Ⅲ	ピット 4	0.22	0.22		18.0		
第31図	A28	Ⅲ	ピット 5	0.24	0.17		20.0		
第31図	A28	Ⅲ	ピット 6	0.34	0.30		11.0		
第31図	A24	Ⅲ	ピット 7	0.66	0.63		25.0		
第32図	A22	Ⅲ	ピット 8	0.48	0.42		13.0	土器	
第32図	A18	Ⅲ	ピット 9	1.04	0.75		28.0		一部噴礫に切られている
第32図	B17	Ⅲ	ピット10	(1.18)	0.93		43.0		一部樹痕がかかる
第32図	B17	Ⅲ	ピット11	0.43	0.29		(25.0)		
第33図	B13	Ⅲ	ピット12	0.90	0.70		21.0		
第33図	B13	Ⅲ	ピット13	0.81	0.60		10.0		溝状遺構15と切り合う
第33図	B13	Ⅲ	ピット14	0.40	0.31		(25.0)		溝状遺構15と切り合う

第7表 有鹿野遺跡 遺物観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	分類	器種	胎 土				焼成	色 調		調 整		文 様	備 考
						石英	長石	角閃石	雲母		内	外	外壁面	内壁面		
34	1	A21	II	1類	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	灰赤	ナデ	ナデ	沈線	
34	2	A21	II	1類	深鉢	○	○	○		良好	赤橙	赤橙	ナデ	—	沈線3条, 貝殻条痕	羽状口縁
34	3	4T	II	2類	深鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	橙	ナデ(貝, ミガキ)	ナデ(貝)	連点文	羽状口縁
34	4	A29	II	2類	深鉢	○	○		○	良好	赤色	赤色	ナデ	ナデ		
34	5	A21	II	2類	深鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ	貝殻刺突文	
34	6	A20	II	2類	深鉢	○	○	○	○	良好	赤褐	橙	ナデ, ミガキ	ナデ(貝)	貝殻刺突文	
34	7	A19	II	2類	深鉢	○	○	○		良好	橙	橙	ナデ(貝)	ナデ	貝殻刺突文	
34	8	A21	II	2類	深鉢	○	○		○	良好	赤橙	赤	ナデ	ナデ	刺突文, 貝殻刺突文	
34	9	A21	II	2類	深鉢	○	○	○		良好	橙	にぶい橙	ナデ(貝)	ナデ(貝)	刺突文, 貝殻刺突文	
34	10	A21	II	2類	深鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	赤橙	ナデ(貝)	ナデ(貝)	貝殻刺突文沈線文	羽状口縁
34	11	A20	II	2類	深鉢	○	○		○	良好	橙	橙	ナデ(貝, ミガキ)	ナデ(貝)	貝殻刺突文, 刺突文	
34	12	A20	II	2類	深鉢	○	○		○	良好	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	沈線, 刺突文	
34	13	A21	II	2類	深鉢	○	○	○		良好	橙	橙	ナデ	ナデ		
34	14	A20	II	2類	深鉢	○	○		○	良好	橙	橙	ナデ	ナデ		羽状口縁
34	15	A21	II	2類	深鉢	○	○		○	良好	橙	橙	ナデ(貝)	ナデ		羽状口縁
34	16	A20	II	3類	深鉢	○	○		○	良好	にぶい赤褐	橙	ナデ	ナデ	貝殻刺突文, 貝殻条痕文	
34	17	A29	II	3類	深鉢	○	○	○		良好	赤橙	赤橙	ナデ	ナデ	貝殻刺突文	羽状口縁
34	18	A28	II	3類	深鉢	○	○		○	良好	橙	にぶい橙	ナデ(貝)	ナデ(貝)		
34	19	A20	II	3類	深鉢	○	○		○	良好	橙	橙	ナデ(貝, ミガキ)	ナデ(貝, ミガキ)	貝殻刺突文,	羽状口縁
34	20	A21	II	3類	深鉢	○	○		○	良好	赤橙	赤橙	ナデ	ナデ	貝殻刺突文	
34	21	A29	II	3類	深鉢	○	○	○		良好	橙	灰赤	ナデ	ナデ	貝殻条痕文	
34	22	A29	II	3類	深鉢	○	○	○		良好	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	貝殻刺突文	
35	23	A29	II	3類	深鉢	○	○	○		良好	暗赤灰	赤橙	ナデ	ナデ	貝殻刺突文	
35	24	A30	II	3類	深鉢	○	○	○		良好	灰赤	にぶい橙	ナデ	ナデ		
35	25	A29	II	3類	深鉢	○	○	○		良好	赤橙	赤橙	ナデ	ナデ	貝殻刺突文	
35	26	A29	II	4類	深鉢	○	○	○		良好	赤褐色	赤褐色	ナデ, ミガキ	ナデ		羽状口縁
35	27	2T	II	4類	深鉢	○	○	○		良好	灰褐	赤褐	ナデ, ミガキ	ナデ	貝殻刺突文	羽状口縁
35	28	A21	II	4類	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	にぶい赤橙	ナデ	ナデ	沈線文, 貝殻刺突文	
35	29	A26	II	4類	深鉢	○	○		○	良好	にぶい赤橙	赤橙	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	貝殻刺突文, 貝殻条痕文	
35	30	A21	II	4類	深鉢	○	○		○	良好	暗赤褐	暗赤褐	ナデ	ナデ		
35	31	A29	II	4類	深鉢	○	○	○		良好	赤褐色	赤色	ナデ, ミガキ	ナデ	沈線文	
35	32	A21	II	4類	深鉢	○	○	○		良好	赤褐	赤褐	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	貝殻刺突文	
35	33	A21	II	4類	深鉢	○	○		○	良好	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ	条痕か	
35	34	A29	II	4類	深鉢	○	○	○		良好	赤橙	赤橙	ナデ(貝)	ナデ(貝)		羽状口縁
35	35	3T	II	5類	深鉢	○	○		○	良好	褐灰	にぶい橙	ナデ	ナデ		
35	36	3T	II	5類	深鉢	○	○		○	良好	にぶい赤褐	赤褐	ナデ	ナデ		羽状口縁
35	37	A20	II	6類	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	にぶい橙	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	沈線文7条	
35	38	B18	II	6類	深鉢	○	○	○		良好	橙	赤橙	ナデ	ナデ		
35	39	4T	II	6類	深鉢	○	○	○		良好	灰赤	にぶい赤褐	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	条痕文	
36	40	A24	II	7類	深鉢	○	○	○		良好	赤橙	灰赤	ナデ	ナデ	沈線文	
36	41	A21	II	7類	深鉢	○	○	○	○	良好	赤褐	にぶい赤褐	ミガキ	ミガキ	沈線文	
36	42	A29	II	7類	深鉢	○	○		○	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ミガキ	ミガキ	条痕文	
36	43	A21	II	8類	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	にぶい橙	ナデ	ナデ		羽状口縁
36	44	A19	II	8類	深鉢	○	○	○	○	良好	赤褐色	赤褐	ナデ, ミガキ	ナデ	爪型刺突文か	
36	45	A29	II	8類	深鉢	○	○	○		良好	赤灰	赤灰	ナデ	ナデ	貝殻条痕文	
36	46	A30	II	8類	深鉢	○	○	○		良好	橙	橙	ナデ	ナデ		
36	47	A20	II	8類	深鉢	○	○	○	○	良好	にぶい赤橙	赤	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ		
36	48	A20	II	8類	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	赤褐	ナデ(貝, ミガキ)	ナデ, ミガキ		
36	49	A21	II	9類	甜形	○	○		○	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		
36	50	A30	II	9類	甜形	○	○	○	○	良好	赤褐色	赤褐色	ナデ	ナデ		
36	51	A21	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	赤褐色	ナデ	ナデ		
36	52	3T	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	にぶい橙	ナデ	ナデ(貝)		
36	53	A21	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	赤褐色	赤褐色	ナデ(貝)	ナデ(貝)		
36	54	A-9	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	赤褐色	ナデ(貝)	ナデ(貝)		
36	55	A21	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ		
36	56	A20	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		
36	57	A29	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	橙	にぶい橙	ナデ(貝か)	ナデ		
36	58	4T	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	灰赤	にぶい橙	ナデ(貝)	ナデ		
36	59	A29	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	灰赤	赤褐	ナデ	ナデ		
36	60	A20	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	赤灰	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		
36	61	A21	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	暗赤灰	褐灰	ナデ(貝)	ナデ		
36	62	A21	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		
37	63	A30	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ(貝)	ナデ		
37	64	A29	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	赤橙	ナデ	ナデ		
37	65	A19	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	橙	橙	ナデ	ナデ		
37	66	A19	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	暗赤灰	橙	ナデ(貝)	ナデ(貝)		

第8表 有鹿野遺跡 遺物観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	層	分類	器種	胎 土				焼成	色 調		調 整		文 様	備 考
						石英	長石	角閃石	雲母		内	外	外壁面	内壁面		
37	67	4T	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	赤褐	赤褐	ナデ(貝)	ナデ(貝)		
37	68	2T	II	胴部	深鉢	○	○	○	○	良好	灰赤	灰赤	ナデ	ナデ		
37	69	2T	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	灰赤	赤褐	ナデ, ミガキ	ナデ		
37	70	2T	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	灰褐	灰褐	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ		
37	71	A29	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	赤	ナデ	ナデ		
37	72	2T	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	にぶい橙	灰褐	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ		
37	73	A29	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	灰赤	赤褐	ミガキ	ミガキ		
37	74	A20	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	赤褐	赤	ナデ	ナデ		
37	75	4T	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	明赤褐	ナデ(貝), ミガキ	ナデ(貝), ミガキ		
37	76	A29	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	赤橙	赤橙	ナデ	ナデ		
37	77	A19	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	赤灰	灰赤	ナデ(貝)	ナデ		
37	78	A29	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	赤橙	ミガキ	ナデ		
37	79	4T	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	赤褐	橙	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ		
37	80	A32	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	にぶい赤橙	にぶい赤橙	ナデ(貝), ミガキ	ナデ		
37	81	A19	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	灰褐色	灰褐色	ナデ(貝)	ナデ(貝)		
37	82	A21	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ(貝)		
37	83	A19	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	暗赤灰	暗赤灰	ナデ(貝)	ナデ(貝)		
37	84	A19	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		
37	85	A21	II	胴部	深鉢	○	○	○		良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ(貝)	ナデ		
37	86	A21	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	橙	ナデ	ナデ		
37	87	A19	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	赤褐色	橙	ナデ	ナデ		
37	88	A29	II	胴部	深鉢	○	○		○	良好	灰赤	橙	ナデ	ナデ		
38	89	A19	II	底部	深鉢	○	○		○	良好	橙	橙	ナデ	ナデ		
38	90	A29	II	底部	深鉢	○	○	○		良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ	底部に木の繊維痕か	
38	91	A29	II	底部	深鉢	○	○	○		良好	明赤褐	赤褐	ナデ	ナデ		
38	92	A29	II	底部	深鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		
38	93	A29	II	底部	深鉢	○	○	○		良好	橙	橙	ナデ	ナデ		
38	94	A19	II	底部	深鉢	○	○	○		良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		
38	95	4T	II	青磁	碗	-	-	-		精緻			ロクロ調整			

有鹿野遺跡 石器観察表 (小型石器・石斧)

挿図 番号	遺物 番号	出土区	器 種	層	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (kg)	製作方法		備 考
										打製	磨製	
39	3	A33	剥片石器	II	硅質頁岩	4.5	4.5	1.5	0.024			
39	4	B9	剥片石器	II	砂岩	7.5	4.9	2.4	0.046			
39	5	A30	剥片石器	II	砂岩	8.9	5.8	1.9	0.093			
39	6	A29	剥片石器	II	砂岩	6.3	5.4	2.4	0.054			
39	7	A18	剥片石器	II	砂岩	7.8	4.65	2.85	0.087			
39	8	A19	剥片石器	II	ホルンフェルス	8.15	5.5	1.75	0.061			
39	9	A20	剥片石器	II	砂岩	12.7	6.1	2.8	0.215			
39	10	A28	剥片石器	II	砂岩	11.5	7.55	3.15	0.19			
39	11	A20	剥片石器	II	砂岩	10.7	7.5	3.9	0.313			
39	12	A21	剥片石器	II	砂岩	11.7	3.05	1.9	0.064			
39	13	A21	微細剥離痕	II	砂岩	9.2	5.2	2.2	0.072			
39	14	4 T	微細剥離痕	II	砂岩	7.5	4.55	1.6	0.053			
39	15	A20	微細剥離痕	II	砂岩	10.35	5.9	3.6	0.163			
39	16	A30	石核	II	水晶	1.7	1.4	1.4	0.005			小型石核
39	17	4 T	石核	II	砂岩	12.7	11.8	4.7	0.729			石皿の転用品か
40	18	4 T	石核	II	砂岩	12	11.9	3.4	0.545			石皿の転用品か
40	19	A-20,21	石斧	表採	ホルンフェルス	6.65	4	1.4	0.045		○	
40	20	A-20	石斧	II	ホルンフェルス	14.1	5.7	3.75	0.342		○	
40	21	表採	石斧	II	砂岩	14.2	4.3	1.2	0.088	○		
40	22	表採	石斧	II	砂岩	9.2	3.85	1.3	0.048		○	
40	23	表採	石斧	II	頁岩	11.7	5.0	2.2	0.162		○	
40	24	表採	石斧	II	頁岩	10.2	5.1	1.05	0.067	○		
40	25	表採	くさび型石器	II	頁岩	10.9	3.45	2.7	0.175			磨製石斧を転用
40	26	A29	土掘り具	II		8.9	4.9	1.7	0.07			使用による磨滅著しい
40	27	A29	石鏃	II	頁岩	1.95	1.2	0.15	0.4(g)		○	
40	28	2T	棒状石器	II	頁岩	1.6	0.6	0.45	0.6(g)		○	
41	29	4 T	ハンマー	II	砂岩	10.2	5.5	3.45	0.281	○		
41	30	A-20	礫器	II	砂岩	10.8	10.6	6.25	0.467			
41	31	2T	フレーク	II	砂岩	2.0	1.7	0.2	0.0008			
41	32	4 T	フレーク	II	砂岩	8.1	6.3	2.3	0.921			
41	33	4 T	フレーク	II	砂岩	9.6	6.2	3.2	0.161			
41	34	一括	フレーク	II	砂岩	8.2	4.6	1.4	0.062			

第9表 有鹿野遺跡 遺物観察表(3)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	類形	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(kg)	断面形状	使用面数			備考
											磨	敲	凹	
31	1	溝状遺構3	II	II類	砂岩	7.5	5.85	4.5	0.27	楕円				溝状遺構3
31	2	溝状遺構3	II	IV類	砂岩	11	8.1	4.1	0.554	楕円	3	3		
41	35	4T	II	I類	砂岩	7.9	5.35	4.9	0.152	不定型	1			筋状の磨痕あり
41	36	4T	II	I類	砂岩	5.15	4.6	3.2	0.062	不定型	2			筋状の磨痕あり
41	37	A29	II	I類	硬質砂岩	7.9	4.6	2	0.124	楕円	1			
41	38	A21	II	I類	砂岩	9	4.75	3.25	0.208	楕円	1			
41	39	A21	II	I類	砂岩	9.8	5.5	4.2	0.324	楕円	2			
41	40	A21	II	I類	砂岩	10.7	7.4	4.6	0.509	楕円	1			
41	41	A21	II	I類	砂岩	8.3	6.5	3.3	0.256	楕円	1			
42	42	A20	II	I類	砂岩	8.5	7.65	3.2	0.318	楕円	1			
42	43	A20	II	I類	砂岩	(7.25)	7.95	3.05	0.302	楕円	1			
42	44	A20	II	I類	砂岩	20.1	7.9	4	0.97	楕円	1			
42	45	4T	II	I類	砂岩	13.5	10.6	4.9	0.982	楕円	1			剥離痕あり
42	46	B17	II	I類	砂岩	13	8.7	3.7	0.783	楕円	2			
42	47	A21	II	II類	砂岩	9.7	8.8	4.2	0.469	楕円	1			
42	48	A18	II	II類	砂岩	10.15	8.9	5.2	0.66	楕円		3		
42	49	A31	II	II類	砂岩	13.25	11.3	5.7	1.12	楕円		3		
43	50	A20	II	II類	砂岩	14.2	9.2	6.55	1.35	楕円		4		
43	51	A20	II	II類	砂岩	6.4	4.7	2.15	0.094	楕円		2		
43	52	A19	II	II類	砂岩	7.4	6.1	3.5	0.221	楕円		5		
43	53	A20	II	II類	砂岩	12.7	9.5	5.6	1.02	楕円		4		
43	54	A29	II	II類	砂岩	11.2	8.85	4.9	0.705	楕円		3		
43	55	A28	II	II類	砂岩	8.1	6.5	3.45	0.258	楕円		3		
43	56	4T	II	II類	砂岩	9.3	5.4	4.1	0.231	楕円		2		
43	57	2T	II	II類	砂岩	11.1	5.15	3.55	0.31	楕円		3		
44	58	4T	II	II類	砂岩	9.85	4.4	2.5	0.169	三角		1		
44	59	A21	II	II類	砂岩	10.4	6.1	2	0.161	不定形		4		
44	60	A18	II	III類	砂岩	12.3	10.3	7	1.24	楕円			5	
44	61	2T	II	III類	砂岩	9.5	4.85	2.75	0.189	楕円			3	
44	62	表採	II	III類	花崗岩	9.8	6.1	4.1	0.35	楕円			3	
44	63	A21	II	III類	砂岩	7.9	5.7	4.7	0.299	楕円			2	
44	64	A26	II	III類	砂岩	7.05	5.85	5.15	0.224	楕円			2	
44	65	B17	II	III類	砂岩	9.2	5.65	3.15	0.235	楕円			3	
45	66	A30	II	III類	砂岩	8.8	5.7	4.15	0.311	楕円			2	
45	67	A20	II	IV類	砂岩	9	8.65	5.3	0.456	楕円	2	2		筋状の磨痕あり
45	68	表採	II	IV類	花崗岩	11.2	9.15	5.95	0.938	楕円	2	外周		
45	69	A29	II	IV類	砂岩	7.95	5.7	3.1	0.205	楕円	1	3		
45	70	A21	II	IV類	砂岩	8.7	6.1	3.1	0.23	楕円	1	3		
45	71	A20	II	IV類	砂岩	12.35	11.15	6	1.07	楕円	2	3		剥離痕あり
45	72	4T	II	IV類	砂岩	9.4	5.4	3.15	0.231	楕円	1	5		
45	73	A20	II	IV類	砂岩	8.9	7.2	3.2	0.26	楕円	1	4		剥離痕あり
46	74	A29	II	IV類	砂岩	10.2	8.5	4.2	0.52	楕円	1	4		
46	75	A29	II	IV類	砂岩	6.8	5.4	4.1	0.184	楕円	2	4		
46	76	2T	II	IV類	砂岩	12.65	9.5	4.4	0.787	楕円	2	4		
46	77	B18	II	IV類	砂岩	9.35	5.6	2.9	0.231	楕円	1	3		
46	78	A21	II	IV類	砂岩	17.8	12.95	6.45	2.18	楕円	1	2		
46	79	A29	II	IV類	砂岩	8.6	5.05	4.15	0.258	楕円	1	1		
46	80	B8	II	IV類	砂岩	9.65	6.2	2.35	0.2	棒状	1	3		
46	81	4T	II	IV類	砂岩	8.3	7.55	3.2	0.264	不定形	1	2		剥離痕あり
47	82	A20	II	V類	砂岩	10.4	8.6	4.1	0.537	楕円	1		1	
47	83	A28	II	V類	砂岩	9.7	6.65	4.1	0.374	楕円	2		6	
47	84	A30	III	VI類	砂岩	9.55	9.1	4.8	0.596	楕円		1	1	
47	85	2T	II	VI類	砂岩	8.3	5.9	3.3	0.244	楕円		1	1	
47	86	A29	III	VI類	砂岩	10.75	8.9	5.7	0.768	楕円		2	2	
47	87	B17	II	VI類	砂岩	9.3	5.6	3.9	0.299	楕円		3	1	
47	88	表採	II	VI類	砂岩	6.8	6.4	3.3	0.215	楕円		2	2	
47	89	A28	II	VI類	砂岩	10.05	7.9	4.25	0.495	楕円		1	1	
48	90	A26	II	VI類	砂岩	9.3	6.95	3.6	0.35	楕円		1	2	
48	91	A24	II	VII類	花崗岩	10.7	9.5	3.35	0.51	棒状	2	2	1	
48	92	A21	II	VII類	石英斑岩	8.25	6.75	4.45	0.3	楕円	1	1	1	
48	93	A20	II	VII類	花崗岩	10.85	6.1	3.35	0.325	楕円	1	2	2	
48	94	A28	II	VII類	石英斑岩	9.9	6.7	3.15	0.29	楕円	2	外周	2	
48	95	A20	II	VII類	砂岩	9.3	6.1	4.2	0.35	楕円	2	3	2	
48	96	A28	II	VII類	砂岩	9.9	7.15	4.6	0.464	楕円	1	2	1	
48	97	A31	II	VII類	砂岩	10	5.1	3.2	0.245	楕円	1	1	1	

有鹿野遺跡 石器観察表(石皿)

挿図番号	遺物番号	出土区	層	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(kg)	円磔	角磔	使用面		備考
											磨痕	打痕	
49	98	A19	II	砂岩	11.55	9.4	4.3	0.626	○		2		剥離痕あり
49	99	A19	II	砂岩	19.8	9.44	7	2.47	○		1	1	
49	100	A29	II	砂岩	27.7	19.7	5.9	4.71	○		1	1	
49	101	A29	II	砂岩	13.4	12.4	7.3	1.64	○		1	1	
50	102	A20	II	硬質砂岩	22.2	15.5	8.7	4.21	○		1		
50	103	A21	II	砂岩	12.1	8.7	5.4	0.971	○		1		

第5節 まとめ

1. 遺構について

有鹿野遺跡では溝状遺構25条、ピット14基を検出した。今回の調査は農道の舗装事業に伴う調査であったため調査幅が約3.5mと狭く、溝状遺構の広がりや新旧関係、ピットとの関係などについては判別するに至らなかった。なお、溝状遺構3, 5は北北東—南南西方向に直線状に走る溝状遺構で、深さはほとんどないが埋土は非常に固くしまることから、当時の道跡である可能性も考えられる。

6トレンチでは、種Ⅳ火山灰と種Ⅲ火山灰の間層であるⅨ層で、大量の炭化物を確認している。また、Ⅸ層の石片の中には、31のようにフレークである可能性のある剥片も確認されている。今回、本調査で旧石器時代までの調査は行わなかったが、東海岸の海岸段丘では島間の横峯遺跡といった類例もあり、旧石器時代の遺跡が存在する可能性はあると考えられる。

○ 噴礫現象について

有鹿野遺跡では、B-8～10区の砂質土範囲を除き、調査区全体でこぶし小～大の砂岩礫が集中して検出される箇所が所々みられた。これらは噴礫とよばれるもので、「6.5kaBPに鬼界カルデラで発生したアカホヤ噴火に伴った地震の痕跡」(成尾・小林 2002)と考えられている。こうした現象は、「震度5以上の地震で沖積低地の砂礫層が液状化し、上位の地層を貫いて噴き出した通路の痕跡」(寒川 1990)で、鹿児島県本土では軽石混じりのシルトや砂による噴砂脈が一般的であるが、種子島や屋久島では風化した砂岩礫による噴礫脈である。

種子島では、海岸段丘の発達する東海岸側でみられ、南種子町島間の露頭でも確認されている。有鹿野遺跡は海岸線から約400m内陸の海岸段丘上に位置する遺跡であるため、広範囲にわたり噴礫現象がみられた。5, 6トレンチの土層断面から、噴礫はⅩ層よりさらに深い地層から吹きあげ、Ⅱ層直下で平面的に広がっていることがわかる。

2. 土器について

有鹿野遺跡で出土した土器は、1類が松山式、2類が市来式、3類が丸尾式、4類は丸尾式土器に類似しており、その系譜上に位置付けられるもの、5類は一湊式、6類は納曽式、7類は納曽式に類似し、その系譜上に位置付けられるものにそれぞれ該当するものと考えられる。

今回出土した土器は、市来式、丸尾式、納曽式などが主体であったが、形式的には松山式～納曽式まで一様に出土しており、この時期の種子島の土器形式の資料となる。特に、今回形式として分類できなかった4類は、器形は丸尾式同様に「く」字状を呈するが貝殻刺突文を鋸歯状に施すものや口唇部に施文するもののほか、口縁部が内湾し器形は納曽式に類似するが貝殻刺突文で文様を施すものなどもみられ、土器の形式の変遷を考える際の資料となる。

3. 石器について

今回出土した石器は、小型石器、磨石・敲石、石皿に大別される。出土石器の大半は磨石・敲石であった。小型石器では、スクレーパーや微細剥離痕のある石器が出土しているが、剥片端部を調整して刃部を形成する簡易なものである。剥片石器に使われている剥片が平坦面を持つ原石を使用していること、

石皿から剥片を剥いだと思われる大型石核が出土していることから、石皿から剥片石器へと二次転用し、素材の石材を有効に使っていたことがうかがえる。

使用している石材は、剥片石器や石鏃などに頁岩、石斧にホルンフェルスや粘板岩など用途により石材が違うものもあるが、砂岩を主体とする。磨石・敲石も砂岩の円礫を主に用いているが、若干、花崗岩や石英斑岩も含まれている。花崗岩は現時点では種子島にはないと考えられており、海を挟んだ屋久島に多くみられる石材である。

砂岩製の石器が多いこと、磨石・敲石などが多いこと、石皿などの大型礫から剥離した剥片で製作した簡易な石器を使用していることなどは、種子島でみられる縄文時代後期の石器組成の傾向に準じるものであるといえる。

4. 小結

今回は、遺構としては溝状遺構とピットのみの検出であったが、埋土が硬くしまり直線状の道跡の可能性のある溝状遺構を確認したこと、遺物が多く出土したこと、遺跡が海へと緩やかに傾斜する台地の先端部に位置することなどから、今回の調査区域は遺跡の端部であり、中心部はさらに内陸部に存在すると想定される。

南種子町の縄文時代後期を代表する遺跡に藤平小田遺跡がある。大型の礫を二重に配置した配石遺構をもつ、祭祀の様相の強い遺跡である。遺物の出土量も多くその種類も多岐にわたるが、様々な形式の土器をもつこと、砂岩製の磨石、敲石、石皿が多いこと、簡易な剥片石器を使用していることなど有鹿野遺跡と共通する点も多い。時期も市来式土器を中心としており、ほぼ同時期の遺跡である。種子島では、縄文時代後期は列島の文化の影響を強く受けつつも一湊式土器や納曾式土器といった大隅諸島を中心とした土器形式がみられ、列島とは異なる様相がみられる。有鹿野遺跡も多岐にわたる遺物が出土しており、縄文時代後期の様相を知る上で良好な資料となりうる。

また、露頭で噴礫の断面はこれまでも確認されていたが、平面でその広がりや噴出状況を確認できたことや、噴出が縄文時代後期の包含層直下までであったことなど、噴礫現象の詳細を今回の調査で、噴礫の状況が良好に確認できたことは、種子島の地質を考える上で大きな成果であったといえよう。

主要参考文献

成尾英二・小林哲夫 2002 「鬼界カルデラ、6.5kaBP噴火に誘発された2度の巨大地震」

『第四紀研究41』

堂込秀人、黒川忠広ほか 2002 「藤平小田遺跡」南種子町教育委員会

前迫亮一 2006 「5 後期」『先史・古代の鹿児島通史編』鹿児島県教育委員会pp.185～201

第Ⅶ章 下鹿野遺跡

第1節 調査の概要・方法

下鹿野遺跡は、国道58号線と西之表南種子線とをつなぐ牛郷池之上線上に位置する。この国道58号線は鹿児島市内から沖縄までをつなぐ唯一の国道である。南種子町の中心部上中から北西方向に直線距離約22km、標高70m前後の台地上にあり、北西方向へと突き出した舌状台地の先端近くに立地し、この台地から先は急な傾斜となり海岸へと臨む。

下鹿野遺跡は平成12年度に分布調査、平成16年度に確認調査、平成18年度に本調査を実施した。確認調査は平成16年5月18日～16年5月31日まで実働8日間、本調査は平成18年5月8日～7月10日まで実働30日間実施した。

調査面積は確認調査が50.02m²、本調査が176.11m²である。

なお、平成17年度に西之表南種子線を挟み約800m西側に位置する下鹿野遺跡B地点の確認調査を行っており、現在の耕作土であるI層から土器・石斧等数点が出土したが、包含層は残存しないことを確認した。

1. 確認調査

下鹿野遺跡は非常に広範囲にわたる遺跡で、平成12年度に分布調査を実施し、縄文・古代・中世の遺跡として周知されている。

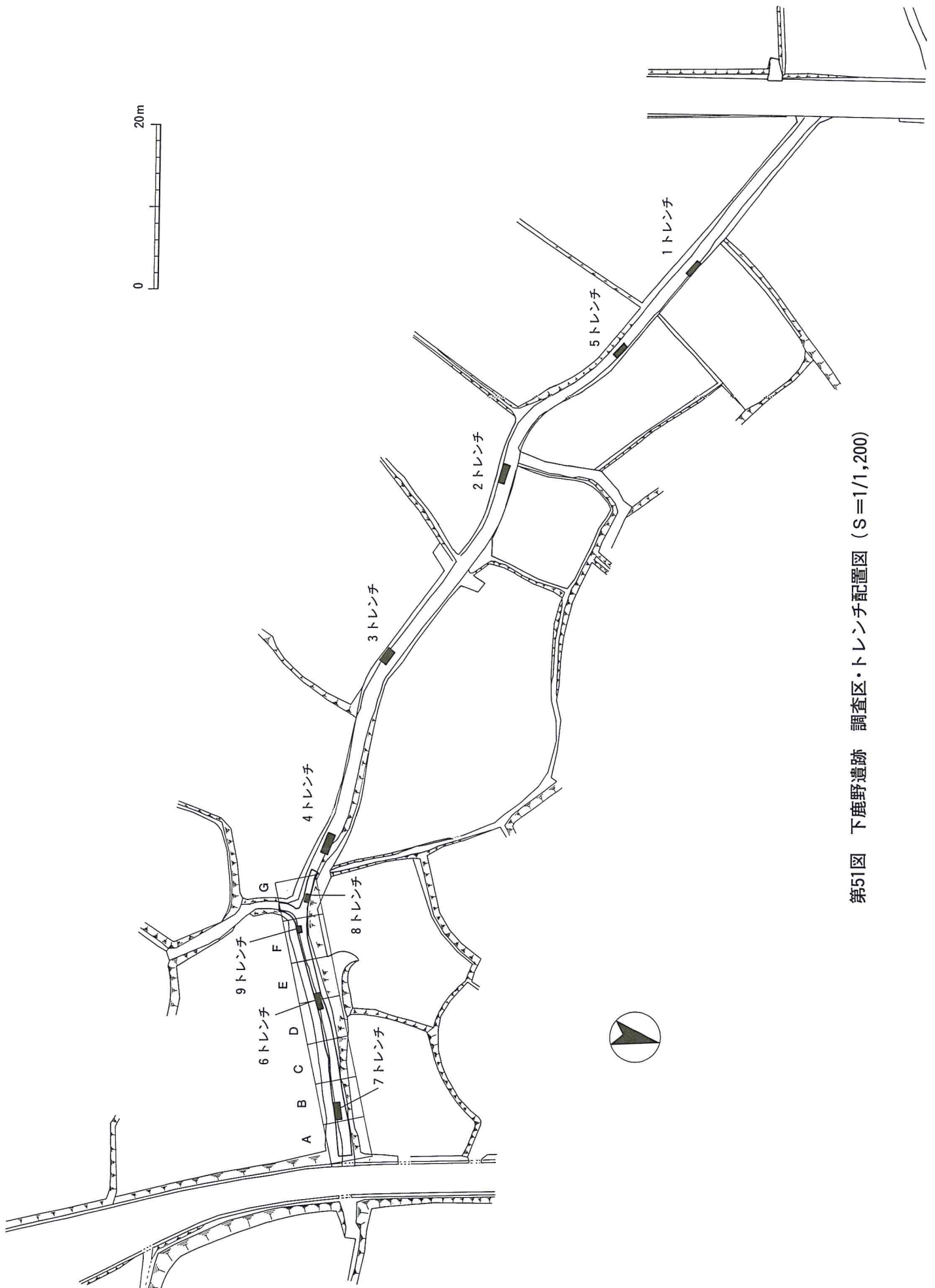
トレンチは2m×4mを基本とし、分布調査の結果を基に、施工区域内を中心に当初7本設定し、調査中2本追加し、合計9本トレンチを設定し調査を行った。今回の事業は農道の舗装整備である。そのため、道路を封鎖して調査を行う必要があるが、全長約300mと長距離に渡るため、前半で西側1～3、5トレンチを、後半で東側4、6～9トレンチの調査を行った。なお、調査時は土地の買収が未了であったため、地権者に出土品を町教育委員会に帰属することの了承及び耕作者に道路の一時封鎖の同意を得て調査を行った。

調査の結果、6～9トレンチで縄文時代後期の包含層を、2トレンチで後期旧石器時代のⅦ層でフレクの可能性のある砂岩製石片を確認している。なお、有鹿野遺跡ほど顕著ではなかったが、下鹿野遺跡でも同様にアカホヤ直上で噴礫を確認した。

2. 本調査

確認調査の結果をもとに、国道沿いの北東側に遺跡が残存することが明らかとなったため、平成18年度本調査を実施した。

計画路線の中心線を基準に10m×10mのグリッドを設定し、北東側からA～G区とした。調査にあたっては、耕作土を重機で剥ぎ取り、遺物包含層は作業員により慎重に掘り下げた。調査の際には、確認調査同様、耕作者の同意を得て農道を通行止めにした。また、該当範囲には畑の防風対策のため樹木の植えられた土手がかかるところがあり、チェーンソー等を使用して樹木の伐採を行った。調査終了後は、重機により土を埋め戻した後、軟岩砂利を敷設した。



第51図 下鹿野遺跡 調査区・トレンチ配置図 (S=1/1,200)

第2節 層位

調査区域内で若干の違いはあるが、標準土層は下記のとおりである。

- I a 層：表土 道路造成の際の攪乱層と思われる
- I b 層：表土 構造改善に伴う攪乱層と思われる
- II a 層：黒褐色土
- II b 層：暗褐色土 遺物包含層（縄文時代後期）
- III 層：明褐色土 アカホヤ二次堆積

第3節 下鹿野遺跡の遺構

遺構は集石1基、溝状遺構4条を検出した。

1. 集石

確認調査時にIII層アカホヤ上面で検出し、掘り下げは本調査で行った。長径約1.6m、短径約1.25m、深さ約60cmで、南北方向にやや楕円形を呈する。

確認調査時、集石中央部は直径50cmほど石がなかったため環状集石かと思われたが、掘り下げたところ、中央部上面はレンズ状にくぼんでおりII b層が残る形であったことが分かった。掘り込みが深いため石の重みで中央部がくぼんだか、あるいは集石周辺に礫が散在していることから上面の礫を取り除いたかのいずれかであろう。

集石はこぶし大程の砂岩角礫で構成され、若干円礫も混じる。礫の大半は程度の違いはあるが、一様に熱による赤化や破碎がみられ、埋土中からは1～2cm程度の大きめの炭化物や焦土がブロック状に混じる。この炭化物を元に行った放射性炭素年代測定の結果、補正年代（BP）は、No11が $4,379 \pm 193$ 、No12が $4,088 \pm 90$ 、No13が $4,302 \pm 119$ であった。放射性炭素年代測定の結果からも、集石は縄文時代後期の範疇であると考えられる。

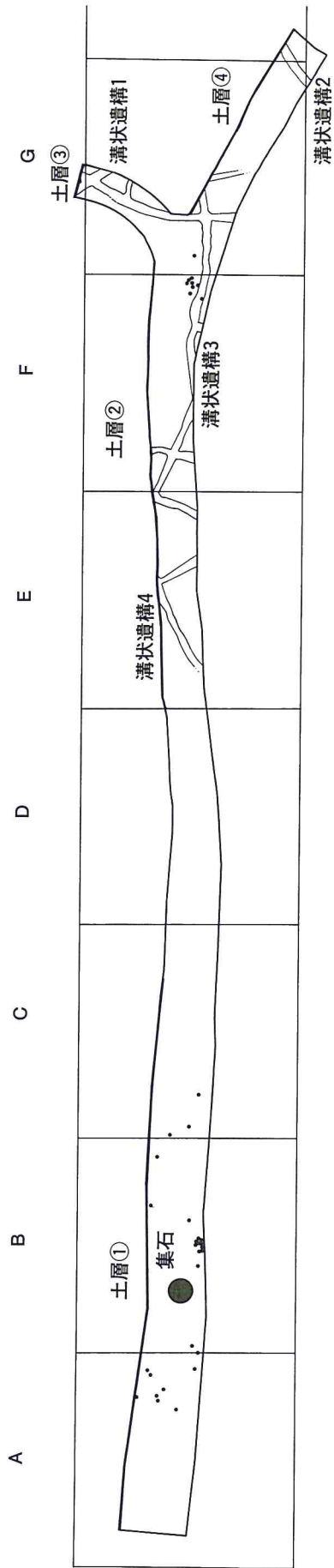
また、集石底部から30～40cmほどの礫が中央部に1点、それを取り巻くように周辺に4点出土した。出土状況から人為的に配置したものと考えられる。礫の上面は被熱により赤化している。

遺物は、土器の小片が数点出土したのみである。なお、調査時に西平式土器と思われる磨消縄文のみられる土器が出土したが、調査中紛失してしまった。

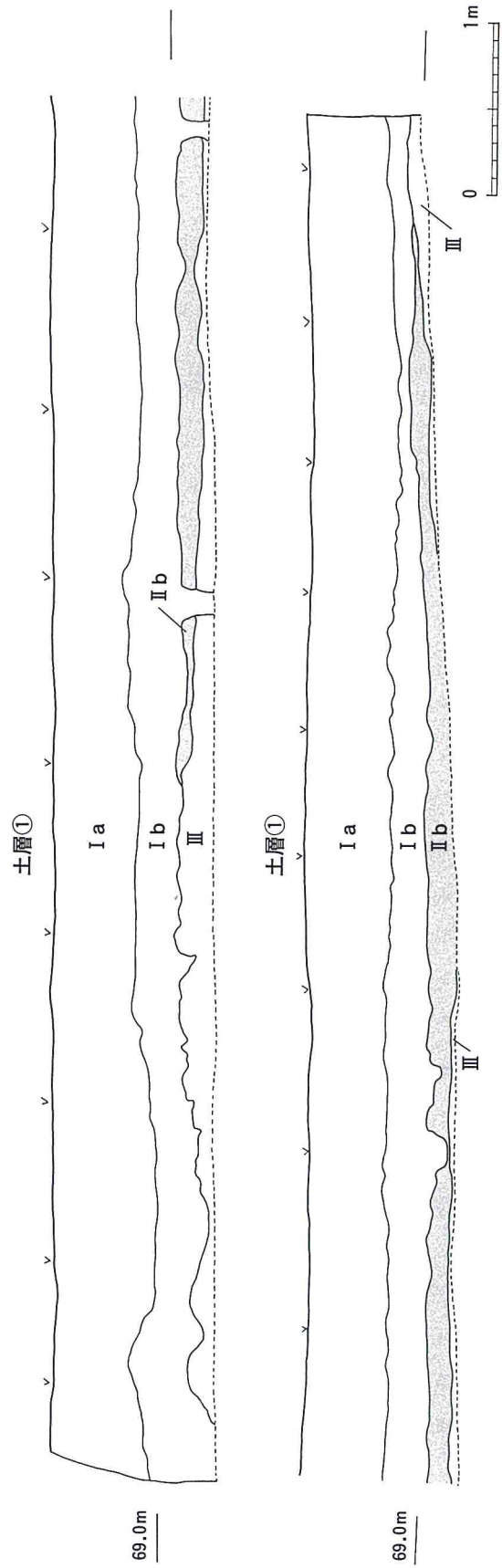
2. 溝状遺構

E～G区で溝状遺構を4条検出した。断面C-C'をみると、溝状遺構1を溝状遺構3が切っていることから、溝状遺構3の方が新しい。

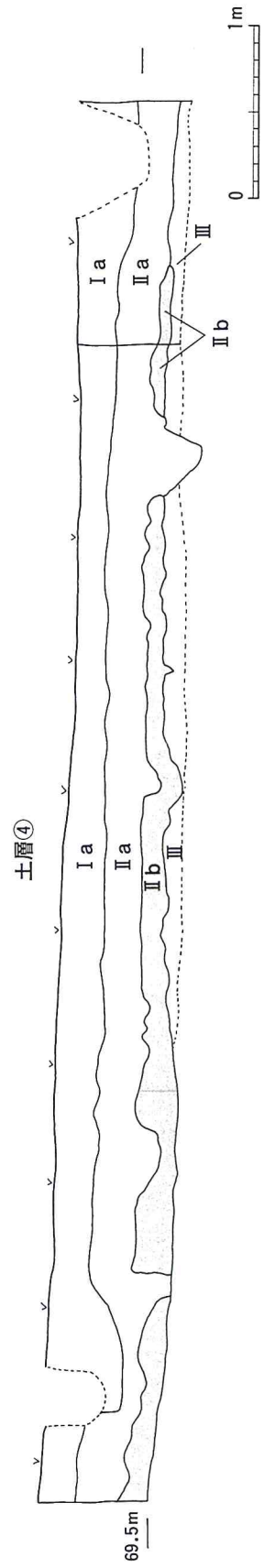
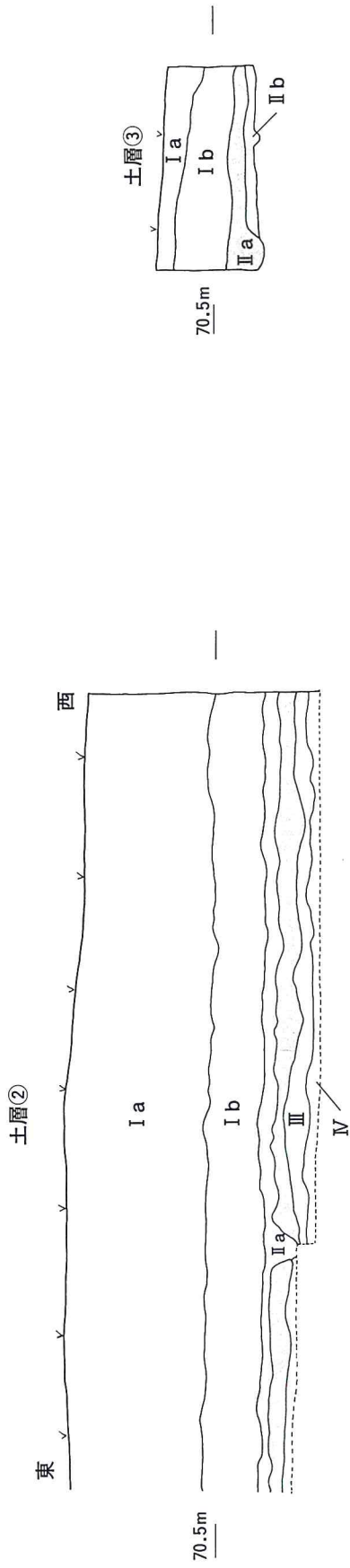
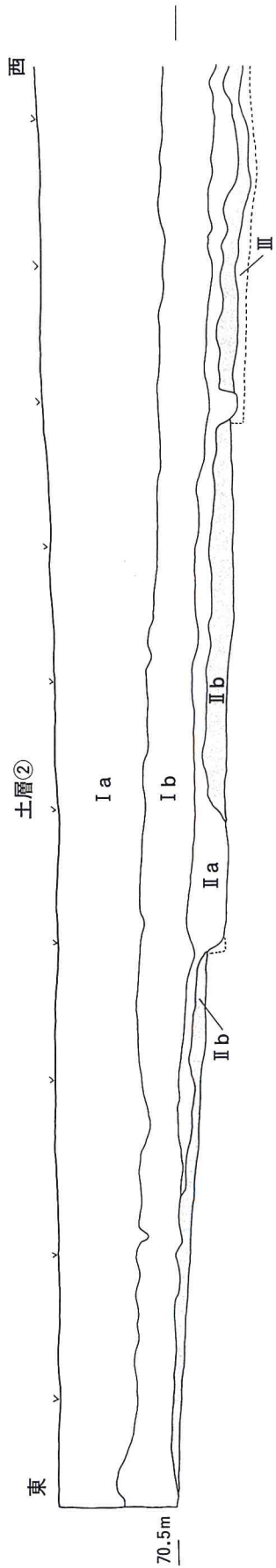
溝状遺構1より数点土器の小片が出土している。



第52図 下鹿野遺跡 遺構・遺物検出状況

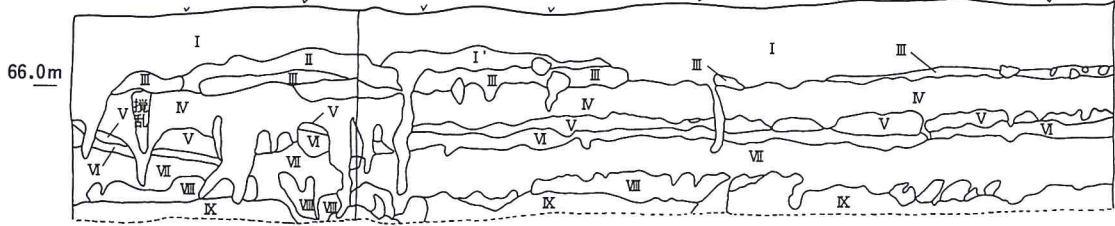


第53図 下鹿野遺跡 土層(1)

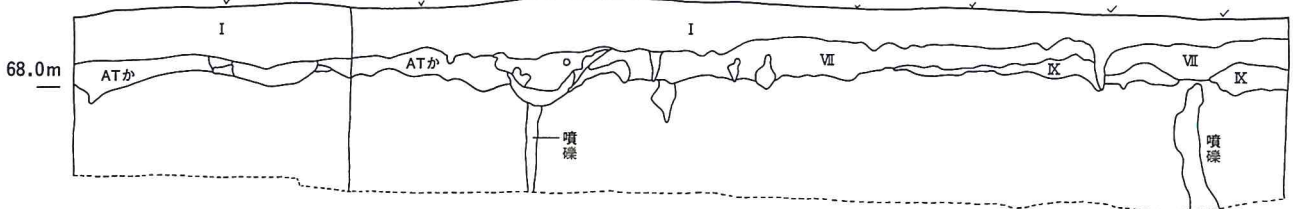


第54図 下鹿野遺跡 土層(2)

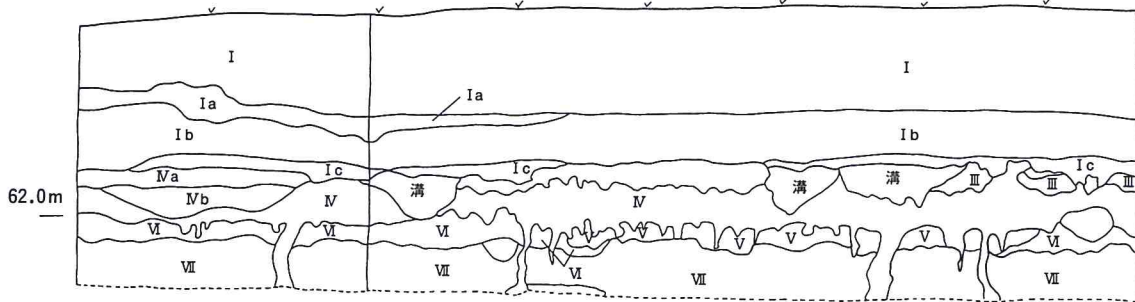
1 トレンチ



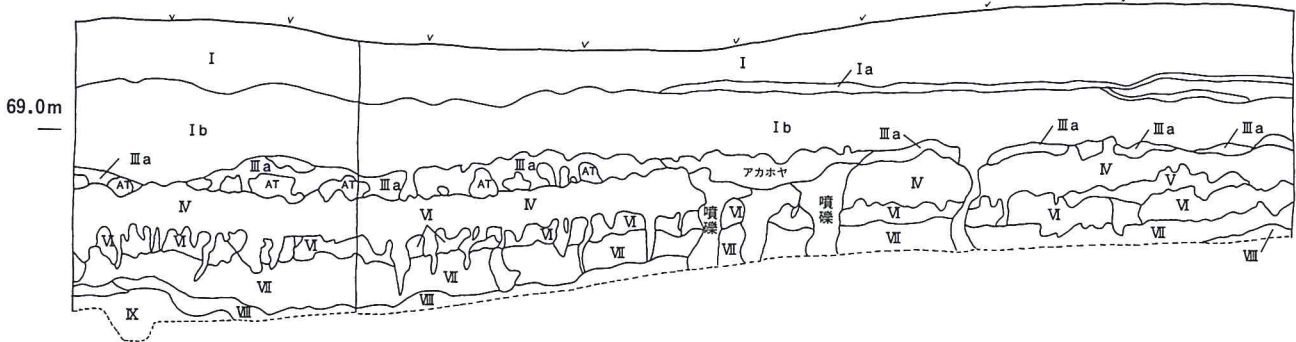
2 トレンチ



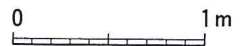
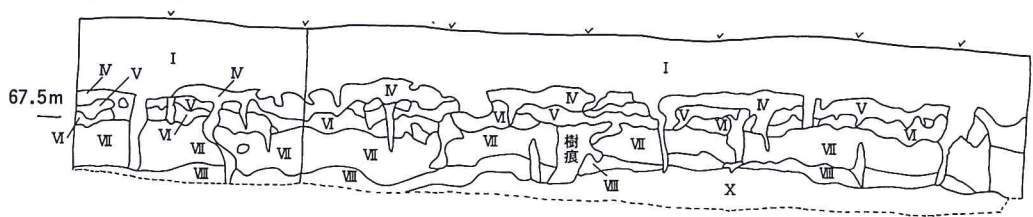
3 トレンチ



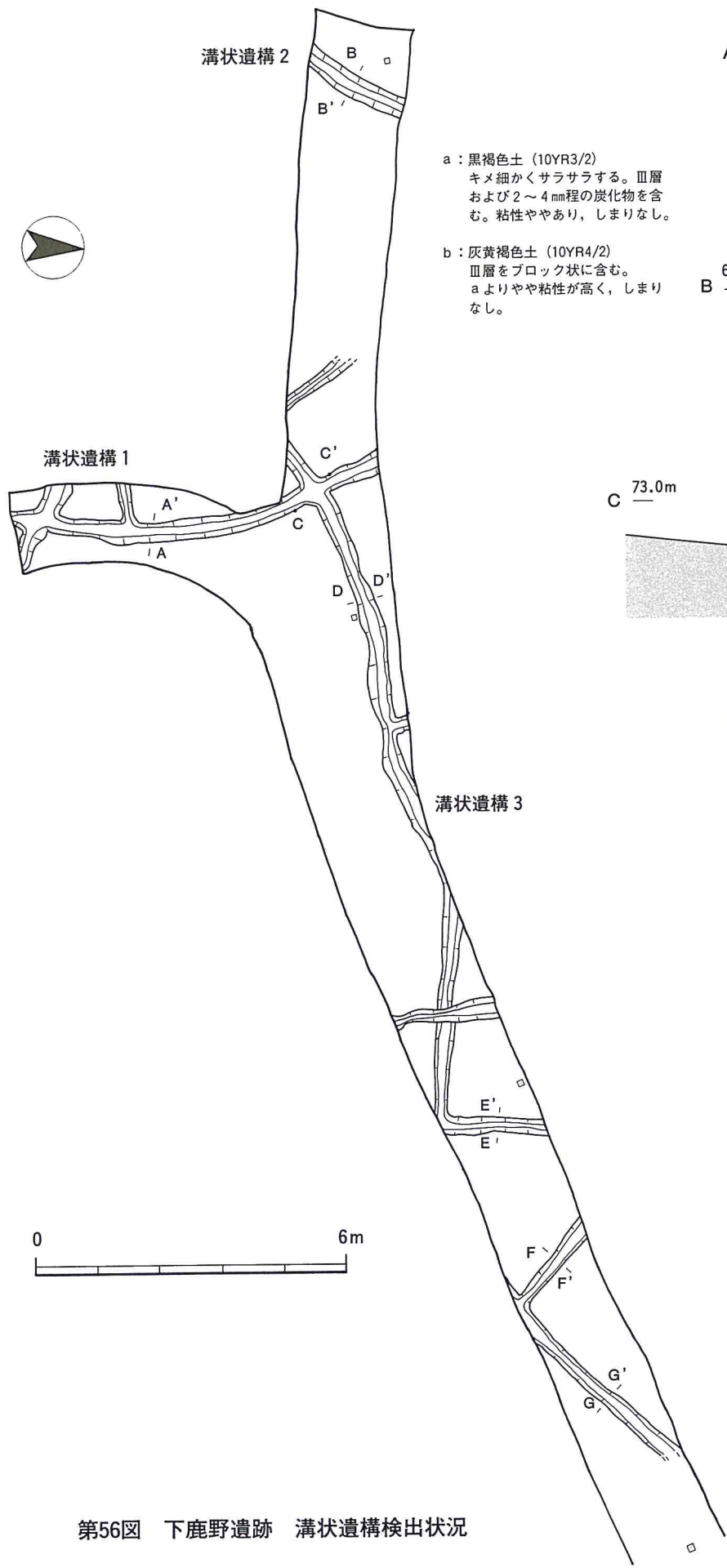
4 トレンチ



5 トレンチ

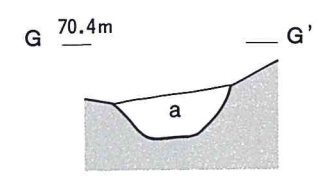
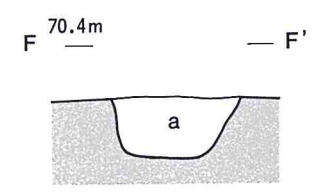
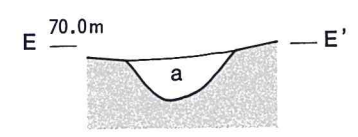
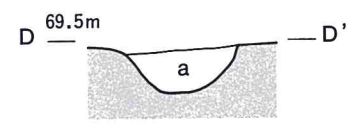
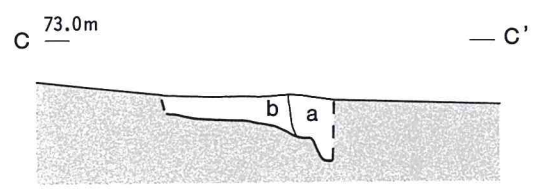
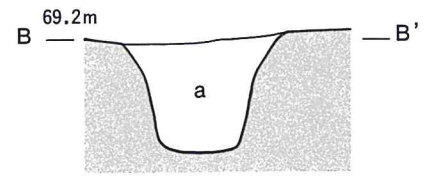
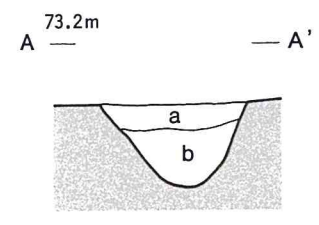


第55図 下鹿野遺跡 確認トレンチ土層

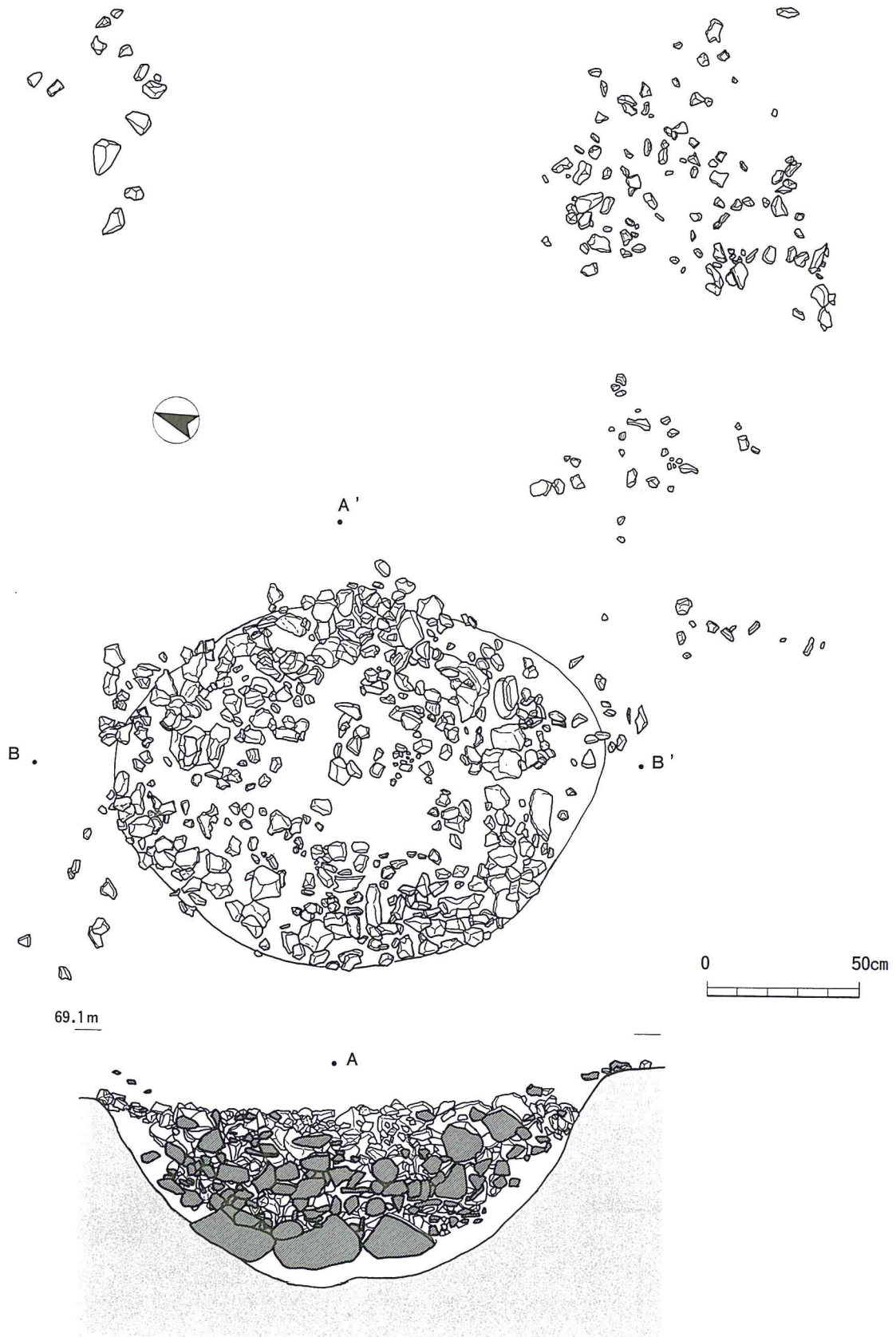


a : 黒褐色土 (10YR3/2)
 キメ細かくサラサラする。Ⅲ層
 および 2~4 mm程の炭化物を含
 む。粘性ややあり、しまりなし。

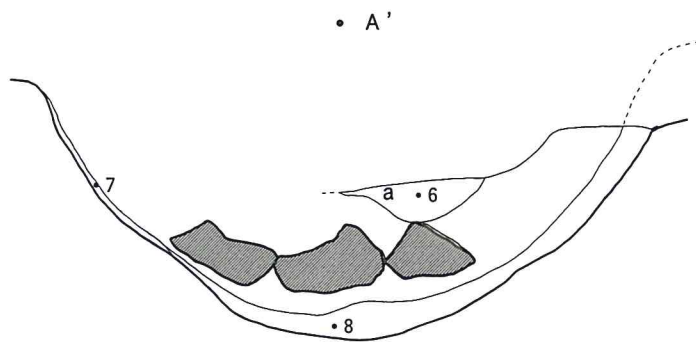
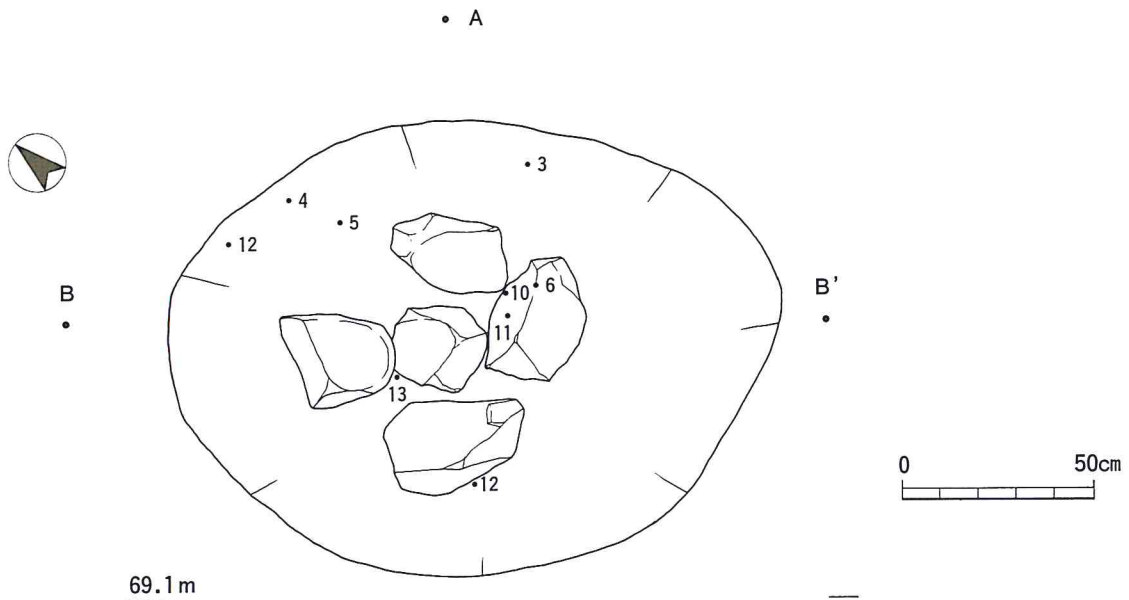
b : 灰黄褐色土 (10YR4/2)
 Ⅲ層をブロック状に含む。
 a よりやや粘性が高く、しまり
 なし。



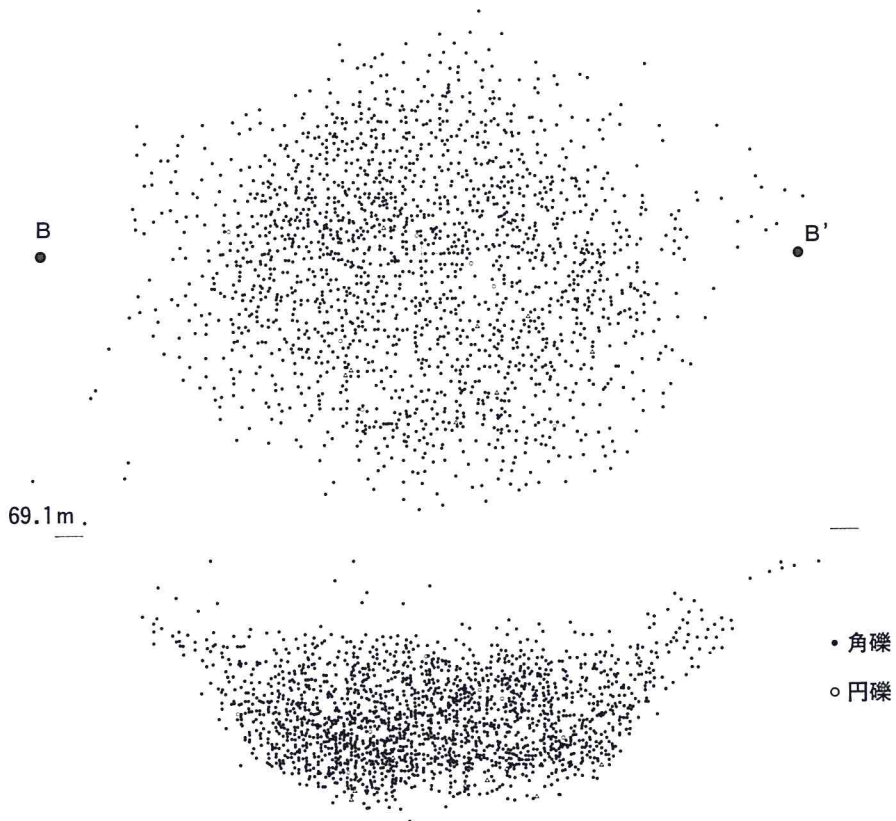
第56図 下鹿野遺跡 溝状遺構検出状況



第57図 下鹿野遺跡 集石(1)



• 炭化物サンプリング箇所
 a層：明黄褐色粘質土
 キメ細かく1mm程の焼土・炭化物ブロックをやや含む。しまりあり粘性高い。



第58図 下鹿野遺跡 集石(2)

第4節 下鹿野遺跡の遺物

下鹿野遺跡の出土遺物はすべてⅡb層から出土し、量は少量であった。特に土器は小片が多く、時代を特定するのが困難であった。遺物は平板を用いて取り上げを行った。

遺物は集石周辺のA～C区、溝状遺構周辺のF～G区で出土している。D区は包含層が畑の造成により削平されていたため残存していなかったが、概ね遺構周辺のみでの出土であった。

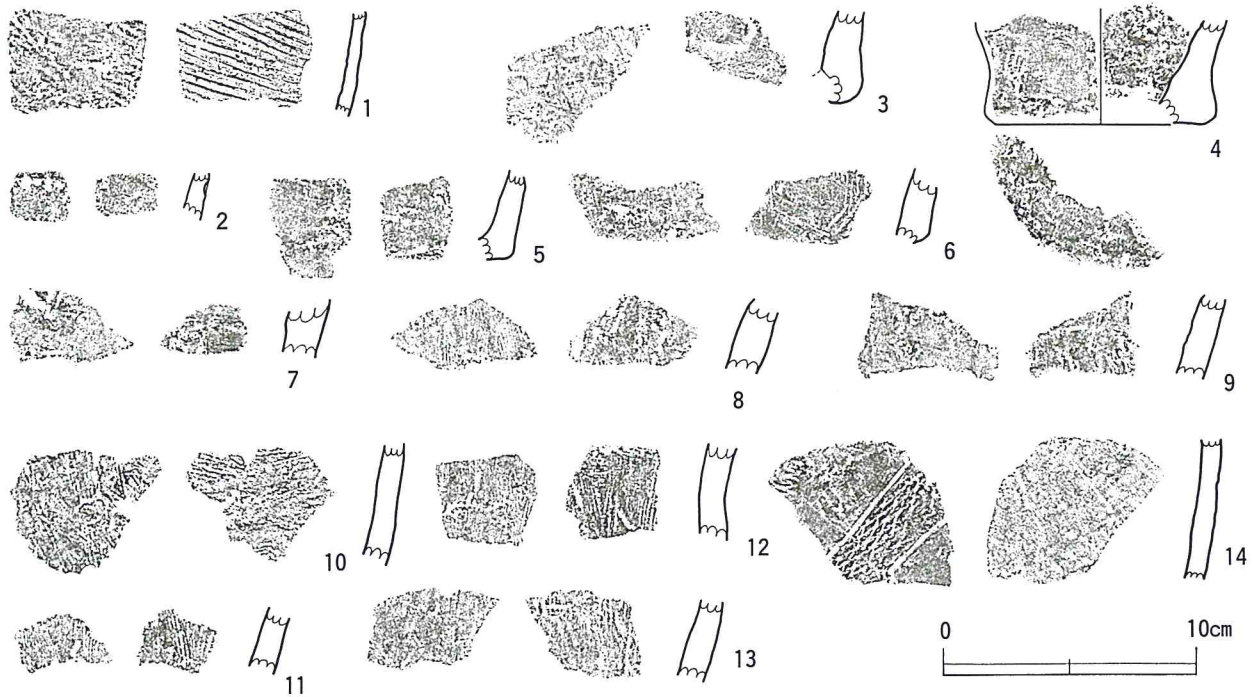
1. 土器 (第59図1～13)

1, 2は集石出土の土器である。1は、器壁が薄く堅緻な土器である。胎土に金雲母を含み、外面は風化しているが、内外面調整のための貝殻条痕がみられる。2は、胎土に金雲母を多く含み、外面に工具による連点文がわずかにみられる。3は溝状遺構1から出土した底部に近い部位の土器である。底部との連結部分には刺突穴が数点みられ、連結のためのものと思われる。4は、比較的大型の深鉢の底部である。ヘラ状工具や指による調整がみられる。5は土器底部である。胎土に金雲母を多く含む。6, 7はいずれも底部近くの部位である。10は、胴部片であるが、胎土に金雲母を多く含む。内外面調整のための貝殻条痕がみられる。14は、斜位の沈線文間に撚糸文が施されている。14は縄文時代早期後葉の土器であるが、出土状況が不明で詳細が分からないため、縄文時代早期の包含層が存在する可能性もあるが、確認には至らなかった。

2. 石器

今回、遺物包含層からは石器と認定できる遺物は出土していない。ただし、Ⅰ層の耕作土より石器が数点出土しており、写真のみ掲載することとする。南種子町の、後期旧石器時代の細石核製作跡と考えられる銭亀遺跡では、白い斑点の入る硅質頁岩を細石核の石材として使用しているが、同様の白い斑点の入る硅質頁岩の石核とフレークが出土している。ただし、この2点は同一個体ではない。そのほか、凝灰岩がホルンフェルス化したと思われる石材を使用した磨製石斧が1点、Ⅰ層より出土した。

また、確認調査の際、3トレンチのⅦ層で炭化物と石片が出土している。石器としての判定が非常に困難だったため、今回図化せず、写真のみの掲載にとどめることとする。いずれも砂岩の石片である。



第59図 下鹿野遺跡 出土土器

第10表 下鹿野遺跡 遺構計測表

挿図番号	出土区	検出面	遺構名	長径	短径	深さ	供伴遺物	備考
				(m)	(m)	(cm)		
第57, 58図	B区	Ⅲ	集石	1.6	1.25	60	土器	底部に大型礫を配置

挿図番号	出土区	検出面	遺構名	長さ	幅	深さ	供伴遺物	備考
				(m)	(m)	(cm)		
第56図	G区	Ⅲ	溝状遺構 1	(1.7)	0.6	22	土器	溝状遺構 3 と切り合っている
第56図	G区	Ⅲ	溝状遺構 2	(7.2)	0.45	29		
第56図	E~G区	Ⅲ	溝状遺構 3	(15.7)	0.45	17		溝状遺構 1 と切り合っている
第56図	E区	Ⅲ	溝状遺構 4	(4.3)	0.35	12		

第11表 下鹿野遺跡 土器観察表

挿入番号	整理番号	出土区	層	胎土				焼成	色調		調整		文様	備考
				石英	長石	角閃石	雲母		外	内	外壁面	内壁面		
1	1	集石		○	○	○		良好	灰褐	にぶい橙	ナデ(貝)	ナデ(貝)		
2	2	集石		○	○		○	良好	橙	にぶい橙	—	ナデ	連点文	
3	3	溝状遺構 1		○	○	○		良好	赤褐	にぶい赤褐	ナデ, 指押え	ナデ		
4	4	F区	Ⅱ b	○	○	○		良好	赤橙	赤橙	ナデ, 指押え	ナデ		
5	5	A区	Ⅱ b	○	○		○	良好	赤褐	灰赤	ナデ	ナデ, 指押え		
6	6	G区	Ⅱ b	○	○		○	良好	赤橙	赤橙	ナデ	ナデ		
7	7	F区	Ⅱ b	○	○		○	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	ナデ, 指押え	ナデ, 指押え		
8	8	F区	Ⅱ b	○	○	○		良好	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		
9	9	F区	Ⅱ b	○	○	○		良好	明赤褐	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		
10	10	A区	Ⅱ b	○	○		○	良好	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ		
11	11	F区	Ⅱ b	○	○	○		良好	橙	橙	ナデ	ナデ		
12	12	9 T	Ⅱ b	○	○		○	良好	赤褐	にぶい赤褐	ナデ(貝)	ナデ(貝)		
13	13	F区	Ⅱ b	○	○	○		良好	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ		
14	14	—		○	○	○		良好	橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	撚糸文	

第5節 下鹿野遺跡から出土した炭化材の年代と樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鹿児島県熊毛郡南種子町下鹿野遺跡では、遺物包含層中から集石SX1が検出されている。遺物包含層からは縄文時代前期および後期の土器が混在して出土しており、その上面は攪乱層となる。

今回の分析調査では、集石の時代・時期に関する資料を得るため、遺構内から出土した炭化材を対象として放射性炭素年代測定を実施する。また、木材利用に関する資料を得るため、併せて炭化材の樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、SX1から出土した炭化材で、合計8点が送付されてきた。このうち、必要量が得られた3点（試料番号11-13）を年代測定試料とした。これらの炭化材は、年代測定用試料を採取すると樹種同定に必要な分が確保できないため、測定前に実体顕微鏡による樹種同定を実施する。また、年代測定を実施しない炭化材5点のうち、樹種同定可能な量が得られた試料番号4と礫間の炭化材の2点についても樹種同定を実施する。したがって、樹種同定点数は5点となる。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料表面の汚れをピンセット、超音波洗浄など等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する。試料中に含まれる炭素を酸化させて二酸化炭素とし、さらに精製ラインを用いて、二酸化炭素からアセチレンを合成する。 β 線計数装置の気体比例計数管で、 ^{14}C の崩壊数を計測する。測定が終了したアセチレンガスから再び二酸化炭素を作製し、安定同位体比測定用質量分析装置で試料中の $\delta^{13}\text{C}$ を測定する。

なお、炭素の半減期はLIBBYの半減期5,570年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

(2) 樹種同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の配列の特徴については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3. 結果

放射性炭素年代測定および樹種同定結果を表1に示す。同位体効果の補正を行った測定結果は、No.11が $4,370 \pm 190\text{BP}$ 、No.12が $4,080 \pm 90\text{BP}$ 、No.13が $4,300 \pm 120\text{BP}$ を示す。

暦年較正結果を表2に示す。暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。なお、暦年較正プログラムは、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ として計算させた結果、No.11はcalBC3,361-2,765、No.12はcalBC2,861-2,496、No.13はcalBC3,262-2,680である。

一方、炭化材は、No.4が広葉樹であることは判別できたが、節部分で保存状態も悪く、同定には至らなかった。その他の炭化材は、針葉樹1種類（マツ属）、広葉樹1種類（シイノキ属近似種）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属 (*Pinus*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急～緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁は保存状態が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

日本のマツ属には、単維管束亜属（ゴヨウマツ類）と複維管束亜属（ニヨウマツ類）とがある。これらの木材組織は、放射仮道管内壁の鋸歯の有無で同定することが可能であるが、今回の試料では放射仮道管内壁の保存状態が悪く、鋸歯の有無が確認できなかったため、マツ属とした。

・シイノキ属近似種 (cf. *Castanopsis*) ブナ科

試料はいずれも細片で、年輪界で割れており、早材部の一部と晩材部のみの観察しかできない。早材部では単独で放射方向に配列する。晩材部への移行は緩やかで、小道管は多数が火炎状に配列する。放射組織は単列のみで、複合放射組織や集合放射組織のような大型の組織は認められない。

以上の特徴から、ブナ科のコナラ属コナラ節、クリ、シイノキ属のいずれかである。現生標本との組織の比較結果と現在の植生を考慮すると、シイノキ属の可能性が最も高いことから、シイノキ属近似種とした。

4. 考察

SX01から出土した炭化材は、礫が加熱された際に燃料材として利用された木材の一部が炭化・残存した可能性がある。これらの炭化材にはシイノキ属近似種とマツ属が認められ、少なくとも2種類の木材が利用されていたことが推定される。

シイノキ属は、暖温帯常緑広葉樹林の主構成種であり、本地域の常緑広葉樹林に普通にみられる種類である。マツ属は、複維管束亜属のクロマツや単維管束亜属のヤクタネゴヨウが本地域に分布している。したがって、シイノキ属近似種とマツ属は、いずれも本遺跡周辺で入手可能であったことが推定される。

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織. 地球社,176p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社,122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

表 1. 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

遺構	番号	位置	種類	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	Code No.	Measurement No.
SX01	No. 4	南西部下の方	炭化材	広葉樹 (節)	—	—	—	—
	No.11	—	炭化材	マツ属	4,370±190	-27.2	9388-1	IAA-1038
	No.12	—	炭化材	シイノキ属近似種	4,080±90	-27.0	9388-2	IAA-1039
	No.13	—	炭化材	シイノキ属近似種	4,300±120	-27.9	9388-3	IAA-1040
	—	碟の間のもの	炭化材	マツ属	—	—	—	—

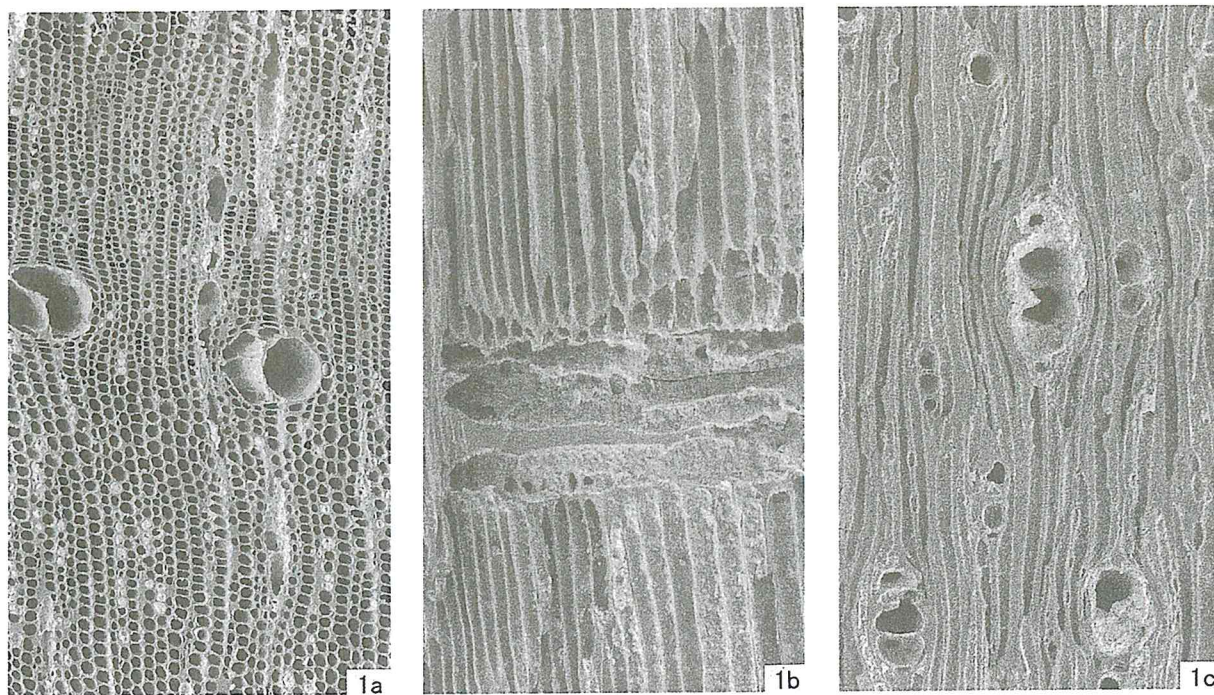
- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表 2. 暦年較正結果

試料名	番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				相対比	Code No.	
			σ	2σ	σ	2σ			
SX01	No.11	4,379±193	σ	cal BC 3,361 - cal BC 2,867	cal BP 5,311 - 4,817	0.961	9388-1		
				cal BC 2,804 - cal BC 2,777	cal BP 4,754 - 4,727			0.036	
				cal BC 2,767 - cal BC 2,765	cal BP 4,717 - 4,715			0.004	
			2σ	cal BC 3,626 - cal BC 3,598	cal BP 5,576 - 5,548			0.009	
				cal BC 3,526 - cal BC 2,565	cal BP 5,476 - 4,515			0.980	
				cal BC 2,532 - cal BC 2,495	cal BP 4,482 - 4,445			0.011	
	No.12	4,088±90	σ	cal BC 2,861 - cal BC 2,808	cal BP 4,811 - 4,758	0.201		9388-2	
				cal BC 2,757 - cal BC 2,719	cal BP 4,707 - 4,669				0.133
				cal BC 2,705 - cal BC 2,565	cal BP 4,655 - 4,515				0.554
			2σ	cal BC 2,532 - cal BC 2,496	cal BP 4,482 - 4,446				0.113
				cal BC 2,896 - cal BC 2,548	cal BP 4,846 - 4,498				1.000
				cal BC 2,896 - cal BC 2,548	cal BP 4,846 - 4,498				1.000
No.13	4,302±119	σ	cal BC 3,262 - cal BC 3,249	cal BP 5,212 - 5,199	0.023	9388-3			
			cal BC 3,099 - cal BC 2,850	cal BP 5,049 - 4,800			0.742		
			cal BC 2,813 - cal BC 2,742	cal BP 4,763 - 4,692			0.156		
		2σ	cal BC 2,729 - cal BC 2,694	cal BP 4,679 - 4,644			0.067		
			cal BC 2,686 - cal BC 2,680	cal BP 4,636 - 4,630			0.011		
			cal BC 3,338 - cal BC 3,207	cal BP 5,288 - 5,157			0.115		
cal BC 3,195 - cal BC 3,148	cal BP 5,145 - 5,098	0.033							
cal BC 3,143 - cal BC 2,618	cal BP 5,093 - 4,568	0.839							
cal BC 2,609 - cal BC 2,598	cal BP 4,559 - 4,548	0.006							
cal BC 2,595 - cal BC 2,583	cal BP 4,545 - 4,533	0.007							

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.01 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

図版1 炭化材



1. マツ属 (SX01 ; 礫の間のもの)

200 μm : a

100 μm : b, c

第6節 まとめ

1. 遺構について

大型礫を用いた縄文時代後期の遺跡としては、西之表市の浅川牧（Ⅱ）遺跡、南種子町の藤平小田遺跡がある。藤平小田遺跡は、北東方向に直線距離約3km、標高約50mの西海岸に面した海岸段丘上に位置する遺跡である。縄文時代後期の二重の大型配石遺構が発見され、大型集石を2基検出している。1号集石は長さ2.0m、幅2.2m、深さ13cm、3号集石は長さ3.2m、幅2.7m、深さ50cmといずれも大型の集石である。

下鹿野遺跡の集石は、構成の主体をなすのはこぶし大の大きさの砂岩角礫で、集石底部には30～40cm程の礫が5点、十字状に意図的に配置されていた。底部に大型礫を配置する集石は、種子島ではみられないものである。

埋土中に炭化物や焼土が多く含まれることや被熱した礫が多いことから使用したことは明らかであるが、こうした大型の集石の用途が小型の集石と異なるのかは、今後の検討課題である。

2. 土器について

遺物は小片であるか、無文であったため遺物で時期を特定するのは難しく、確認調査時に集石で出土した、西平式と思われる土器より、縄文時代後期の遺跡と想定した。

ただし、出土地不明であるが、塞ノ神式土器も出土しており、縄文時代早期の包含層が存在する可能性があるが、今回は確認に至らなかった。

3. 小結

今回の調査では、遺構も集石と溝状遺構のみであり、遺物も少量であった。下鹿野遺跡は、西海岸の海岸段丘上に位置し、緩やかな傾斜を経て急な勾配となっていく台地上に位置する。1.5m程の大型集石が検出されたことより、遺跡の中心部が近くにあると想定されるが、今回の調査区域はその周縁部にあたると考えられる。

今回検出された集石は、長さ、幅ともに大型であったが、深さ60cmで底部には30～40cmの大型礫を配置していた。このような大型の集石がどのような目的で使用されていたのかは、今後類例の増加を待ち、検討課題としたい。

〈参考文献〉

堂込秀人・黒川忠広ほか2002『藤平小田遺跡』南種子町教育委員会

徳田有希乃2006『銭亀遺跡』南種子町教育委員会

青崎和憲1994『浅川牧（Ⅰ・Ⅱ）遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター

第Ⅷ章 日ノ丸遺跡

第1節 調査の概要・方法

日ノ丸遺跡は、上中からほぼ南方向に下った、鹿鳴川下流に広がる標高5 m前後の沖積平野に位置する。この沖積平野は南種子を代表する水田地帯で、昭和30年代に大規模な構造改善が行われている。遺跡は台地から平野に下る裾部に位置し、背後には急傾斜の山が迫る。遺跡の南側は弧を描いて伸びる前之浜海岸へと続く。

日ノ丸遺跡は平成12年度に分布調査、平成16年度に確認調査、平成17年度に本調査を実施した。確認調査は平成16年7月27日～16年8月16日まで実働11日間、本調査は平成17年9月26日～10月28日まで実働18日間実施した。

調査面積は確認調査が48.9㎡、本調査が85.4㎡である。

1. 確認調査

当地区は、平成12年度に分布調査を実施し、古代・中世の遺跡として周知されている。

トレンチは2 m×4 mを基本とし、分布調査の結果を基に、施工区域内を中心に6本設定した。今回の事業は構造改善で区画された畑間を走る農道の舗装整備である。そのため、耕作者の同意を得て道路を封鎖しトレンチを設定した。なお、1トレンチは事業対象外の場所であったが、地形的に最も遺跡が発見される可能性が高いと想定されたため、地権者に同意を得て調査を行った。

調査の結果、大規模な構造改善が行われているが、中世以下の包含層は残存しており、1トレンチ、2トレンチ、3トレンチで遺構・遺物を確認した。

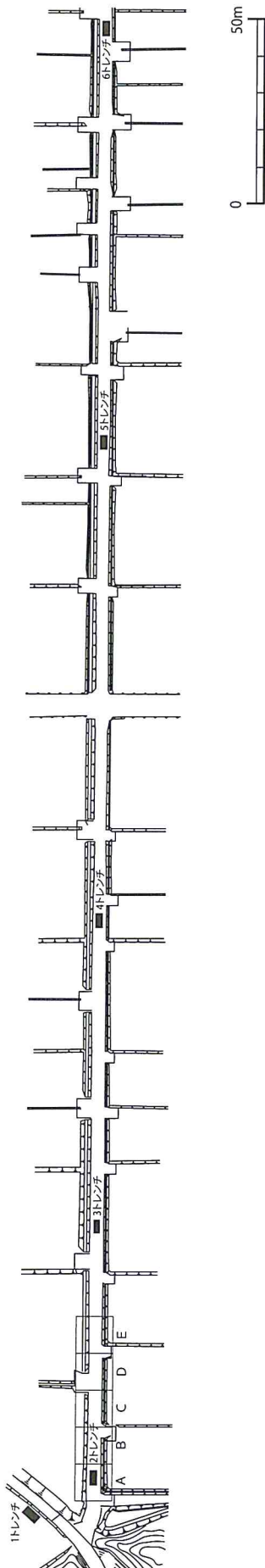
2. 本調査

確認調査の結果をもとに、台地の裾野部にあたる北側に遺跡が残存することが明らかとなったため、平成17年度本調査を実施した。

計画路線の中心線を基準に10 m×10 mのグリッドを設定し、北側から1～4区とした。調査にあたっては、耕作土や造成工事による攪乱層を重機で剥ぎ取り、遺物包含層は作業員により慎重に掘り下げた。

当地域は南種子町でも有数の水田地帯である。そのため、調査の際は水中ポンプを稼働し水をくみ出しながらの調査であった。こうした状況上、水成作用を受けており総数は1,309点と、遺物が多く出土したが、大半は磨滅した小片であった。

調査終了後は、重機により土を埋め戻した後、軟岩砂利を敷設した。



第60図 日ノ丸遺跡 調査区・トイレ配置図

第2節 層位

調査区域内で若干の違いはあるが、標準土層は下記のとおりである。

I層	：軟岩砂利	表土
II層	：黄褐色砂質土	遺物包含層（古代～中世）
III層	：黒褐色砂質土	遺物包含層（古代～中世）
IV a層	：灰色砂質土	遺物包含層（古代～中世）
IV b層	：灰色砂質土	遺物包含層（古代～中世） VI a層よりやや白っぽい。
V層	：黄褐色粘質土	
VI a層	：灰色粘質土	
VI b層	：灰オリーブ色粘質土	
VI b層	：青黒色粘質土	

第3節 日ノ丸遺跡の遺構

確認調査の1トレンチで溝状遺構1条、本調査でピット7基、畠跡1基、溝状遺構1条を検出した。

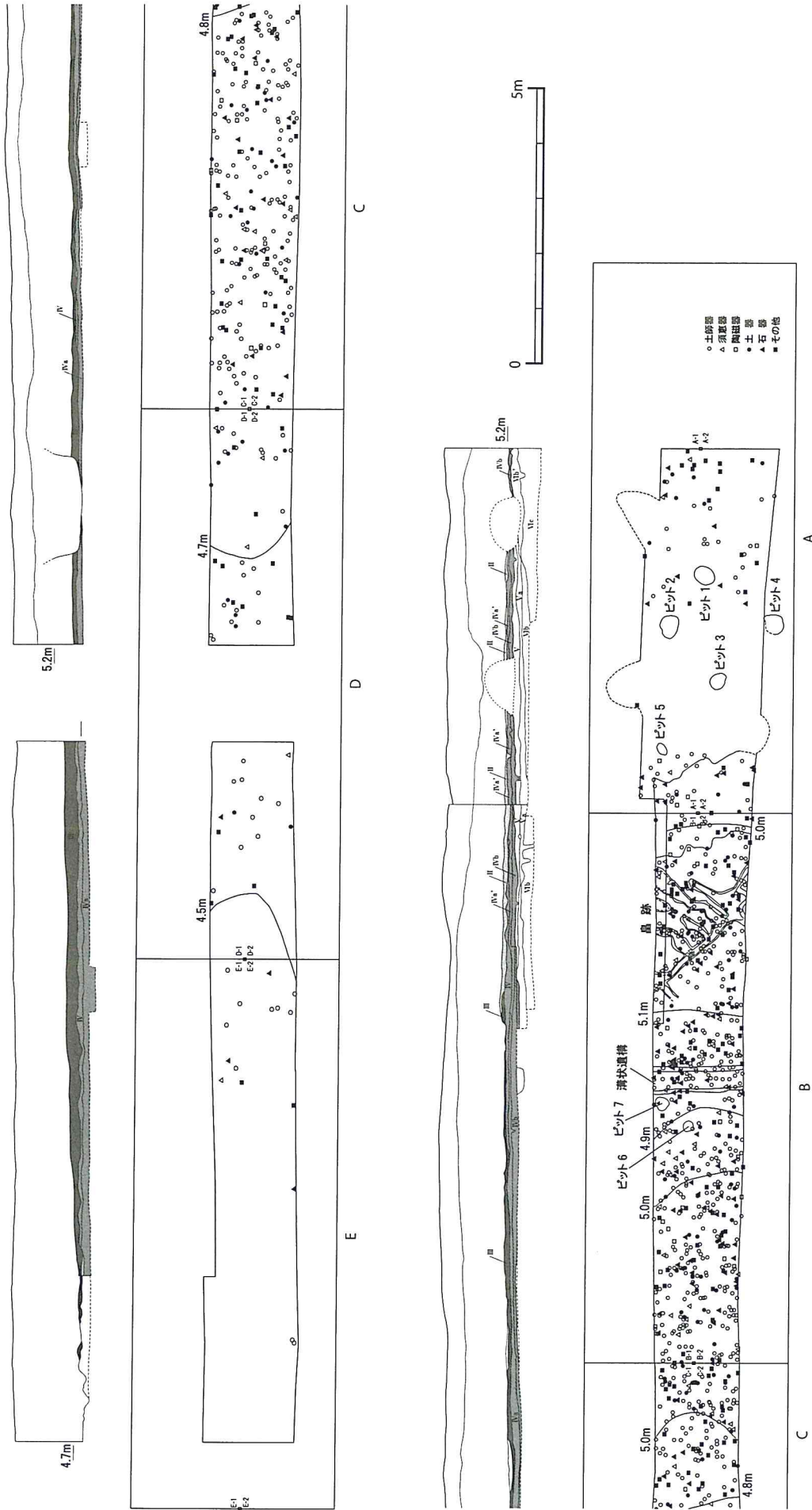
1. ピット

A区のIII層直下でピット1～5を検出した。ピット間がそれぞれ1m程度と同間隔で、列状をなしている。ピット4は深さ73cmと深く、上面に15cm程の礫がみられる。こうしたことから、掘立柱建物跡の柱跡である可能性が想定されたため、A-A'、B-B'の延長上でピットを探したが、該当する遺構は確認できなかった。なお、ピット5に関しては、ピット3との距離は約1.3mであるが、掘り込みはほとんどなく、柱穴の可能性は低い。ピット1からは、土器の小片、土師器椀底部がそれぞれ1点ずつ出土した。3は土師器の底部に近いが磨滅著しく、高台部は残っていない。ピット4からも土師器の小片が2点出土している。

B区でもピットを2基検出している。ピット6の埋土中から、4の土師器杯の底部が1点出土している。磨滅著しいが、若干上げ底状を呈する杯である。ピット7は長径、短径ともに0.25m、深さ40cmで不定型のピットである。底部近くで12cmほどの木片を検出している。木片に加工は施されておらず、自然木であった。

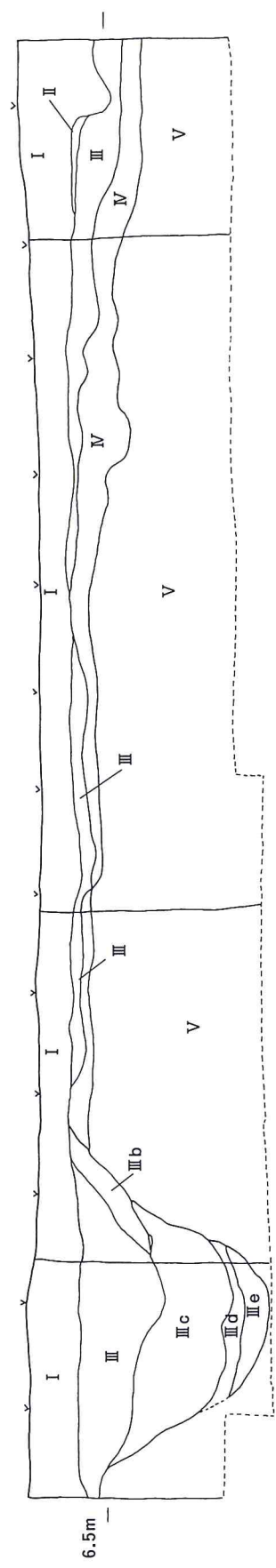
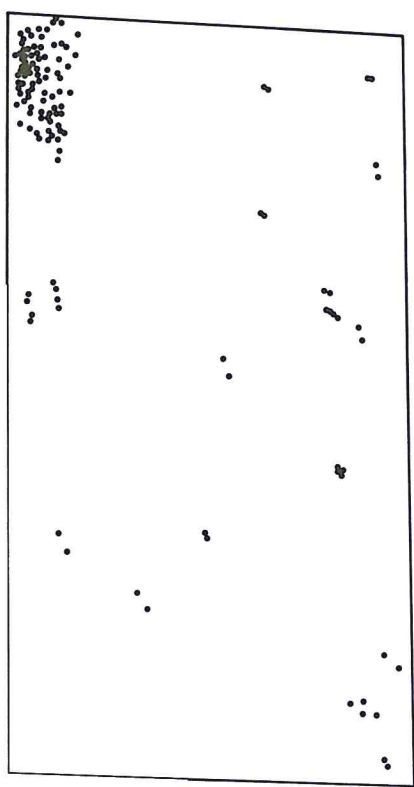
2. 畠跡

B区をIV層まで掘り下げたところ、II層が筋状に残る部分があった。II層が残る部分は2～3cmと非常に浅いものであったが、II層部分のみ土を除去したところ、畝状の盛り上がりが残った。当地は南種子町有数の水田地帯で、現在も広範囲にわたり稲作が行われている。そのため、水田跡も考慮に入れたが、畝間の間隔が狭いこと、盛り上がり部が直線状を呈することなどから、畠跡と判断した。3条から4条の畝跡と思われる盛り上がりが見られる。また、畠の畝幅は40～100cmと一定ではなく、長さも幅もまちまちである。

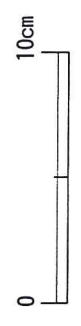
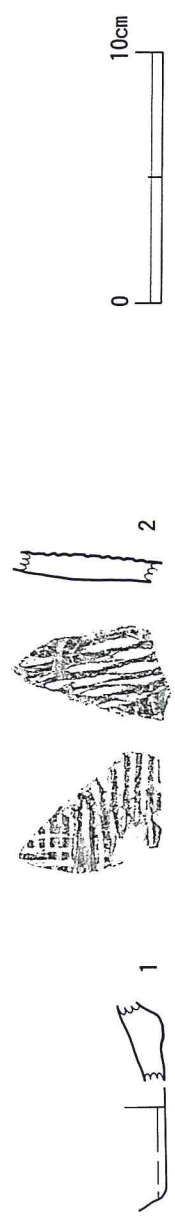


第61図 日ノ丸遺跡 遺物出土状況・遺構配置図・土層断面図

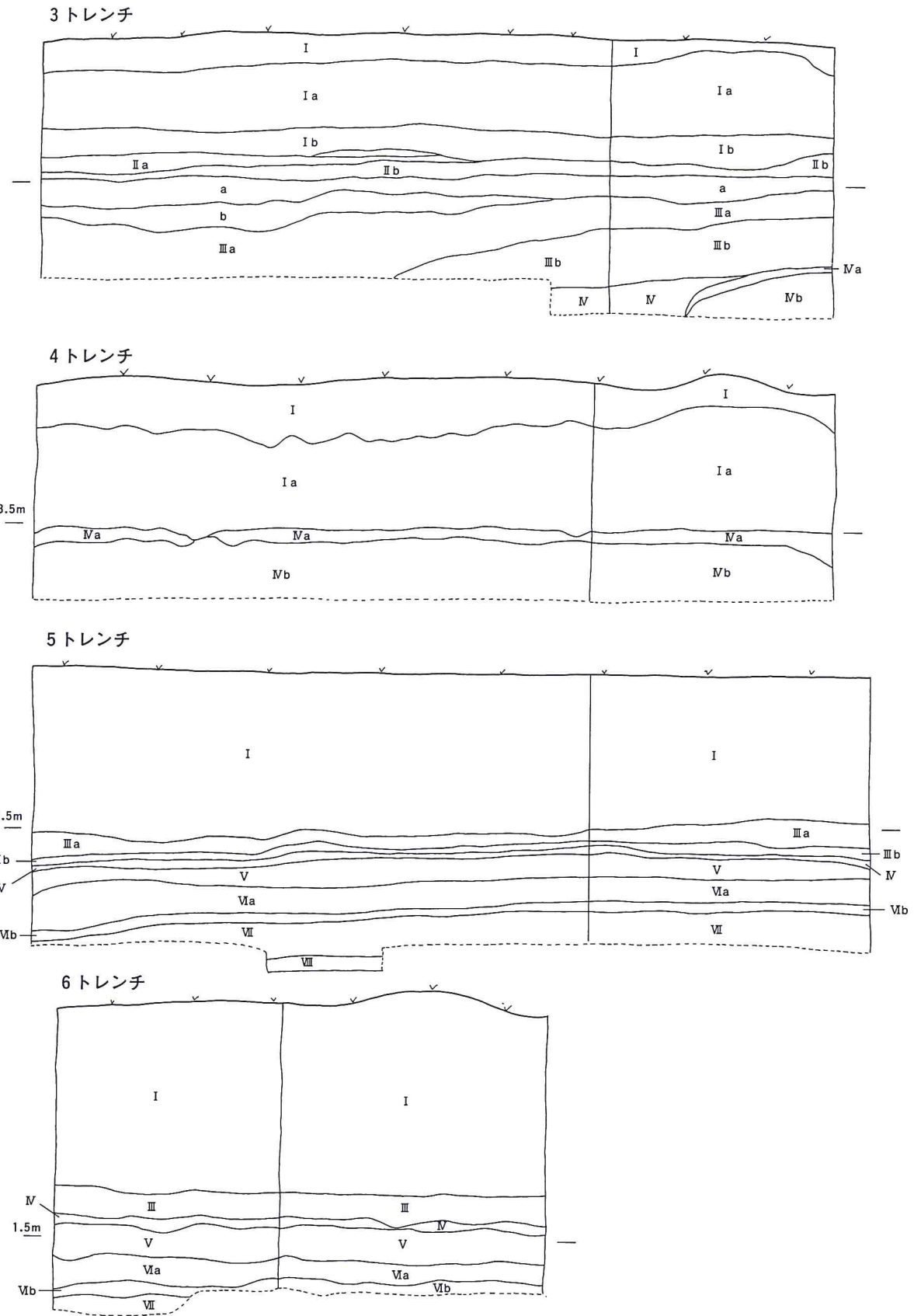
1 トレンチ



第62図 日ノ丸遺跡 1 トレンチ遺物出土状況及び土層



第63図 日ノ丸遺跡 出土遺物



第64図 日ノ丸遺跡 確認トレンチ土層 (S=1/40)

なお、この畠跡の土壌の植物珪酸体分析を行った。分析の結果、イネ属が検出されたことから、畠での陸稲栽培の可能性も示唆されるが、遺物包含層直上が近現代の水田耕作土であることからその影響も想定されるため、断定はできない。

出土遺物として遺物が4点出土している。土師器3点、陶器1点出土しているが、いずれも水成作用による磨滅が著しく小片で、時代や形式等の判別はできなかった。

3. 溝状遺構

確認調査1トレンチで、溝状遺構1条を壁で検出した。埋土中からは1、2のほか土器4点、土師器19点が出土しているが、いずれも小片であった。1は土師器の底部である。磨滅著しく底部の形状、調整等は判別できなかった。2は須恵器である。内外面平行線状のタタキ調整がみられる。

また、B区V層で溝状遺構を1条検出した。調査区の北西-南東方向にのびる、幅0.5mの幅広い溝状遺構である。5は土師器碗の底部近くである。高台部は磨滅し残存しない。

第4節 日ノ丸遺跡の遺物

II～IVb層まで、一様に遺物が出土した。出土量が多かったため、10m×10mグリッドを東西5mずつの小グリッドに区切り平板で取り上げた。

遺物包含層は大きく3層に分かれるため、遺物は層ごとに図化した。出土遺物は下層にいくにつれ土器の出土量が多くなる傾向があるものの、多岐にわたる時期の遺物が混在し、層ごとの時代区分は出来なかった。

1. V層出土遺物

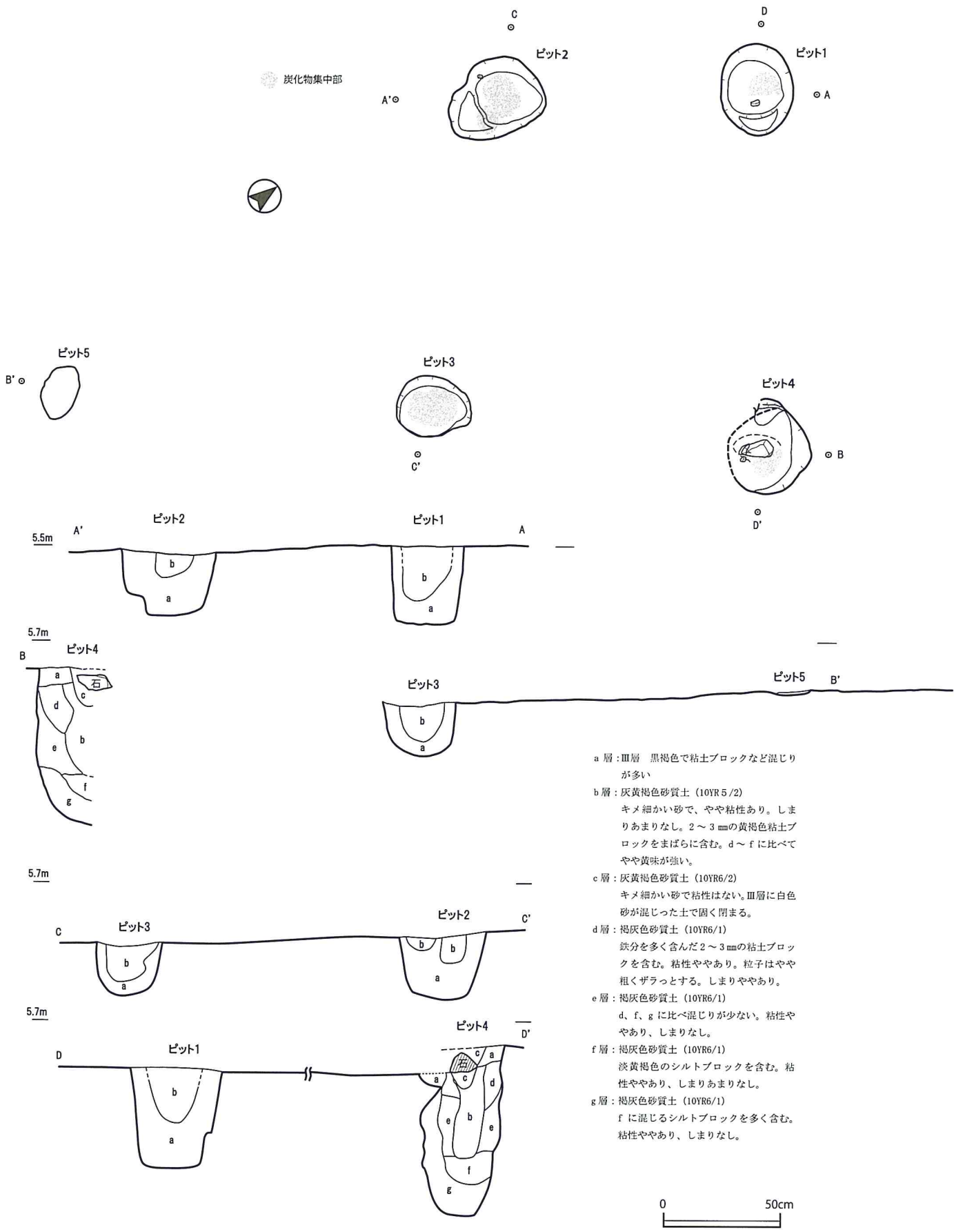
土器が数点出土している。本来、V層は遺物包含層ではないが、IV層からの混じり込みと考えられる。6は金雲母を多量に胎土に含む甕形土器である。口縁部が斜めに立ちあがる形状を呈し、弥生時代後期～古墳時代にかけての在地系の土器である。

2. IVb層出土遺物

土師器、須恵器、敲石、石皿のほか、羽口片と思われるものが出土している。8は土師器の杯または碗の口縁部である。12は底径9cmの土師器碗の底部である。底部は充実高台で、0.5cmほどの小さな圧痕がみられる。稲作に伴う刳圧痕の可能性もあるが、磨滅しており判断できなかった。13は須恵器である。胎土は赤く、内外面平行線状のタタキが施されている。14は砂岩円礫を石材とする敲石、15は砂岩の石皿である。使用による剥離がみられる。

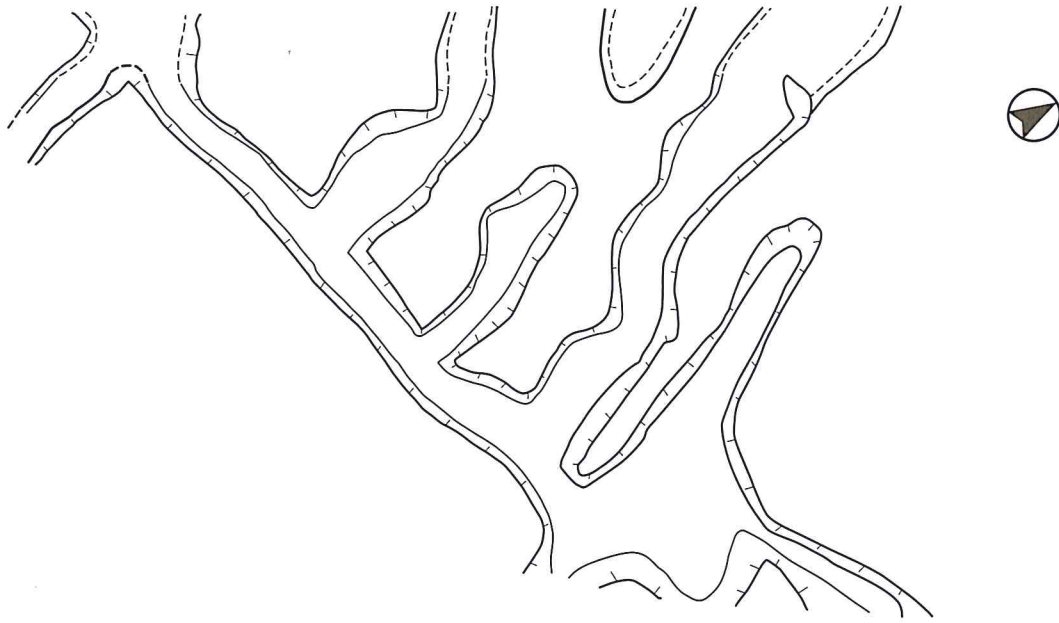
3. IVa層出土遺物

土器、土師器、青磁等が出土している。16は土器の口縁部である。17はヘラ切りの土師器底部である。18は青磁碗の口縁部で、内面に片彫りの文様がみられる。

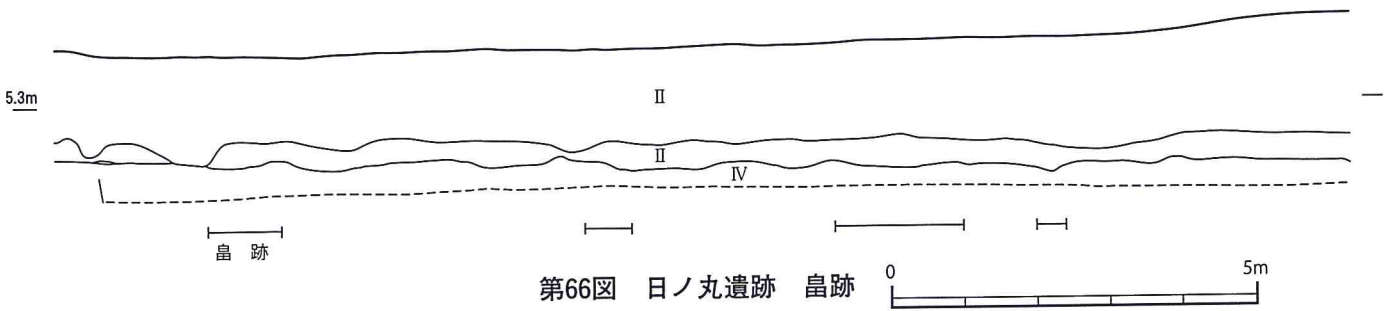


- a 層：III層 黒褐色で粘土ブロックなど混じりが多い
- b 層：灰黄褐色砂質土 (10YR 5/2)
キメ細かい砂で、やや粘性あり。しまりあまりなし。2～3mmの黄褐色粘土ブロックをまばらに含む。d～f に比べてやや黄味強い。
- c 層：灰黄褐色砂質土 (10YR 6/2)
キメ細かい砂で粘性はない。III層に白色砂が混じった土で固く閉まる。
- d 層：褐灰色砂質土 (10YR 6/1)
鉄分を多く含んだ2～3mmの粘土ブロックを含む。粘性ややあり。粒子はやや粗くザラっとする。しまりややあり。
- e 層：褐灰色砂質土 (10YR 6/1)
d、f、g に比べ混じりが少ない。粘性ややあり、しまりなし。
- f 層：褐灰色砂質土 (10YR 6/1)
淡黄褐色のシルトブロックを含む。粘性ややあり、しまりあまりなし。
- g 層：褐灰色砂質土 (10YR 6/1)
f に混じるシルトブロックを多く含む。粘性ややあり、しまりなし。

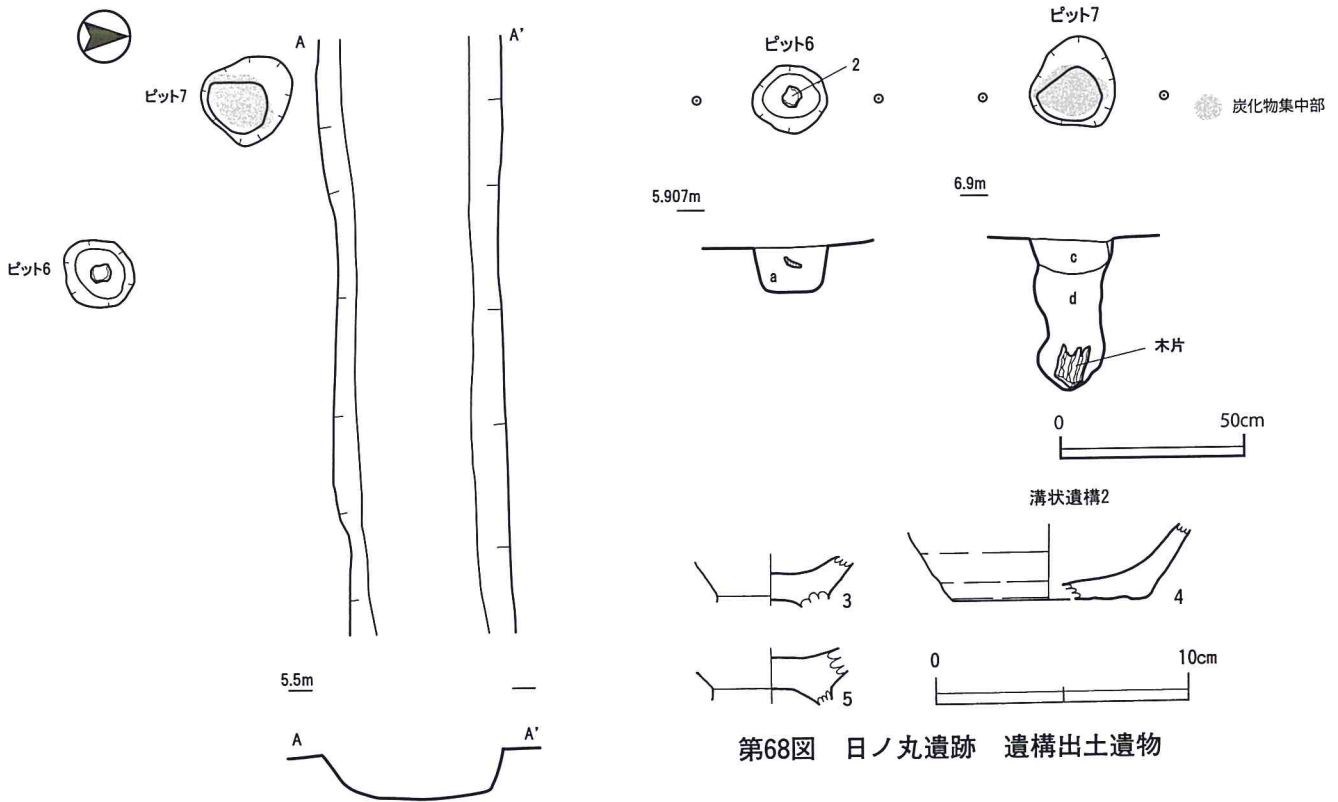
第65図 日ノ丸遺跡 ピット



B-1 A-1
B-2 A-2



第66図 日ノ丸遺跡 畠跡



第68図 日ノ丸遺跡 遺構出土遺物

第67図 日ノ丸遺跡 ピット及び溝状遺構

4. IVa層出土遺物

土師器，須恵器，滑石製品小片，鍛冶に伴うと考えられる軽石状塊等が出土している。19は底部ヘラ切りの皿である。21は充実高台の杯である。磨滅著しく，調整等は残っていない。22は須恵器で，外面は格子状のタタキが施され，内面は平行線状の当て具痕がみられる。23は粘板岩を石材とする石製品で，欠損し一部のみであるが，裏表ともに縁辺部を研磨し鋭角にしている。石庖丁と思われるもので，欠損上部には穿孔の可能性のある抉りもみられる。

5. IV層出土遺物

最も出土遺物が多く，土器，土師器，須恵器，白磁，青磁，東播磨系須恵器，カムイヤキ，滑石製品小片，軽石製品，石製品，羽口片，鉄滓と種類も豊富である。24～27は土器である。24は土器の口縁部である。外反する口縁部以下は直立に近い。壺形土器の口縁部と考えられる。28～33は土師器である。28は土師器の皿である。30は磨滅しているがヘラ切りの底部である。31～33は土師器碗の高台部で，いずれも磨滅著しい。33は内黒土師器と思われる。34～40は須恵器である。34は甕あるいは壺の肩部にあたり，大きく湾曲する。外面は平行線状のタタキを施した後ナデ消している。35は外面調整にハケ状の工具でナデを施し，格子状のタタキを施している。内面には平行線状の当て具痕がみられる。37は軟質の須恵器で，磨滅著しい。外面に平行線状のタタキが施される。熊本県下り山窯系の須恵器の可能性もある。39は，内外面ナデ調整を施しており，胎土に礫を含む厚く胎土のやや粗い須恵器である。常滑焼系の陶磁器の可能性もある。41は種子島で初めて出土したカムイヤキ¹である。堅緻で内外面は青灰色であるが，芯部は赤褐色をしている。器壁は薄く湾曲しており，壺あるいは鉢と想定される。外面はナデ，内面はヘラ状工具による回転調整が施され，格子目状の当て具痕が残る。文様は横位に綾杉文がみられる。42～49は白磁である。42は青白磁の合子である。外面は施釉されているが，内面は無釉である。43は白磁の皿口縁部である。口縁部は大きく外反し，外面下部は無釉である。44は口縁部が肥厚し玉縁状を呈する。器壁は0.3cmと非常に薄く堅緻である。45は口縁部がくの字状に屈曲し，大きく外反する。46は碗の底部と思われるが，内面は焼成不良のため釉薬は白黄色を呈し，外面は無釉である。49は内面見込み部分に1条沈線が施されている。50～57は青磁である。50はやや外反する口縁部で，外面にクシ状工具を縦位に施した文様がみられる。52は口縁部が内湾する龍泉窯系青磁の碗である。内面にヘラ状工具を用いて片彫りの草花文を施している。53は内面に文様を施しており，口縁部下に横の沈線を1条，その下位にヘラ状工具片彫りによる草花文がみられる。内外面ともに貫入が著しく入っている。54はやや口縁部が外反し，内面にヘラ状工具片彫りによる草花文と思われる文様がみられる。55は口縁部がやや内湾し，内面に細いヘラ状工具で片彫りの草花文と，クシ状工具による短い文様を施している。56は内面にクシ状工具により波状の文様が施されている。58は東播磨系須恵器と思われるもので，内外面灰色で口縁部が屈曲し直行する。外面口縁部に自然釉がみられる。59も東播磨系須恵器と思われるもので，やや内湾し，口縁部は肥厚する。肥厚した口縁部に自然釉がみられ，内面には煤が付着している。60は滑石製品である。小片で磨滅しており，形状などは判別できない。下部に穿孔を施しており，筋状の削痕が幾重も重なっている。61は軽石製の磨石である。不定形で整形の跡は認められず，使用により磨面は中央部がくぼんでいる。62は砂岩の磨石である。61同様，使用により磨面中央部がくぼみ，また磨面が赤色化している。63,64はともに鍛冶に伴う鉄滓であると思われる。

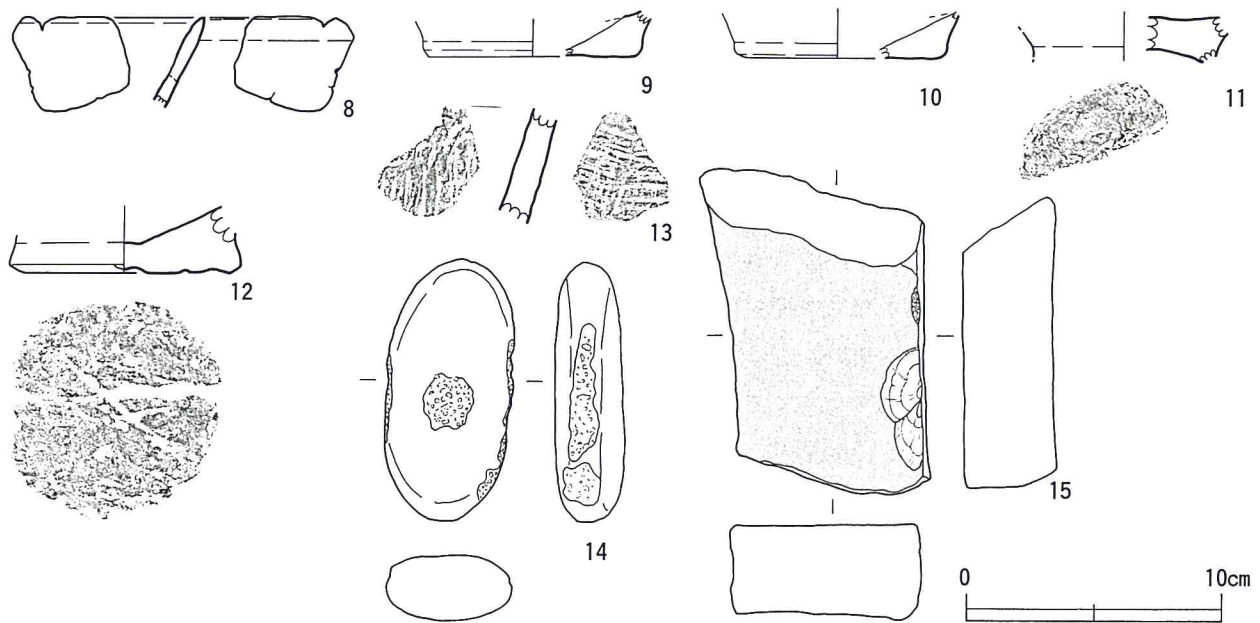
1 カムイヤキなど，日ノ丸遺跡の出土遺物の同定については琉球大学池田榮史教授にご教示いただいた。

6. Ⅲ層出土遺物

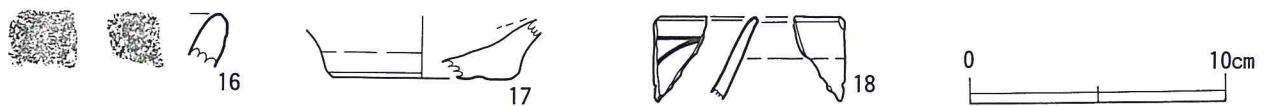
土器，土師器，須恵器，白磁，青磁のほか，滑石製品片，磨石，鉄滓などが出土している。65～67は土器である。66は砂礫混じりの胎土の土器で，貼付突帯が1条みられる。その他，風化著しく図化できなかったが，金雲母を多く含む，弥生時代後期～古墳時代の在地系土器の口縁部も出土している。68～77は土師器である。いずれも水成作用による磨滅著しい。68はヘラ切りの皿である。73は充実高台の土師器底部である。77は内黒土師器の椀である。78～85までは須恵器である。78は外面に格子状のタタキが施され，内面には平行線状の当て具痕がみられる。82も外面に格子状のタタキが施され，内面には平行線状の当て具痕がみられる。胎土は一部赤色化している。85は内外面無文の東播磨系須恵器の可能性のある須恵器である。外面はロクロ整形によるロクがみられ，内外面ナデ調整を施している。一部底部の屈曲部が残存する。86～88は白磁である。86は，白磁の合子蓋の肩部にあたり，大きく屈曲する。外面中央部には陽刻で鏝のある花卉が描かれ，中央を中心に放射状の筋が施されている。内面は屈曲部より下位には施釉がなされていない。87は口縁部が肥厚し玉縁状を呈する白磁椀の，やや内湾する口縁部である。88は口縁部に向かって大きく外反する椀である。器壁は薄く0.3cm程度である。外面に一部無釉の箇所が認められる。89も口縁部が外反する椀であるが，口縁部断面はほとんど丸みを帯びず角状を呈する。内面口縁部下位に2条，横位の沈線が施されている。そのさらに下位に段を形成している。90～92は青磁である。90は青磁の椀であるが，内面にクシ状工具による施文が施されている。91は椀の底部である。高台の高さはほとんどなく，一見充実高台状を呈する。内面は施釉，外面は無釉で，内面見込に1条沈線を施し中央部には花卉文様と思われるものが確認できる。見込部，高台部に一部，重ねて焼成する際の目跡が残る。92は青磁の小椀で，体部下位で大きく屈曲し，口縁部を大きく外反させる。内外面とも厚い施釉が施され，貫入もみられる。内面に横位の沈線を1条めぐらせている。なお，小片であったため図化しなかったが，鏝のある連弁文様の青磁片も出土している。93は砂岩を石材とする磨石である。



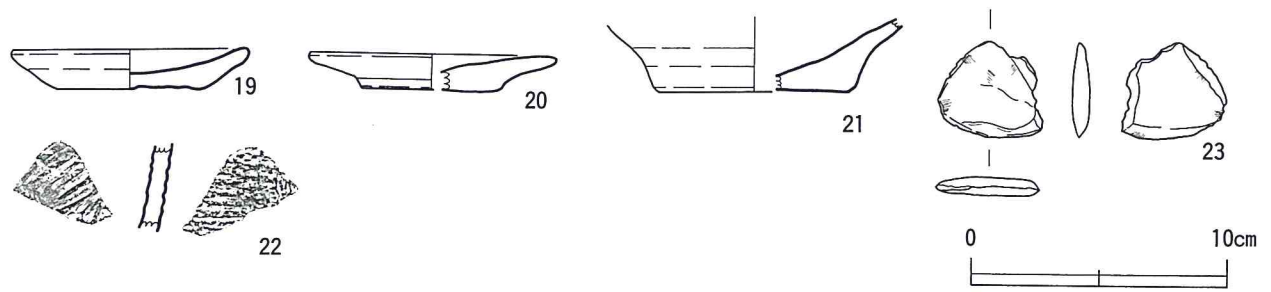
第69図 日ノ丸遺跡 V層遺物



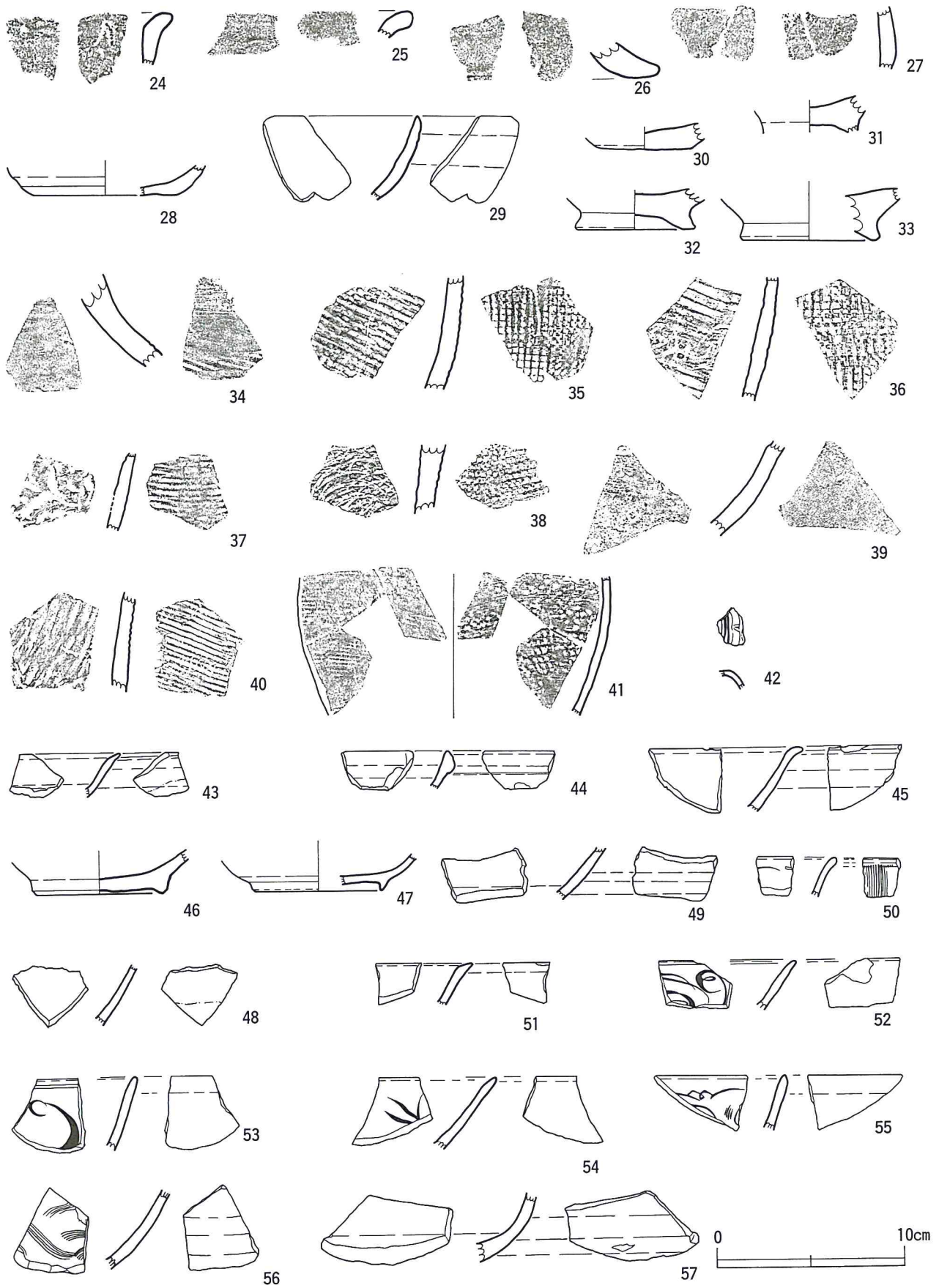
第70図 日ノ丸遺跡 IVb層遺物



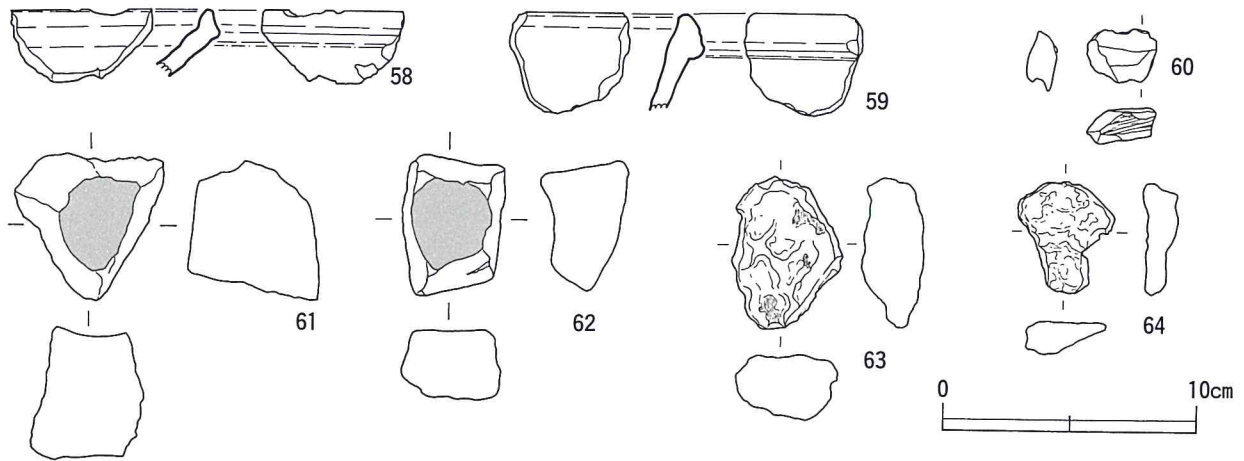
第71図 日ノ丸遺跡 IVa層遺物



第72図 日ノ丸遺跡 IVa'層遺物



第73図 日ノ丸遺跡 IV層遺物(1)

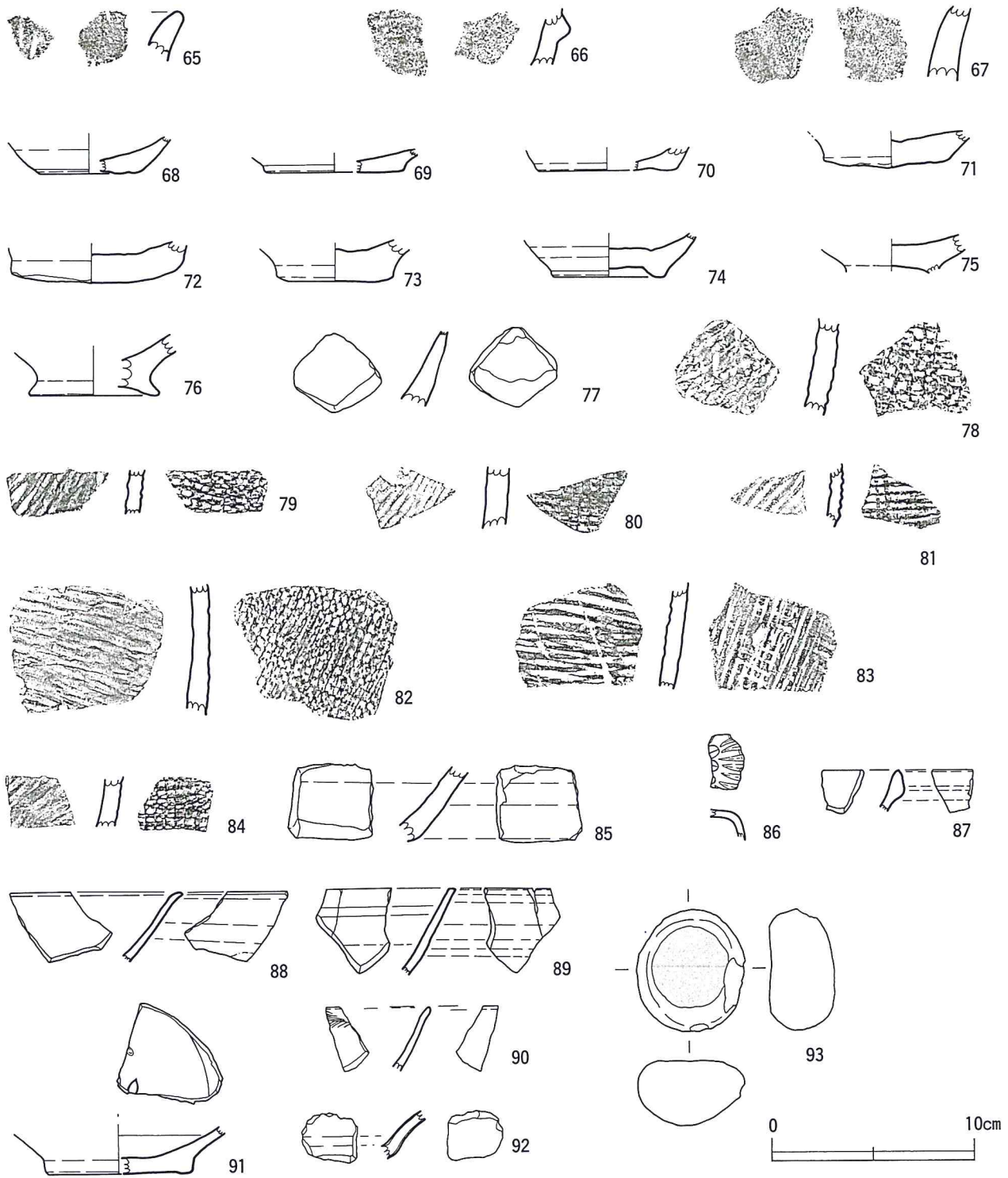


第74図 日ノ丸遺跡 IV層遺物(2)

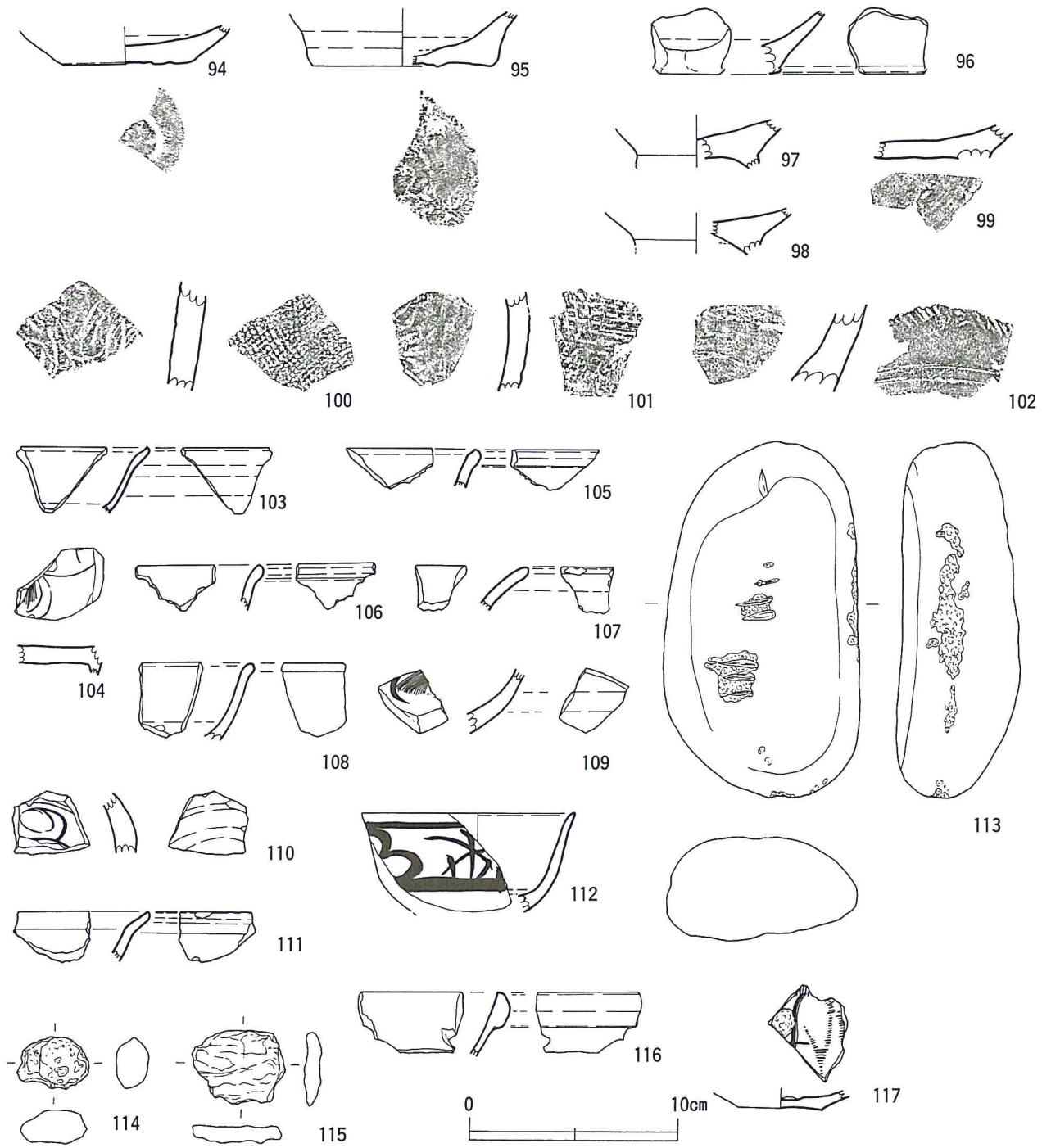
7. II層出土遺物

II層からは土師器、須恵器、白磁、青磁、石皿、鉄滓のほか近世陶磁器も出土している。94～98は土師器である。94, 95はヘラ切りの底部で、器形から杯と思われる。96は内黒土師器の底部である。磨滅しているため、椀の高台部が磨滅しているのか高台のない杯なのか判別できなかった。99～102までは須恵器である。99は、高台部は欠損しているが、大型の甕などの底部であると考えられる。外面は回転によるナデ調整、内面はナデ調整が施されている。常滑焼系の陶磁器の可能性もある。100は外面に格子状のタタキが施され、内面は青海波文がみられる。102は甕または壺の底部と思われる。ロクロ回転に合わせて2条、横位の沈線文を施す。上面には平行線状のタタキが見られる。内面は工具によるナデ調整が施されている。常滑焼系の陶磁器の可能性もある。103, 104は白磁である。103は白磁の皿と思われる。口縁部が屈曲し大きく外反する。口縁部内外面は釉が除去され、口禿状を呈する。104は白磁の椀底部で、内面見込部分にヘラ状工具片彫りとクシ状工具による施文が施されている。105～110は青磁である。105, 106は口縁部がやや肥厚し、外反する。107は輪花状を呈する口縁部である。109は内面にヘラ状工具片彫りとクシ状工具による施文が施されている。110は焼成不良の青磁であるが、内面にヘラ状工具片彫りによる文様が施されている。111は近世陶器、112は近世の染付である。111は口縁部で大きく屈曲し外反する。112は染付の小碗で、明治初期以降の在在系染付と考えられる。内面見込部にはアルミナが塗布されており、重ね焼きの名残と思われる。113は砂岩を石材とする石皿である。側面に敲打痕があるほか、中央部から下位にわたり、細い筋状の磨痕がみられる。114, 115は鍛冶に伴うと考えられる鉄滓である。

なお、攪乱出土ではあるが、112の白磁玉縁口縁と113青磁皿を図化した。113は高台を有さない底部で、内面見込部にヘラ状工具片彫りとクシ状工具をギザギザに施した文様がみられる。このような文様は、同安窯系青磁の特徴である。



第75図 日ノ丸遺跡 III層遺物



第76図 日ノ丸遺跡 II層及び表採遺物

第12表 日ノ丸遺跡 遺構計測表

挿図番号	出土区	遺構名	検出面	長径	短径	深さ	供伴遺物	備考
				(m)	(m)			
62	1 T	溝状遺構	Ⅲ			110	土器, 土師器, 須恵器	
68	B 1, 2	溝状遺構	V	(1.65)	0.50	15.0	土師器	

挿図番号	出土区	遺構名	検出面	長径	短径	深さ	供伴遺物	備考
				(m)	(m)			
66	A 1, 2	ピット1	Ⅲ層直下	0.40	0.32	35.0	土器, 土師器	
66	A 1	ピット2	Ⅲ層直下	0.42	0.34	27.0		
66	A 2	ピット3	Ⅲ層直下	0.33	0.25	22.0		
66	A 2	ピット4	Ⅲ層直下	0.41	(0.37)	73.0	土師器	
66	A 1	ピット5	Ⅲ層直下	0.24	0.15	3.0		
68	B 1	ピット6	Ⅳ	0.20	0.19	13.0	土師器	
68	B 1	ピット7	Ⅳ	0.25	0.25	40.0		埋土より自然木片出土

第13表 日ノ丸遺跡 遺物観察表(1) 土器

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	胎土				焼成	色調		調整		文様	備考
					石英	長石	角閃石	雲母		外	内	外壁面	内壁面		
69	6	A-1	V	甕	○	○		○	良好	灰褐	にぶい褐				
69	7	A-1	V		○	○		○	良好	赤	灰赤	ナデ	ナデ		
71	16	D-2	Ⅳa	鉢	○	○	○		良好	褐色	褐色	ナデ	ナデ		
73	24	C-2	Ⅳ		○	○	○		良好	にぶい褐	にぶい褐	ナデ	ナデ		
73	25	c-1	Ⅳ	鉢	○	○	○		良好	明赤褐	にぶい赤褐				
73	26	B-2	Ⅳ		○	○	○		良好	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ		
73	27	C-1	Ⅳ		○	○			良好	赤褐	にぶい赤褐	ミガキ	ミガキ		
75	65	B-1	Ⅲ	鉢	○	○		○	良好	にぶい橙	暗赤灰	ナデ	ナデ		
75	66	B-1	Ⅲ		○	○	○		良好	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	貼付突帯	
75	67	B-2	Ⅲ		○	○	○		良好	橙	橙	ナデ	ナデ		

日ノ丸遺跡 青磁・白磁

挿図番号	遺物番号	出土区	層	種別	器種	色調		法量(cm)			焼成	備考
						外	内	口径	底径	器高		
71	18	C-2	Ⅳa	青磁	椀	オリーブ黄	灰白				良好	ヘラ状工具による文様
73	42	D-7	Ⅳ	青白磁	合子	淡黄	淡黄				良好	
73	43	B-1	Ⅳ	青磁	皿	灰オリーブ	灰白				良好	
73	44	C-2	Ⅳ	白磁	椀	灰白	灰白				良好	玉縁口縁部
73	45	C-2	Ⅳ	白磁	椀	灰白	灰白				良好	
73	46	B-2	Ⅳ	白磁	椀	灰白	灰白		7.2		不良	
73	47	D-1	Ⅳ	白磁	椀	灰白	灰白		6.8		良好	
73	48	B-2	Ⅳ	白磁	椀	灰白	灰白				良好	
73	49	B-2	Ⅳ	白磁	椀	灰白	灰白				良好	内面見込みに沈線
73	50	C-2	Ⅳ	青磁	椀	オリーブ黄	灰白				良好	クシ状工具により施文
73	51	B-2	Ⅳ	青磁	椀	灰オリーブ	灰白				良好	
73	52	B-1	Ⅳ	青磁	椀	灰オリーブ	灰白				良好	ヘラ状工具による草花文
73	53	C-2	Ⅳ	青磁	椀	灰オリーブ	灰白				良好	ヘラ状工具による草花文
73	54	B-1	Ⅳ	青磁	椀	オリーブ黄	灰白				良好	ヘラ状工具による文様
73	55	D-1	Ⅳ	青磁	椀	オリーブ黄	灰白				良好	ヘラ状工具による文様
73	56	C-1	Ⅳ	青磁	椀	浅黄	灰白				良好	クシ状工具により施文
73	57	C-1	Ⅳ	青磁	椀	灰白	灰白				不良	
75	86	B-2	Ⅲ	白磁	合子	明オリーブ灰	灰白				良好	中央部に花文
75	87	B-2	Ⅲ	白磁	椀	灰白	明オリーブ灰				良好	玉縁口縁部
75	88	2 T	Ⅲ	白磁	椀	灰白	灰白				良好	
75	89	C-2	Ⅲ	白磁	椀	灰白	灰白				良好	内面に沈線2条
75	90	C-2	Ⅲ	青磁	椀	灰オリーブ	灰白				良好	クシ状工具により施文
75	91	B-2	Ⅲ	青磁	椀	灰白	灰白				良好	内面見込みに花文か
75	92	C-1	Ⅲ	青磁	皿	灰オリーブ	灰白				良好	
76	103	B-2	Ⅱ	白磁	椀	灰白	灰白				良好	口禿口縁部
76	104	A-2	Ⅱ	白磁	椀	灰白	浅黄				良好	内面見込に文様
76	105	A-1	Ⅱ	青磁	皿	灰オリーブ	灰白				良好	
76	106	C-1	Ⅱ	青磁	皿	オリーブ灰	オリーブ灰				良好	
76	107	C-2	Ⅱ	青磁	椀	灰オリーブ	灰白				良好	輪花椀
76	108	B-1	Ⅱ	青磁	皿	灰白	灰白				良好	
76	109	B-1	Ⅱ	青磁	椀	灰オリーブ	灰白				良好	ヘラ状工具, クシ状工具により施文
76	110	B-1	Ⅱ	青磁	椀	オリーブ黄	灰白				不良	ヘラ状工具による草花文
76	111	B-2	Ⅱ	陶器		灰白	灰				良好	
76	112	3 T	Ⅱ	染付	椀	灰白	灰白	10.2			良好	近世染付
76	116	攪乱		白磁	椀	灰白	灰白				良好	玉縁口縁部
76	117	攪乱		青磁	皿	灰白	オリーブ灰		4.0		良好	同安窯系青磁

第14表 日ノ丸遺跡 遺物観察表(2) 土師器・須恵器

挿図番号	遺物番号	出土区	層	種類	器種	色調		調整		法量(cm)			焼成	備考
						外	内	外面	内面	口径	底径	器高		
63	1	1 T	溝状遺構	土師器	杯か	浅黄橙	浅黄橙	マメツ	マメツ		7.0		良好	
63	2	1 T	溝状遺構	須恵器	甕	赤灰	赤	タタキ	タタキ				硬質	
68	3	B-2	ビット1	土師器	椀	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	マメツ				良好	
68	4	B-1	ビット6	土師器	杯	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ		7.8		良好	
68	5	A-2	溝状遺構	土師器	椀	黄橙	黄橙	マメツ	マメツ				良好	
70	8	B-1	IVb	土師器	椀	浅黄橙	浅黄橙	マメツ	マメツ				良好	
70	9	B-2	IVb	土師器	杯	灰白	にぶい橙	マメツ	マメツ		8.2		良好	
70	10	B-2	IVb	土師器	杯	灰白	にぶい橙	マメツ	マメツ		6.2		良好	
70	11	A-2	IVb	土師器	椀	淡黄橙	淡黄橙	マメツ	マメツ				良好	
70	12	B-2	IVb	土師器	椀か	淡黄橙	淡黄橙	マメツ	マメツ		9.0		良好	底部に初庄痕か
70	13	B-1	IVb	須恵器	甕	褐灰	にぶい橙	タタキ	タタキ				硬質	
71	17	C-2	IVa	土師器	杯	にぶい黄橙	浅黄橙	マメツ	マメツ		7.5		良好	底部ヘラ切り
72	19	B-2	IVa	土師器	皿	淡黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ	9.3	5.8	1.5	良好	底部ヘラ切り
72	20	B-2	IVa	土師器	皿	灰白	淡黄橙	マメツ	マメツ	9.2	5.3	1.4	良好	
72	21	B-2	IVa	土師器	杯	にぶい黄橙	灰白	ヨコナデ	ヨコナデ		7.9		良好	底部ヘラ切り
72	22	B-1	IVa	須恵器	甕	灰白	灰白	タタキ	タタキ				硬質	断面;灰白
73	28	C-2	IV	土師器	杯	橙	橙	ヘラケズリ	ヨコナデ		7.8		良好	
73	29	B-2	IV	土師器	椀	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ				良好	
73	30	B-2	IV	土師器	杯	浅黄橙	浅黄橙	マメツ	マメツ		5.3		良好	底部ヘラ切り
73	31	B-2	IV	土師器	椀	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコナデ	マメツ				良好	
73	32	C-2	IV	土師器	椀	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	マメツ		6.5		良好	
73	33	C-1	IV	土師器	椀	にぶい黄褐	褐灰	ヨコナデ	マメツ		7.4		良好	内黒土師器
73	34	C-2	IV	須恵器	壺	にぶい黄橙	灰白	ヨコナデ	ナデ				硬質	断面;灰白
73	35	B-1	IV	須恵器	甕	灰白	灰白	ヨコナデ	タタキ				硬質	断面;灰白
73	36	C-1	IV	須恵器	甕	灰白	灰黄褐	ヨコナデ	タタキ				硬質	断面;灰白
73	37	B-2	IV	須恵器	甕	浅黄橙	浅黄	タタキ	マメツ				軟質	下がり山系
73	38	B-2	IV	須恵器	甕	灰白	灰	タタキ	タタキ				硬質	断面;灰白
73	39	B-2	IV	須恵器	壺	灰白	褐灰	ナデ	ナデ				硬質	断面;灰白 常滑焼か
73	40	C-2	IV	須恵器	甕	黄灰	明黄褐	タタキ	タタキ				硬質	
73	41	B-1	IV	カムイヤキ		暗灰	にぶい赤褐	タタキ	タタキ				硬質	断面;にぶい赤褐
74	58	B-2	IV	須恵器	鉢か	灰	灰白	ヨコナデ	ヨコナデ				軟質	東播磨系須恵器か
74	59	C-2	IV	須恵器		灰白	灰白	ヨコナデ	ヨコナデ				軟質	東播磨系須恵器か
75	68	C-2	III	土師器	杯	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ		5.0		良好	底部ヘラ切り
75	69	D-2	III	土師器	皿か	明黄褐	黄橙	マメツ	マメツ		7.0		良好	
75	70	C-1	III	土師器	杯	灰白	灰白	マメツ	マメツ		6.8		良好	
75	71	B-2	III	土師器	杯	浅黄	灰白	ヨコナデ	マメツ		6.2		良好	底部ヘラ切り
75	72	C-1	III	土師器	杯	灰白	明黄褐	マメツ	マメツ		8.2		良好	底部ヘラ切り
75	73	C-2	III	土師器	杯	明黄褐	浅黄橙	マメツ	マメツ		5.7		良好	充実高台
75	74	E-2	III	土師器	椀	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	マメツ		5.7		良好	
75	75	C-2	III	土師器	椀	浅黄橙	にぶい黄橙	マメツ	マメツ				良好	
75	76	2 T	III	土師器	椀	灰白	灰白	マメツ	マメツ		6.5		良好	
75	77	B-1	III	土師器	椀	浅黄橙	褐灰	マメツ	ミガキ				良好	内黒土師器
75	78	2 T	III	須恵器	甕	黄灰	灰白	タタキ	タタキ				硬質	
75	79	D-2	III	須恵器	甕	黄灰	黄灰	タタキ	タタキ				硬質	
75	80	C-1	III	須恵器	甕	黄灰	黄灰	タタキ	タタキ				硬質	
75	81	B-1	III	須恵器	甕	明褐灰	にぶい橙	タタキ	タタキ				硬質	
75	82	B-2	III	須恵器	甕	灰	灰	タタキ	タタキ				硬質	
75	83	B-1	III	須恵器	甕	褐灰	にぶい橙	タタキ	タタキ				硬質	
75	84	C-1	III	須恵器	甕	灰	灰	タタキ	タタキ				硬質	
75	85	A-1	III	須恵器		黄灰	灰白	ヘラケズリ	ヨコナデ				軟質	東播磨系須恵器か
76	94	3 T	II	土師器	皿	浅黄橙	橙	マメツ	マメツ		6.3		良好	底部ヘラ切り
76	95	1 T	II	土師器	杯	橙	橙	ヨコナデ	マメツ		8.1		良好	底部ヘラ切り
76	96	C-1	II	土師器	椀	浅黄橙	褐灰	マメツ	ミガキ				良好	内黒土師器
76	97	C-1	II	土師器	椀	橙	黄橙	マメツ	マメツ				良好	
76	98	B-2	II	土師器	椀	浅黄橙	浅黄橙	マメツ	マメツ				良好	
76	99	C-2	II	須恵器		灰白	灰白	ヨコナデ					硬質	断面;灰白 常滑焼か
76	100	B-1	II	須恵器	甕	灰白	灰白	タタキ	タタキ				硬質	断面;灰白
76	101	B-2	II	須恵器	甕	灰白	にぶい黄橙	タタキ	タタキ				硬質	
76	102	B-2	II	須恵器		褐灰	灰白	タタキ	布庄痕				硬質	外面に沈泥2条 常滑焼か

日ノ丸遺跡 石器, 鉄製品

挿図番号	遺物番号	出土区	層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
70	14	B-2	IVb	敲石	10.2	5.1	2.7	212.0	砂岩	
70	15	B-1	IVb	石皿	12.8	8.2	3.8	680.0	砂岩	剥離痕あり
72	23	B-1	IVa	石庖丁	(3.8)	(4.0)	0.7	(12.6)	粘板岩	
74	60	B-1	IV	滑石製品	(2.2)	(2.0)	1.1	(8.0)	滑石	穿孔あり
74	61	B-2	IV	砥石	(5.9)	(5.8)	(5.3)	(35.0)	軽石	
74	62	C-2	IV	磨石	5.5	4.1	3.4	89.0	砂岩	磨面赤色化
74	63	C-1	IV	鉄滓	5.9	4.4	2.7	62.0		
74	64	B-1	IV	鉄滓	4.4	3.6	1.3	16.0		
75	93	B-2	III	磨石	6.0	5.3	3.2	139.0	砂岩	
75	113	1 T	II	石皿	17.6	9.4	5.8	1221.0	砂岩	細い筋状の磨痕あり
75	114	B-1	II	鉄滓	3.5	2.6	1.6	12.0		
75	115	A-2	II	鉄滓	4.5	3.5	0.9	18.0		

第5節 日ノ丸遺跡中世畠跡の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鹿児島県熊毛郡南種子町日ノ丸遺跡は、鹿鳴川下流の沖積平野に立地する。こんな器の発掘調査区内では中世（11-14世紀）の遺物が混在する包含層が見られ、建物跡や畠跡などの遺構が検出される。

今回は、畠跡での栽培植物に関する情報を得る目的で、植物珪酸体分析を実施した。

1. 試料

発掘調査区内では、砂質土であるd層の上位に粘質土あるいは砂質土の堆積が見られ、大きくI層-VI層に区分される。これらの土層は、南側(海側)に向かって緩やかに傾斜する。このうち、VI層とV層は粘質土層、IV層-II層が砂質土層、I層は耕作土の砂利層である。VI層はVIa層、VIb層、VIc層に、IV層はIVa層とIVb層に細分される。IV層-II層は、11-14世紀の遺物が混在する包含層である。また、IV層とIII層の間にはa層とb層とされる砂質土層が見られ、中世の造成層とされる。

畠跡は、調査区B地区のIV層面で検出された。試料は、遺構断面のIV層から土壌試料3点(試料番号1-3)と、南側の調査区壁面に見られ、IV層の下位に当たるIVa層から土壌試料1点(試料番号4)が採取され、全点を分析試料に用いた。

2. 分析方法

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示すとともに、植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

結果を表1、図1に示す。

壁面IVa層および畠跡IV層の各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

壁面IVa層試料では、植物珪酸体含量が約3,400個/gである。栽培植物としてはイネ属が検出され、葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、籾殻に形成される穎珪酸体が認められる。その含量は、短細胞珪酸体が約50個/g、機動細胞珪酸体が約140個/g、穎珪酸体が約20個/gである。この他、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。また、イネ科起源の他

表1. 畠跡の植物珪酸体含量

種 類	畠跡			壁面
	試料番号	IV層	IV層	IVa層
	1	2	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	0	0	23	47
タケ亜科	115	52	23	141
ヨシ属	57	0	0	47
ウシクサ族ススキ属	115	0	0	47
イチゴツナギ亜科	229	104	0	71
不明キビ型	172	260	0	283
不明ヒゲシバ型	0	0	0	24
不明ダンチク型	0	0	46	118
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	459	104	137	141
タケ亜科	229	260	68	283
ヨシ属	229	312	0	141
ウシクサ族	229	312	23	259
不明	1,376	1,249	205	1,014
珪化組織片				
イネ属穎珪酸体	0	0	23	24
樹木起源				
第Ⅲグループ	688	572	0	802
合 計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	688	416	92	778
イネ科葉身機動細胞珪酸体	2,522	2,237	433	1,838
珪化組織片	0	0	23	24
樹木起源	688	572	0	802
総 計	3,898	3,225	548	3,442

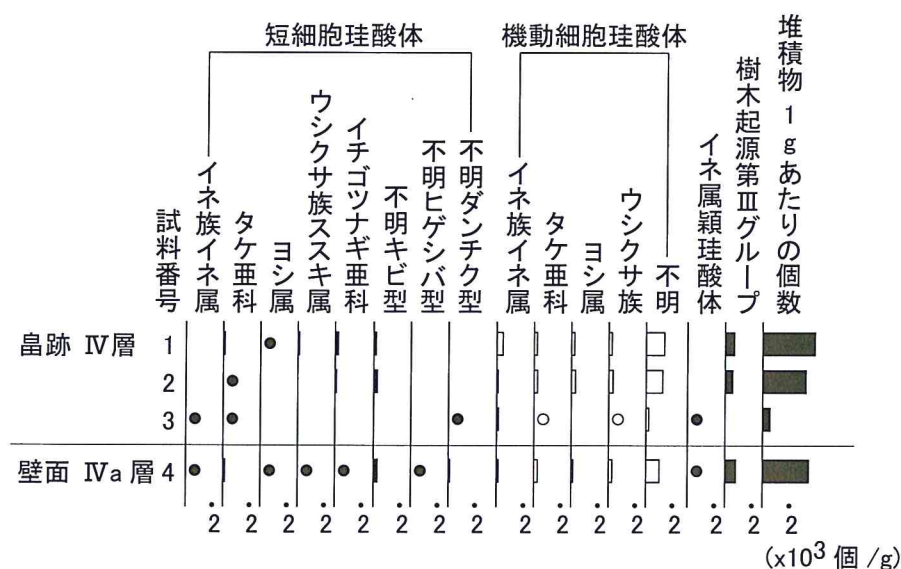


図1. 畠跡での植物珪酸体含量の変化

堆積物 1gあたりに換算した個数を示す。●○は 100 個/g 未満の種類を示す。

に樹木起源珪酸体第Ⅲグループ(近藤・ピアスン,1981)が検出される。この珪酸体は「Yの字」あるいは「くの字」状の形態を呈し、維管束細胞の節部がケイ化したもので樹木葉部の観察できるとされている。検出された分類群の中では、タケ亜科と樹木起源珪酸体第Ⅲグループの産出が目立つ。

畠跡Ⅳ層試料では、試料番号1と2で植物珪酸体含量が3,000個/gを超えるものの、試料番号3では500個/g程度である。各試料からは、壁面Ⅳa層試料と同様にイネ属が検出される。試料番号1と2では機動細胞珪酸体、試料番号3では短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体、穎珪酸体が認められる。このうち、試料番号1の機動細胞珪酸体の含量は約460個/g、で、産出が目立つ。試料番号2の機動細胞珪酸体の含量は約100個/gである。試料番号3では、短細胞珪酸体が約20個/g、機動細胞珪酸体が約140個/gで産出が目立ち、穎珪酸体が約20個/gである。この他に、壁面Ⅳa層試料でも見られたタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などのイネ科起源の植物珪酸体や樹木起源珪酸体第Ⅲグループも検出される。

4. 考察

畠跡のⅣ層では、イネ属が検出された。Ⅰ層(耕作土層)の影響が下位のⅣ層に及んでいないとすれば、畠跡にイネ属の植物体が存在したことが示唆される。またその当時、畠で陸稲栽培が行われていたことや、稲藁堆肥や敷き藁利用されたことが示唆される。

鹿児島県内で検出されている中世頃の畠跡にはイネ属の植物珪酸体が産出した調査例があり、指宿市の橋牟礼川遺跡で検出された西暦874年の開聞岳噴火により埋没した畠跡、始良郡福山町の藤兵衛坂段遺跡で検出された文明ボラ(桜島3テフラ：西暦1471年)により埋没した畠跡、川辺郡金峰町の芝原遺跡で検出された中世とされる畠跡などで稲作の可能性が指摘されている(杉山,1993：株式会社古環境研究所,1997：パリノ・サーヴェイ株式会社,未公表)。当該期の畑作の様態には地域差があると思われるが、この点については今後の調査課題となろう。

また、畠跡Ⅳ層の下位に当たる壁面のⅣa層でもイネ属の植物珪酸体が認められ、Ⅳa層での稲作あるいは稲藁や初穀の利用が示唆される。今後さらに、複数の地点で層位的に植物珪酸体分析を実施し、層位的あるいは空間的にイネ属の分布を調査することで、イネ属の消長や耕作地の広がりについてさらに明らかにできる可能性がある。さらに、前述した藤兵衛坂段遺跡の畠跡では、キビ族(ヒエ属型)の植物珪酸体も検出されている(株式会社古環境研究所,1997前出)。今回の植物珪酸体の産状からはキビ族などイネ属以外の作物の痕跡は認められず、稲作以外の畑作が行われていたことは明確にできなかった。今後さらに、花粉分析あるいは炭化した種実を対象とした種実同定を併用することにより、イネ属以外の栽培植物に関する情報も得られると思われる。

なお、今回の分析結果ではイネ属の含量が数十-数百個/g程度と少なく、畠跡の一部で機動細胞珪酸体のみが検出された。また、概して植物珪酸体含量も少なかった。蒸発量の多い亜熱帯湿潤気候下では、珪酸のかなりな部分が溶脱するとされている(松井,1988)。また、植物珪酸体は湿潤な土壌や土壌温度が高い堆積物の方が、植物珪酸体の風化の度合いが高いとされている(近藤,1988)。植物珪酸体は非結晶質の珪酸で構成されるため、このような脱珪酸化作用などの化学的風化作用の影響を受けることが十分に考えられる。これらの点を考慮すれば、現在までに受けた風化作用により、土壌中に埋積した植物珪酸体が溶解、消失した可能性もある。

ところで、植物珪酸体の産状からは畠跡の周辺にタケ亜科、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科な

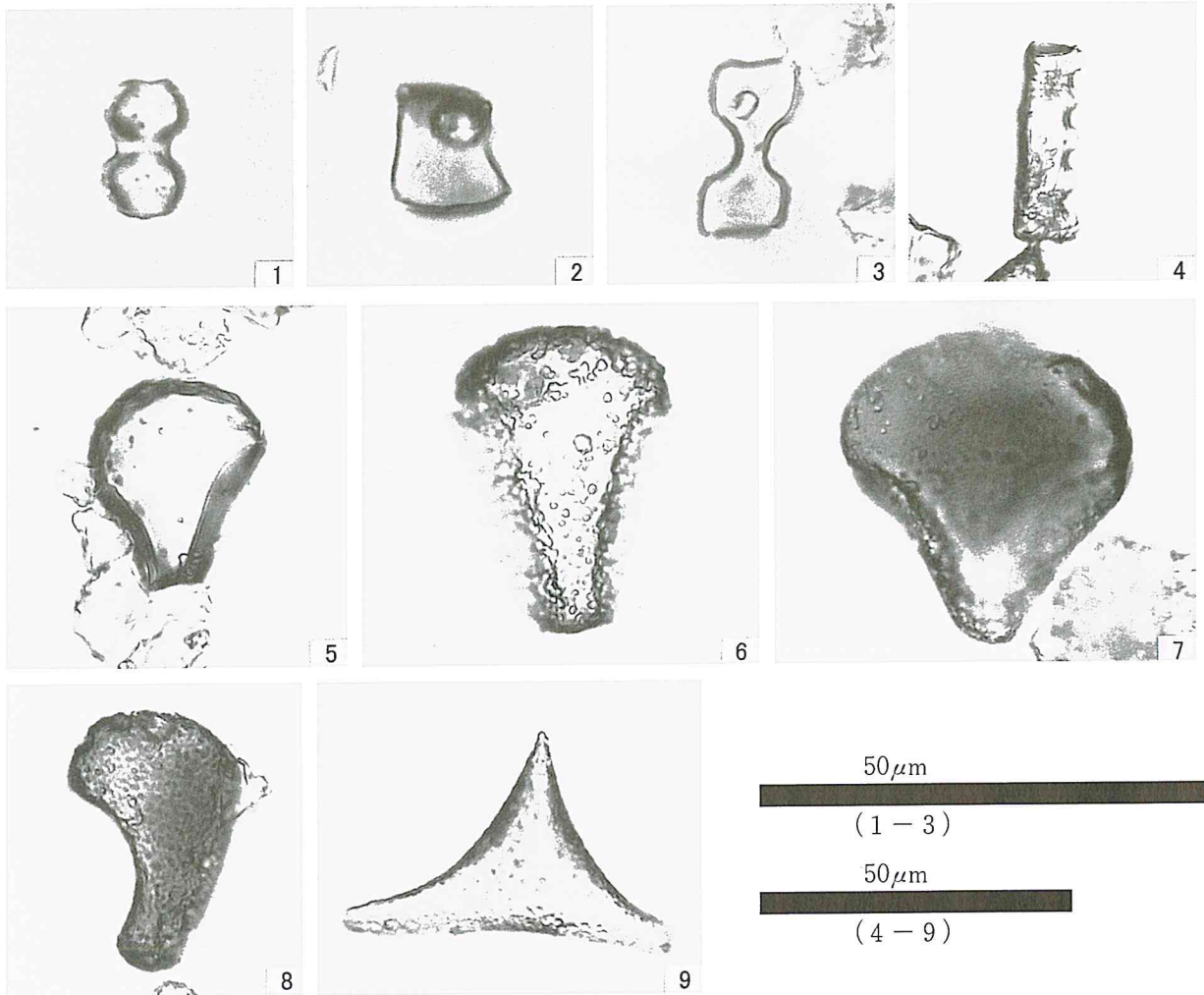
どのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。これらの種類は、開けた場所に生育する種類である。タケ亜科やススキ属には乾いた場所に生育する種類が多く、ヨシ属は湿潤な場所に生育する。そのため、調査区の周辺は開けており、かつ乾燥した場所や湿潤な場所が存在していたと思われる。

また、樹木起源の植物珪酸体も認められた。今回検出された樹木起源珪酸体は、ブナ科・モクレン科・マンサク科（イスノキ）など照葉樹林要素となる分類群を含む種類の葉部に数多く含まれるとされているが、大部分の樹木の葉部に形成するとされている（近藤・ピアスン, 1981前出）。そのため、種類の特定は困難であるが、調査区の周辺には、樹木の生育していたことがうかがえる。本島の植生変遷史については調査例が少なく、今回のような基礎資料の集積が重要である。今後さらに、植物珪酸体分析や花粉分析とともに炭化材や種実遺体などの大型植物遺体の調査例を蓄積し、植生変遷や栽培植物の消長について検証することが望まれる。

引用文献

- 株式会社古環境研究所, 1997, 福山町, 藤兵衛坂段遺跡における自然科学分析. 福山町埋蔵文化財発掘調査報
- 調査報
- 告書3集「藤兵衛坂段遺跡 県営特殊農地保全整備事業（新原地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 福山町教育委員会, 41-47.
- 近藤 鍊三, 1988, 植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代. ペドロジスト, 32, 189-203.
- 近藤 鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.
- 近藤 鍊三・ピアスン 友子, 1981, 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報)双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について. 帯広畜産大学研究報告, 12, 217-229.
- 松井 健, 1988, 土壤地理学序説, 築地書館株式会社, 316p.
- 杉山 真二, 1993, 指宿市橋牟礼川遺跡, 遺跡範囲確認調査の自然科学分析. 指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書12集「橋牟礼川遺跡Ⅴ」, 鹿児島県指宿市教育委員会, 100-109.

図版1 植物珪酸体



- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体 (IV a 層; 4) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (IV a 層; 4) |
| 3. ススキ属短細胞珪酸体 (畠跡IV層; 1) | 4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (畠跡IV層; 1) |
| 5. イネ属機動細胞珪酸体 (畠跡IV層; 3) | 6. タケ亜科機動細胞珪酸体 (IV a 層; 4) |
| 7. ヨシ属機動細胞珪酸体 (畠跡IV層; 1) | 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (IV a 層; 4) |
| 9. 樹木起源珪酸体第Ⅲグループ (IV a 層; 4) | |

第6節 まとめ

1. 遺構について

今回の調査では、掘立柱建物跡の可能性のある4基を含むピット7基と畝跡、溝状遺構2条を検出した。

日の丸遺跡より約150m西南西方向には、ほぼ時期を同じくする本村丸田遺跡がある。昭和60年に発掘調査が行われ、3棟の掘立柱建物跡を検出している。本村丸田遺跡の1号掘立柱建物跡の梁間、桁間が約180cm、2号掘立柱建物跡が約130cmであるのに対し、今回検出したピット間の距離はそれぞれ1m前後であった。調査範囲が限られていたため遺構の全容は確認できなかったが、ピットが一様の距離で検出され、立ち上がりやプランがはっきりしていること、ピット4で礎石の可能性のある礫が検出されたことより、掘立柱建物跡になる可能性は高いと考える。

また、今回、Ⅲ層で畝跡と想定される畝跡を検出した。珪酸体分析で植生を調べた結果、イネ属が検出された。当該地は現在も春から夏にかけては水田として使用されており、そうした影響の可能性も考えられるが、12の土師器底部に粘土の圧痕の可能性のあるくぼみがみられることや本村丸田遺跡の採集品に粘土痕のある土師器が出土していることなどから、当時稲作に使用されていた可能性は高いと考えられる。

2. 遺物について

Ⅱ層～Ⅳ層まで幅広く遺物が出土している。今回は層序ごとに掲載したが、水成作用を受けやすい地質状況もあり、様々な時代の遺物が混入していた。Ⅱ層では比較的新しい時代の遺物が多く、Ⅳ層では土器など古い時代の遺物が多いというおおまかな傾向はみられるものの、層序毎に時代の分別は出来なかった。杯や小皿の土師器底部はすべてヘラ切りで、糸切りの底部は出土していない。鹿児島県では、ヘラ切りから糸切りに技法が変化するの12世紀後半頃である。また、内黒土師器（黒色土器A類）も、少量ではあったが出土している。須恵器は小片のみであったが、食膳具はなく、いずれも甕、壺の一部であった。中でも、特筆すべきはカムイヤキで、種子島で初めての出土である。カムイヤキは、徳之島カムイヤキ窯で生産された「類須恵器」で、吐渇喇列島から先島諸島までの範囲で流通していたと考えられている。11世紀後半～13、14世紀頃まで生産され、本土でも搬入品として出土している。南島諸島と本土との中間に位置する種子島において、今後もカムイヤキの出土例は増加すると想定される。貿易陶磁器については、白磁は玉縁口縁や口縁部が外反するものが多く、Ⅱ層では口禿の口縁部がみられる。青磁は龍泉窯系の椀が大半で、ヘラ状工具やクシ状工具で内面に文様を施している。Ⅱ層では杯の体部下位を屈曲させ外反するものが多い。龍泉窯系青磁の特徴である、外面に連弁文を施した椀はほとんど出土せず、1点鎚連弁をもつ小片が出土したのみである。また、113を含め、同安窯系の青磁と思われるものも若干出土している。

以上のことから、時期は11世紀後半～12世紀を中心として13世紀まで下ると考えられる。また、鍛冶炉自体は検出されなかったが、鍛冶に伴う小鉄滓、羽口片、砥石に使用したと考えられる軽石製品など、鍛冶に伴う遺物もいくらか出土している。

3. 小結

調査の結果、日ノ丸遺跡は11世紀後半～13世紀の遺跡であることが明らかとなった。種子島は古代・中世の遺跡が非常に少なく、当時の様相はほとんど分かっていない。南種子町では、越州窯系青磁が出

土した9世紀後半から10世紀頃の松原遺跡や前述の本村丸田遺跡、藤平小田遺跡などがある。越州窯系青磁の出土は、種子島では西之表市の西俣遺跡について2例目である。本村丸田遺跡は、土師器はヘラ切りと糸切りが混在することからその過渡期にあたる12世紀後半以降の遺跡と考えられるが、日ノ丸遺跡では出土した貿易陶磁から時期は13世紀まで下ると考えられるため、大きな時期差はないと考えられる。両遺跡は距離にして約150m離れており、本村丸田は標高約28.7m、日ノ丸遺跡は標高約5.5mである。日ノ丸遺跡の居住空間は本村丸田同様、より内陸の山手側にあると想定される。

また、今回畠跡が検出されたことで、当時の農耕状況の一端を明らかにすることができた。敷領遺跡は鹿児島県指宿市の遺跡で、西暦874年3月25日に降下した火山灰で覆われた当時の水田、畠跡を検出し、古代律令制度の下では基本的には水田による稲作が行われていたものの水田と畠両方で稲を栽培していたことが明らかになった。こうしたことから、日ノ丸遺跡の畠跡で稲作を行っていた可能性は高いと考えられる。

日本書紀天武10年(681年)には、多禰国について『稗稻常豊。一殖兩収。(稗稻は常に豊かで、一度植えたら二度収穫できる)』と記されている。温暖湿潤で稲作に適した環境にあった種子島では、早くから稲作がおこなわれていたと考えられる。今回、IV b層で底部に沓痕の可能性のある土師器が出土するなど、稲作に関わる遺物もいくらか出土している。中でも、IV a'層からは粘板岩製の石庖丁が出土していることに注目したい。今回の調査では層序による時代の分別ができず時代の特定には至らなかったが、石庖丁は西之表市の表採品について2例目である。一ノ坪遺跡で沓痕のついた土器が出土したと併せ、種子島の稲作開始時期を考える上で重要な資料となるといえよう。

11世紀後半は、本土では金峰町持躰松遺跡など万ノ瀬川流域の遺跡で貿易陶磁が大量に出土し、交易の拠点として活性化する時期である。日ノ丸遺跡は種子島南端の沖積平野に位置し、鹿鳴川や郡川など河川流路もある。貿易陶磁器や東播磨系須恵器、常滑焼などが多く出土した背景にはこうした交易活動と関わりがあるものと考えられる。

また、鉄滓や羽口片が出土したことから、鍛冶を営んでいたことが明らかとなった。1543年鉄砲伝来以後、日本に鉄砲が定着した背景には、種子島の製鉄・鍛冶の高度な技術が指摘されており、その前段階の鍛冶の様相を考える上で興味深い資料である。

種子島の古代・中世期はまだまだ不明な点も多いが、今回種子島最大の沖積平野で古代～中世の遺跡が調査できた成果は非常に大きい。

参考文献

中村和美2006「4.奈良・平安時代の諸問題8土師器と須恵器」『先史・古代の鹿児島通史編』

鹿児島県教育委員会pp.630～639

高梨修2006「4.奈良・平安時代の諸問題9交易」『先史・古代の鹿児島通史編』

鹿児島県教育委員会pp.639～644

山本信夫1999「中世前期の貿易陶磁器～その分析視点～」『原遺跡七郎丸1遺跡・口寺田遺跡』

国東町教育委員会

森田勉ほか1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館

圖 版

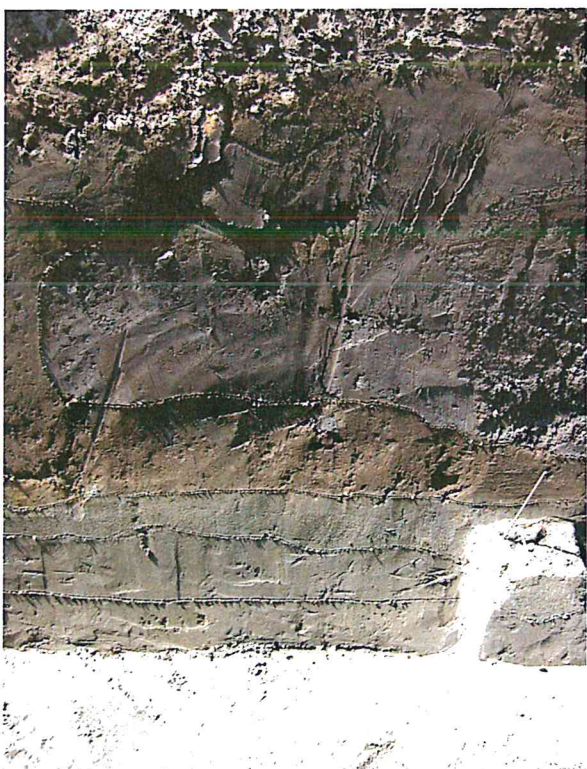
図版 1



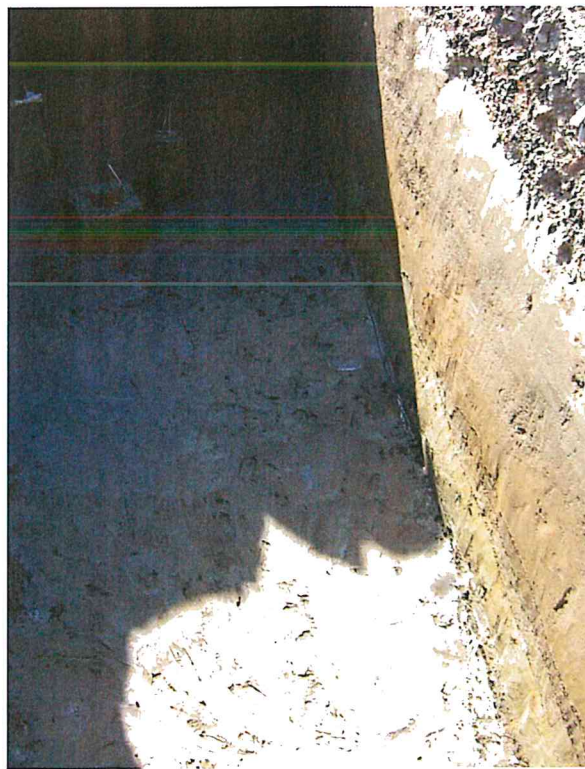
1. 植松遺跡標準土層写真



2. 一ノ坪遺跡確認調査第4トレンチ土層写真
↓で示した黄白色の層は、火山灰層の可能性が
ある。



3. 一ノ坪遺跡標準土層写真



4. 高田遺跡2トレンチ西側土層写真

各遺跡の土層断面(1)

図版 2



1. 真所汐入B遺跡1トレンチ西側土層写真



2. 有鹿野遺跡 土層写真



3. 下鹿野遺跡 土層写真



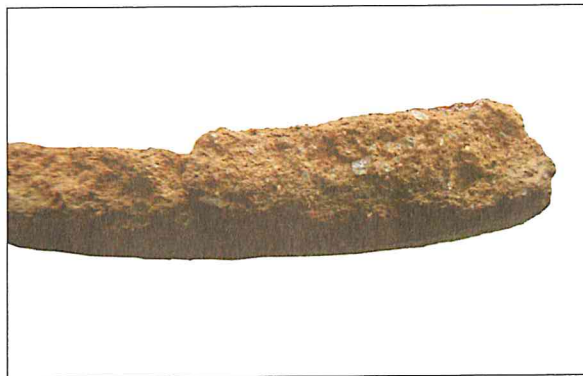
4. 日ノ丸遺跡 土層写真

各遺跡の土層断面(2)

図版 3



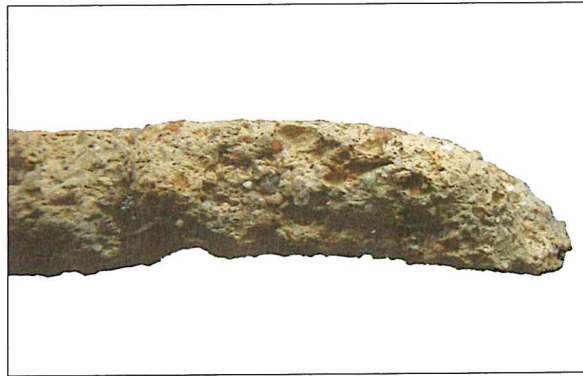
1. 植松遺跡苦浜式土器胎土 (遺物番号 3)



2. 植松遺跡妙見・天道ヶ尾式土器胎土 (遺物番号 4)



3. 植松遺跡土器胎土 (遺物番号 5)



4. 植松遺跡吉田式土器胎土 (遺物番号11)



5. 一ノ坪遺跡土器胎土 (遺物番号 1)



6. 一ノ坪遺跡土器胎土 (遺物番号 6)



7. 一ノ坪遺跡土器胎土 (遺物番号23)



8. 一ノ坪遺跡土器胎土 (遺物番号35)

出土土器の胎土(1)

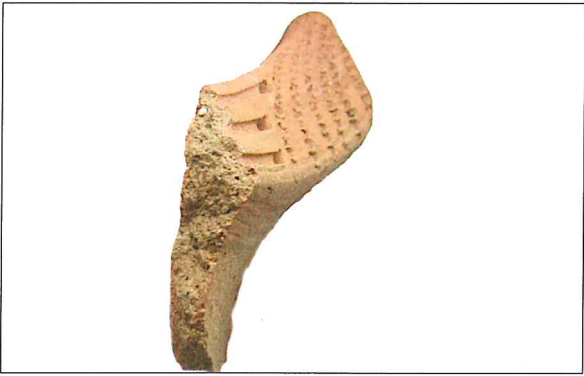
図版 4



1. 高田遺跡土器底部胎土 (遺物番号 1)



2. 有鹿野遺跡松山式土器胎土 (遺物番号 1)



3. 有鹿野遺跡土器胎土 (遺物番号10)



4. 有鹿野遺跡丸尾式土器胎土 (遺物番号18)



5. 有鹿野遺跡一湊式土器胎土 (遺物番号35)



6. 有鹿野遺跡納曾式土器胎土 (遺物番号37)



7. 有鹿野遺跡納曾式系土器胎土 (遺物番号40)



8. 日ノ丸遺跡カムイヤキ胎土 (遺物番号40)

出土土器の胎土(2)

図版 5



1. 植松遺跡 調査区全景 (完掘写真)



2. 植松遺跡 調査前風景



3. 植松遺跡 調査区遠景



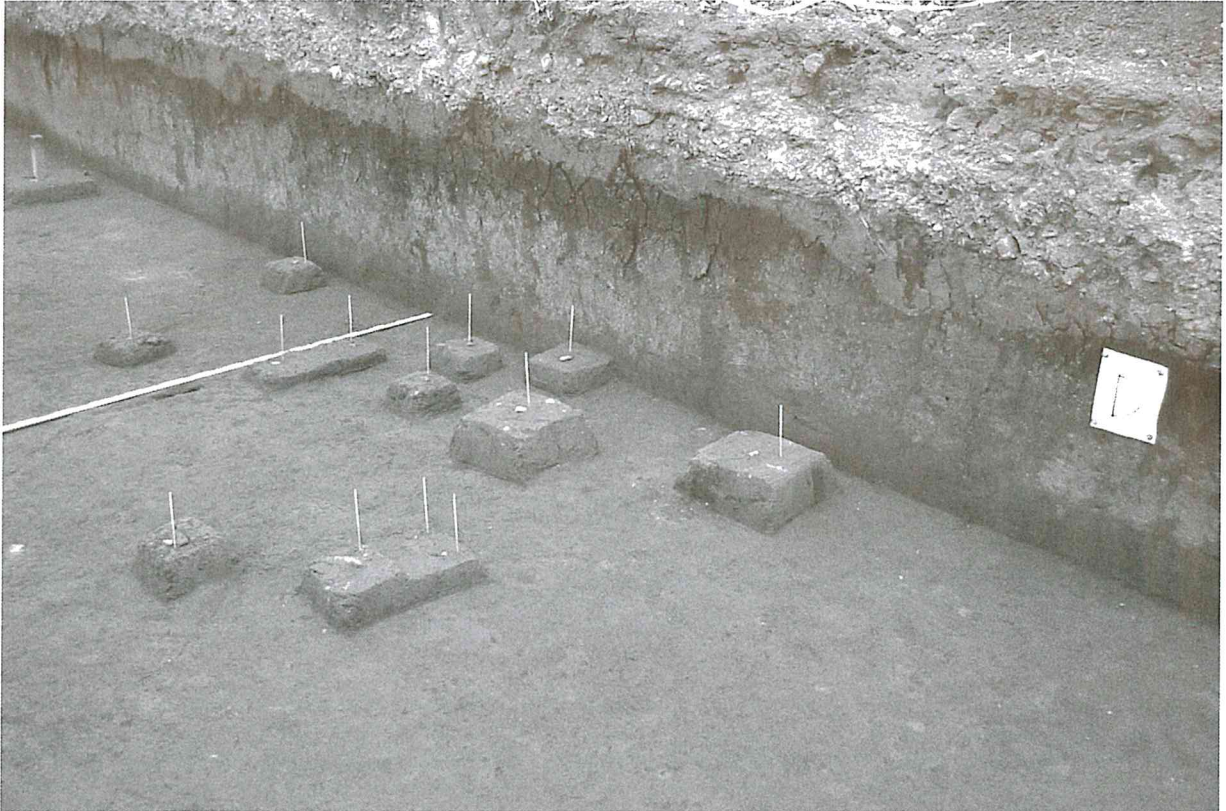
4. 植松遺跡 表土剥ぎ状況



5. 植松遺跡 発掘調査風景

植松遺跡 調査写真(1)

図版 6



1. 植松遺跡 D区出土状況(1) (東より撮影)



2. 植松遺跡 D区出土状況(2) (北より撮影)



3. 植松遺跡 苦浜式土器破片出土状況



4. 植松遺跡 局部磨製石斧出土状況



5. 植松遺跡 南種子中学校生徒職場体験学習

植松遺跡 調査写真(2)

図版 7



1. 一ノ坪遺跡 調査地点遠景



2. 一ノ坪遺跡 調査地点全景



3. 一ノ坪遺跡 遺物出土状況

一ノ坪遺跡 調査写真(1)

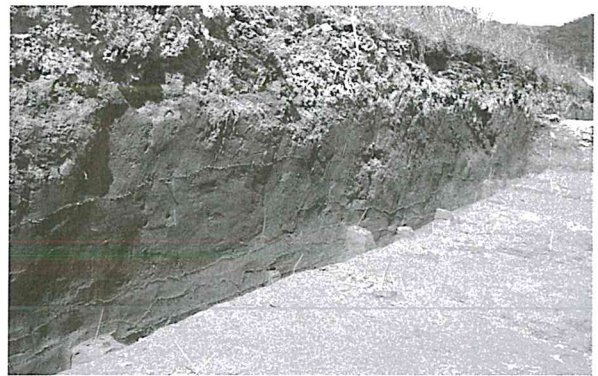
図版 8



1. 一ノ坪遺跡 須恵器散布地で表面採集をする南種子中学校生徒



2. 一ノ坪遺跡 発掘調査風景



3. 一ノ坪遺跡 土層堆積状況



4. 一ノ坪遺跡 調査指導 (県文化財課堂込氏)



5. 一ノ坪遺跡 重機仕様状況

一ノ坪遺跡 調査写真(2)

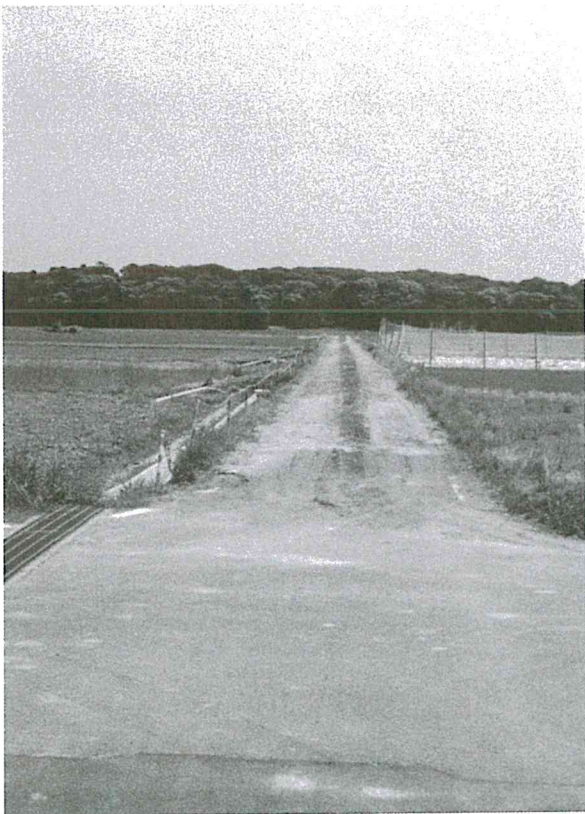
図版 9



1. 高田遺跡 調査風景



2. 高田遺跡 土器底部出土状況



3. 真所汐入B遺跡 調査地点近景



4. 真所汐入B遺跡 曾畑式土器出土状況

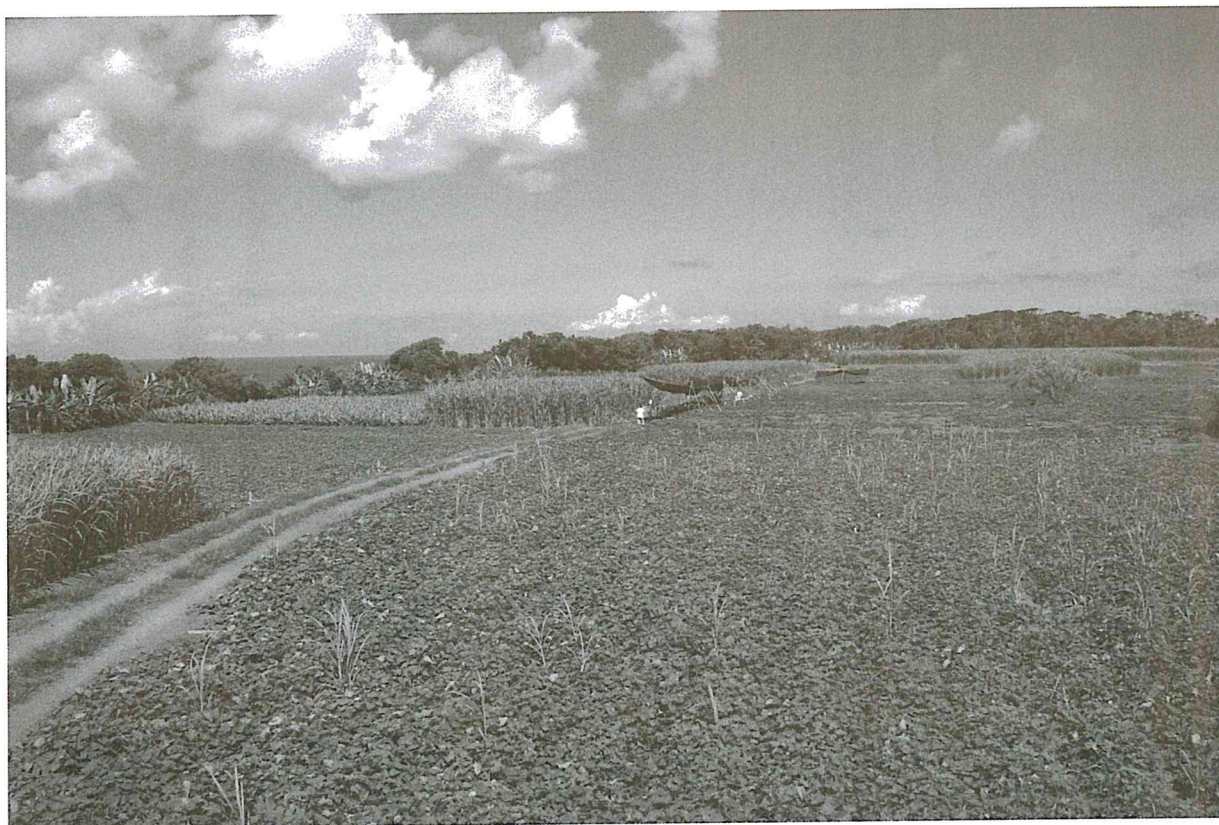
高田遺跡・真所汐入遺跡 調査写真



1. 高田遺跡 発掘作業員の集合写真



2. 整理作業員の集合写真
発掘作業員・整理作業員の集合写真



1. 有鹿野遺跡 遠景



2. 調査前の状況



3. 溝状遺構検出状況



4. 5トレンチ噴礫検出状況



5. 5トレンチ噴礫断面

有鹿野遺跡 調査写真(1)

図版12



1. 遺跡からロケットの打ち上げを望む (左)
2. 6トレンチ種Ⅳ下検出の炭化物 (右)
(炭化物検出地点に竹串を立てている)



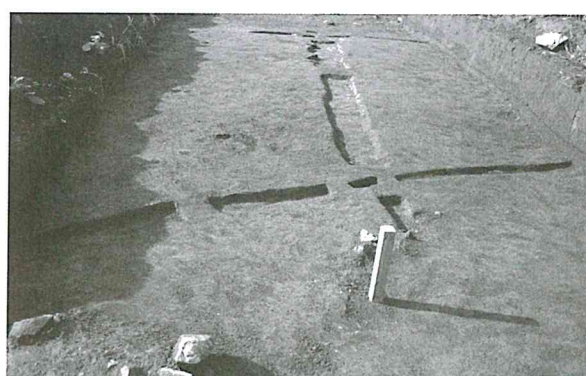
3. 遺物出土状況(1)



3. 遺物出土状況(2)



4. 中学生職場体験



5. 溝状遺構検出状況

有鹿野遺跡 調査写真(2)

図版13



1. 調査前の状況



2. 噴礫検出状況



3. 発掘調査風景



4. 溝状遺構検出状況

下鹿野遺跡 調査写真(1)



1. 集石検出状況



2. 集石断面



3. 集石底部の大型礫



4. 集石底部土層断面

下鹿野遺跡 調査写真(2)

図版15



1. 日ノ丸遺跡 遠景 (中央部小さな森山あたりが遺跡)



2. 調査前の状況



3. 調査区 (北から撮影)

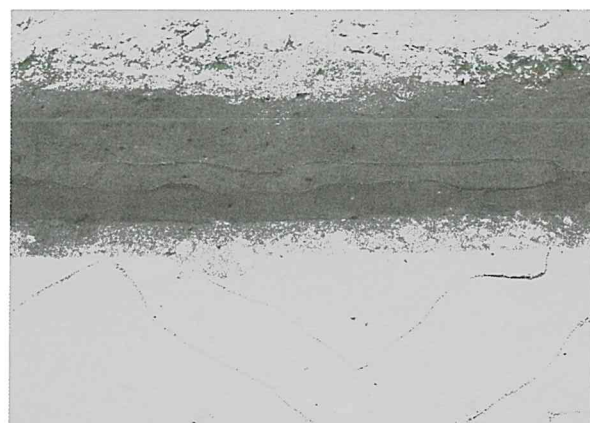


4. 1トレンチ土層断面にかかる溝状遺構



5. 遺物出土状況

日ノ丸遺跡 調査写真(1)



1. 畠跡検出状況 (上)
2. 畠跡完掘状況 (左下)
3. 畠跡土層断面 (右下)

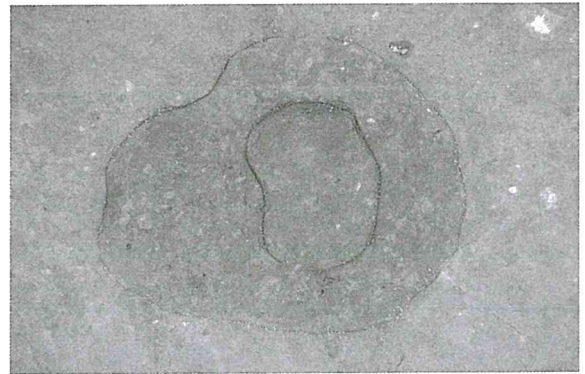
日ノ丸遺跡 調査写真(2)



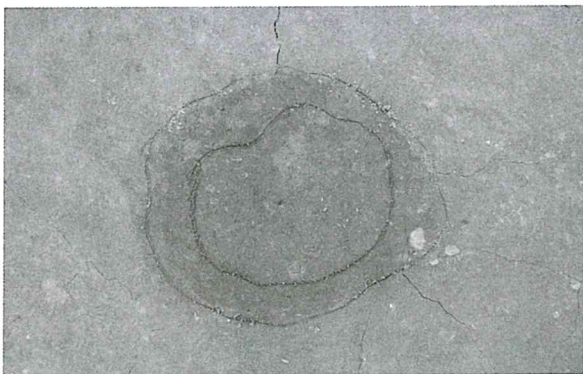
1. ピット検出状況



2. ピット1



3. ピット2



4. ピット3



5. ピット4断面

日ノ丸遺跡 調査写真(3)



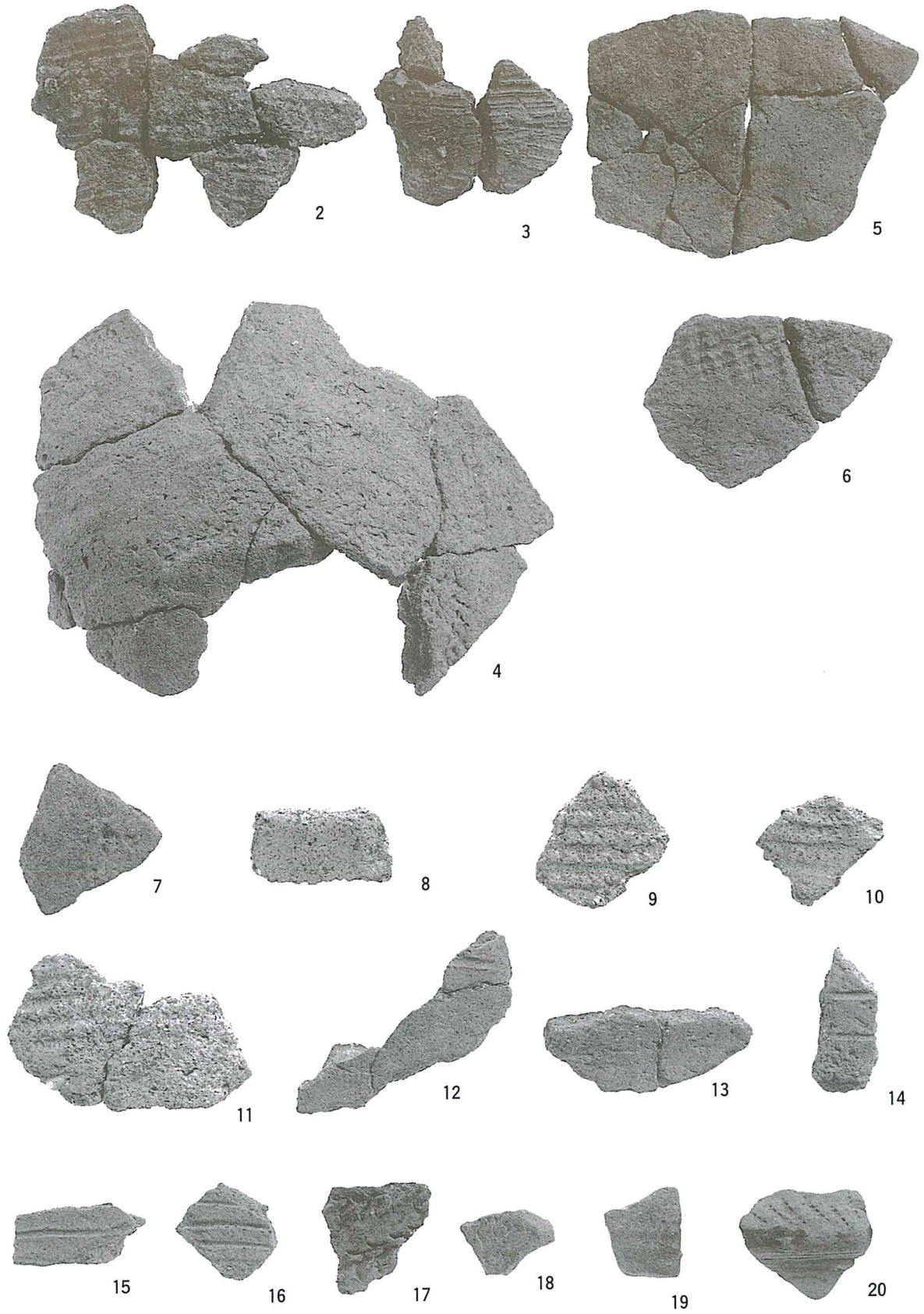
1. A区土層



2. ピット6半截 (左中)
3. ピット7土層断面 (下部に木片がみえる) (右下)
4. 溝状遺構 (左下)

日ノ丸遺跡 調査写真(4)

図版19



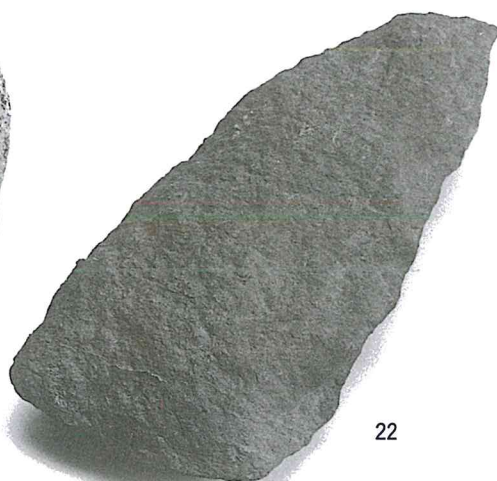
植松遺跡 出土遺物(1)



植松遺跡 出土遺物(2)



21



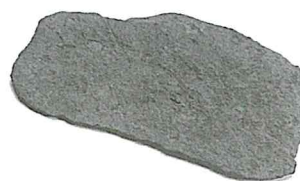
22



23



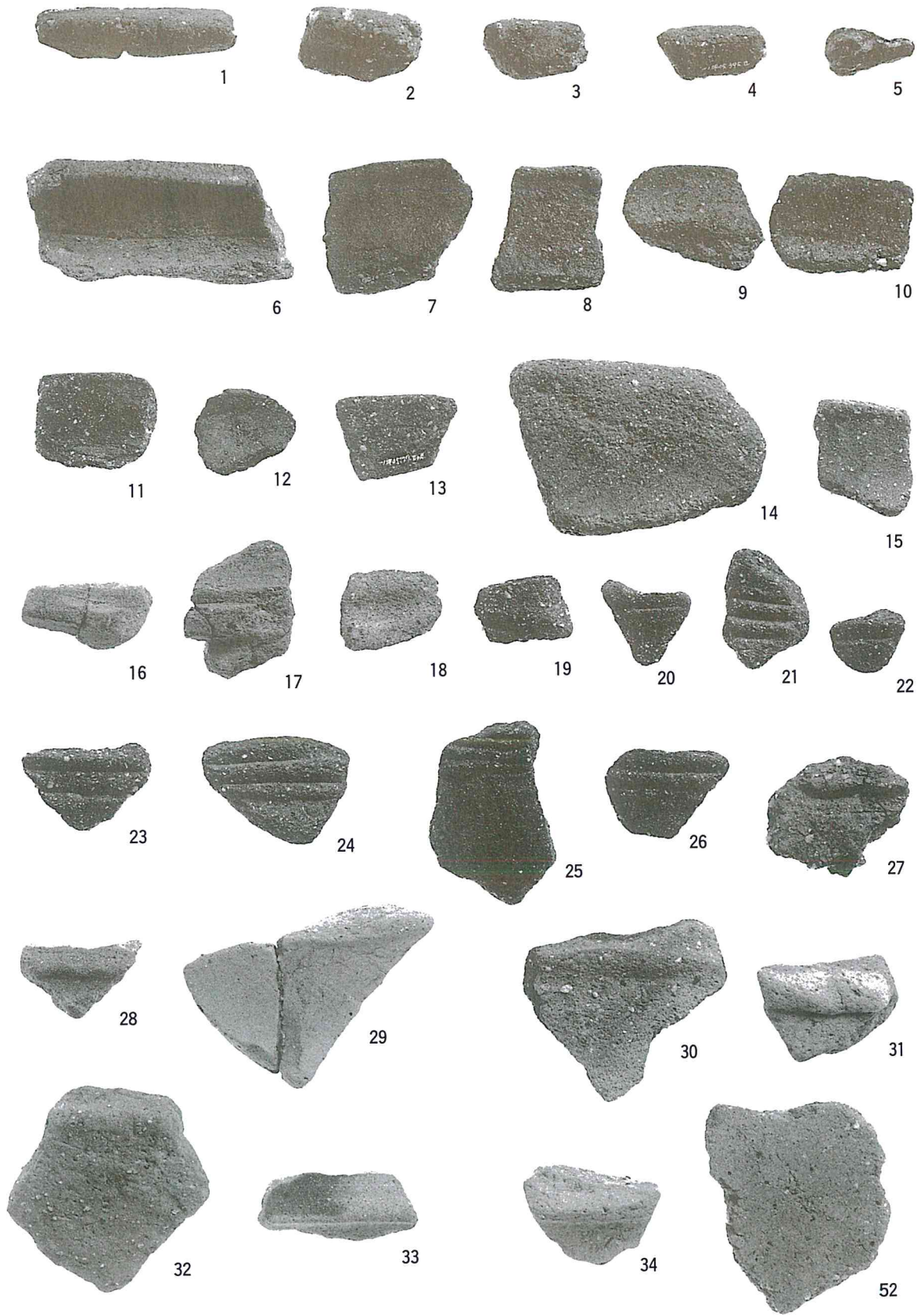
24



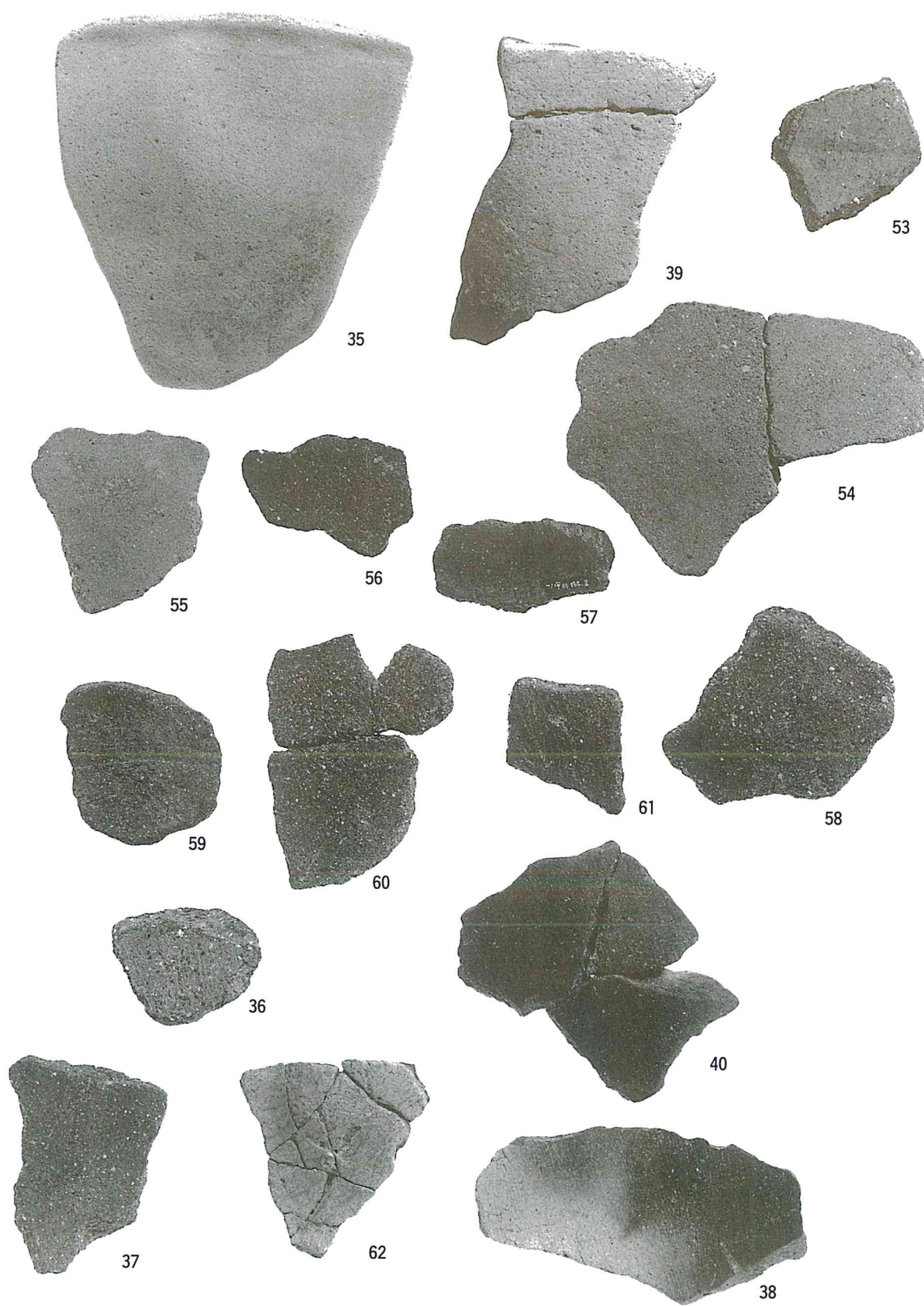
25

植松遺跡 出土遺物(3)

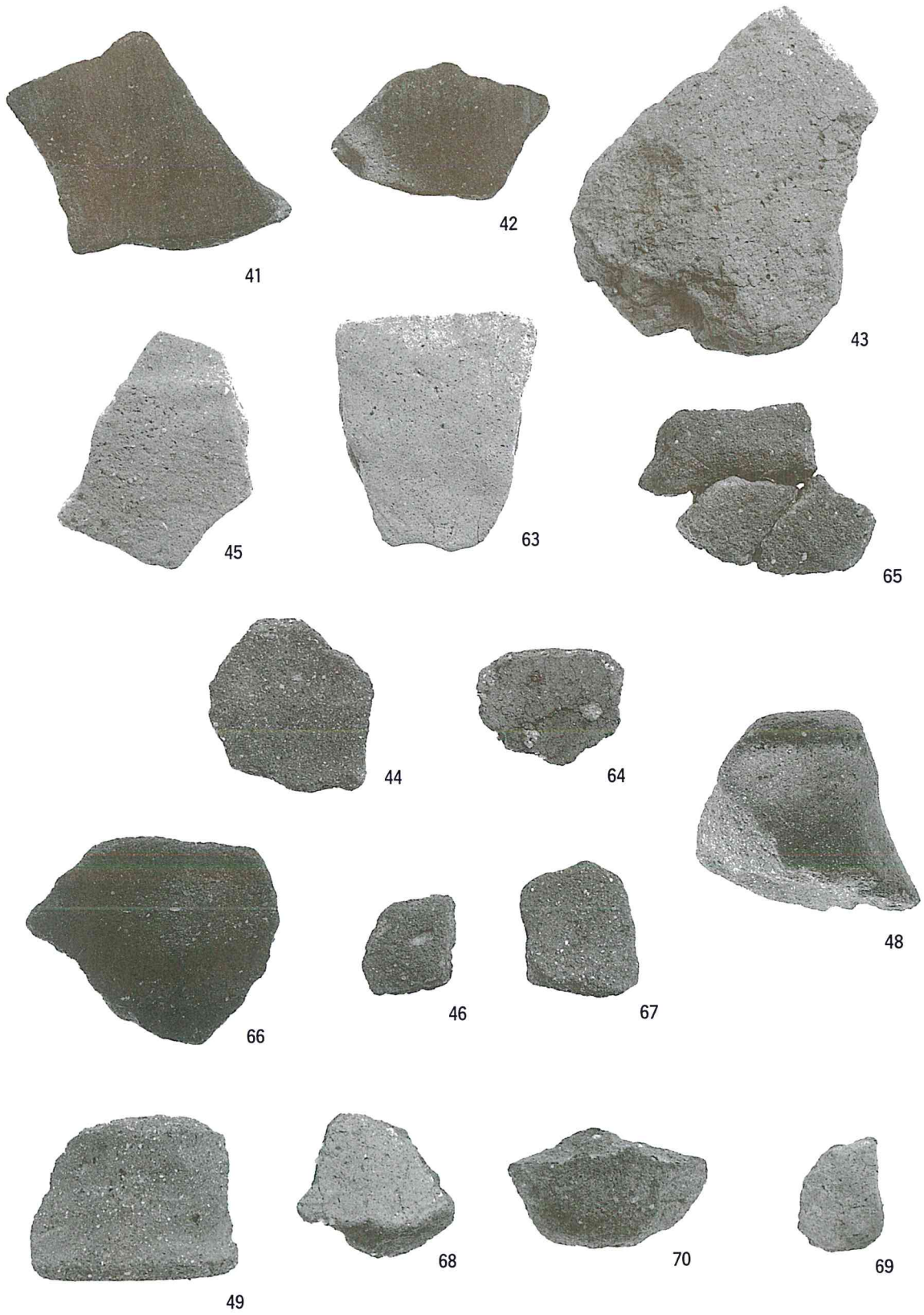
图版21



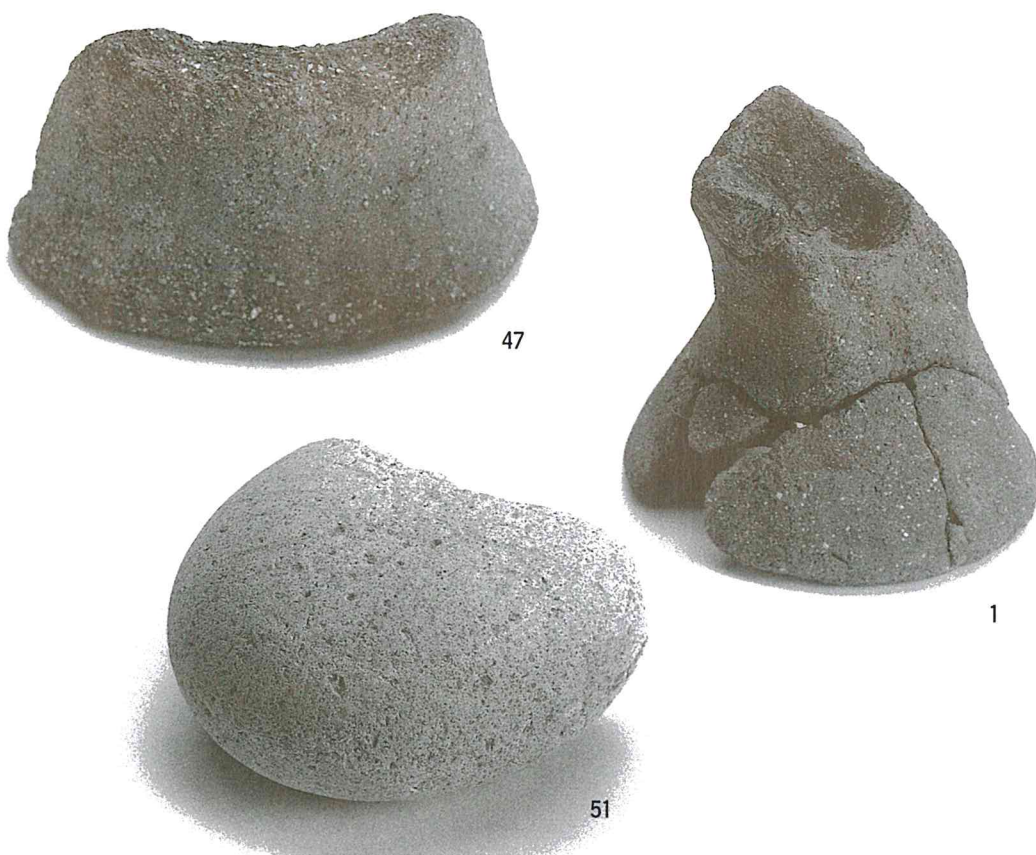
一ノ坪遺跡 出土遺物(1)



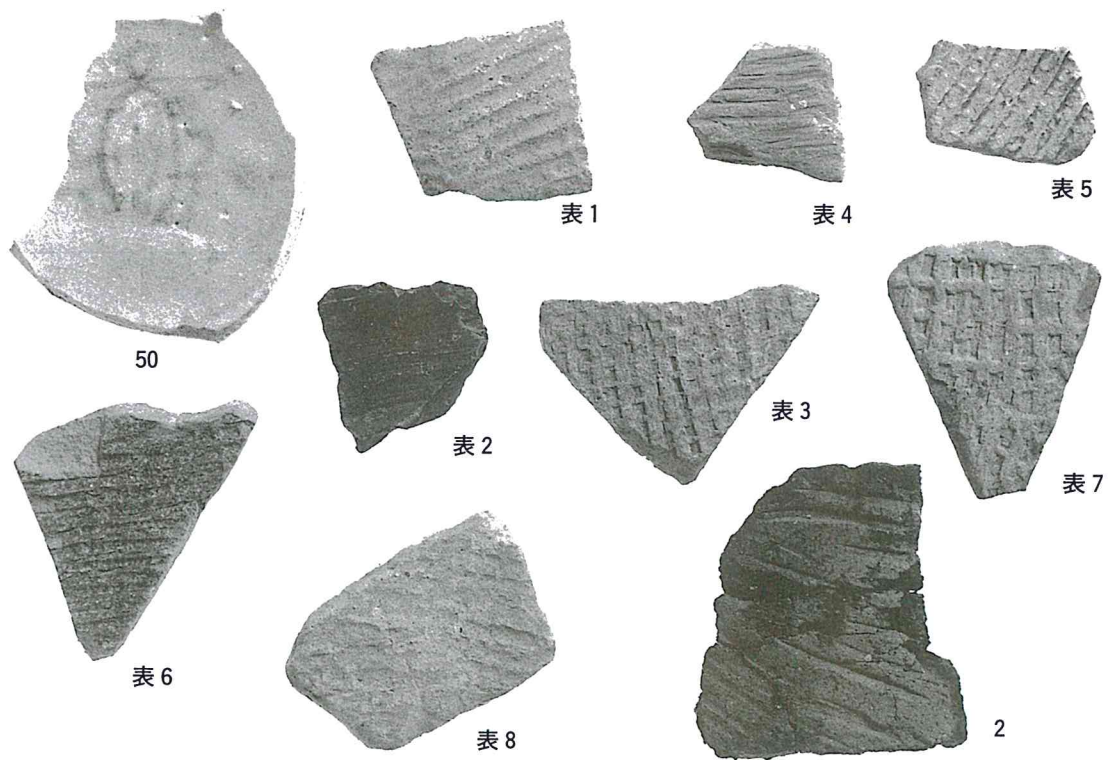
一ノ坪遺跡 出土遺物(2)



一ノ坪遺跡 出土遺物(3)

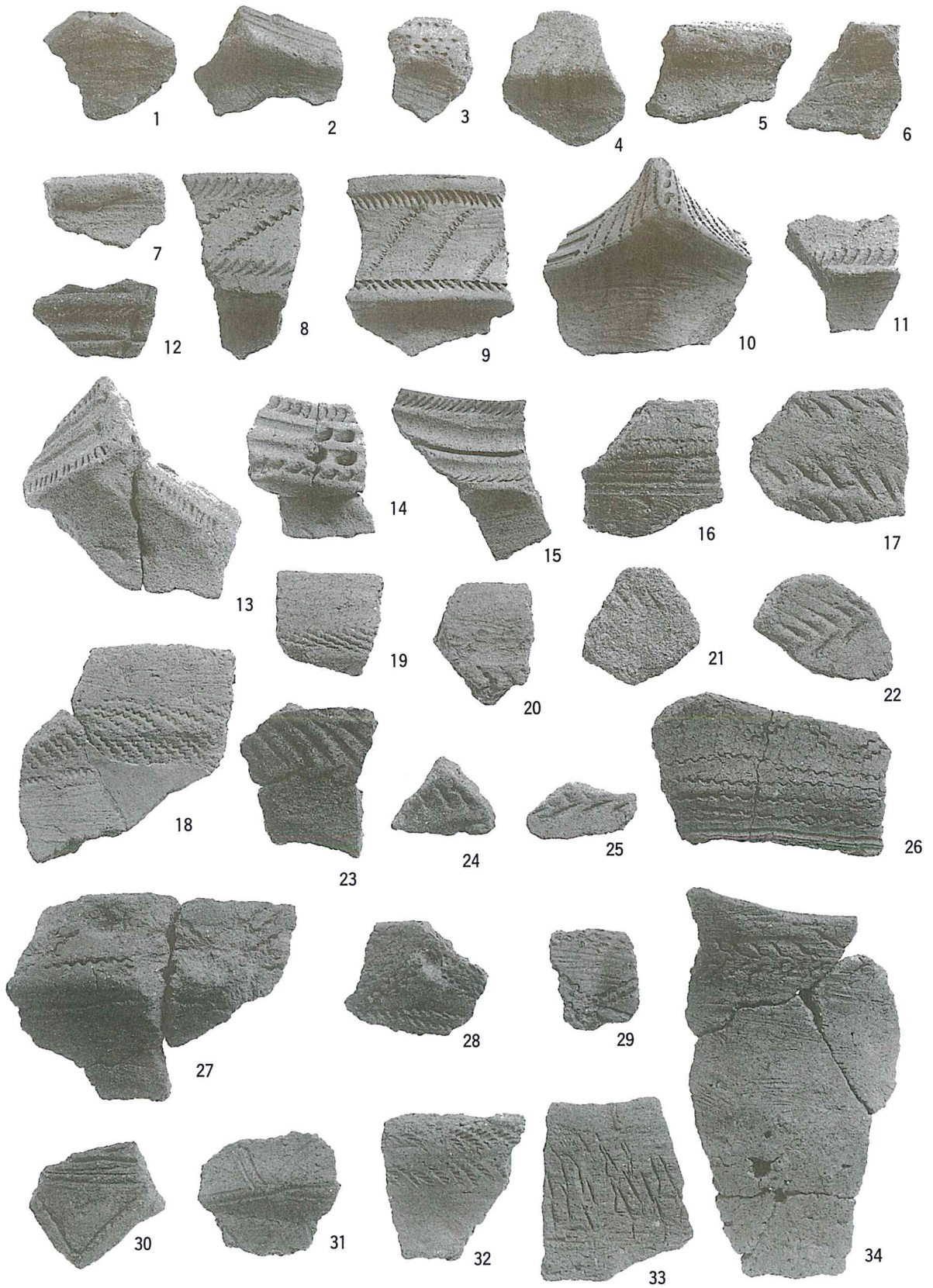


一ノ坪遺跡・高田遺跡 出土土器底部, 石器

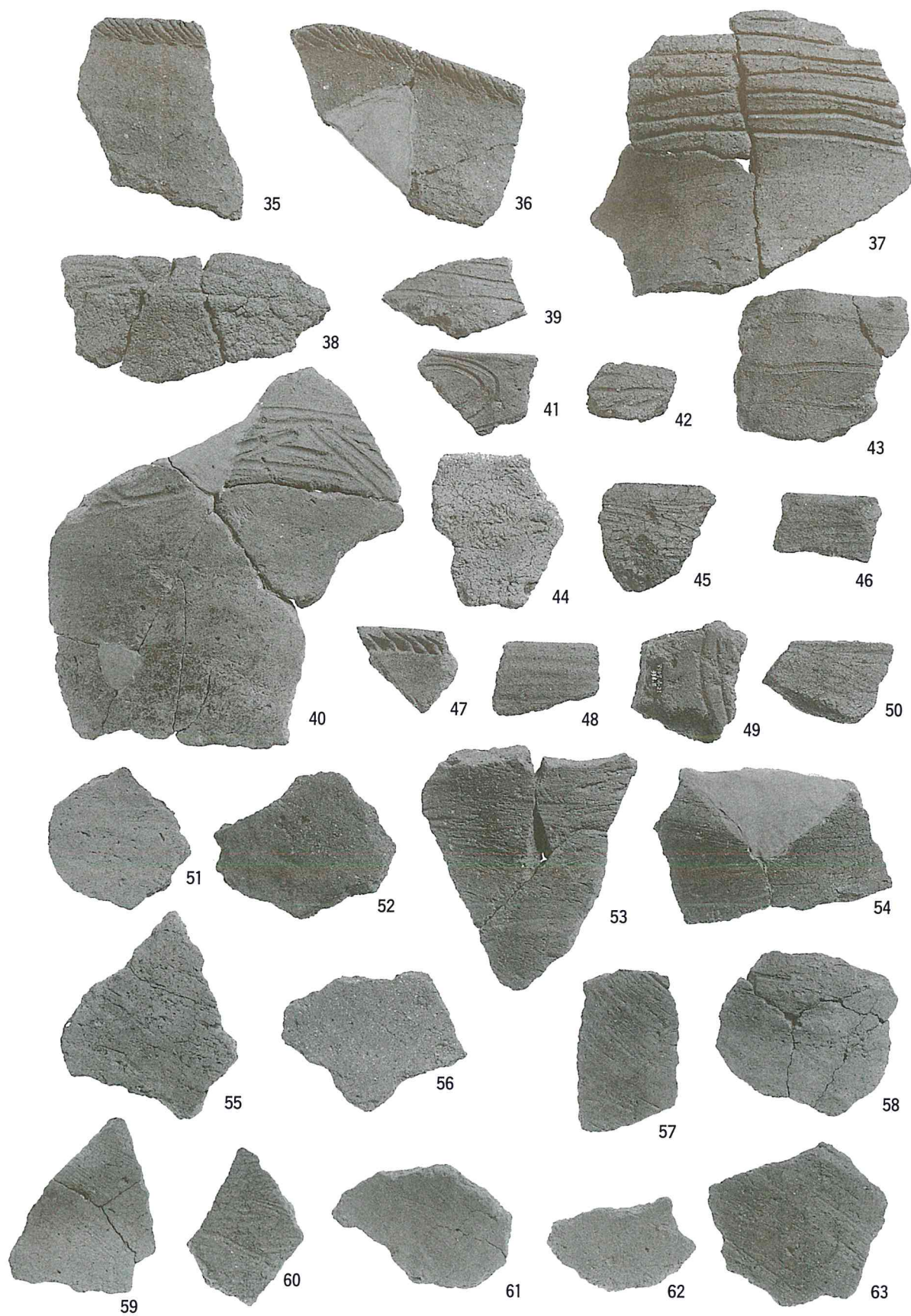


一ノ坪遺跡・真所汐入B遺跡 出土土器

图版25

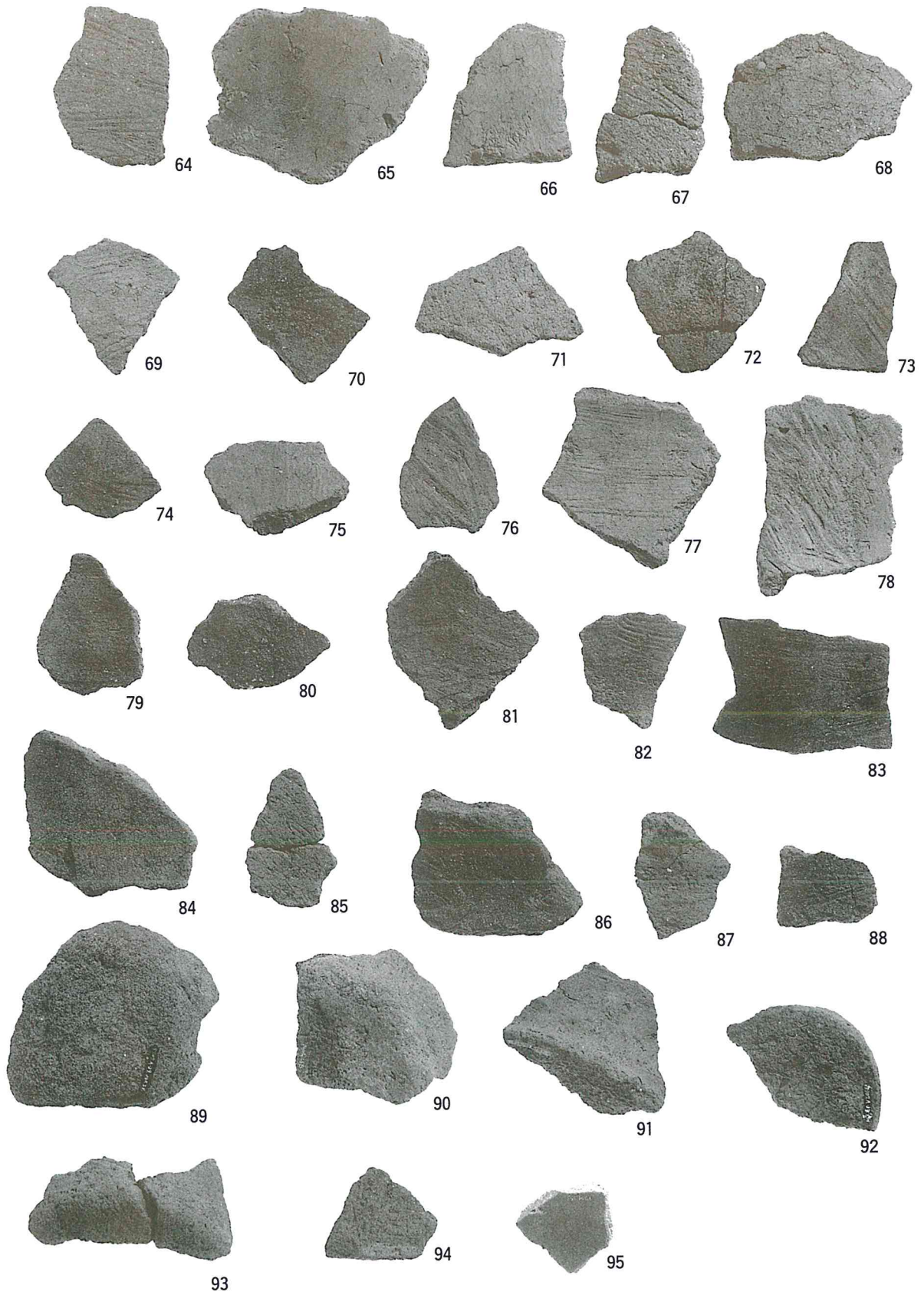


有鹿野遺跡 出土遺物(1)

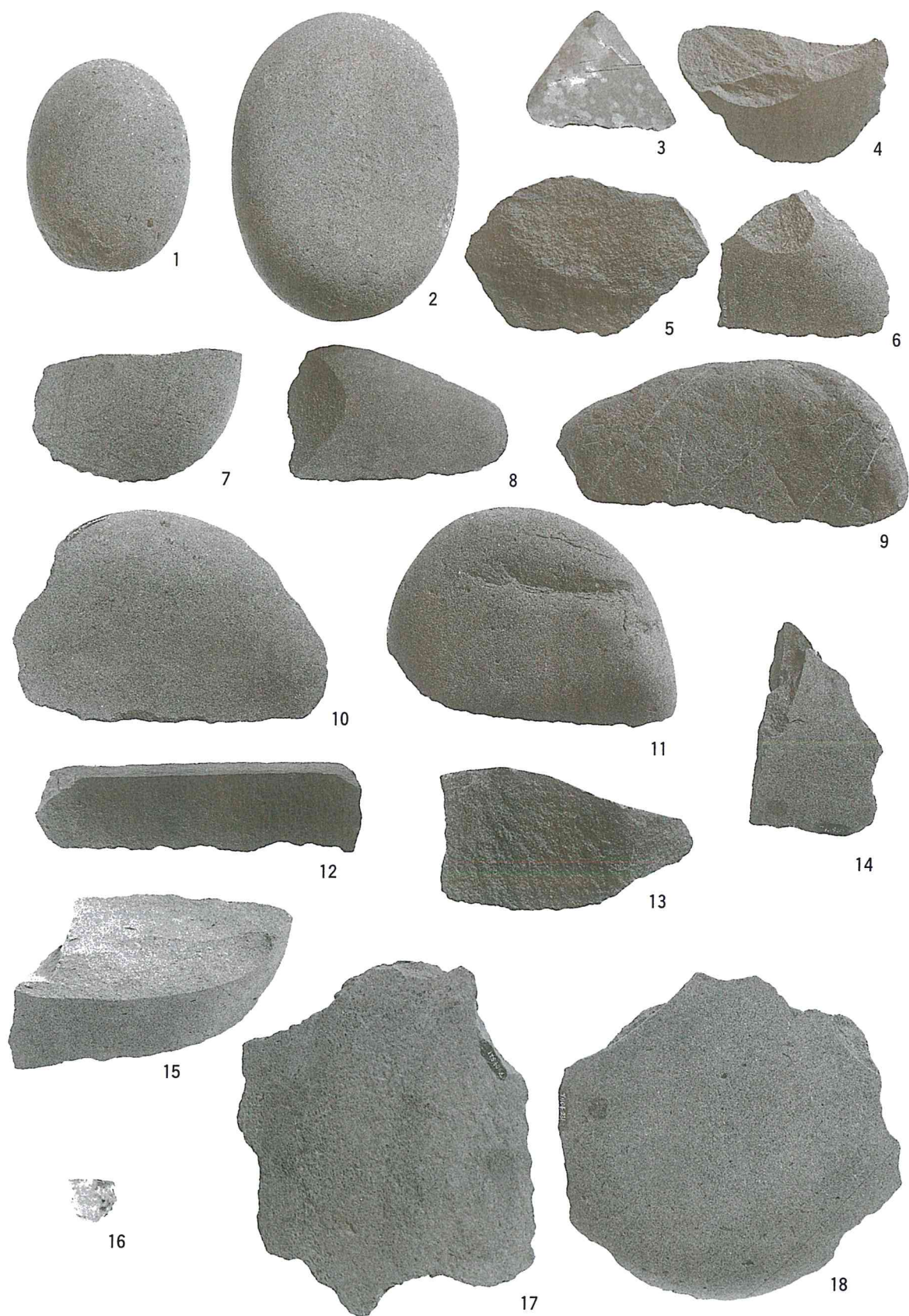


有鹿野遺跡 出土遺物(2)

图版27

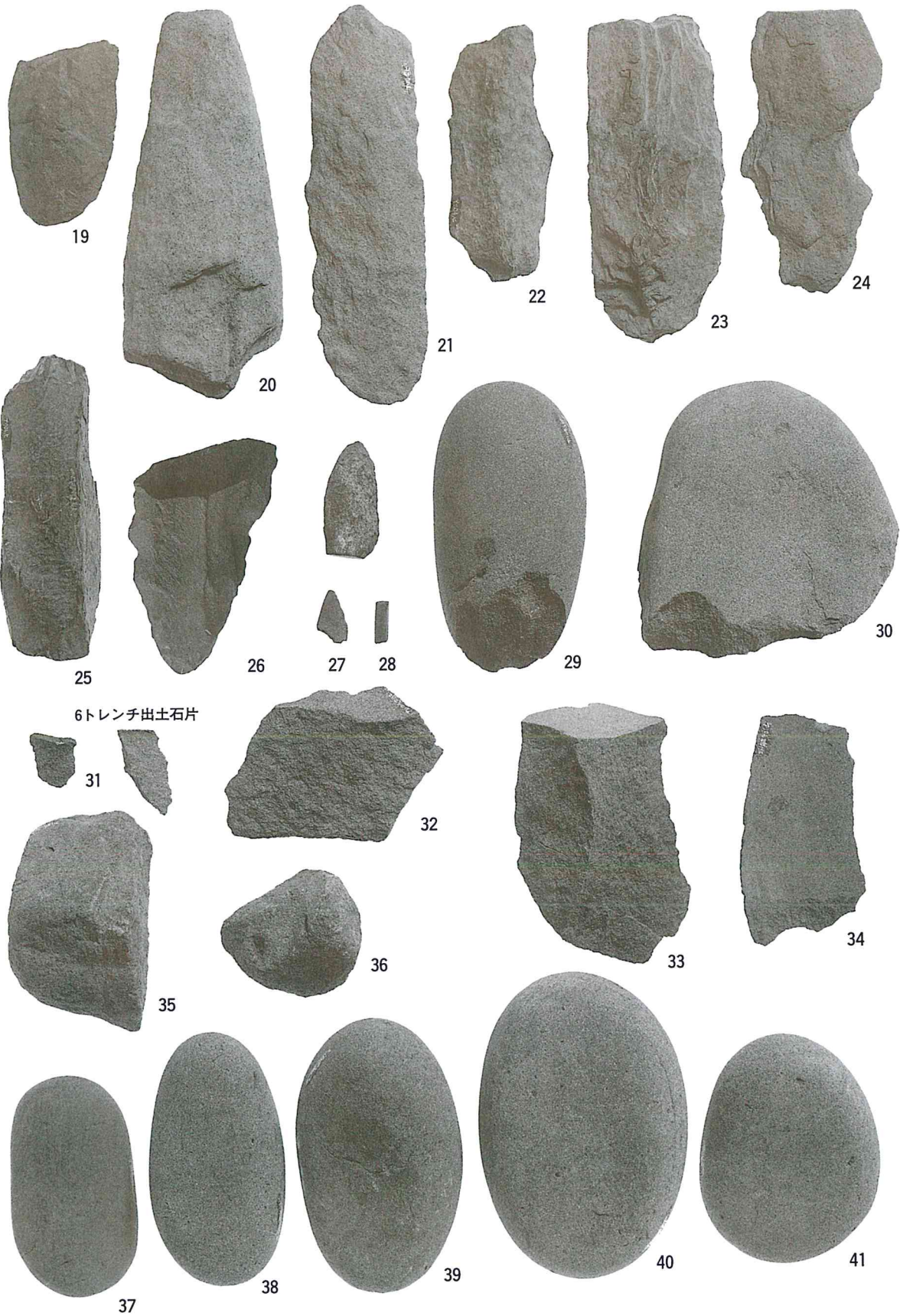


有鹿野遺跡 出土遺物(3)



有鹿野遺跡 出土遺物(4)

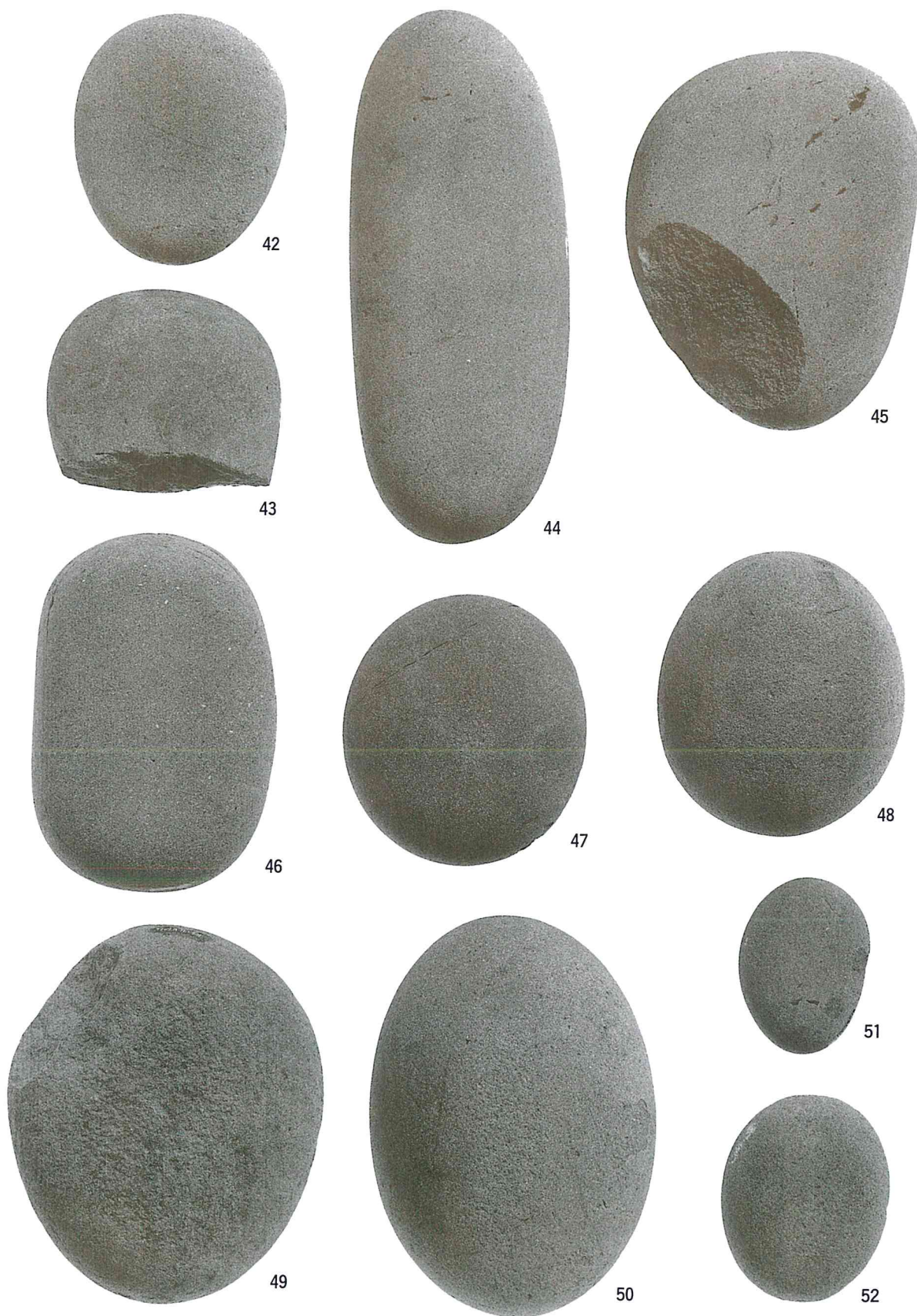
図版29



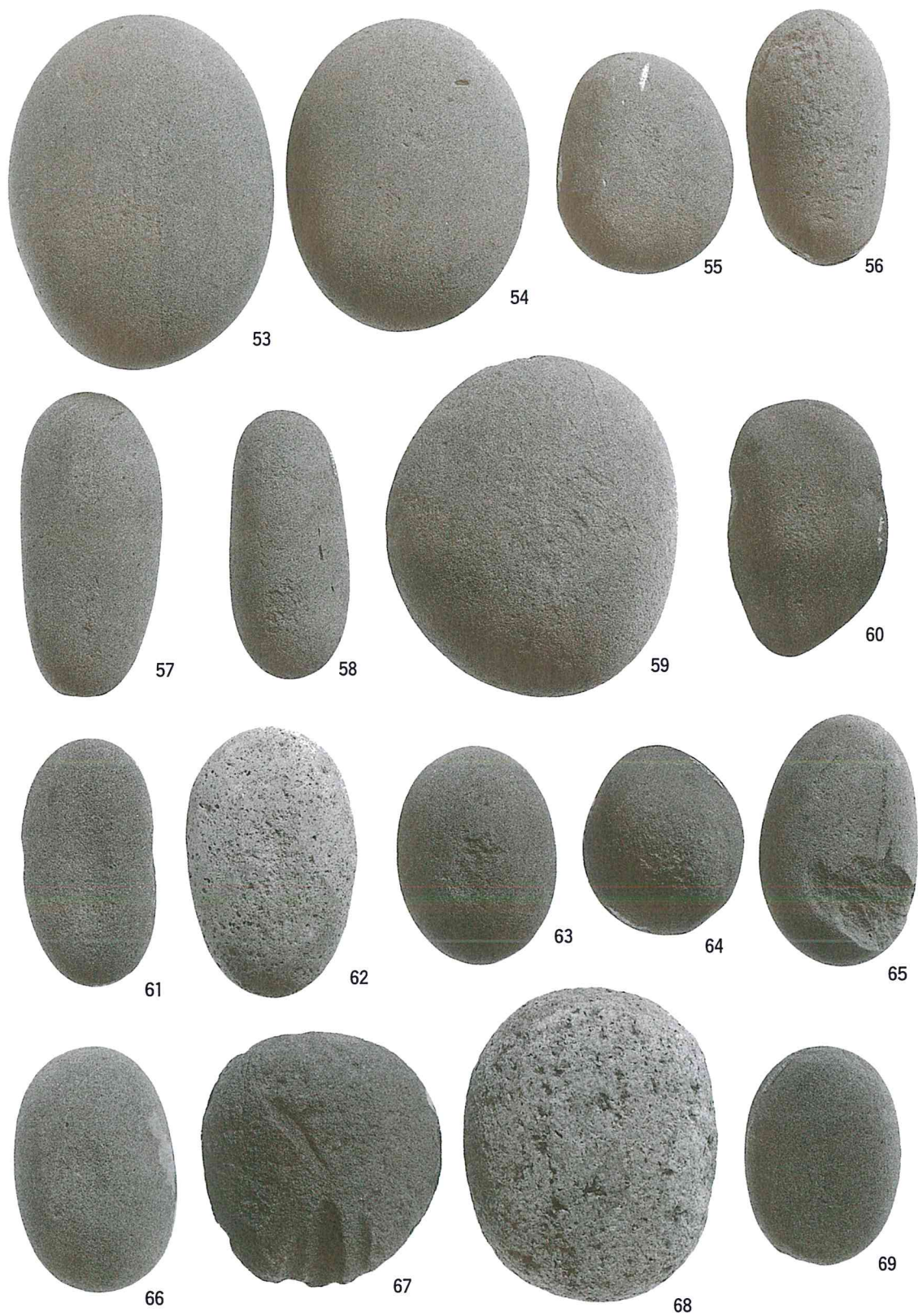
6トレンチ出土石片

有鹿野遺跡 出土遺物(5)

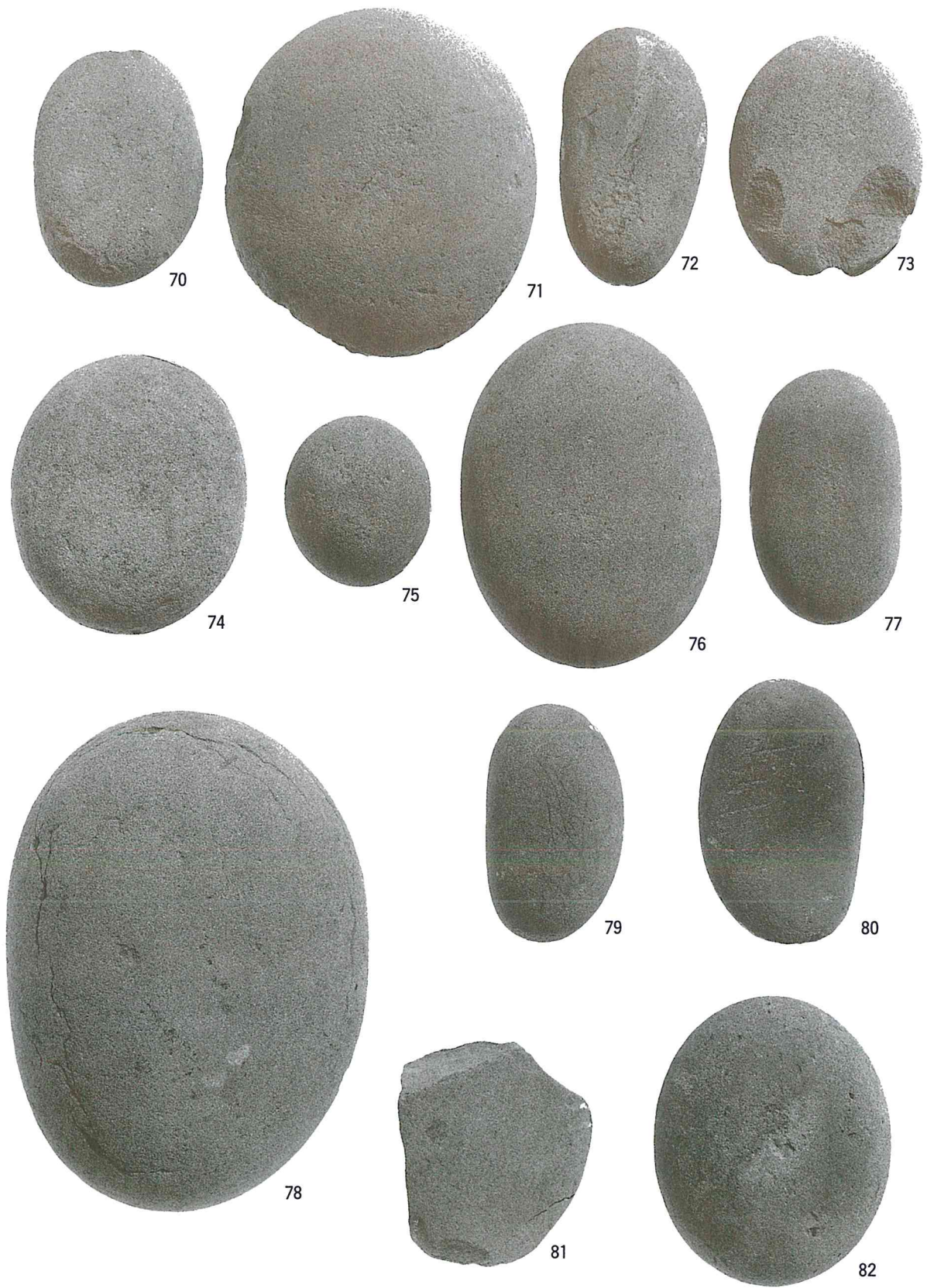
图版30



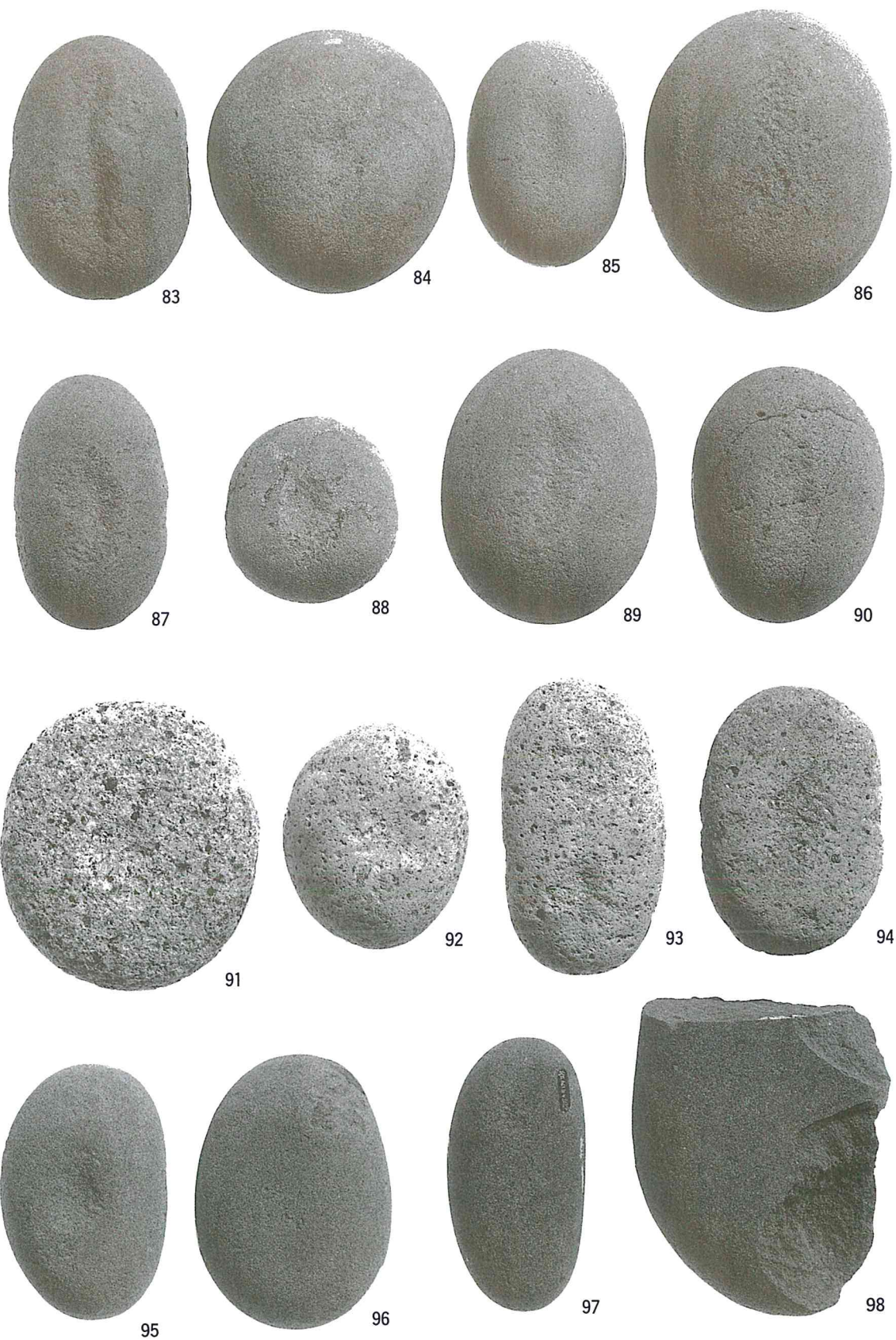
有鹿野遺跡 出土遺物(6)



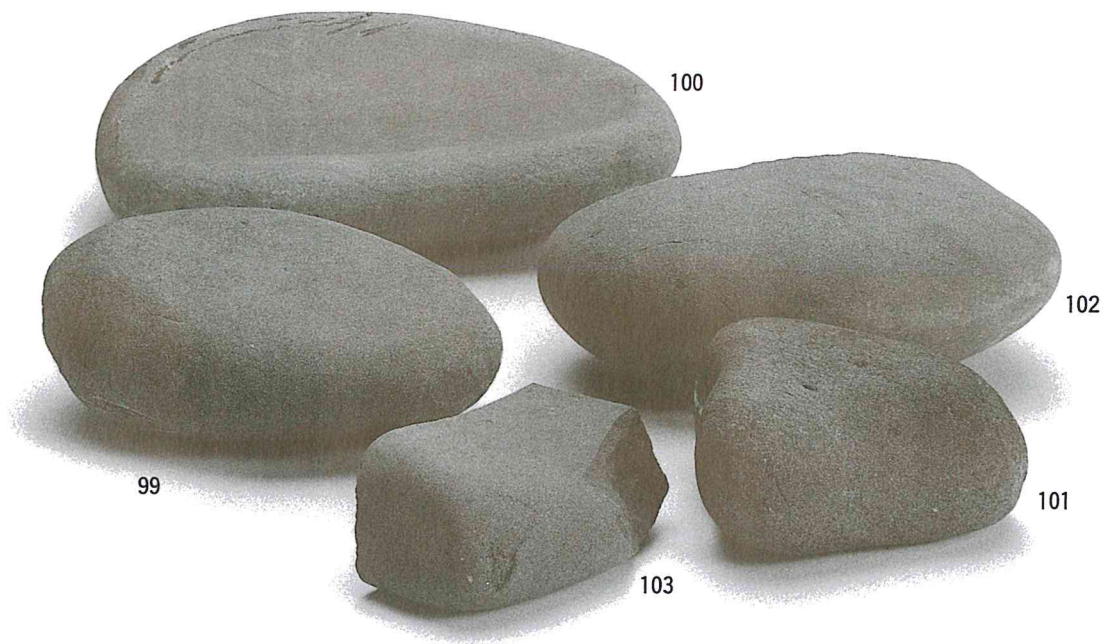
有鹿野遺跡 出土遺物(7)



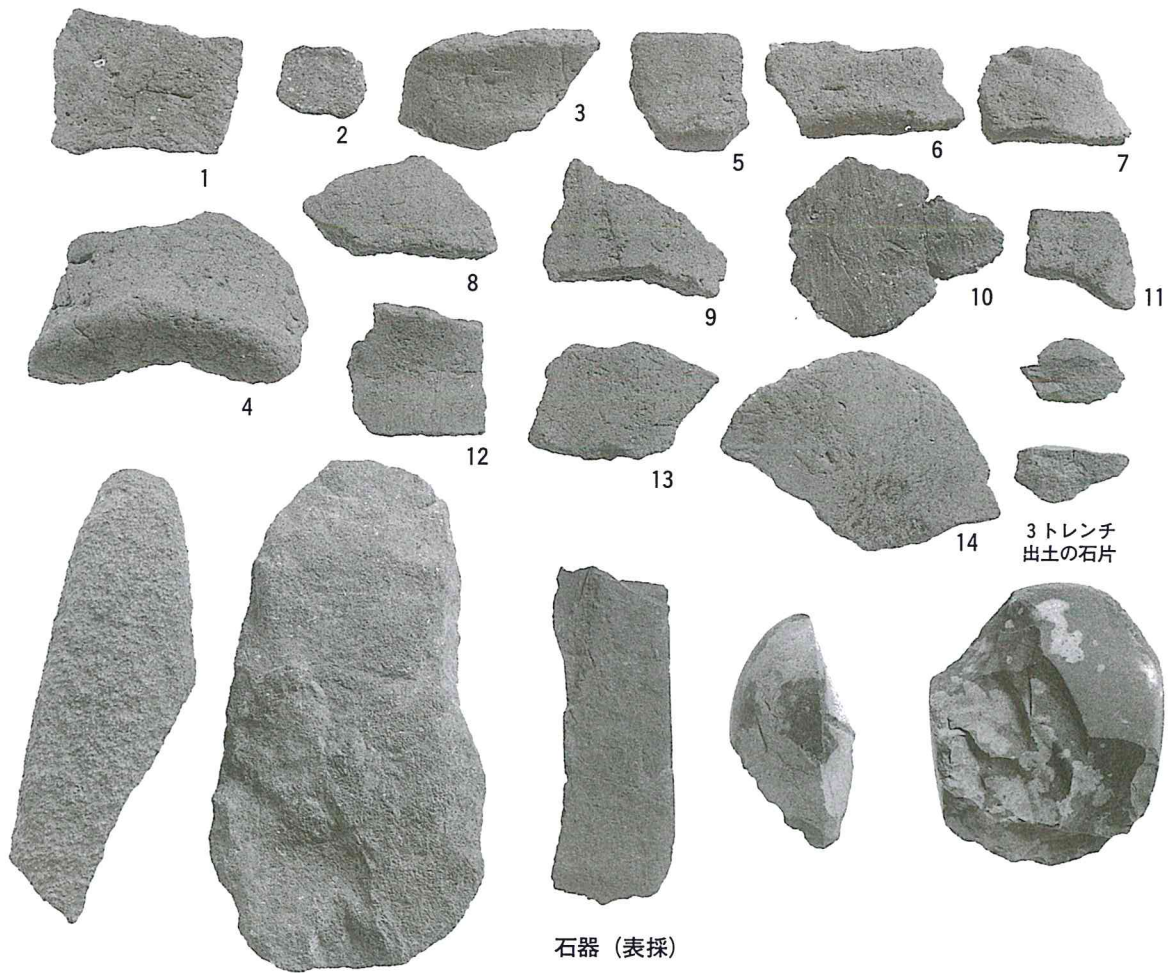
有鹿野遺跡 出土遺物(8)



有鹿野遺跡 出土遺物(9)

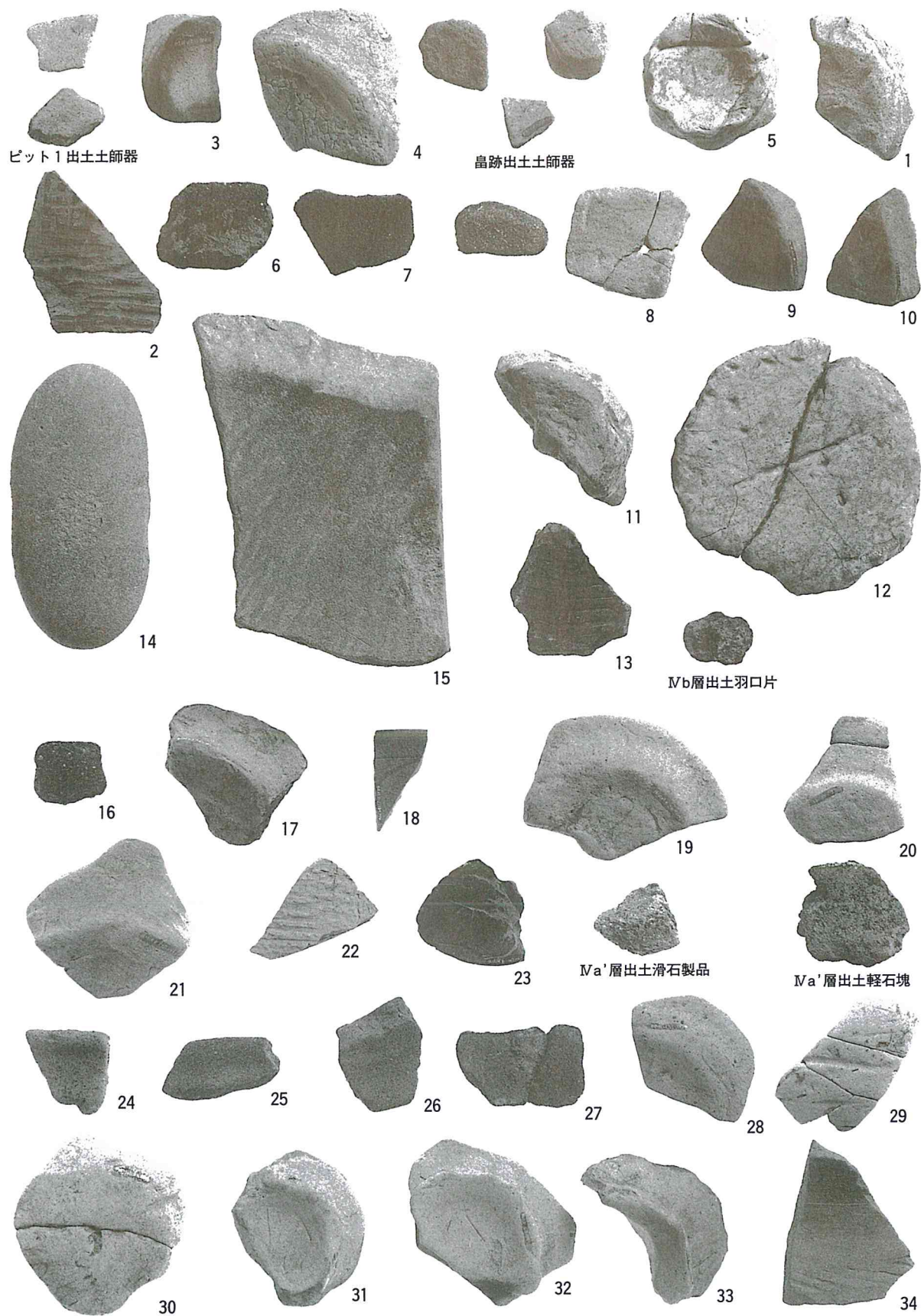


有鹿野遺跡 出土遺物(10)



下鹿野遺跡 出土遺物

図版35



ピット1出土土師器

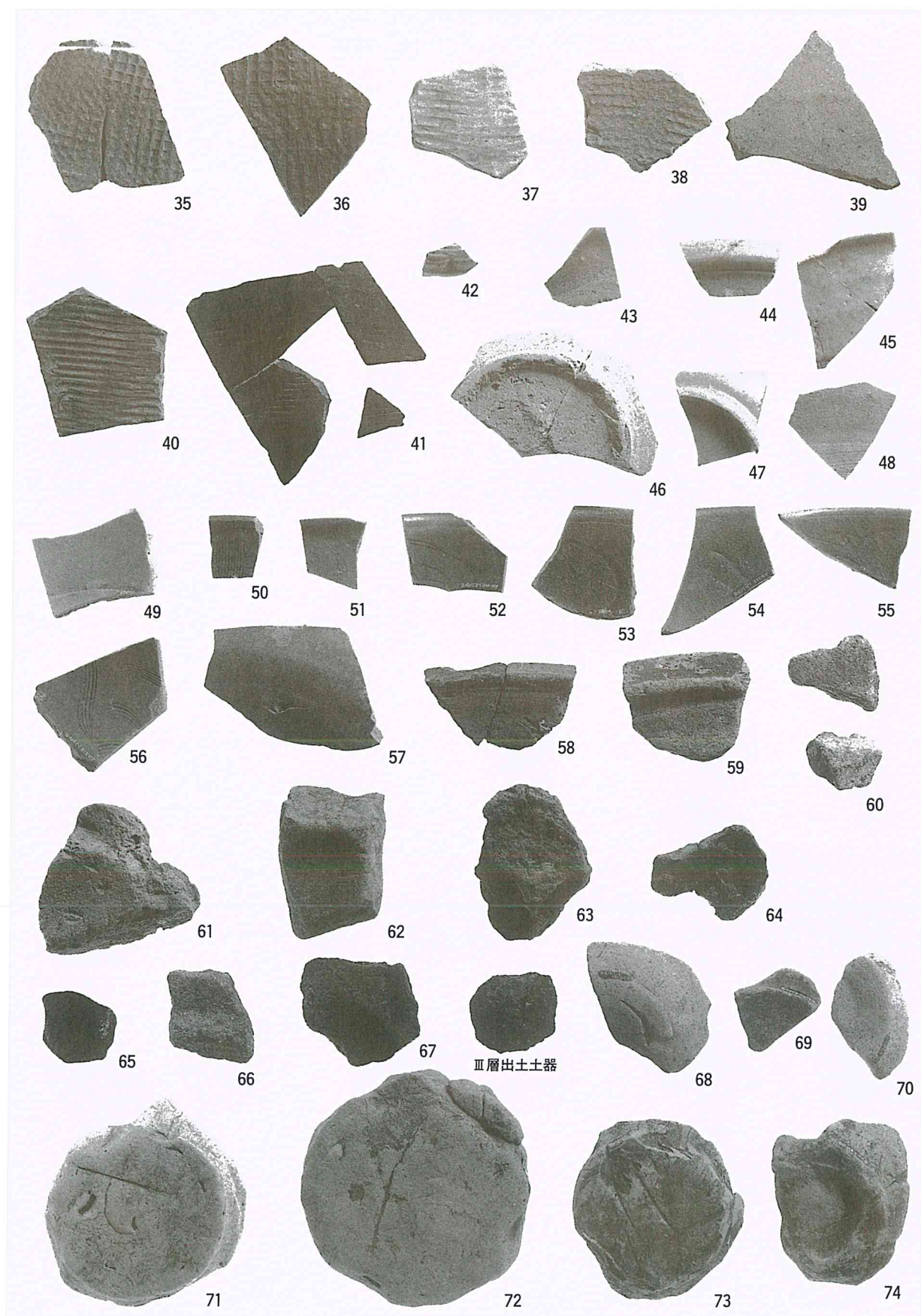
畠跡出土土師器

Mb層出土羽口片

Iva'層出土滑石製品

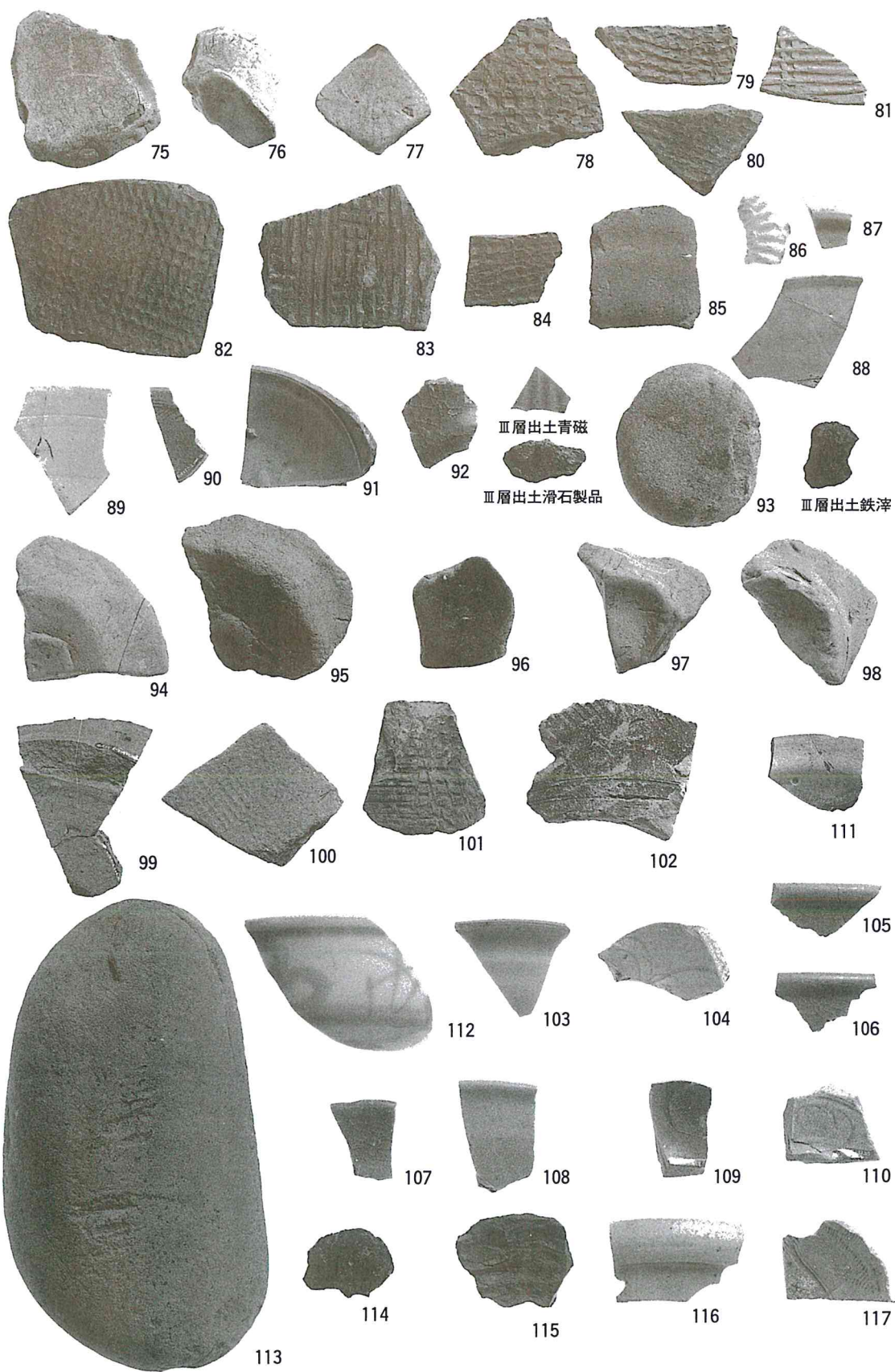
Iva'層出土軽石塊

日ノ丸遺跡 出土遺物(1)



Ⅲ層出土土器

日ノ丸遺跡 出土遺物(2)



日ノ丸遺跡 出土遺物(3)

南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(16)

県営中山間地域総合整備事業（広域連携型）
種子島南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

植松遺跡・一ノ坪遺跡・高田遺跡

真所汐入B遺跡・有鹿野遺跡

下鹿野遺跡・日ノ丸遺跡

発行日 2009年3月

発行者 南種子教育委員会

〒891-3792 鹿児島県熊毛郡南種子町中之上2793-1

TEL 0997-26-1111

印刷所 株式会社 秀巧社印刷

〒890-0072 鹿児島市新栄町4-40

TEL 099-257-3300

